

アズールレーン  
との航路

怪獣

ヴェノム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前世の人間だった頃の彼は軍人であると同時に特撮オタクが凝視したと思っただけで、ずいいた時には別の地球でハリウッド版ゴジラとなっていた

そして知らなかった自然の美しさを知りながら、怪獣の友人を持ちながら縄張りを狙っては命を狙ってくる怪獣を片っ端から倒していたら怪獣王として頂点に立ち、しばらくして住む拠点だった地下世界にある者達が来る

それは自身の世界でゲームとしてはやっていたアズールレーンの娘たちであり、そし

て彼は生まれて2億年たった今……この世界がアズールレーンの世界だと知ったのだっ  
た！

これは怪獣たちと人間たちにKANSEN達が紡ぎだす可能性と日常と戦いの物語  
だ

入らなかったタグ：GODZILLA アズールレーンアニメ勢 いろいろと勉強中  
(アズレン)

# 目次

一話	転生したら怪獣王でアズールレーンの世界だった	1
2話	迷い込んだKANSEN達との対話	53
3話	とある者たちの過去ととある獣の覚醒(前編)	111
4話	とある者たちの過去ととある獣の覚醒(後編)	164
5話	新たな開戦と新たな遭遇(前編)	209
6話	新たな開戦と新たな遭遇(後編)	287
7話	襲撃の後の襲撃・黒き翼と王(前編)	357
8話	襲撃の後の襲撃・黒き翼と王(後編)	428
9話	新たな仲間と亡霊への問答(前編)	519
9話	新たな仲間と亡霊への問答(後編)	575

一話：転生したら怪獣王でアズールレーンの世界だった

地球

それは水と酸素の楽園であり、生命が豊かに実る美しい星

しかしその地球は人類という種が生まれてから少しずつ大地や海や空を蝕まれてきた

海は戦いや実験によって煮えたぎり、生物たちは毒される

大地は自分達だけの繁栄と戦いによって自然は破壊され、生物たちは追い込まれる

空は鉄で出来た翼やガスによって空は燃え、空気は生物たちの肺を蝕んだ

生物は皆生きるために戦う。未来に種を残すために、家族を守るために、腹を満たす

ために、安住の地を探し勝ち取るために・・・その上での自然の破壊は致し方ないだろう。しかし人類は違う・・・不利益または自分達の欲と維持や国の権威という自分勝手で理不尽な理由で他の生物を滅ぼし、自分達だけが過しやすい環境を作るがために環境を際限なく破壊し、他の生物たちの生態圏を壊してきた

人類はそれだけのことをしてても全く悪びれることはない。自分達こそが頂点なのだから何もしても許され、そのための犠牲は知ったことではないかのように振る舞う。その傲慢さは『セイレーン』という世界共通の敵を前にしても変わることはなかった。それどころか『セイレーン』を退けたことで自分達はやはり誰にも負けることがないとかだらない傲りと自尊心が増長し、未来のために結集された尊い力『アズールレーン』は価値と方針の違いに真つ二つに割れる。人の力で打ち勝とうとする『アズールレーン』、毒をもって毒を制すようにセイレーンの技術を取り込んで勝とうとする『レッドアクシズ』・・・共通の敵がまだいるにもかかわらずさらなる戦いを繰り広げ星をさらに蝕んでゆく

全ては自分達が正しいと証明するために・・・

世界を救うのは自分達で在る事を示すために・・・

自分達が『セイレーン』を倒し頂点となるために・・・

しかし彼等は知らない

自分達は決して星の頂点に立つことはないことを・・・

自分達がこの星において井の中の蛙だったことを・・・

この星の生態系の頂点に立つ生物たちを束ねる王がいたことを・・・

星の願いを聞き、王が今動き出す

く地球の遙か地中にてく

『地球空洞説』という説を知っているだろうか？

簡単に言うと、地球の地下は空洞になっていて別世界が存在するという説だ。そこで



は手つかずの大自然と澄み切った空気に美しい豊富な水に太陽の変わりとなる神々しい地球を駆け巡るエネルギーが存在し、独自の生態系と古代生物が生息していると予想されている。もちろんこんな説を信じようとする者は変人か、狂人くらいのもので大多数は馬鹿馬鹿しいSFの妄想だと笑い飛ばした・・・

しかしその説は正しかった・・・地下では上記の通りの環境が整っており古代の生物たちが悠々と大地を踏み回っていた。すると大きな山の陰からゆつくりと108メートルもの大きさを誇る漆黒の巨獣が現われる。その体格は岩の様にごつごつしながらもがっちりとした筋肉を持ち、姿は恐竜を思わせるが背中には刃のように鋭く尖り大きな背鰭が3列になって生えている。其れが発する雰囲気は絶対に逆らってはいけない事を本能に囁くような絶対的な気を放っていた

ゴガアアアアアアアアアアアア!!

まるで自分の存在を誇示するようにそれは辺り一面に轟く咆哮を上げる。彼こそがこの星の頂点にして生態系の頂に立つ『怪獣』たちの王・・・調律者にして破壊神・・・怪

## 獣王ゴジラ』

## ゴジラSide

ゴジラ（もうゴジラになって2億年はたっただろうか？）

ゴジラは岩石が浮かぶ地下世界での空・・・ではなく反転した大地を見ながらふと思いで出す。彼が者世界で生まれた間もない頃、生まれたときから彼の精神は成熟していた。理由は彼が前世の記憶・・・人間だった頃の記憶を持ってゴジラに転生していたか

らだ

前世の人間だった頃の彼は軍人であると同時に特撮オタクでもあった。生まれた時から両親がおらず、孤児であったために真つ当な仕事に就けなかったが腕っ節だけは強く流れるまま生きる上で稼ぎやすい軍人となる。当時は国は紛争に介入しており、正直国の意地や権威に威信などくだらない理由で戦うのが馬鹿馬鹿しいと思っていたがただ生きるためだけに戦い続けた。そんな血に濡れた日常でも同じ境遇の中生きた者や気に掛ける者達が集まって仲間となってくれたことやそんな仲間達が趣味として教えてくれた特撮・・・特に怪獣物で今の彼であるゴジラが好きになった。その後様々な失いつつも、仲間達と笑い合える日常を謳歌したが新しく来た司令官が来た事で全てが変わった。イバルだけで指揮や能力は能なしの裏工作でのし上がったクズで、部下となる彼等をまるで奴隷か道具のように扱い欲と自分の名誉のためならどんな不正や犠牲を強いて、刃向かう者は暴力で押さえ込んでいった。無論彼にガマンの限界が近づき殴り飛ばしそうになることもあったが、ここで自分が問題を侵せば仲間達に予先が来るのではないかと踏みとどまってきた。しかしある時報告のためにクズの元へ向かった先で見たのはいたぶられボロボロとなった仲間の一人の姿が映り込んだ。彼が来たのを確認しこいつは俺に意見を申しだして刃向かったから潰してこの後見せしめにするた

めだと自慢げに話し出した。要するにクズは自身のイライラと自分に逆らったらどうなるかを見せつけ、さらに従順にさせ名誉を立てようとした。・・・そんなくだらぬことのために関係ない自分らを巻き込んで仲間を傷つけたと理解すると同時に彼の意識は真つ赤に染まり、近づいたときには何発の銃弾を撃ち込まれハガ全てたたき折られ原型が分からないほどぐちゃぐちゃになった上官の死体だった。彼は正気に戻ったと同時に自分がクズを殺したと認識し、この後どうするかを考えた。このクズは隠滅や詐称だけは得意で、表向きは優秀で人格者な男だと認識されていた上に自分らを不当に扱っていた証拠がない以上彼は上官殺しの罪を問われるのは確実だった。彼は重傷の仲間を仲間達に託し、事情を全て話した上で何もするなと伝えた。下手をすれば上官殺しを庇った罪人にされてしまう考えたからだ。その後彼は姿を消し、上官殺しの罪で指名手配され追われる身となって長い間逃げ続けるも長年戦ったことで病が発症してしまい其れが原因でどんどん衰弱してしまい小さな小屋で最底辺だった身だが大切な仲間が出来て、短い間だったが幸せな日常を味わえ仲間を助けて死ぬるのだから上々だろうと思いつながら息を引き取った

しかし彼がまた意識を覚ました、同時に困惑しながらも目の前の暗闇をどうにかしようという違和感がある四肢を動かし壁のような物を壊して外へと出る。するとそこは空という物がなく、逆さまな前世で汚れきった空気と荒れ果てた戦場しか見たことがなかった彼にとつて見たことも感じた事も無かった美しい大地と初めて綺麗と綺麗な自然は底知れない感動をもたらす物だった。他にもそこに住む巨大な獣の姿だった・・・しかしその巨大な獣たちはもの凄く彼には見覚えのある物で信じられないと感動と打つて変わつて茫然とすると自分が出て来たもの、すなわち卵から転げ落ち水たまりへと落ちこちる。そして彼は起き上がると水たまりに映る自分の姿を見て先程よりも驚愕する。なぜなら自分の姿が特撮で大好きだった怪獣でありアメリカで生まれたレジェンダリーシリーズの『ゴジラ（GODZILLA）』だったからだ

その後彼は生まれたばかりだというのに成長がもの凄く速く強靱に育っていった。というのも彼の卵が埋められていた場所が地球のコアに近いところだったため、生まれてくる以前から十分すぎるエネルギーを獲得していたためだった。そしてこうなった

以上ゴジラとして生きることを決意してこの美しく愛しい自然と共に生きていった

そして彼は縄張りを広げながら放射能と地下世界でのエネルギーを吸収して成長していくと同時に向かってくる怪獣たちをのきなり倒していたらいつの間にか怪獣達の中で最強の称号として『王』と呼ばれるようになった。その一億年後ではさらに力と共に体も大きくなり、地下世界の半分以上を縄張りに行っているとゴジラが現われるまで最強として名高く縄張り争いから発展して王の座を巡って世代を変えながら戦い続ける好敵手兼親友の『キングコング（タイタヌス）』一族や卵を産み落とさせて欲しいという頼みを聞き入れたことで自然の良さを話題にして友人となった『モスラ（タイタヌス）』等、前世のように種は違えど仲間が出来たことにうれしさを感じていたところ突如『地球の意思』となれる謎の声から彼の実力と彼のあらゆる環境に適応し放射能や地球のエネルギーと言ったあらゆるエネルギーや物質を自身のエネルギーに変える性質を持ち再生能力を持つゴジラの細胞こと『G細胞』を見込んで自然の回復や浄化を行いこの星に調和をもたらす『調律者』の役割を頼まれた。前世では感じなかった綺麗で美しい自然や親しい友人や認め合った好敵手と言った自分の仲間と日常を守れるならと引き受

ける。それ以降過度な縄張り争いや行きすぎた狩りと道楽のための狩り等を殺戮と  
いった自然の破壊をもたらし調和を乱す怪獣や存在を討伐か撃退といった制裁を与え、  
破壊された自然の場所を通る事で再生を促すと同時に毒や体液で汚された大地を浄化  
していき、そんな使命をさらに一億年も続けている内に縄張りを広げるために周りの環  
境を無理矢理変えようとしたところを力でねじ伏せた結果、自ら舎弟兼部下となった怪  
獣『アンギラス（タイタヌス）』や幼体の頃に縄張りを追い出され怒りのままに殺戮を  
行っていた怪獣に親不在の時に狙われた所を彼と付き添っていたモスラに救われ、それ  
以降尊敬を示す怪獣『ラドン（タイタヌス）』と言った仲間が増えていき騒がしくも悪く  
ない日常を楽しんでいた・・・だがちょうど5千年前に地下と地表をつなぐトンネルを  
通して地表に出ていたに地表にいた際に空から三つ首の竜と一つ目の死神が現われモ  
スラと共に戦うも勝負がつか無い上に自然への破壊がとんでもなかったので最終的に  
氷河にたたき落とすことで封印して事なきを得ては、数十年前にキングコング一族のな  
かで彼と実力が近い一頭『コング』が地殻変動とともに両親や仲間達に何も伝えず行方  
が分からなくなつたので地下にいないならば地表へと探し回つたいたらこの世界の人  
類に水爆や核爆弾を使って殺そうとしてきたので、自然のことも考えて搜索を断念して  
地表に戻つたりと最近はさんざんだったらしい・・・放射能をごちそうになつたのはう  
れしいらしいが・・・

今までのことを振り返りながら自身の縄張りを巡回すると共に、壊れた自然や汚れた大地がないか調べていると遠くから獣の鳴き声と前世で聞き慣れた砲弾の音を聞きつける。彼ことゴジラはそのことに疑問を浮かべる、獣の咆哮ならこの地下世界では当たり前のことだが・・・

ゴジラ（・・・何故地下世界で砲撃の音がする？）

ゴジラの言う通り文明処か人間が一人もいない地下世界で、科学技術の結晶である銃や大砲と言った武器は存在しないはずなのだ。にもかかわらず獣の咆哮と交互に砲撃の轟音が鳴り響いき、不審に思ったゴジラは屈強で巨大な脚で大地を踏みしめながら進



んでいく。しばらくして音が鳴り響く現場へとたどり着いた先にあつたのは艦の形をした近代兵器を身に纏った少女三人と身長58メートルもある黒に近い赤色の体色をして黄色に光る複眼で少女達に狙いを定める巨大な蠟螂の怪獣『カマキラス』二匹が砲弾と鎌で互いに攻撃し合っていた。けれど怪獣達はこの星の生態系の頂点に立つ生物のため高々数発の砲弾程度で死ぬほど弱くはない、それにカマキラスの体は巨大な故に外皮も硬い上に素早く動けるため彼女らの攻撃の大半は当たらずどこかへと飛んでいき、命中してもどれも致命傷や目立った傷を付けられずピンピンしているほどだ。肝心のゴジラは体勢を低くして気配を消しながら状況を観察してどう介入すれば良いか考えていた。もし彼女らが自分達怪獣のように頑丈もしくは水中で移動が可能で海中トンネルか地上からの重力が反転するトンネルからこちら側に攻め入り、この地下世界の調和と自然を乱すならば彼女らに制裁を与えることになる。単にトンネルに誤って入ってしまいこちら側に迷いこんだ結果、初めて見る怪獣の脅威に気が動転してカマキラス達を攻撃をしたのならそれはよくある生きるための防衛行動による争いなので放っておく

前者か後者にするか考えていると、ふと血のにおいがかき取りその先に視線を向け

る。カマキラス達の後方に当たるその場所にはたべかけの部分が多くほつとかれた上に食べた後がなく、大半が傷だらけで明らかにいたぶった痕跡がある物まである地下世界でのそこそこ巨大な水牛『スケル・バッファロー』の死体らが転がっていた。その光景を見てゴジラは全てを察した。あのカマキラスの個体らは先程まで腹を満たし生きるためでも無ければ、ましてや縄張りから外敵を追い払うための防衛でもない。自分らが楽しむという欲のために他者の命を刈り取っていたのだと、そして今は自分達よりも小さな存在を新しい玩具にしようとしていることを理解する・・・そして彼等がもはや調和を乱し自然の理に反した存在だとも認識した

ゴジラ（制裁を与えるのは奴らの方だったか）

王にして調和者の使命を果たすため、ゴジラはゆつくりと立ち上がりと同時に咆哮を上げる

ゴジラ「ゴガアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ゴジラの轟く咆哮によってカマキラスと少女達の戦いは中断され、一同が咆哮がする場所に視線を向けたその瞬間カマキラス達は先程までの少女達との戦いにおける勢いは消え失せると同時にゴジラの迫力に怯え始めた。彼等は瞬時に理解したのだろう：自分達は王の怒りに触れてしまったことやもう逃げることは出来ないのだと。少女達は先程戦っていた相手よりも巨大かつ屈強で誰にも抗うことを許さないと思わせる雰囲気放つゴジラにただ茫然とするしか出来なかった。すると逃げる事が出来ないと分かったカマキラス達は傷を与えてその隙に逃げようと考え戦う道を選び、一斉に飛びかかった

カマキラスA 「ギユキユウウウウウウ！」

カマキラスB 「ギユキユウウ！」

カマキラス達は真つ正面から羽を羽ばたかせ飛行しながら自慢の鎌を振り上げてゴジラの胸部を切りつけようとするが、ゴジラは一匹のカマキラスがくりだす渾身の袈裟蹴りを剛力を生み出す怪力で両腕の鎌を難なくつかみ取る

ゴジラ 「グルルル」

ゴジラはこの程度かと小さく鳴くと、右手で鎌を押さえ込んだまま頭をがちりと掴むとそのまま地面へと頭から叩きつけ、流れるように屈強な足による踏みつけで叩きつけたことで地面にめり込み動けないカマキラスの頭をグシヤリと体液をまき散らせながら踏みつぶしてあつという間に絶命させる

カマキラスB「ギユキユウウウツツ!？」

残ったカマキラスはわずか数秒で仕留められた仲間を見て、やはり王には適わないと改めて思うと自身の羽を広げて全速力でその場から逃げようと空へと飛び立つ。しかしやすやすと理から外れた者を逃がすほどゴジラは優しくはない。

『ヴォン・・・ヴォン・・・ヴォン・・・ヴォン・・・ヴォン・・・ヴォン!』

ゴジラは体内に原子炉のような器官を持ち合わせ、無尽蔵のエネルギー生み出していると同時に背鰭が尾の先端から胎動して広がるように青白い光を放ち始める。そしてゴジラの口内に途方もない熱と生み出されたエネルギーが凝縮され、黄色に輝く瞳は青白い光・・・チェレンコフ光に輝くと同時にゴジラの口から青白く輝く

『ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!』

同時にゴジラの口の中で発する生体電気を起爆剤として熱とエネルギーを爆発させ、巨大な炎の奔流『放射熱戦』が放ち、巨大で太陽と思わせるほど熱い炎の柱はあつという間に遠くへと逃げていたカマキラスを撃ち抜き数秒で灰へと変えた

ゴジラ 「ゴガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

カマキラスを倒したことを確認し、勝利の雄叫びを轟かせる。そして彼は制裁を終え

たので次の問題に入ることにした。視線を少女達に向けると怪獣達の戦いに気圧されず此方を見て目を輝かせる者もいれば驚きのあまり茫然とするしか出来ない者もいればただ此方をじつと見つめる者がいた。その容姿はそれぞれ異なっているが、一番目を引いたのが一見人間の少女のなりをしているが頭には獣の耳が生えていたのだ。

するとゴジラは在る事に気づいた

ゴジラ（この少女達、何故か見覚えが？）

ゴジラは少女達の容姿に凄まじい既視感を覚えていた。思い出そうと二億年という膨大な記憶の海から該当する物をあさっていくが何一つ思い当たらず、前世の時の記憶も掘り返し思い出そうとするとふと頭から光が差すように思い出した。前世で訓練時の休憩や休日の合間に仲間達の間や世間で評判が良く、自分も多少ははまってはいたがストーリーや設定は忘れてしまったが実在する第二次世界大戦で活躍した艦船が美し

い少女へと擬人化して敵と戦うゲームで出て来た子達だと気づいた。名前は忘れてしまったが、二億年ぶりに驚愕してしまった・・・ゴジラの世界で転生したと思っていたが正確には違っていたのだから

ゴジラ（ここは怪獣達が存在する『アズールレーン』の世界だったのか・・・！）

この日を境にゴジラは騒がしく戦いながらも悪くない静かな日常を彼女たちと仲間達で命が尽きるまで続けることになるとは誰も知らなかった

ゴジラSideout



K A N S E N    S i d e

『地球』

星の6割が海で構成された美しい星で人類は繁栄し豊かに暮らしており、四大国家や少数の諸国が存在し国同士のいざこざはあれど比較的平和に世界は回っていた。しかし人類の歴史は戦いの歴史だと言うことを思い出させるように人間ではない不明勢力『セイレーン』が出現し、人類に対して攻撃を開始した

無論人類は初めて共通の敵を前にして、一致団結し奴らを打倒すべくテイコウするが

敵の圧倒的な力とテクノロジーの前では人類の力はあまりにも時代遅れで瞬く間に人類存亡の危機に陥るのは誰から見ても明白であった。そんな中突如として『メンタルキューブ』というクリスタル状の物質が人類の手に渡り、それが在りし古き艦船を模した装備をした少女へと変わる。人々は彼女らを『Kinetic Artifacts of the Navy - Self-regulative Enllore Node』・・・略して『KANSEN』と呼び彼女らと共に人類は再びセイレーンへと挑み、次々と勝利を勝ち取ることに成功して失われた制海権を取り戻していった

そんな中作戦中で敵の待ち伏せを受けて艦隊は甚大な被害を受け、三人のKANSENがしんがりを務める

一人は狐耳をはやしたストレートの長髪をして、白と赤で彩られた巫女服の要素を取り入れた首から肩を露出させたワンピースドレスという服装をして、威厳があるたたずまいをしているが華奢で幼い体つきで大仰な肩飾りを付けそこから半透明のマントを

垂らして巨大で強力な砲が四つも備え付けられている艦装を纏う少女・四大陣営の一つ『重桜』の四代目連合艦隊旗艦にして巫女である戦艦のKANSEN『重桜所属・長門型戦艦1番艦・長門』

もう一人は銀髪をツーサイドアップでまとめて前髪の一房に赤いメツシユが入っており、赤と黒と灰色を中心とした無骨だが露出が多くスカートが非常に短い服装をして、大胆で蠱惑的な雰囲気を持っており背後から長いアームで伸びて龍の首を模された砲と砲の付いた盾の様なユニットが装備されて高い防御力を持つ艦装を纏う少女・四大陣営の一つ『鉄血』の参謀にして重巡洋艦のKANSEN『鉄血所属・アドミラル・ヒツパー級3番艦・プリンツ・オイゲン』

最後に1本の艦の煙突を乗せてアホ毛の生えたピンクの髪を黒のリボンを使ってツインテールでまとめて、白と水色のアイドル衣装に近いドレスの上に大きめの海軍服を羽織った服装をして、幼く無邪気な性格だが年上感があり航空甲板が描かれた旗をつけて艦橋を模した戦旗と腰部に小さな砲をしていかにも軽装な艦装を纏う少女・四大陣営の一つ『ユニオン』の老兵ことベテランにして空母のKANSEN『ユニオン所属・レキシントン級航空母艦2番艦・サラトガ』

三人はしんがりを務め辛くも艦隊の撤退に成功させるが敵から直上からの攻撃を受け気を失ってしまふ。そして運が良いのか悪いのかそのまま海流に飲まれ地下世界へのトンネルへと誘われてしまふ

長門「・・・すごい・・・！」

長門はひたすら目の前の漆黒の巨獣に驚愕した。振り返ればあつという間で目を覚ましてみればしんがりを務めセイレーンの攻撃で気を失って目を覚ましてみれば共にしんがりを務めたプリンツ・オイゲンとサラトガと一緒に地平線の彼方まで緑豊かな大地が広がり、上を見上げれば空は存在せず逆さまの大地が延々と続いているという神秘的であり得ない光景をみて三人で驚いていると突如として巨大な蠅螂の怪物が襲ってきた。無論三人と共に砲撃や艦載機による爆撃や機銃掃射で攻撃したが硬い外骨格によつて機銃や砲撃はあまり効果が無く、艦載機に至つては空を飛んで素早い動きと鎌で撃墜され今度はその鎌を自分らに振るわれようとしたときこの漆黒の巨獣が現われあつという間に自分達では牽制程度しか出来なかつた相手を叩き潰しては灰にしてみつたのだから・・・サラトガは何故か目を輝かせながら巨獣を見つめ、オイゲンは驚きの連続の成果茫然としていた。しかし長門は重桜特有の『ミズホの神祕』で先の蠅螂は絶大な生命の息吹を放つ凄まじい魂のオーラを放つていたがこの漆黒の巨獣はそれよりも何倍も凄まじい息吹と王たる威厳溢れる巨大なオーラを感じ取ると同時に動物の本能で感じ取ってしまった・・・自分達ではこの巨獣に傷一つ与えることも抵抗すら出来ない存在だと・・・そうして動けない三人を漆黒の巨獣は変わらず見下ろしている。そしてその沈黙を破つたのは漆黒の巨獣だった

??? 『お前達は何だ?』

長門・プリンツ・サラトガ「ッ!？」

三人は突如頭に響く声に驚き、目を見開く。どういう仕組みかは分からないが目の前の巨獣が何らかの方法で語りかけていたのだけがわかる。しかし頭・・脳に直接語りかけてくるなど今日までなかった経験なのでたじろいでしまう。するとせかすように目の前の巨獣が続けて語りかけてくる

??? 『聞こえている筈だが、もう一度きくがお前達は何だ?』

プリンツ「……人の名を聞くときはまず自分から名乗る物だと思っけど？」

茫然としたプリンツは正気に戻ったのか長門達よりも先に口をする。今彼女の頭には出来るだけ多くの情報を手に入れると自分達の生存しか入っていなかった

??? 『……そう言う物だったか、俺の名はゴジラだ。改めて聞くがお前達は？』

長門「よ、余は重桜の長門だ」

プリンツ「鉄血のプリンツ・オイゲンよ」

サラトガ「こんにちはは！私はユニオンのサラトガだよ」

ゴジラ『そうか、なら何故お前達のような種がココにいる？どこからこの地下世界に  
来た？』

プリンツ「話すと長くなるけど・・・」

そこから彼女らはこれまでの出来事と自分達の詳細と状況を詳しく説明し、ゴジラか  
らこの場所が自分達がいる地表とは異なる地下世界で豊かな環境と生態系の頂点に立  
つ怪獣達がはびこる世界で自分が王として調和と自然と仲間を守っている事と地下世  
界から地表に蛙には地下空洞へと続くトンネルを使わなければならないと知る。そし  
てそのトンネルが自分達がいる場所よりも遙か先に在る事も知り、自分達はこの世界の  
地理は皆無であり方角もこの世界特有の磁気の流れによりわから無い上に行くてには  
怪獣がうじゃうじゃいるであろう状況にどうするか頭を抱え始める。するとゴジラか  
ら有る提案を受ける



『ゴジラ』ならばばらくは俺と共に行動するのはどうだ？』

長門・サラトガ・プリンツ「？」

怪獣の王のまさかの提案に三人して首を掲げた。そして三人ともこれから起こるであらう事に想像することすら出来なかつたであろう……

まさかゴジラと提案通りにしばらく共に過すことに成り、他の怪獣達とハチャメチャな日常を垣間見ることになるとは……

K A N S E N S i d e o u t

## ゴジラSide

ゴジラ（・・・まさか地上ではそんなことになっていたとはな）

プリンツ達に情報をあたえると同時にまさかしばらく行っていない地上で人間ではない存在『セイレーン』が現われ、人類と彼女たちKANSENが地上の至る所で世界規模の戦争をしているとは思わなかったのでゴジラはかなり驚いていた・・・大体は

自分が忘れてしまったせいもあるが……

とりあえず前世は人間であったせいも人間に近い種族に当たる彼女たちに会えたこととはとても懐かしく嬉しく思ったが、彼女たちと地下世界の環境を考えれば一刻もはやく立ち去って貰った方が良いと判断した。彼女たちの装備は怪獣達には影響は少なくとも自然やスケル・バツファローのような小型の生物たちにとって十分驚異であり、先程のカマキラスの様な怪獣にとつては彼女たちは格好の獲物でもあるからだ。故に速く彼女たちを地下トンネルへ送り出したいが、人間よりも頑丈な彼女たちでもカマキラスの戦闘の成果体力が消耗して傷だらけの状態であれば反転する重力の中で良くて全身骨折で悪くてぐちゃぐちゃの肉塊になってしまう。しかも今はここから一番近い地下トンネルがある地帯ではいま繁殖期が起きておりゴジラでも気が立った怪獣に問答無用で襲い掛かってくるほど荒れており、あと二週間は続くだろう。そして考えついた結果がしばらく自分と共に行動するという提案だ

長門「共に行動するとはどう言うことなのだ？」

ゴジラ『正直に言えば一刻でもお前達にはお前達と自然のために地上に帰還して貰いたい、唯一の地表へと続く道であるここから近い地下トンネルがある地帯では怪獣達が普段よりも殺気立っている。お前達だけではすぐに餌になる可能性が高い。そして今の消耗し怪我を負った状態のお前達がトンネルに入れば反転する重力によって死に絶える可能性もある』

プリンツ「要するに私達が生還するためにはまず傷を癒やして二週間この地下で生き抜かなければならない。けれど私達じゃ生き抜くことは不可能、だからあなたと行動することで少なくとも怪獣から襲われる可能性を避けることが出来るという事ね」

プリンツの言う通り、彼女たちだけではすぐさままた別の怪獣に襲われ今度こそ怪獣の胃袋に収まれる事になってしまう。そこでゴジラと行動することで王である彼を警戒して襲われるリスクを大幅に下げることが出来る

ゴジラ『その通りだ。とりあえず今は俺のねぐらに向かい、その付近だけで過すことになる。狭苦しい思いをするだろうが勘弁してくれ』

サラトガ「そんなこと思わないよ、助けて貰ったのは私達だからね！。それにせつかくこんな綺麗で凄い場所に来たんだから楽しまないとね〜」

ゴジラ『・・・見かけによらずたくましいな。では尾から背鰭につかまれ、出発するぞ』

そうしてゴジラは三人が背鰭に捕まったことを確認すると自分のねぐらへと向かって行った

## 数時間後

ゴジラは三人を自身のねぐらまで連れて行き、とりあえずここを彼女たちの一時的な住まいとする。とりえあず自生する薬草と今日の食事と彼女らの食べ物を取るために巨大な湖へと向かおうとするがただ守られるだけで何もしないわけにも行かないという言うので仕方なくつれて行くことになった

ゴジラ『別についてこなくても良かったんだが？』

長門「守られた身分の上で世話まで掛けさせる情けない真似はできぬ、自身のことは自身で片づけなければな」

他の二人も同じ意見のようで、自身の艦装を携えながら此方に向けて心配ないと言いたげな笑みを浮かべていた。ちなみに艦装の弾は現在弾を発射しない空砲になっているため衝撃と音しか出ないため環境と自然に配慮していた

ゴジラ「やはり小さい身だが出来ている者達だな」

ゴジラは三人に感心しつつ、餌をとるために湖へと入った。基本的にゴジラの主食は放射能や地球のエネルギーだが今回は三人に合わせて久しぶりに川の幸を食べることにしていたのだ。長門は主砲や副砲を湖につけて発射することで衝撃を水中にたたき込み、衝撃による震動で魚たちを気絶させ一匹ずつ回収していく。プリンツは生物学的な艦装を使って鉄の顎で水中にいる魚をつかみ取っていく。サラトガは艦載機を上空で

飛ばして怪獣が来ないか見張ると同時に長門やプリンツの仕留めた魚を一緒に持つなど手伝いに徹している。ゴジラはプリンツ達がいる所よりも深い場所へと移動すると気配で獲物を感じ取り、片手を湖に突っ込むとぬめぬめとした何かを掴みとりそのまま水面へと引きずり出す

リバー・デビル「キュルルルル！」

姿を現したのは身長30mにも及ぶイカとタコを合わせたような姿をして、所々傷だらけで1本脚をもがれた巨大な頭足類の怪獣『リバー・デビル』。カマキラスとは違う怪獣が現われたことにプリンツ達は驚く



サラトガ「わわ、今度は大きいタコさんの怪獣だ！」

長門「・・・このような怪獣もおるのか（たこ焼きどれくらい作れるかな?）」

プリンツ「彼の提案に乗ったのは正解だったわね・・・」

サラトガはカマキラスとは違う怪獣のため単純に驚き、長門は驚きながら心の中でリバー・デビルの足を見ながらたこ焼きがどれくらい出来るか考え、プリンツはもしも自分達だけでここを訪れていたらリバー・デビルになすべ無く食べられた可能性を思いゴジラの提案に乗ったことに安堵した。するとリバー・デビルは自身を水中から引きずり出したゴジラにたいして触手を首や腕や足に巻き付けて攻撃を始める

ゴジラ「ゴガアアア！」

ゴジラは首や足や腕に強力な圧力で肉と骨をきしませながら締め上げられるも、それがどうしたと言わんばかりに力任せで吸盤で張り付く触手を振り払うと触手を数本束にして持つと近くの岩盤や地面へと数度叩きつけを行いジャイアントスイングのように遠心力をつけて浅瀬へと投げ飛ばす。踏みつぶしてとどめを刺すため近づこうとしたその時、サラトガから警告の声を聞く

サラトガ「ゴジラ、直上から凄い速さで大きいのが来るよ！」

サラトガの巡回に使っていた艦載機が此方に迫ってくる巨大な空飛ぶ何かを発見し、その知らせを受けたサラトガが即座にゴジラに伝えたのだ。其れと同時に空から根えっ気を纏った風と巨大な何かが咆哮を上げながら迫ってきた

??? 「ギャオオオオオオオオオオン!!」

その正体は燃烧する巨大な翼を備えた翼竜のような身体に後部に向かって伸びる二本の角と悪魔のような顔を持ち、体温はマグマの如く熱く全身が冷えた溶岩、または焼け爛れ硬化したような皮膚で覆われている怪獣でそのまま空から傷だらけのリバー・デビルめがけて両足にある鋭く膨大な熱を持った爪を向ける

リバー・デビル「キュルルツ!」

リバー・デビルはその怪獣を見るやいなや直ぐさま湖の深い場所へと逃れようとす

る。実を言うところのリバー・デビルがゴジラに見つかる前から手負いだったのはこの怪獣に襲われてしまい傷を負い、脚をもがれても辛くも逃げおうせていたのだ。しかしこの怪獣は執念深かったため取り逃がした獲物を川を伝って搜索していたところをゴジラに引きずり出された瞬間を発見し今に至る

??? 「グルルルル！」

怪獣は逃げようとするリバー・デビルを即座に足の爪で掴み拘束、その間も怪獣からの爪で切り刻まれては熱でその身を焼かれ続け弱っていく。それでも逃げ延びようと触手を使って怪獣を引き離そうとするリバー・デビルだがマグマのように熱い体温と熱気によってたちまち触れた面から触手は焼け焦げていき、最終的に炭化していくため抵抗すればするほど苦しみが増すばかりだった。そして怪獣の鋭いくちばしが軟体の胴体を軽々と貫き、血肉をついばむように食らいながらそのまま奥底で脈打つ心臓をえぐり出されリバー・デビル弱弱い声を上げながら絶命する。怪獣はそのままえぐり出し

た心臓を一飲みしながらゆっくりとおいしそうに残された屍を喰らい始める。プリンツ達はすぐにあの怪獣とゴジラが餌の取り合いもしくは縄張り争いが始まるのではないかと艦装をいつでも怪獣に撃てるように警戒する。しかしゴジラはとられた餌を取り返そうともしなければ威嚇することもせず、その目は久しぶりに出会った友人か仲間を見る目だった。其れを感じ取ったのか長門はゴジラにあの怪獣について問いかける

長門 「ゴジラ、あの怪獣はもしやお主の知り合いか？」

ゴジラ 『ああ、名は『ラドン』。いわく俺を尊敬する数少ない仲間だ』

長門の問いに目の前に怪獣の正体はゴジラの仲間であり、名はラドンと答える。ちなみに戦闘しなかったのは仲間という事もあるが、元々彼が狙っていた獲物であったのでゴジラが仕留めれば横取りになってしまう・・・それに獲物は最終的に仕留めた者の物

になるのが自然の理でもある。するとラドンはリバー・デビルを平らげるとゴジラに気づき陽気に話しかける

ラドン『あつ。王だ、久しぶり……あれ？その虫みたいに小さいの何？』

ラドンは自身の王であるゴジラに軽く挨拶を交すと、ゴジラの後方にいる長門達に注目する。その目は初めて見る物に対する好奇心に満ちてはいるが、彼女たちにとっては猛禽類が獲物を見定める時の目に見えるのでたじろいでしまう

ゴジラ『事情により共に行動している地上の者達だ。しばらくはこの地下で過して貰い、時が来れば送り届ける……言うなれば居候だ。あの二人の匂いがするが近くにゐるのか？』

ラドン『ああ、狩りの途中で出会ったんだ。あいつと女王はもう近くまで来てるよ』

ラドンの言葉と同時に湖の水面から背中が剣山のように大きく硬く逆立った棘が並び立ち、全身が鎧を着込むように硬い甲殻で覆われ、小さく鋭い棘を持った恐竜アンキロサウルスと龍の風貌を持ち口から冷気を漏らす怪獣が現われ、空からは歌のようにも鳴き声を発しながら体躯の小ささとは裏腹に巨大で光輝く美しい羽をなびかせ、足には蟻螂のような鎌と腹部には蜂のような棘と言った様々な昆虫の特徴を持ち合わせた美しい蛾の怪獣が現われた

??? 「キュオオオオオオー—————!!」

????? 「ガアアアアアアアアアアアアアアン!!」

咆哮を上げながらゴジラの向かってくる怪獣達はその尾や腕に草や動物を巻き付けて持っていた。彼等もこの付近で狩りをしていたので。そしてゴジラの前に立つと頭を垂れてまるで従者が主にたいして敬礼を示すかのような姿勢を保つ

長門「なんと・・・綺麗な・・・！」

サラトガ「うわー！あの蝶みたいな怪獣、天使みたいだよ。ユニットくめないかな？」

プリント「ずいぶんと派手な怪獣達もいたものね（あのトゲトゲ、姉さんが趣味に使ってる道具と似てるわね）」



長門とサラトガは蛾の怪獣の美しさに心を打たれ感動を浮かべ、プリントは綺麗と感じながらももう一方のトゲトゲの怪獣の姿を姉の趣味に使う道具に似てると思っていた

ゴジラ『久しぶりだなアンギラス、それにモスラ。こうして四匹そろうのは何年ぶりだろうか？』

モスラ『4年ぶりですよ王。それはそれとして可愛らしい者達を連れていきますね』

ラドン『そうかな、可愛いというより面白そうだと思うんだけどな？そう思うよねアンギラス？』

アンギラス『まず貴様は王と女王の貴殿方に対して口の利き方は相変わらずの所をどうにか出来ないのか？…：私は強いて言えば酷く小さいとしか思わんな。して王よ、この小さき者達は一体？』

ゴジラ『この際だ、お前達には伝えておこう。実は…：…』

その後ゴジラは彼女らが地表から来た者達だと言うことなどを説明し、それぞれ理解した後に互いに自己紹介することになり順番的にKANSENの彼女たちからすることになった

長門「改めて名乗らせていただく、余は重桜の長門である

サラトガ「こんにちは！魔女っ娘アイドルサラトガだよ」

プリンツ「プリンツ・オイゲンよ……まあ、よろしくね」

彼女らのあらためての紹介が終わり、今度は3匹のゴジラの友人であり、仲間であり、臣下でもある者達の自己紹介が始まる

モスラ『地上の皆さん紹介ありがとうございます。私はモスラ……この地下世界で怪獣の女王を努めています』

ラドン『ラドンだよ！よろしくね、おちびさん達』

アンギラス『我はアンギラス。．．．お前達が強者であるならば覚えておこう』

ゴジラ『．．．終わったな、狩りのつづきをするぞ』

その後狩りを再開し、途中でアンギラスやラドンも加わり湖は氾濫するは住んでいる生き物たちは慌てふくはで混沌と化した。ちなみに自分の分の食料を取り終えたプリンツ達は巻き込まれないようにモスラのモフモフに背中に避難し、モフモフの感触に頬を緩ませながら地表はどのようなもので話題を弾ませ有った

数時間後

ゴジラ『……こんな物か、お前達大丈夫……わけないか？』

巨大な魚を捕まえねぐらへと戻ったゴジラの視線の先ではモスラから貰った毛と草で作った簡易的ベツト弟子人のように眠るプリンツ達だった

長門「うゝん．．．」

サラトガ「．．．ボール．．．こないで．．．」

プリンツ「．．．帰れる．．．かしら．．．私．．．」

寝言を言いながらも、例え銃弾を撃ち込まれても起きないと言わんばかりに熟睡する彼女らを見て仕方が無いと思ったゴジラ。そもそもなiggったかという．．．ゴジラ

が狩りを終えたあと、ラドンがプリンツ達の艦装の話を持ち出したこととただの生き物ではないと直感したアンギラスに見知らぬ弱き者に王と共にいる事は許さないと忠誠の高さ故に半ば無理矢理勝負することになり、死にかけること約十数回・・・アンギラスの腹に0距離での攻撃をたたき込んで転倒させたと同時に力尽きてしまう。そしてほぼダメージはないが自身をひるませ転倒させた彼女らをそれなりの強者あると認めゴジラと共にいる事を許す事になった・・・ということ事が起こったのだ

ゴジラ『今はゆつくりと休むと良い・・・大変なのはこれからだからな』

そうしてゴジラは外の景色を見ながら巨大魚を食べ始める

こうして始まった地下世界での生活・・・・彼女らは無事地表へと帰還し、この世界で何を思うのか？

それはまだ誰も知らない



## 2話：迷い込んだKANSEN達との対話

彼女たちKANSENが地下世界での生活を初めて早一週間・・・ゴジラと同行しても、縄張りに入ったことで追い返されることもあれば餌として襲い掛かかれること等が日常茶飯事で常に命がけの毎日だった。しかしだからこそそんな環境にいたおかげで怪獣相手の立ち回りや行動解析に弱点を見抜く洞察力や身体能力などが底上げされ以前よりも心身共に彼女たちは強くなり、格下で小さい部類に入る怪獣ならば優勢に戦えるようになっていた。そんな毎日でも楽しい事もあったためか彼女たちの心境は穏やかである。たとえばサラトガがモスラの歌にときめきアイドルに勧誘しようとしては一緒にデュエットしたり、アンギラスが放つ冷気で氷を作ると果汁を組み合わせて氷菓子を作ったり、ラドンの高い体温で翼を鉄板プレートのように使い焼き肉をしたり等怪獣の能力を生かして楽しみを満喫していた

## 長門 Side

ねぐら近くの平原で狩りを終えてゴジラと共に自身が背負う艦装偽を預けながら腰を下ろして休憩する

長門「もう一週間経つのか・・・時間の流れは速い物だな」

ゴジラ『その感覚はあながち間違いでは無いな、俺たちのような必死に生きようとす  
る者達にとってたかが一週間など刹那の時間と同じだ』

昼飯を食べ終わった頃に長門は1週間が短く感じるようになったとつぶやき、ゴジラは其れを正しいと同調するなどたわいの無い話をする。ふと長門はゴジラを見つめ始め、これまで見てきた彼と自分を比較する。ゴジラが王として慕われるように自分も指呼として慕われ使命を持っているが、力を持って自由となっている彼と違って自分は幼

くして『巫女』という使命を持つ一方で権力者の椅子に座らされた傀儡のような境遇で自由もなければ、抵抗すれば大好きな民が傷付いてしまうと責任感の強さ故に何も出来なかった。似たような立場でここまでの違いに在る事から、この質問が王に問いかけられるのも必然だったのかも知れない

長門「・・・ゴジラ、一つ問いを掛けてもいいだろうか？」

ゴジラ『良いぞ、何が聞きたい？』

長門「・・・余は重桜の旗艦であり巫女として国の代表と言っても良い位についておる。身分で表すならお主とさほど変わらないが、お主が真の王ならば余は担ぎ上げられた操り人形の巫女なのだ・・・無論余の権力が下の者達に利用されてしまうことがある。其れを止めようとは向かおうとしてもその行為が重桜とその民達を苦しませる結果になると考えてしまうと恐ろしくてたまらなくなってしまう・・・ゴジラ、余は重桜にアマチの道を歩ませたくない。どうすればいい？どうすればお主のような強き王とい

う指導者になれるのだ？』

長門にとつてゴジラは力を持って自由でありながらも、調和を保つ王として使命を果たしつつ誰の指図も受けず自身の意思のままに行動し自然をと仲間のために戦い続ける姿によつて慕われる者……自分とは似てるようで正反対だからこそ、そのあり方にあこがれそうなりたかつた……ゴジラはその問いに対して視線を長門に合わせ真剣に語り始める

ゴジラ『簡単だ。自分が為したいと思うこと、正しいと思つたことを己が心が赴くままにすれば良い。例え真つ向から否定し、お前を縛ろうとする者がいたなら決して屈することはするな。立場等も関係ない、一步を踏み出す勇氣と抵抗する力を持って自身に正直で有れば十分だ』

そう、ゴジラはただただ自身の気持ちを嘘をつかず為したいと思うことを全力で為し

てきた。だからこそ大好きな自然と仲間と仲間と居れるその日常を守るために絶大な力を持ち、そのためならどんな敵をも屠り必ず大切な者を守り通そうとする不動の覚悟を持つて使命を果たし、その姿に憧憬と畏怖と尊敬といった感情を向けられ王となったのだ。しかし自分が国と皆のためにわがままを通せば、それが逆に皆と国を苦しめる結果になると思うと一歩を踏み出すことが怖くなってしまう・・・責任感が強いこそその迷いだらう

長門「・・・しかし余の肩には民と国の未来がかかっておる。余のわがまま一つで皆をとの間に混乱を招くかも知れぬ、それに余が皆のための一歩を踏み出してもその一歩が危機を招くと思うと怖くてしかたないのだ」

自分で妹くらいにしか言えない自身の心境を言う内に、どこまでも自分が指導者として情けなく自分の意思を強く表すことが出来ず、物知らずな娘だと分かってしまう。目に雫がたまりそうになるとゴジラが励ますように語りかける

ゴジラ『長門、成り行きと力で王になり使命を持つているがお前と比べれば背負う物が少ない俺と違い生まれから使命を持ち、多くの民と国の全てを背負っている重責をもつお前の心境は俺が察するに余りあるかも知れない。だがこの短い間で知ったお前は責任感が強い物知しらずだが誰よりも国と国の者達を心から愛している少女だ。そのお前が決めたことならばその決断と一歩は間違つては無いと俺は思う・・・自信を持って。それでも不安が残るといふならば友人や仲間を頼れば良い、誰かの手を借りることは恥じやないからな』

長門「・・・怪獣の王にそのような評価を受けるとは光栄だな。・・・余には友人と呼べる者はそういないのだが」

ゴジラの励ましの言葉はとても嬉しい物だったが、肝心の友人に関してはも心から欲

してはいるが重桜を守る者として喋り方や立ち振る舞いで威厳を出しているのが裏目に出て逆に近寄りがたい雰囲気を作った結果、敬う者が畏れる者か尊敬する者などしか出来なかつたため『ただの長門』として接してくれる友人は皆無だった．．．故に自身の心境をTT身隠さず伝えた上で相談できる者は当然いなかった。ここに来て少しばかり今までの自分の立ち振る舞いを後悔する。するとゴジラが思いがけない一言を発する

ゴジラ『なら俺がお前の友人になればいい』

長門「え？」

ゴジラ『正直変な話になるが、どうもお前達3人は他人の気がしない上にここまで事情を知ったからには力になってやりたい気持ちもある。いきなりになったがどうだ？』

自身にとってその問いはとても魅力的だった。大ききや歳や知識などを全て上回るどころか種族も異なっているが、自身と同じ身分につく大先輩であると同時に新たな憧れでもある彼と友人となれるのだから・・・そして彼の言う通り自分も当初会ったときから他人とは思えない気持ちがあった。自身のかの大戦の記憶にある『全てを飲み込む光』で水中から恐竜のような生物がうつすらと現われたような場面があり、それがどことなく目の前の彼に似ていた気がしたせいかもしれないが今は目の前の提案のことが優先でその考えは記憶の片隅に追いやられ、答えを彼に伝えるために妹の陸奥にしか見せないほどの素直で無垢な笑顔で答える

長門「その申し出喜んでお受けしよう、これからは友人としてよろしく頼むぞゴジラ」

ゴジラ『新たな友人として歓迎する、俺こそよろしくだ長門』



自分は華奢で小さな手で、彼は巨大で無骨な指を互いにさしだし握手を交した。初めて出来た友人の手はとても他暖かく心強く感じた

自分は今日初めて友人が出来て少しだけ前に進むことができたこの日の出来事を決して忘れることはないだろう・・・その後そ友人を作るこつを聞きモスラ達相手に実践する際に自分の立ち振る舞いなどを伝えた後、威圧感を放つ艦装を外して接すればいいのでは？と提案された・・・艦装を降ろしみると後であったアングラスやモスラにラドンから接しやすくなったと言われながら友人となってくれたが自分としては淡い喪失感に襲われなげだか素直に喜べない自分がいたような気がした

長門 Side out

## サラトガSide

このすごい地下世界に来てから一週間と三日かかった。まさか最近魔女っ子キャラアイドルとして売り出していたら、魔女が戦うような魔獣にそっくりな生き物『怪獣』に出会って戦うことになって絶体絶命だよくな状況になったり、そこを怪獣達の王様のゴジラにあって助けられると私達への気遣いと互いのために護衛をして貰いながら過すことになった・・・最近長門ちゃんとかかなり親密になったみたいだけど、其れよりも私はそのゴジラに対して在る事を毎日仕掛けていた

ゴジラ『ZZZZZZZ……』

ゴジラは昼食を終えて、ねぐらで寝静まっていた。この時長門とはモスラと一緒にモスラ自慢の花畑を見に出かけ、プリンツはラドンとアンギラスと共に夕食の食料を狩りに行っている。ちなみにラドンが善意で主食である巨大昆虫『メガヌロン』をおいしいと見せるがあまりのグロテスクな見た目に反射的に主砲で吹き飛ばしたため、くちばしでくわえていたラドンの頭事撃ってしまったため起こったらどんと壮絶な鬼ごっこをアンギラスに止められるまで続いたという。それはさておきサラトガが艦載機の準備をするとゴジラの耳元に配置する

サラトガ「ふっふっふ、今度こそ……」

今度こそ成し遂げようとする笑みを浮かべながら、一斉に配備した艦載機のプロペラの爆音とエンジンの発動音を最大にしてゴジラの耳元で大音量で響かせる。人間なら下手をすれば聴覚障害や鼓膜が損傷するなど重傷をもたらすほどの物で、例え七日間徹夜して熟睡した人間でさえ飛び起きて耳栓をしたくなる程の轟音だが・・・

ゴジラ『ZZZ・・・むう？何だサラトガか、また懲りずに悪戯か？』

ゴジラにとっては軽い電話機についたアラーム機能の小さな音のため軽い目覚まし時計程度のような物らしく、浅い眠りから覚めたようにすつきりと起きる。よくよく考えればゴジラは艦載機よりも強力な怪獣の咆哮を聞き慣れている上に怪獣といった生物は匂いや音にも敏感だがそれ以上に敵意や殺意や悪意といった感情等の方が敏感な

のだから、サラトガの驚かせようとする悪戯は大変可愛い物なのだ。しかしアイドルで天真爛漫な彼女が趣味の悪戯が失敗続きが続くので、2週間以内にゴジラが驚かそうと頑張っているのだ

サラトガ「むく！また失敗しちゃった、どうしたらゴジラは驚くのよー!？」

一週間と三日の間、彼女はゴジラに大好きな悪戯を仕掛けていた。頑張って片足が肘まで埋まる落とし穴や食事中に耳元で爆音を立てたり、寝床に大きな岩を置いて寝にくくしたりといろいろなイタズラを執行したが、地下世界で育ったゴジラにとって下が空洞だったため陥没に巻き込まれたり、食事中に他の怪獣に喉を噛みつかれたり、寝床に戻れず場所を選ばず寝にくい場所で寝るなど日常茶飯事だったため大抵の人間レベルのイタズラが聞かないほど耐性を獲得していたのだ

ゴジラ『・・・そう聞かれると、俺自身も今更どうすれば驚くか分からないな?・・・強いて言うなら倒した相手が実は生きていたという経験を持たないからそれなら驚かもしれないな?』

サラトガ「それ私処か出来る人いないでしょ!次こそは驚かせるんだから、その時は約束ちゃんと守ってよね?」

ゴジラ『フフツ、期待しておく・・・』

実のところサラトガにいたずらを何回かしかけられ失敗しても健気に何度でも仕掛

けてくる彼女を見て、もしも自分を驚かせられたら一つだけ言うことを聞くと面白半分で持ちかけたため、彼女はかなり張り切っておりその日は引き下がり、次に向けてのイタズラのアイディアを求めてある三人もとい三匹に協力を求めた

数時間後

1日があったたその日サラトガはモスラやラドンにアンギラスにアイディアを貰おうとこれまでの経緯を説明すると同時に相談していた。忠誠心が高いアンギラスは余り乗り気ではなさそうだけど・・・

サラトガ「・・・と言う訳なんだけど、何か良い案はないかな？」

モスラ『王を驚かせるですか？難しいでしょうね』

ラドン『でも王が驚く姿って見てみたいかも！』

アンギラス『・・・下らん。そのようなことを考える暇が有るならば、縄張りに不埒者がいないか見回る方がマシという物だ・・・』

ラドン『少し間が空いたって事はちよつとは気になるんだね？』



アンギラス『黙秘させて貰おう・・・』

モスラ『まあ、話を戻しましょう。知つての通り王は長く生きている中で様々な災害や襲撃を経験しているため、意識外からのいたずらに對しての鉄壁と言える耐性がついています。なにか別のやり方なら可能性はありますね』

ラドン『そういえば前にお気に入りのねぐら候補と一緒に見に行つたとき、辺り一面『蜥蜴』だらけでねぐらが跡形もなくなってた事があって、その時王すごく目を見開いてたよね』

アンギラス『かなりお気に入りの場所であつたらしい、花々が生い茂ると同時に川や緑も有りかなり環境が静かに整つていた場所だつたらしいが・・・それがあの蜥蜴共の巣窟になりはてていれば無理もないだろう』

三人（三匹）の言葉からゴジラは今まで意識外のいたずらは効果が無く、一方で予想外のことなら望みがあるとわかった。問題はゴジラにとつて予想外なイタズラはどのようなシチュエーションでやれば良いかだが、先の話をもとにすれば「起きてみればそこは平原でねぐらが跡形もなくなっていた」とう物なら驚くことかも知れないが自分達の恩人の寝床を吹き飛ばすのはもつてのほかで自然の法から外れた破壊に繋がりに自分達が排除される事になるため直ぐさま捨てる。その後黙々と考えると自分の売りを組み合わせたイタズラをまさに雷の如くピカツと閃く

サラトガ「閃いたよ！三人ともちよつとお願い聞いてくれるかな？」

そして自分のイタズラ作戦の全てを説明した後、明日に備えて準備を施していきあつという間に1日が過ぎていった

1日後

その頃全ての準備が整い、自分を待ち構えているとは知らず長門達がまだ寝静まつている早朝から縄張りの循環をしているゴジラだったがどこからか微弱的な地震と酷似した振動を感じていた。どこからかと正確な位置を感じようとすると、そこにラドンが

上空から現われる

ラドン『王、北の何も無い岩石地帯で変な振動が起きてるよー』

ゴジラ『あの場所か、わかった。直ぐに見に行く』

ゴジラがラドンの言葉を元に固い岩盤で構成され緑が少ない過酷な環境故に命がごくわずかしかない場所を思い浮かべると、ついてくるラドンと共にその場所へと向かう。険しい道のりを進みながらたどり着くこと同時に場所に似合わない大音量と歌声が響き、突然のことに硬直してしまいかろうじて視線を移せたのはモスラと共に歌を歌う『アイドルとしてのサラトガ』の姿だった

サラトガ「♪♪♪♪♪♪！」

モスラ「♪♪♪♪♪♪！」

本来アイドルが歌う派手なステージや自分を照らすライトに楽器はなく、ステージは岩を積み重ねて2段目階段ようにしたステージとは言えない舞台だが、其れはあくまでアイドル達をより引き立てるための物で大事なものはアイドル達の努力と歌唱力にダンスの披露力である。モスラは羽を大きく広げると同時に飛ばたかせる動きと規則的にガンマ線による発光を使って場の雰囲気盛り上げると同時に良く飛行しながら歌う歌を楽しそうに飛ばみながら歌い、サラトガはその光の下でモスラと合わせられるように一から作り出した歌と何度も練習しいっぺんのミスも犯さない洗練されたダンスと合わせる事で誰の心にも響かせる情熱と聞くだけで高鳴る興奮と言ったものをたたき込んでいく。気づけばゴジラだけでなくラドンやいつの間にかラドンの後ろにいた

アングラスも彼女らの歌とアイドルの姿に魅了されていた。そんな怪獣の心さえ刺激して見せたライブはあつという間に終わりを迎えた。そして直ぐさまサラトガの元気な声が響く

サラトガ「ヒュ〜！ゴジラどうかな？モスラとサラトガちゃんのライブ凄すぎて驚いたでしょ〜！」

自分のイタズラ兼ゲリラライブでゴジラは表情からも分かるように驚いているのは分かり凄まじい達成感を感じた。するとゴジラもしてやられた事を察すると同時にモスラ達にも視線を移し、どうやら三人もグルだったことをも察したようだった

ゴジラ『・・・ああ、まさかこんなイタズラを仕掛けるとは思わなかった。久しぶりに何かに対して驚嘆したな。まさかモスラ達もグルだったことも意外だった』

モスラ『はい、サラトガに頼まれたこともありですが、私達も王が驚く姿に興味がありましたから』

ラドン『いやー、上手く行っておかげで王の驚きの他にも面白いのが見れて良かったね!』

アンギラス『まさかこのような策で上手く行くとは思わなかったが・・・』

アンギラスの言葉通り考えた作戦は単純な物だった。まずアンギラスがこの岩石地帯で力込めた足踏みで比較的弱い震源を発生させることで、弱い地震として思わせたことでゴジラに気づいて貰った後ラドンにそれっぽい理由を伝えることで誘導し、謎の震源の原因究明に来てみればまさかそこで怪獣と共にライブが始まるなんて予想外を起こして驚かそうというイタズラ大作戦だった。今思えばアイドルの自分らしいゴジラにとつて予想外の弱さをついたイタズラだったと思う。その後モスラ達と共に作戦の全容を伝え、お待ちかねの約束を聞いて貰うことにした

サラトガ「うふふ、ゴジラ？約束通り一つだけお願い聞いて貰うわよ♪」

ゴジラ『ああ、楽しませて貰った分遠慮無く言ってくれ』



サラトガ「それじゃあ私の友達で怪獣ファン1号になってよ〜」

今まで思っていた願いをついに打ち明ける。ゴジラのような初めて意思疎通が出来る生き物に対しても興味津々な上に意思疎通が出来るならこの地下世界でもファンを作りたいと思っていた。そんな願いをゴジラは彼をよく知らなければ分からないが少しだけ微笑して答えた

ゴジラ『ああ、モスラの歌の次に心に響く歌だった。喜んでその願い聞き入れよう』

こうして怪獣で初めてのファンと友達が出来たことに嬉しさのあまり満点の笑顔で飛び跳ねる。その後流れでモスラ達とも友人になれてまさに有頂天の気分だった。そのままモスラもアイドルにならない？と誘うも余りどう言う物かわからず性に合わない

いと言うことでやんわり断られた。絶対もの凄い人気で慣れると思うけどな・・・

サラトガSideout

プリンツSide

このあまりにも現実離れで私達の常識が全く通じない世界に墜ちて1週間と5日があった。今は今日の晩食の狩りを終えて休憩がてら地下世界の風景を眺めている。思い返せばこの世界での日々を思い返すとまさに波瀾万丈という言葉が一番しっくりくる。味方艦隊のしんがりを務め、艦隊を逃がすことには成功したがセイレーンの攻撃によつて気絶したと思つたら海流に飲まれてこの世界に來た途端私達の攻撃が殆ど意味を成さない巨大な怪物・・・『怪獣』に遭遇し、そのまま食い殺されると思つた瞬間に今行動を共にしている怪獣の王ゴジラに救われ、共に2週間行動を共にし地表へと返す事になる。私にとつて其れは願つてもないことだったため快く受け入れ、多少自然を破壊しすぎないなどの制限はある物の必ずここから生きて帰るために使える物は利用していくつもりだった。けど最近になつて何かと世話を書いてくるゴジラやモスラと言つた彼の友人達と一緒に墜ちてきた長門とサラトガと行動していると、ただ利用するだけの存在と思えなくなると同時にほんの少しだけ罪悪感を感じ始めていた・・・もう誰も信じず心を閉ざし一人でいる私らしくない・・・まさか彼等なら共に歩めるかもと期待してる?・・・ありえないわ

ありもしない筈の思考を振り切ると、後ろからズシンズシンと振動を感じ振り返るとゴジラが同じ景色を見ながら近づいていた

ゴジラ『ここにいたのかオイゲン、そろそろ呼び戻そうと来たんだが・・・良い眺めだろう、ここは比較的高台になっているため地下世界全体を見渡せる』

プリンツ・オイゲン「そうね、少なくとも悪い物じゃないわね」

こうしてみると空に位置する場所には鏡映しにみえる大地が広がり、人の手が入らないため鳥のさえずりや川の波の音や怪獣達の咆哮が一種の音楽のように響き、高く生える木々やそびえ立つ山々が自然の力強さを表しまさに壮観の景色だった。来た初めは

狩りや怪獣の対処など忙しかったためこういうのに気が回らなかったがあらためてみるとこの世界に来たことも悪いことばかりではなかったと思えてくる。するとそんな景色を見ながらゴジラがふと問いかけてきた

ゴジラ『オイゲン、お前に対して気になることがある。聞かせてくれるか』

オイゲン「良いわよ、答えられる物なら何でも聞かせてあげる」

ゴジラ『そうか・・・なら何故お前は作り笑いを浮かべ、誰も信じず自分から孤独になろうとしている？』

オイゲン「ツ！」

長い付き合いになる鉄血の仲間でなければ分からない自分の偽物の笑みと誰にも話したことの無い自分の心境をたった1週間と数日間を過した相手に見抜かれたことに一瞬だけ息が止まり、わずかに目を見開いた。その様子を読み取ってやはりかと言いたげにゴジラは言葉を続ける

ゴジラ『俺たち怪獣は生きるために限らずあらゆる目的や欲に自分に対して正直な生物だ。俺はそれらを長い間見続けてきた。だからお前のように自分から孤独でいようとし、誰も信じようとしもない者の目は異質だ。そんな目をした者の先にあるのは決まって破滅しかない・・・だからこそ聞きたい、何故お前は一人でいようとすか？』

彼の言葉からすれば自分はかなり異質な存在だったらしい。動物に例えるなら確かに群れから外れ、只一人で生きようとすればたちまち他の強者が群れに淘汰されるか種も残せずただひっそりと誰にも認識されず死ぬかのどちらにせよ何にも覚えられず何も残せない・・・文字通り破滅だろう。だからこそ短い間だが妙に思いやりとお節介をかいてくる彼が私の心の異質さに気づき問いきたんだろう。だがこれは自分だけの問題で自身も変えようとしないうちに話す気は無かった。だから適当にはぐらかしその場を去ることにした

オイゲン「ふふふ、悪いけどプライベートに関することはだめよ。それだけならそろそろ戻らない？速くしないとあのアイドル様が騒ぎ出すかもね」

『ゴジラ』……やはり二人から聞いたとおりお前の過去、いや前世の出来事がお前を孤独になろうとする原因か』

自身の孤独の原点であるかの大战を切り出され、あからさまに動揺しながら彼に振り向く。二人から聞いたと言うことは長門やサラトガから聞いたのだろう。アズールレーンとして同盟を結んでいる以上、ある程度艦隊を組む相手同士では自身の艦歴などの詳細を載せられた資料に目を通すことになっている。彼はそこから私の艦歴と普段の様子から私の心の内を知ったと確信する。もうここまで知られた以上、はぐらかし誤魔化す気は無くなり其れを知った上で何を言う気か気になり始めた

オイゲン「……そうだとしたら、どうするつもり？同情してくれるなんてありきた



りなことでも言うのかしら」

ゴジラ『違う。同じ痛みを知っているだけで、その時お前が味わった絶望や悲しみはお前にしか分からない物、それは当事者でもない俺には分かるはずもない。だが過去に捕らわれたままでは生きることどころか守ることも自分が心から為したいことすらも出来ない』

オイゲン「結局、何が言いたいのよ？」

ゴジラ『過去ばかり見る余り、今の自分を抑え込み本当の気持ちから逃げるなど言っているんだ。過去はどうあがこうと変えられないが未来を変えることは出来る・・・今お前は意思のない道具ではなく心を持つ生きる者だ。生きる者は今と未来でしか生き

ることは出来ない、だからこそ常に本気で生き抜き心のままに命尽きるまで生きることこそ大切な事だ。そうしなければまたお前は過去を永遠と繰り返し、信じたかった者と共にいたいと思つた仲間に自分すら失い続けるぞ？」

オイゲン「……知つたような口を言わないでもらえる……！」

失い続ける……たしかにそうかもしれないと自分でも分かつている。それでも私の中に根付く恐怖と悲しみと孤独の決意が誰かを信じることも、一緒にいたいという願いを押し殺し心を開かせない。そして何よりも私のためだろうと孤独の辛さ、悲しみ、恐怖を知らない奴にずかずかと私の心を語られたくない怒りとまた信じて結果また失いあの時の思いをするのではないかという怖さにより、私は堰が切れたように感情を爆発させ吐き出す

オイゲン「あんたに何が分かっていうのよ!? どれだけ傷付いて本気で戦っても一人だけ生き残って……周りから誰もいなくなる悲しみが……信じても置いて行かれて孤独になる痛みが……また失って孤独になってしまいかも知れない恐怖があんたに理解できる!? 痛みもこの気持ちもしらないで理解も出来ない奴が知ったような口をきくな！」

かの大戦の時と同じようにまた信じて独りぼっちになってしまおうと怖くてたまらなかつた。信じて裏切られるのと思うと足が震えだして耐えられなかつた。どれだけ本気に事を為そうと全てが無駄になると思うとどうしようもなく哀しかった。だからもうあんな思いもせず、傷付かなくて済むと思つた。だからKANSENとして生を受け、姉や仲間達と出会い仲が良くなるうとも決して信じず受け入れようとしなかつた。しかし生きる者は本能的に掛けた者を補おうとする……傷を負えば直ぐさま治癒して塞ごうとするように一人が寂しければ心は他者を求めてしまう。それを今ままで気のせいと無

意識で押さえ込んでいたが、彼との対話で其れを自覚し孤独という恐怖をもう味合わないために他者を廃し心を縛っているのに心は他者を求めているという葛藤でもうどうすれば良いか分からなくなってしまうた……しかしそんな思考の海に沈んだ私を彼の一言がそこから引きずり出した

ゴジラ『……俺はこの星で生まれて2億年間親や兄弟は初めからいなければ、俺以外の同族とも出会えず生まれたときから1億年という間の中ずっと一人で生きてきた。種は違うがかけがえのない仲間の死と別れを多く見てきた』

オイゲン「え？」

まるで頭を金槌でぶん殴られたような錯覚をさせるほどの衝撃が走った。自分とは

違い兄弟もいなければ親が生まれたときからいなかった？・・・一億年という想像もつかない途方もない時間の中で同族もおらず只一人だった？・・・自分とは比べようもない孤独を彼は味わっていた？・・・数々の疑問が頭を駆け巡ったが、一つだけ確信したことがある。いま昔を思い出しながら話す彼の目を見ればそれは自分と同じ目をしていた・・・いや自分以上に多くの仲間の死を見て生き残ってきた奴の目を・・・

ゴジラ『生まれたときから俺の周りには味方もいなければ自分と同じ存在もいなかった。有ったのはまだ弱かった自分と俺の命を脅かす敵しかいない状況だ。それでも俺は必死に生きて、まだ見ない同族を探し続け1億年・・・結局は見つからずいつそ死んでしまおうと思うほど絶望したこともあった。だがそのたびに死んでいった仲間の声が聞こえた気がしたんだ・・・俺達は死んでも魂はお前と共にある。だから俺たちの分まで生きて、俺たちの分まで幸せになってくれ』と・・・だから俺は死んだ仲間が生きるはずだった時間と幸せを享受するため常に本気でここまで生きてきた。そして種族は違えど失いたくないからこそ死ぬ目に会っても守ろうと思える友のモスラ達と合い、幸せと思える日常を手に入れることが出来た・・・生きると言うことは何も失うばか

りではない、それ以上に生きること得られる者の方が多いんだ。俺は死んだ仲間の言葉信じ生きることでもまた大切な者を得ることが出来た、オイゲン・お前も生きること得られた物があつたはずだ。だからこそもう孤独でいようとすることはやめろ、また誰かを信じて共に生きて良いんだ』

ゴジラの言葉でより心を揺さぶられ、同時に頭の中に自分がキューブから生まれこれまでの記憶が駆け巡った。大半は硝煙と砲撃の轟音と血が舞う戦いの記憶だが、少しだけ戦いの合間に仲間と何気ない話で盛り上がり、時には自身の最愛の姉をからかってその反応を楽しんだり、酒を飲み有つて馬鹿騒ぎした記憶がありその中で心から笑つて楽しい思い出を得られていたことを思い出した。たしかに生きること道具ではあつた頃とは体験できなかったことや知らなかつたことを知る事があればこうして他の陣営の子と、仲間との日常を悪くないと思つていたことも事実だつた。次第に私の閉ざしていた心が開いていくのを感じた。また信じても良いんだと。また仲間と共に歩んでも良いんだと。常に心から笑つても良いんだと。けれど心に纏わり付いた恐怖心が心を押さえ込んでくるのを感じた。また裏切られる抱けどと。それ

もなら決していなくならない不変の存在を側にいさせてみると・・・

オイゲン「・・・それでも私は・・・」

ゴジラ『まだ一人になるのが怖いなら俺がいなくなることがない友になるさ。伊達に2億年も生きてはいなければ、簡単には死ぬことはないからな。危機やお前が求めるならいつでも力にもなってやる、仲間や友人は皆そのような物・・・だからもう一度誰かを信じるようになれオイゲン。もう一人ではないのだからな』

その言葉とともに右手の指を私の目の前に持つてきた。彼なりの握手なのだと解釈し、両手で彼の指を包むように触れる。傷だらけでごつごつと触り心地は良いとは言え

ないが指から伝わる彼の強い鼓動がとても暖かく安心させてくれる。今思えばこの生きるだけでも過酷な世界でどことなく世話をしてくれた上に毎日のように出会う怪獣から必ず守り通してくれた、そして自分の孤独と痛みを理解しこうして友人として私を救おうとするそんな彼の姿を見て来たからこそ今では彼なら心を開き信じて良いと思わせてくれる。なんとなく彼は私を一人にしといていくことはないと確信させてくれる。いつの間にか心の中でへばりついた恐怖心はなくなっていた。其れが分かるといつの間にか目から涙を溢れ出しているのを感じ、もう孤独でいる必要は無いと実感しながらもう一度信じることを出来るようにしてくれた彼に視線を合わせ今の自分だからこそ言える言葉を掛ける

オイゲン「本当にどうしようもない程お人よしね。でもありがとう、そして・・・これからよろしく頼むわ Lieber Freund」



ゴジラという信じれる友を得られた私はこの日から少しずつ変わっていくのだろうと思いつつ、騒がしくも悪くないみんなの元へと帰って行った。その後ゴジラと私の帰りが遅かったことで色々聞かれ、彼と友人となったことを簡潔に言うとは二人も同じ流れでゴジラと友人になっていたことに意外と感じながらもこのどことなく思いやりがあつてお節介で強い王様ならと驚くことはなかった。その後流れというかあのアイドルが陽気で強い推しによつてアンギラス達や長門とも友人関係を結ぶことになった。以前の私なら内心くだらないと一蹴し利用するだけの間柄としてしか思わなかったが、今ではこの地下世界で連携しながら背中を合わせた戦友として少しだけ信じるようになった・・・その騒ぎながら明日に備えて眠ることにした。

ここまで心から笑えて気分が良いのは久しぶりで、信じれる相手と友達に囲まれながら眠りにつくのは初めてだった・・・ゴジラの肌寄りかかりながら眠ろうとしたが、彼に触れていると不自然に胸の鼓動が早くなり大きく波打ちながら音を立てる。けど苦しくはなく逆に心地良いこの感覚は初めてで何だろうと考えたが睡魔が強いためそ

のまま流れるまま眠りへと落ちていく

私がこの気持ちの正体に気づき自覚するまでの時間はそう長くない事になるとは私も彼も誰も分からなかった

プリンツ・オイゲンSideout

怪獣&KANSEN Side

地下世界に墜ちて2週間

彼女たちKANSEN達が怪獣達が住む地下世界に墜ちて、怪獣王ゴジラとその配下兼友の怪獣達と対話の果てに絆を結び友となり生き抜くこと2週間・・・ついに地上へと繋がる地下空洞トンネルが有る地域での怪獣達の活動が沈静化したはずの旗艦まで生き残る事が出来た。すでに彼女たちはゴジラの背中に乗り、すでにその地域へと向かっていた

モスラ『三人は地上へと帰ればまず何をしますか？』

長門「そうだな、まず救難信号を上げて余達の無事を伝えるつもりだ。重桜の皆と妹を速く安心させなければな．．．久しぶりに餡蜜も食べたいとも思っておる」

サラトガ「はやくフアンのみんなにサラトガちゃん堂々帰還ライブを開いて新曲を届けないとね」

オイゲン「私はまずシャワーを浴びてふかふかのベッドで熟睡したいわ、そしたらため込んだいた秘蔵のお酒をたぐり味わう予定よ」

アンギラス『我らは娯楽という物をよく知らんから、酒や料理といった物はよく解らん』

ラドン『それにしてもなんだか2週間って言う短い時間だったけど別れるとなると、寂しく感じるね』

三人はそれぞれ帰還した後の予定をハツラツと答える。怪獣組には娯楽や料理といった物には彼女らと出会うまで無塩の言葉であったため殆ど分かっていないが……そんな雑談をしながら怪獣の背中に乗りながら向かって行き、そして数時間後ついに地下トンネル前に到着する

ゴジラ『ここから先は途中で海に繋がっている、アンギラス達はココで待っていてくれ。彼女たちは俺が責任を持って送り届けてくる』

モスラ『わかりました。長門、サラトガ、オイゲン、また遭うときがあれば地上の話  
をまた聞かせてくださいね？』

ラドン『またねみんな、今度会えたらまた歌を聴かせてくれたりもつと遊ぼうね！』

アングラス『・・・また会うことになれば話や狩り程度には何時でも付き合おう、達  
者でな』

長門「お主らにはとても世話になった、この恩はいづれ必ずかえそう」

サラトガ「本当にありがとうね♪今度は私達から出張ライブを届けに来るからね」

オイゲン「まあ、大変だったけど悪くない日々だったわ。また会えたならお気に入り  
のビールを奢ってあげる」

彼女らは怪獣達にこの世界で自分達を支えてくれた感謝を笑顔で伝える。ゴジラは  
そんな彼女らを見て、最初であったときは大きく恐ろしい自分達を恐れると同時に警戒  
し心を許さなかったが友に行動を共にし触れ合うことで互いを理解し種が違えど親し  
い友人の関係になった。そして心なしか彼女らの背中は一団と力強くも感じた

互いに別れの言葉を交すと、長門達はゴジラの背鰭にしつかりと捕まる。ゴジラは三人がしつかりと捕まっていることを確認すると地下トンネルへと入っていき、地上の海へと続く道を泳ぎ出す。地下トンネルの中の水流は激しく少しでも流れをもちに受ければあつという間にゴジラから引き離され死しても尚海を漂うことになる。だからこそゴジラは急いで彼女らを地上へと送り出したが、急いで最速で泳ごうとすればそれほどするほど水流の勢いを強め彼女たちを振り落としてしまう危険があるため抵抗が少ないまま速く泳げる程度の速度で泳いでいる。長門達は艦種が潜水艦ではないため長時間の息止めは出来ないため腕の力の配分を間違えればたちまち酸素を欠乏してしまい力を出せず振り落とされてしまうため。力の配分を間違えないように少しでも酸素を使わないようにしていた。ときおり振り落とされそうになればオイゲンが艦装を二人に巻き付け引き寄せては長門やサラトガが力の限り互いを支え合うことでなんとかゴジラの背鰭から振り落とされまいと耐える。そんな過酷な状況を5分から15分という短くも長く感じる時間の中でKANSENの三人は徐々に閉じた瞼から光を感じ目を見開くと同じ瞬間に息が出来ない水中から水しぶきを上げながら水上へと投げ出される。三人はKANSENとして立ち上がると目の前には夜明けの夕日と自分達を心配するように見下ろすゴジラの姿と見慣れた蒼く広がる美しい海が広がっていた。やっと自分達は地下世界から帰れたと認識すると一気に今までの疲れが襲い掛かり会



場に腰を下ろしてしまふ。そんな無事な彼女らを見てゴジラは無事に送り届けられたことにホツとする。そして自分を他の誰かに見られることはよろしくないのですぐさま別れの言葉を切り出す

ゴジラ『久しぶりに地上の光景を見たが、やはり夜明けの太陽は綺麗だな。無事にお前達を送り届けることが出来たいま、俺もそろそろ帰ることにしよう。また会える日があるならその時はまた日常の話しを肴にたかり合おう。』

長門「礼を言うのは余達だ。ゴジラのおかげで余は前に進むことができた、お主が友人となつてくれたことを心から感謝するぞ。また会えれば重桜の良きところをたくさん教授しよう」

サラトガ「大変なこともあつたけど本当に楽しかったよ。また会えたら私のファン

のみんなにゴジラの事紹介させてね」

オイゲン「毎日が命がけだったけど悪くなかったわ、いろいろとありがとうね」

ゴジラ『俺こそお前たちとの日々はとても楽しいものだった。こういつてなんだがお前たちが地下に落ちてきて良かった・・・さよならだ地上の新しい友人たち』

互いに地下世界での濃密な2週間の日々を思い出しながら、時に互いを守りながら笑い、友人となった相手同士で一時的の別れの言葉と感謝の言葉、もしくはまた会えた時の話を交える。ゴジラはそんな彼女らに自分こそ新しい友人となつて彼女たちがいるからこそアンギラス達と過ごす日常とは違う楽しい日々を過ごせたことに礼を言うと、上半身だけ水上に出ている体制を崩しワニのように四肢を体に密着させながら体を大きく波立たせながら深海へと潜ろうとする。するとそこにオイゲンから声をかけられた

オイゲン「ああ、ゴジラ。ちよつと待ってもらえる？」

ゴジラ『ん？ どうs・・・』

チュツ

そこからゴジラの言葉は途切れてしまった。顔だけ振り向いた瞬間に頬のあたりにほんのわずかだが何か柔らかいものが当たった感触をし、それが何かを認識した瞬間あまりの出来事に動揺してしまったからだ。なぜならそれはオイゲンが両手をごつごつとした表皮につけて寄りかかるようにゴジラの頬にキスをしたのだから！

そのキスは数秒にも見たいない程ソフトなものだったが、ゴジラにとっては前世でも味わったことのない体験だったので効果は抜群で少しの間放心してしまう。そこにオイゲンが妖艶な笑みで語り掛ける

オイゲン「言葉だけじゃ物足りないから私なりのお礼のプレゼントよ♪…………お気に召したかしら？」

ゴジラ「……よくわからないな」

ゴジラはそれだけ言うと彼女の妖艶な笑顔からすぐに視線を外し、海の奥底へと消える。まるで以上に高くなる体温や高く鼓動する心臓をはやく冷やして収めようとすさまじい勢いで冷たい深海をぐんぐんと潜っていく、なぜ自分はオイゲンにキスをされてこんなに心臓が高鳴り、体が火照っているのか自問しながら地下世界へと帰った。当のオイゲンはそんな反応を見せたゴジラをみて面白うに微笑みながら見送り、一部始終を見ていたサラトガと長門は頬を染めながらオイゲンの行動を問いただす

長門「おおおお、オイゲン殿！なぜゴジラに接吻を!!？」

サラトガ「あわわ・・オイゲン。見かけのとおり大体だね〜」

オイゲン「フフっ・・さあ、どうしてかしらね？」

そう心からの笑顔で答えたオイゲンは長門たちとともに救難信号を聞きつけた艦隊に拾われアズールレーンお吉へと帰還できた。その時オイゲンが一人部屋についたとき別途に飛び込んで顔を赤くしながら少し悶えたの別の話・・・

一方そのころゴジラは地下世界に戻った際にモスラたちに出迎えられ、それぞれの縄

張りへと帰っていた。アンギラスは凍土地帯に、ラドンは火山地帯に、ゴジラとモスラは森林地帯へと、ちなみにモスラはゴジラと親友となつて長い上に体質の事もあるのでゴジラの縄張りに同居させて貰っている。そんな二匹だがゴジラは今モスラに首元を何度も甘噛みされている

ゴジラ『モスラなぜそんなに噛んでくるんだ？』

モスラ『別に……なんだか嫌な匂いするので私の匂いで上書きしてるだけです』

勤の良い者なら気づくかも知れないがモスラはゴジラに好意を抱いている。一見するとモスラとゴジラは種族がちがうためそんな関係はあり得ないように見えるが自然界において他種との間に友好関係や恋愛感情ができることもある。事実ある本ではヤマネコに育てられたリスが登場することもあればイルカと人間の恋愛もあつたらし

い・・・そんな約一億年も思いを寄せているモスラだが、ゴジラにとつては一緒にいると時折先ほどのオイゲンにされたキスと同様に一緒にいると胸が高鳴り厚くなることがある一番の親友としか見えていない。元々ゴジラは前世でも色恋沙汰など皆無であつたため人が自分に対してどんな気持ちを抱えてどう思っているかも、恋に対する気持ちも初めてだから仕方ないことだ。しかしモスラとオイゲンのおかげでその気持ちがわかる時も遠くないだろう・・・話を戻すと一億年も思いを寄せて、ゴジラの心を動かすに至つたモスラがたつた2週間という時間で自分と同等にゴジラの心を動かし、たことは当然面白いはずもなく、今まで恋のライバルもいないこととゴジラを恋心を向ける親友というより王として見ることもあつたことで自分と彼が釣り合うのかという迷いで一歩下がつた距離間から向き合つていたことでここまで時間がかかつてしまつたことをモスラ自身がゴジラからゴジラに対して好意を持ち始めたオイゲンのおい色が濃くすることから自覚し、ゴジラの心を射止めて愛をささやき彼の一番になるのは自分でありたいという決心の元、積極的になり今こうして今までしなかつたあまがみでキスによつてこびりついたオイゲンののにおいを消しているのだ。普段ならこんな行為をしないはずのモスラを前にゴジラは内心戸惑つていた



ゴジラ（こんなに嘯みついていたいどうしたんだモスラ・・・何故か悪い気はしない、それどころか少しずつ心地よくなっている？）

モスラ（フフフ♪戸惑っているゴジラもなんだか可愛らしいですね、そんな強くて冷静でかつこよくて誰よりも思いやりも持つあなたに私は恋をしたのでしようね・・・オイゲンもそんな彼を好きになるのはわかりますが簡単には渡しませんよ？）

そしてモスラの甘噛みが終わるまで二匹はずっとその場から動かず地下世界の光に照らされながらたわいないことで喋りながら、人間がいない日常を過ごすのだった

ちなみにこの時地表で自身が所属する基地の内部にある自室でオイゲンは就寝していたが、モスラとゴジラが終始恋人？としてイチャイチャして最後は互いにキスをしあつて最後はモスラが自身に向けて「もらっちゃいました♪」と言つてくる夢を見たた

夢を見た夜が明けたその日オイゲンはベリーベリー不機嫌で誰とも話そうとせず駄々洩れの威圧で見方を委縮させ、攻めてきたセイレーンの艦隊をたつた一人で殲滅させ、その姿はまさに悪魔だったと後に仲間にも語られた・・・

この時はまだなぜこんなに二人がイチャイチャしてるのを見てこんなにイラつくのか、無意識にゴジラの隣にいたいと思つてしまうのかはまだ彼女自身もわからなかった・・・わかる時が来ればそこからモスラとオイゲンにとって本当の戦いが始まるだろう

### 3話：とある者たちの過去ととある獣の覚醒（前編）

～1999年～

セイレーン大戦がはじまり、長門たちがゴジラと出会う15年前・・・

その日からある者たちの人生を変え、人と怪獣の運命が交わりだしていた

～重桜・本土近海にある有人島～

そこは重桜本土から少し離れた島で世界でも数少ない原子力発電所『雀路羅原子力発電所』が建造されていた。そこでは優秀な科学者や研究者、その家族やはたまた関係のない一般人が住んでおり日夜放射能の研究も兼ねた研究所とともに原子炉から生み出される膨大なエネルギーを島や本土へと送り届ける仕事に皆精を出していた。当時セイレーンの猛威が最大限に振るわれていたがKANSENたちが現れ始めたことで島は比較的平和で穏やかだった

そんな中その島のある一軒家で早朝から電話を片手に大きな声で話しており、それを聞きつけ手作りの飾りを引きずりながら小学2年生（8歳）の小さな少年『シンジ・ブロディ』が電話に向けて大きな声を放つ自身の父でユニオン人の『ジョー・ブロディ』を気づかれないように除きだす

ジョー「・・・いや、タカシ違う。ちよつとこつちの話聞いてくれ、すぐに会議がしたいんだ。原子炉を停止しなきゃならん、メモで伝えるような案件じゃない・・・ユニオンの所有する鉱山近くで小さな揺れがした時からモニターしてるがその揺れが

個々の近くから起こり始めたんだ……ハヤトに言われたんだ！この件はタカシと話し合えて……私は研究所のマニュアルに従って君に相談してるんだ……」

小さいシンジには父の難しい言葉には理解できないところがあるが、父がどんな仕事についているかは知っているためきつと大変な事なのだろうと察していた。すると今から黒いスーツを着こなした黒髪で長髪の女性・シンジの母である『サクラ・プロディ』がシンジと一緒にジョーに気づかれないように気を付けながら除きながらシンジと予定していたサブライズをどうするか話し出す

シンジ「もう起きてるね？」

サクラ「ええ、今日に限ってずいぶん早いわね」

シンジ「どうするの?」

サクラ「……着替えておいて、私がちゃんと考えておくから」

シンジ「……わかった」

そして三人は身支度を済ませ、シンジは家の前に留まる学校行のバス停へと向かい、ジョーとサクラは自家用車に乗り込む。ジョーはいまだに揉めているのか電話を片時も離せず、視線と手を振ることでシンジを送り出した。シンジがバス停につくと後ろから狐耳が生えた少女と美女がやってきた、その容姿はまさに大和撫子と言っても差し付けないがやはり人にはあるはずがない狐の耳やしっぽに目が行ってしまう……彼女たちも重桜の者だが人間ではなくするとKANSENである。茶髪の長髪で穏やかな雰囲気を持ち傘を差した美女が『天城』、黒髪で髪型はショートで左右を結ばれた少女は『赤城』、同じく髪型はショートだが銀髪でどこか勇ましい雰囲気を持つ少『加賀』だ。こ

の島では赤城と加賀のような小さいKANSENたちと人間の少年少女たちを共に同じ学校に通わせることで今KANSENを恐れる風潮の意識改革を促している。そして赤城と加賀が笑顔をしながらシンジへと駆け寄り、その様子を微笑ましいように見つめながら天城も二人の後に続く

赤城「おはようシンジ。さあ、子分とし今日も主の私を楽しませなさいよ？」

加賀「シンジ、あまり赤城の言葉を真に受けるな。これ以上に調子に乗らせるとろくな事にならないからな・・・それでは天城さん行つて参ります」

天城「ええ、三人とも気を付けていくのですよ？」

赤城と加賀は当諸学校に来たときは人間からは余り関わろうとされず二人っきりの

時が多く、悪いときにはKANSENと言うことで石を投げてくるなどタチの悪いイタズラがされたがそこにシンジが身を挺して守った頃から付き合いが始まりとても仲が良くなった。それ以降シンジの家にお邪魔させて貰いとみに遊んだりサクラたちと二人の親がわりの天城を含めて談笑するほど付き合いが長くなりこうして三人で仲良く登校するようにまで至った。ちなみに加賀はシンジのことを度胸も良く力もそこそこある良い人間として見ているが赤城の場合最近ではシンジを見る目が獲物を見るような鋭い目をして加賀はともかく他の少女達と喋っているところを見ると凄まじく不機嫌になるそうなの……そんな三人を天城は笑顔で見送る。一方車の中ではようやくジョーが会話を終えて、慌ただしく出て来てしまったためサクラが身なりを整えながらある事を話す

サクラ「昨日シンジが頑張って飾りを作ってたわよ？」

ジョー「飾り？何に使うんだ？」



サクラ「誕生日に使うのよ、今日は仕事を速く終わらせてケーキを買ってシンジと赤城ちゃん達を迎えに行ってくるわ。フツツ・あの子達もお世話になってるから祝いたいんですって」

とても楽しみなのかサクラは話している間ずっと笑顔だった、そんな笑顔に自分は惚れたのだろうか？ ジョーは愛おしそうにサクラの肩に手を置きながら話す

ジョー「そうか今日は彼奴の・・・サクラ、センサーが正常なのか確かめたい。何も異常が何のに変人が騒いだなんて思われたくない。発電所に着いたらチームと一緒に震源に近いレベル5に直行してほしい」

サクラ「あなたは変人じゃないわ。まあ、そういう所もあるけど今回は違うわよ・・・それと誕生日おめでとう！」

ジョー「え？・・・それじゃあ、すっかり忘れてた！これは良いもんだ」

サクラ「もう忘れん坊さん♪」

サクラは真剣な表情からうってかわって自分の誕生日で息子がその祝いの飾りをしていてくれたことに気づき笑顔になる。そこにサクラが頬に口づけをする・・・もう熱々である。そして二人は原子力発電施設に車を進める

そこで何が起るかも知らずに・・・

〈雀路羅原子力発電所・内部〉

ジヨー「このグラフは？」

「異常な地震波です。このグラフは分単位ですよ……一日単位ではありません、今起こっています」

「ちよつと待て、地震波っていったか？それじゃあ今地震が起こってるのか？」

ジョー「いや地震ならこんなグラフにはならない、一定の間隔で少しずつ強くなって  
る・・・これにはパターンがある」

役員と作業員を挟まれながら話すジョーの手元にはいような振動の波形を記録した  
レポートがあり、普通地震波の波形は上や下に線が入り振動の強さを振幅で表すが、  
これはまるで緩やかな台形のような形で表されていた。そして中央制御室に向かった  
ジョーはそこで同じ研究員のハヤトとタカシと合流し、互いに会議を悠長と開いている  
事態ではないと確認する。そして互いに今も尚観測し続けている震源のグラフを見な  
がら震源の場所を特定しようとする

ジョー「タカシ、揺れはどこから来ていると思う？」

タカシ「正直見当もつかない、わかっているのはこの揺れはダンダンと強くなつて  
ることだけだ」

ハヤト「さつきから他の施設に問い合わせてるんだが、この現象は他の地域では起きてない。でもおそらくこの前のユニオンでおきた地震の影響だと思う」

数々の憶測が飛び交うがどれもこの現象を説明するにはあまりにも役には立たなかった。そしてジョーはこのまま揺れが続き続けた場合におこる原子炉への影響を危惧していた

ジョー「……今原子炉はフル稼働中なのか？」

タカシ「ああ、でも念のためパワーを下げた方が良さだろう」

とりあえず揺れの対処として原子炉のパワーを下げることに決め、それぞれの端末で作業員などに指示を出そうとしたその時……

『ギョオオオオオオオオオン!!・ブルルル!!』

何かに電子機器が影響され動作不良や緊急停止を起こしながら凄まじい振動が発電所全体を襲った。揺れは数秒で収まり、誤作動に緊急停止をした機械が復活するもジョーは研究者で有りエンジニアとしての感が激しい警鐘を鳴らしていた。このまま

では発電所が倒壊し、原子炉から放射線が漏れ付近に甚大な被害をもたらしてしまうと・・・もはやパワーを下げたおこうという考えは微塵もなかった

ジョー「今すぐ原子炉を停止して密閉するんだ！付近にも避難を呼びかけるんだ速く！！」

ジョーはタカシ達に直ぐに指示を出すと、現在防護服をいて原子炉の点検をしているサクラと連絡をとるために近くの配置された無線機の一つを手に取り呼びかけるが再び大きな揺れとともに無線機の周波数が乱れ通信が出来なくなってしまう

そのころサクラたちは原子炉の調査をしていたが大きな揺れが分単位で起きてくることからサクラを含めるチーム全員がこの事態に困惑しており、リーダーであるサクラはここにいるのは危険だと判断しその場を去ろうとする

サクラ「みんな戻るわよ、急いで……嘘、大変！」

その瞬間に揺れによって原子炉の一部が目の前では破損し凄まじい勢いで放射能吐き出す。全速力でそこから離れながらサクラはジョーに連絡を入れる

サクラ『ジョー、ジョー聞こえる？』

ジョー「サクラ無事か!? そっちはいまどうなってる？」

サクラ「最悪よ、原子炉が破損したの! こっちは今戻って所よ」



ジョー「急げ！原子炉の破損なら防護服を着てたつて五分と持たない！」

サクラ「分かってる急いでるわ！」

最愛の妻が危機的な状況だと分かると、一旦通信を切つて迎えに行くために原子炉へと向かい出す

ジョー「タカシ、サクラを迎えに行ってくる。防護扉を手動にしといてくれ」

タカシ「ジョー其れは無理だ!？」

ジョー「頼む、まだサクラがいるんだ！」

タカシに頼みを伝えると全速力で原子炉へと向かい到着するも、防護扉の先にはまだサクラたちの姿が見えなかった。その後タカシから手動になっていることを伝えられココで待つことにして再び無線機でサクラに呼びかける

ジョー「サクラ聞こえるか、扉の所にいる？・・・サクラ聞こえるか！扉で待つて  
るからな」

その頃ジョーからの通信で助かる可能性があることが伝わり、サクラたちは必死に後

ろから迫る放射能の霧から逃げ続けていた。しかし彼女たちに再び大きな地震による揺れが襲い掛かり、一人がバランスを崩してしまうことで何人ともぶつかりまともに倒れてしまった

サクラ「みんなしつかり！後もう少しだから！・・・あつ・・・」

仲間を励ましながら立たせようとする彼女が見た者は目と鼻の先まで迫っていた放射能の霧だった

そしてジョーは5分という短くも彼にとつては長い緊迫とした時間を妻が無事に帰ってこれるように神に祈りながらじっと待っていた。しかし時間が経つにつれ危険と脅威が徐々に大きくなっていることを無線から流れるタカシの言葉で思い出された

タカシ『ジョー聞こえるか？扉を早く閉めるんだ！』

ジョー「頼む！あともう少しだけ待ってくれ！」

タカシ『これ以上は無理だ！早く封鎖しないと島が危ないぞ！』

ジョーも研究者としてタカシの言いたいことはよくわかっていた。このままサクラたちを助けるために防護扉を閉めなければもしもサクラたちよりも放射能が扉の向こうへとたどり着いたなら、高濃度の放射線が島全体へといきわたり多くの者が被爆し命を落とす最悪の状況になるだろう・・・おそらくその中には息子のシンジや赤城たちも含まれているかもしれない。妻を取るか息子と島の住民たちを取るか、ジョーの頭の中では大切な者同士が頭の中の天秤によって測られていた。

自分はどうすればいいのか自分でもわからなくなるほど思考の海に沈んでいく中、無線機からサクラの声が届き直ぐに無線機を取り出す。しかしその声はとても弱々しかった

サクラ『ジョー・・・ジョー聞こえてる？』

ジョー「サクラ！聞こえてる、大丈夫か!？」

サクラ『ジョー・・・よく聞いて、扉を閉めて・・・もう間に合わないわ・・・』

ジョー「何言ってる諦めるな！とにかく急いでくるんだ!!」

サクラ『ジョー・・・あなたは生きるのよ・・・シンジのために・・・!』

ドオオオオオオオオン!!!

激しい揺れと轟音とともにサクラたちよりも早く放射能の霧がジョーのいる扉に向かって迫ってくる。ジョーは迷いを振り切るかのように慟哭の叫びをあげながら手動で防護扉を閉めた。ジョーの行動は自身の息子と島に住む多くの命を救ったが、代わりに最愛の妻を切り捨てることになった。悲しみに暮れながら涙を流していると扉をたたく音が向こう側から聞こえ、扉に付けられた窓からようやくやくたどり着けたチームが助けを求めていた。そんな彼らに対してジョーにできるのはただただ謝罪する事しかなく、するとチームを押しよけるように桜が防護服のマスクを外して口から被ばくによる

吐血を流しながら顔を見せた

ジョー「あ……ああ……!!」

サクラ「ごめんなさい……間に合わなくて、だから自分を責めないで……」

苦しみながらも涙を流しながら自信を見る最愛の夫を慰めるように精一杯の笑顔が浮かべながら間に合わなかったことを誤る。そしてジョーのいる方からもう一つの扉が嚴重に締まっていきサクラの顔は見えなくなっていた……

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

再び襲ってくる激しい揺れとともに獣の咆哮にも似た音がまるで早く出ていけと言わんばかりに響き渡り、ジヨもサクラに託された思いを無駄にしないためにもその場を後にして残された人を探しながら非難するのだった

外では発電所の設備や原子炉が揺れによってひびが入り、次々と倒壊していった。発電所の付近ではあたり一面に警告音が鳴り響き老若男女関係なく荷物をまとめて避難を始めていた。その中にはシンジと赤城と加賀たちもおり、避難しようとして荷物をまとめていると轟音が響きそちらに向けて三人とも視線を向けるとジヨとサクラがいるであろう発電所が粉々になりながら倒壊していつており、その光景を見てシンジ達はただ



ただ突然の事態に困惑によって呆然とするしかなく赤城と加賀の手からはジョーのため  
めに作った千羽鶴や手作りの和菓子がまるでだれかの命の灯が消えていくことを知ら  
せるかのように音を全くとたてず落ちていった・・・その後三人は教員によってその  
場を上空になりながら後にしていく。発電所の方から聞こえる獣の咆哮を耳にしな  
がら・・・

（15年後（2014年））

???  
&  
???  
s  
i  
d  
e

ピ  
ピ  
ピ  
ピ  
!!

シンジ「うん・・・もう朝か」

とある部屋の寝室に設置された目覚まし時計によって、あの惨劇から15年を経て立派な青年へと成長したシンジが目を覚ました。随分と懐かしく悲しい惨劇の思い出を

夢として見ていた気がしながらも凝り固まった肩をまわしながら近くにある窓のカーテンを開けて太陽の比を浴びて眠気を覚ます。すると自身の横から小さく寝ぼけた声を出しながら布団からもぞもぞと黒い長髪で狐耳と九つの尾をはやしたまさに絶世の美女と言っても過言ではないほどに美しい容姿に成長した赤城・いや『重桜所属・航空母艦・赤城』が出てきた。まだ眠い野中うつすらとしか目を開いておらずいまだ寝ぼけているのかシンジの腕に抱きついたまま離れない。そんな彼女を愛おしそうに頭をなでながら朝だと呼びかける

シンジ「赤城、もう朝だから起きないと」

赤城「ん……おはよう旦那様」

赤城もシンジの呼びかけに答えるように先ほどの眠気が嘘のように消し飛び、甘えるような声をだしながら寝間着越しでもわかるほど美しく整い豊満に育った体でシンジ

に抱き着く。そんな彼女の行動はとてもうれしいものだったが朝食の準備などもしなければいけないため、寝室から出るべく行動を起こす

シンジ「そろそろ今日の朝食を作らないといけないから、また後でな」

赤城「むう、わかったわ。なら私も手伝わせてもらおうわね？」

そして二人は服装を着替えて、朝食を作り軽く談笑をしながら朝食を食べ終わる。その後二人で休日である今日を二人で出かける予定であったため、朝早くから外にでて様々な店で面白い物をしては喫茶店であんみつを食べたりなどをして楽しんでいく。途中シンジと過剰なまでにくつつきイチャついてる赤城に対して嫉妬の視線が飛び交い、それに気づいた赤城は勝者の根身を浮かべていたという・・・すると目の前から赤城と同様に狐耳と九つの尾をはやした銀髪で勇ましい雰囲気を持つ美女・・・15年成長した加賀・・・今では『重桜所属・航空母艦・加賀』がやってくる。体を動かしていたの

か少しだけ頬に汗を流していた

加賀「む？・・・シンジに赤城姉さま、今日も相も変わらず仲睦まじいですね」

赤城「フフツ、ありがとう加賀。でも私たちは仲睦まじいのではなくて相思相愛よ」

シンジ「こんにちは加賀、ずいぶんと動いていたようだけど今日も鍛錬してたのか？」

加賀「鍛錬もそうだが、瑞鶴に鍛錬に付き合っほしいとせがまれてな。少しは楽しめるかと揉んでやるとそれなりにできるように成長していたからほんの少し本気を出しただけだ」

加賀は重桜の中でも屈指の実力者のため、その加賀の一端を引き出したのだからその瑞鶴というKANSENは将来有望だろう。強者との戦いが好きな彼女にとつて強き者が増えるのはいいことだった。しかしそんな彼女だからこそシンジたちは彼女にある不安を抱いていた

シンジ「鍛錬もいいと思うけど、あまり勇ましすぎると障害独り身になるぞ？」

赤城「そろそろ加賀も相手を持つてもいい年ごろね。おめかしくらいは覚えておいた方が良くないじゃないかしら？」

加賀「私はまだ別にそんなものに興味は・・・仮に私を墮とすなら私を軽々と圧倒し征服できるほどの強者ではないと認めません」

加賀を完膚なきまで倒せる相手など早々見つかるわけもないので、しばらく加賀は独り身だなど確信してしまった二人だった……

そして加賀と別れた後、二人が家に帰ったところには外は暗くなっており満月だったため夕食やふろを済ませて自宅の広い庭で二人で並び月を見上げながら黄昏ていた

シンジ「平和だな……あの大战が嘘みたいだ」

赤城「そうね……だからこそあなたと私が一つに慣れて本当に幸せよ♡」

感が鈍い人でも気づくだろうが、シンジと赤城は『ケッコン』しておりその証拠に互いの薬指に銀色に輝く指輪がはめられている。シンジは母親を失った後もう誰かに大切な人を失う気持ちを味合わせたくないと軍に入隊し爆発処理班として功績をあげながら指揮能力を高めて『少佐』となるとKANSENを生み出す素材『キューブ』の適正が高いことからアズールレーンの指揮官に任命され、惨劇以降ともに生活していた赤城と加賀とともにセイレーンを打倒するために戦い続けた。その時に幼いころから恋心を抱かれていた赤城に猛烈なアプローチや共に戦場に行くことでシンジも赤城が友情などを超えた大切な存在だと認識し『ケッコン』する。その後見事セイレーンを退け今は重桜で指揮官としての執務をこなしつつ平和を仲間と愛する者たちとともに享受していたのだ。しかしこの『ケッコン』とは永遠の愛を誓い合う事という意味では『結婚』と変わりないがこれは絆を深めあうことで可能となる強化の側面もあるため籍を入れたことにはならない。そしてシンジは彼女たちKANSENを人の形をした船としてではなくともに戦ってくれる人間として好感的に接しているのでかなり彼女たちの好感度が高い、そして重桜の娘たちは愛に関しては重過ぎる思いを向けてくる・・・要は少なからず赤城以外のKANSENたちも指輪を送ってもらい、赤城と同様にそばに立つて籍を入れてもらおうと虎視眈々と狙って迫っているということだ。そのせいか



この前赤城と出かけているとシンジを慕って狙うKANSENたちに会うと、わざと抱き着いて勝ち誇った笑みをしたことで嫉妬によつて喧嘩が勃発し一つの地区が吹き飛び始末書を書くことになったのは別の話……。しかしながら今のところシンジは

赤城一筋なため重婚の毛は毛頭ないのだが……

さてさてこうして結婚生活が続き、落ち着いた時期になれば夫婦が行う共同作業の機会が増えるのは目に見えるだろう

赤城「貴方……そろそろ床に行きましようか？私に授かりものを宿らせてほしいわあ！」

シンジ「お、お手柔らかに……」

重桜のKANSENは獣の性質をもっているため、情事になればその行為は激しくなるのは必定である。シンジが初めての時は危うく三途の川が見えたらしく、最近は鍛えなおして慣れたためかそう簡単にへばることは無くなったが内心もう少し優しくしてほしいと思っている。そして二人が寝室に向かおうとしたその時・・・

ジリリリリリリ!!

家の固定電話が鳴り響き、シンジは寝室に赤城を待たせ受話器を取る。そして電話越しの相手から要件を気化されシンジの顔は険しくなる。そして話を終えて赤城の元に戻るが赤城は複雑そうな表情をしているシンジを見て何かあったのだと悟り、その要件がなんであるかうすうすう気づいていた

赤城「・・・またお義父様が問題を起こしたの？」

シンジ「ああ、父さんが退避区域に忍び込もうとして逮捕されたんだ。明日早くから出て迎えに行かなきゃいけない・・・父さんはまだあの事故には真相があるって躍起になってるみたいだ」

ジョーはあれから母国であるユニオンに行くことなく妻の故郷であり眠る場所である重桜に住み続ける道を選び、シンジが指揮官となって赤城と所帯を持ってから別居しており、あの事故はただの事故ではないと信じ、以来退避区域となった発電所跡地の郊外の別荘で研究と跡地と監視をしながら英語の教師をして暮らしている。そして何回か退避区域に忍び込もうとしており、そのたびにシンジや赤城が迎えに行っている。

赤城「……シンジ、あの人は聡明でいい人よ。そして一度何もかも失っているわ」

シンジ「それは俺も同じだ。だけど乗り越えた……いつまでも過去に縛られちゃ前に進めない。それに会うたびにおかしな話ばっかして振り回されるんだ、君を巻き込むわけにはいかない」

シンジは頑なに父を認めようとしないう。そんなシンジに赤城は優しく彼の頬に手を添える

赤城「残されたたった一人の肉親なのよ……私や加賀にとっては本当に父親のような人だった。だから少しだけでもいいから信じてあげて？」

シンジ「……わかった、少し話してくるよ」

その後寝る前に数秒にも満たないキスをして床に就き、二人そろって深い眠りにつく。早朝赤城に見送られながら父のもとへと車を走らせていき、発電所跡地付近にある留置所に向かった

シンジ&赤城  
s i d e o u t

シンジ  
s i d e

く早朝から数時間後く

数時間車を走らせて到着すると中はかなり重い空気で見たらされており、その中で15年たった父であるジョーの姿があつた。顔は年相応にしわなどが増えているがそれ以上に披露型割っているのか顔色もよろしくない様子だつた。その後目を合わせるが互いに何を話せばいいのか迷っているのか車に乗り、ジョーの別荘につくまで無言を貫きいざ別荘につき部屋に入ってみると壁一面に当時の事故の新聞の記事や核に対する記事に何か印をつけられた地図や何かの資料や本が並んでいる異様な雰囲気を放っている。そして無言だつたジョーがようやく話し出す

ジョー「・・・普段客は来ないんだ」

シンジ「・・・みたいだ」

ジョー「たとえ博士号を取ってても英語を教えるだけじゃあ稼げなくてな・・・そういえば指揮官の仕事はどうだ、今じゃ誰しもあこがれるからかなり儲かると聞いたが？」

シンジ「セイレーンを撃退した今じゃ大体の仕事は執務でのデスクワークだよ。けど有事の際に備えてKANSENたちと訓練は毎日行ってるんだ。最近は四大陣営の上と陣営同士の関係はなかりきな臭くて悪くなる一方だからね」

セイレーン大戦に勝利した人類だが、セイレーンを撃滅したのではなく撃退しただけのため戦力は手放せず保持し続けていたが共通の敵が現れないまま時間だけが経つにつれ互いの思想や価値観に違いが現れてしまい、今やアズールレーンは体裁を整っているように見えて内部では謀略と権力闘争や腹の探り合いが起こる諜報合戦などが起き

ており近い将来アズールレーンは二つに割れてしまふとわかるぐらいガタガタだった

もちろんこれは秘密裏の情報であるため国民などには知しられていない。ひとまずそんな嫌な話は頭の隅に置きながらシンジは壁の記事を見ながら次の話題を話そうとすると、先にジョーが明るい表情で話しかける

ジョー「そうだ！赤城は元気か？加賀もどうだ？結婚してもう何年だ？」

父の笑顔を久しぶりに見て、家族思いな性格は全く変わっていないことに気づき心の中でものすごくほっとした感じがシンジの胸を暖かくした。もう父はあの事件のありもしない真の原因に取り付かれ昔の父はもういないとばかり思っていたが、確かに昔の父はここにいた。赤城の言うう通り信じてもいいかもしれないとシンジは思い始めな



がら目に留まったある本を手取る

シンジ「2年だ、赤城たちも元気だよ。赤城の作る料理は本当においしいんだ、加賀はあの性格だからまだ独り身は続きそうだけど・・・まだあの事件を調べてるの、反響転移？」

ジョー「ああ、すまないそこにあるのは動かさないでくれ。今は生物音響学を学んでいるんだ」

シンジ「そうなんだ・・・父さん、退避区域で何をしていたんだ？許可もなく入れば犯罪だってわかるだろ」

ジョー「それはわかってる。だが聞いてくれ、最近この地域で起きた地震を調べたらまたあの時のパターンが出たんだ。あそこの家に置いたままのデータを取り戻せれば世界中に証明できる……あれは絶対に地震の揺れなんかじゃなかったんだ！」

シンジ「父さん!!」

熱くなり次第に荒れる父にシンジは一括する。ジョーはシンジの一括で冷静になりながら退避区域が見れる窓まで近づき、その荒れ果てた元住まいがある場所の光景を見ながらつぶやく

「ジョー」……サクラはまだあそこにいる。今でも思い出すんだあの時の母さんの姿

を・・・あつと言う間に退避させられてた。写真すら残ってない」

シンジ「父さん・・・もうやめるんだ」

背中からもわかるほどジョーの背中には言葉を並べていくごとに震え悲しみと悔しさがにじみ出ていた。シンジも母親が大好きであったため、その気持ちは痛いほどわかる

シンジ「また一緒に暮らそう・・・赤城たちも会いたがつてるからしな。明日でもいいかな？」

シンジの提案にジョーはうれしそうに微笑み、その日は夕食を済ませて互いに床に就

いた

く早朝く

まだ朝日が伸びり始めた時間帯、シンジは仕事の関係上朝方になっているので静かに起きると居間の方から父が電話越しに誰かと話していることに気づき、気配を殺しながら声を頼りにその場に近づいて会話を聞く

ジョー「……センサーが沈んでいる場所は？そうか、わかったすぐに行く」

ジョーは会話を終えてすぐ支度しようとして椅子から立ち上がろうとしたとき、シンジに気づき会話が利かかれていたと察する。シンジは会話はすべてを聞けなかったがただ事ではないとわかっているのか険しい表情になっている

シンジ「何してるの？」

ジョー「……一時間だけ退避区域に行ってくる」

ジョーの言葉にシンジはすぐに反応する。また退避区域に入ったことがばれば、こんどこそ間違いなく数十年は堀の中に努めることになるほかに、下手をすれば被爆し病気を患い寿命を縮める可能性すらある。そんなことになるのはシンジは認めもしないし、赤城たちだつて涙を流すことになる。そう頭の中で思うとシンジはジョーの前に立ちふさがり生かせないと立つ

シンジ「だめだ、行かせない！」

ジョー「行かなきゃならないんだ！私はここで6年も無駄にした、有刺鉄線から何もできず見つめてな。確かに最初あの事故は発電所のシステム所の欠陥によるものだと思うってた……だがある日沖合で貨物船を操縦している男に出会った、彼は毎日あの

退避区域の周りを運航しているから周波数センサーをブイに付けてもらったんだ。毎日周波数をチェックしていたんだがちようど2週間前にセンサーが作動したんだ……驚くことだが何かをあそこでどんな連中かはわからないが守っているんだ。そして今日もその周波数が来たんだ……まるで話をするみたいにな？あの家にあるあるデータがどうしても必要なんだ、あの時と今のデータを比べれば答えが出るはずだ……シンジ、私はお前が思ってる変人じゃないんだ。今度こそ連中のウソを暴いてやる」

シンジ「……どうしてそこまであの事件にこだわるの？もう終わって過去のことなんだよ」

ジョー「……お前の母さんを死なせてしまった。何度も言うがあれはメルトダウンじゃなかったんだ」

シンジ「やめてくれ、もうそんな話は聞きたくない！」

シンジは母の死の原因を知るために周りから孤立し、変人とささやかれても研究と監視を続け真実を追い求めていた。その姿勢はシンジにとつても尊敬できる、だがもう母の死が陰謀論がかわらんでいるとか事故ではなかったと掘り返され騒がれたくはなかった。そんなシンジに思いに同調するようにジョーはシンジの言葉を肯定する

ジョー「何も聞きたくない気持ちはわかる。だが逃げてもらえない……過去からずっと目を背けてはいけないんだ、どんな言い訳を心の中で呟いてもな……」

そのままジョーは支度を済ませようと防護服などを準備する中、シンジは心の中で自問自答する……父は母の死を受け止められずたわ言を言い続けて逃げてはおらず真



実を解き明かすためにあがいてきたのか？逆に母の死が事故だったというカバーストーリーを言い訳に母の死の本当の原因をしろうとせず逃げてきたのは自分ではないのか？ここで父を止めれば母に何があったのかも一生知ることもなく闇に包まれたままなのか？・・・いろんな考えが飛び交う中明確な答えはでなかった。けれどここで逃ければ自分は一生後悔する確信が走り自分も父の退避区域入りに参加することを決意した

シンジ side out

## ジョー&amp;シンジ side

↳ 退避区域（雀路羅原子力発電所跡地）↳

シンジたちは防護服で身を包み、ボートで退避区域へと上陸を果たす。シンジの目の前には15年間人を廃止したことで建物や車などが作りあげたものは崩れては錆びつき、国屋や樹木が生い茂り野犬や猫といった小動物が闊歩していて荒れ果てていた

シンジ「父さん、あともう少しだ・・・父さん？」

うろ覚えではあるが少しずつつかつてのわが家へ歩を進めている二人だが、ジョーはリュックから放射能測定器を取り出す。そこに表示されるメーターを見ると否や歩を止める。直後ジョーは防護マスクをはぎ取ってしまった。シンジはそんな父の突然の行動に驚愕する

シンジ「父さん!?何してるんだ!」

ジョー「・・・大丈夫だ、普通に呼吸もできる。やっぱりここが退避区域だったなんて嘘だったんだな!」

ジョーの言葉を裏付ける証拠として先ほどの放射能測定器が表示した放射線の量はゼロだったのだ。つまりもうここは人が入っても許される場所であるからにもかかわらず、こうしてまだ退避区域としてひとお寄せ付けないでいる・・・ジョーの連中がここで何かを守っているのは確信的だった

その後二人はマスクを脱いだ状態でようやくついた実家へとたどり着く。中は腰ぐらゐまで伸びる雑草などが非茂り見る影もない。ジョーは自室へと移動し、邪魔なものをどかしながら当時のディスクをさがす。数分間搜索すると無事に無傷のディスクを見つけ安堵するとふとある写真だを見つけ手に取るとそこには3〜4歳ぐらいのシンジと並んで移っている家族写真だった。もう見ることはないと思っていたサクラの写真を見れたことにジョーは一筋の涙を流す。感傷に浸っているとヘリによる爆音が少しづつ聞こえだし、途中シンジと合流し外へと出るとヘリに気づかれないように尾行しながら追跡する。退避区域でヘリが飛んでいるなどテレビなどの報道機関でもやらない事・・・飛んでいるということはここは退避区域ではないと知っているものだけだ

追跡する二人がヘリが飛び去った先に見たものは、かつて発電所があった場所の代わりにまるで要塞のような作りをしている何かの施設だった。しかしまだその施設は未完成なのか所々重機が工事を行っていた

シンジ「あれはいったい何の施設を作ってるんだ？」

ジョー「わからない・・・なんだろうな」

二人は施設の事に考察していると後ろから車のエンジンをが響いてくるのを感じ、振り向くと完全装備し防護服を着た人たちが二人に銃口を向けて近づいていた

「お前たちそこを動くな！」

「ここがどこなのかわかってるのか!？」

「お前たち何者だ？」

人数的にも抵抗は無意味と察した二人はそのまま無抵抗で車に乗せられ連行される。しかしジョーにはあの施設につかづけて真実にも近づけるのだから好都合だったが……

しかしジョーどころかシンジやこの場にいた全員が思わなかっただろう……

かの者が覚醒がすぐそこまで迫っていたことに

## 4話：とある者たちの過去ととある獣の覚醒（後編）

）  
???)  
）

???)  
&ジョー&シンジ side

数十分くらいか車に乗せられているとあの施設についたのか、車は急停止され車から降ろされる。ジョーは謎の隊員たちが何か話しているが気にすることはなく、ただただ後ろの窓から見える光景に釘付けだった。なぜならそこには工場のような建物に囲まれ、三日月上の巨大な繭のようなものが規則的にオレンジ色の光を発しながらうごめいていたのだから……

施設の司令室では繭のようなものを観測しながら、隊員たちに指示を出している。隊員たちは慌ただしくしながら繭の周りに集まりそれぞれの道具を携えながら何かの準備をしていた



《10秒間隔・・・10秒間隔・・・》

アナウンスが流れると同時に繭が光を発しながら胎動する

??? 『ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・ドクンドクンドクンドクンドクンドクン・・・ガアアアアアアーン!!』

まるで心臓の鼓動のような音を発しながら最後は獣のような顫動音を発しながら周りの電子機器に対して障害を微々たるものだが及ぼした、まるで15年目のように：：そして先ほどの繭の反応をデータ化して研究員のような人たちが様々なことを考察しながら今の状況を述べていく

「現在振動は7. 2秒間隔・・・どんどん早まっています」

「思ったよりもまずい状況だな芹沢博士？」

こここの所長と思われる男がある首元に動かなくなった懐中時計をぶら下げながら、年の男性に話しかける。彼はこの施設を作った組織に所属し、放射線が生物に与える影響を調査している生物学者「芹沢 猪四郎」博士だ。彼も所長の言葉に同意するかのようには険しい顔をしながら胎動する繭を見つめると、後ろから隊員が入ってきた

「芹沢博士。不審者を二人拘束したのですがどうしますか？」

「博士は今忙しい、グレアム博士に任せろ」

グレアム博士・・・本名ヴィヴィアン・グレアム。同じく組織に所属する古生物学者で芹沢博士の助手を務めている

「グレアム博士からの要望で、何でも一人はこの元社員だそうです」

その言葉を聞き、芹沢は15年前の当事者だとわかり助手の要望に応えるため、その場を離れその元社員だった者のところへと向かう。取調室でグレアム博士と合流すると、マジックミラー越しに取調員と話すジョーの姿があった。話と言ってもジョーが取調員の言葉をはねのけるため全く話になっていないが・・・

グレアム「鞆にディスクと資料が入っていました・・・しかも日付はどれも15年前

の物でした」

芹沢「当時の記録はすべてなくなっていたと思っていたが・・・」

グレアム「ええ、意外ですね」

芹沢が手にもつジョーの資料は先ほど繭から発せられた振動のパターングラフと完全に一致しており、これである事故の原因があ繭にあることは明白ということが確認された。二人をよそにジョーは取調員の事を無視して引き離されたシンジの安否とディスクと資料の返却を訴えるも全く話にならず怒鳴り声の音量はどんどん上がっていく。するとマジックミラー越しに芹沢と目が合いジョーはそちらに話しかける。ジョーは芹沢たちがそこにいるなどと知らないがただそこにいる気配がするので話しているのだ

ジョー「なあ、そこから見てるんだろ？水槽を除くみたいだ！あんたたちは国民をだましてる、ここは全く退避区域じゃない！ここから人払いしたのはここにあるあの何かを隠すためだったんだろ？・・・妻はここで死んだんだぞ！！ここで！あの何かに殺されたんだ！本当のことを教えろ！知る権利がるはずだ！」

ジョーの大切な物を失った悲しみとその死と真実を偽り騙してきた彼らに対する怒りが魂からの叫びとなつて、芹沢達に響く。彼にしてみれば自分たちは妻の仇を悠々と生かして守っているのだからその怒りは自分たちに向けられても当然の事。15年前の当事者でありここまで秘密を知ってしまった以上潔くすべてを話そうと思ひ、扉を係員に開けるように指示を出そうとすると・・・

ドウウウウウウウ！・・・ゴロロロロロ！

先ほどとは比べようもない程の振動と電波障害が繭から発せられたのか司令室からそれなりに離れたここまで影響が及ぼされた。この現象をみてジョーはさらに確信しあるたどり着いた真実を告げる

ジョー「ほらな・・・またあの現象だ。わかってるぞこれは変圧器の以上なんかじゃない、本当は電磁パルスの影響なんだ！周囲何キロもの電気系統に影響するんだ、それがまた起こってる・・・15年前もこれと全く同じことが起きてたんじゃないのか!?このままじゃ本当に取り返しがつかなくなるぞ！」

芹沢達があれを研究して知らなかった生体の一つをマジックミラーに向かつて食いつくように言うジョーに告げられ、芹沢はもしそれが事実ならこの状況の説明がすべて

片付くと同時にすぐに対処しなければジョーの言う通り取り返しをつかないことになってしまう。そう思った矢先さらに先ほどと同じくらいの振動が施設全体に襲い掛かり、芹沢とグレアムはすぐに指令室に走って言った

〈施設の司令室〉

司令室は繭の活動が先ほどとは比べようがないほど活発化しており、振動と電波障害を引き起こす電磁パルス拡散の感覚がさまざまに早くなり研究員たちは慌てふためいていた

「数秒間隔だ！送電システムに影響を主ぼしています！」

「放射線レベルはどうだ？」

「ガンマ線レベルはゼロです、奴が放射線を吸い尽くしました」

実のところこの繭には放射線を餌とする生態があり、に原子力発電所が倒壊した後の漏れた放射線をエネルギーにしていたことでこの地域にしみこんでいた放射線は食べ続けていたことでジョーたちがくる以前からここは退避区域ではなくなっていたのだ・・・そして今や奴をここにおやつ漬けておくために用意していた放射線物質やわずかにこの地に残っていた放射線もたった今食い尽くしてしまったのだ。そこに駆け付けた芹沢博士たちも到着し事態は深刻であると再認識する

『ドクン・・・ドクンドクンドクンドクン・・・ガアアアアアン!!』



さらに繭の胎動は速くなり、周りにごつごつとした岩石のような塊が振動によって崩れまじめた。まるで虫の蛹のように・・・緊急の事態にまわりの作業員たちも下がり始める。そのころ司令室では所長がグレアム博士からジョーの資料を受け取り今の記録とパターンが瓜二つだと驚愕する

「パターンが同じだと!？」

芹沢「15年前これで発電所がメルトダウンしたんだ」

グレアム「電磁パルスの影響です。蓄えた続けた放射線で成長しようとしてるんです!」

芹沢 「所長！すぐにシャツトダウンだ！」

「ああ、緊急処置実行！」

《総員に通達・・・すぐに第一階層から退避せよ！》

アナウンスに従い、繭から一歩でも早く距離を取るため多くの作業員たちが鉄橋を回り終えると次々と非難完了のボタンを押されていく。そして上部では重機に取り付けられ制御された特殊性のワイヤーが繭の上に蜘蛛の巣上に展開され蓋を閉じるかのよう配置される。そんな中折の近くではジョーと引き離されたシンジがまだ車両の中で閉じ込められていた

「……けど捕まえた侵入者はこのままでもいいんですか！」

運転手は指示を仰ごうとするが、今は自身の身を守るため素早く非難せよと言われシンジを車に乗せたままどこかに行ってしまった

シンジ「いったいなんだ……おい置いていくな！」

シンジは呼びかけるも今は誰も耳を貸せない状況の中のため、自身を助けてくれる者はいないとわかってしまった。なんとか車から出ようと後部のドアをけり続ける……

そして数分後非難がすべて完了し、檻も展開完了したと報告が司令室に伝わる

「・・・非難完了しました」

繭の中で胎動する命をみて、これから自分たちと何も知らない人の命と社会を守るためとはいえただ生まれたいと願うだけの命を奪うことに芹沢博士は苦々しい表情をしていた。彼は生物学者としてあらゆる命に敬意を表している。しかし奴の能力は現代において人類において致命傷を与えかねない存在であり、すでに奴が知らないとはいえもうすでにジョーのように誰かの大切な人たちを多く殺している。ここで躊躇すれば一体どれだけの人が死ぬことになる結果を考え・・・心を鬼にして言う

芹沢「・・・殺そう」

他の研究者体が見守る中、一人の研究員が芹沢の指示に従いあるボタンを押す。すると施設から高圧電流が放射され、一気に繭に襲い掛かり全体にすさまじい電気が流れて

いき中身まで放電による熱を伝わらせる

『ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!?』

焼かれる痛みと電気が全体を焼きながら奔る痛みに不気味な赤い光を発しながら  
繭……いや繭の中にいるなにかが絶叫を上げる。放電が開始されて数十秒語、繭の一  
部が崩落するとともに絶叫と電磁パルスは消えていきやがて電磁パルスの反応も完全  
に沈黙する

「電磁波が消失……」

「だれか生死を確認しろ」

司令室の命令で隊員の一人が静寂した空気の中繭が完全に死んでいるかを鉄橋を渡って確認する。一部が崩れたことで繭の中身が見えるようになっており、そこからのぞき込むことで確認を行っていくと暗闇の中で何かがうごめいたことに気づき隊員がライトを当てて確認しようとしたその時・・・巨大な虫のような巨大な腕が隊員を押しつぶし繭から黒い何かが繭を派化しながらその身をあわわした

??? 「ゴツゴツゴツゴツゴツゴ!」

規則的でいて音にも聞こえる唸り声を上げながら赤く光り輝く腕の爪を地面へとたたきつける。次の瞬間腕の爪を中心に先ほどとは比べようもない出力の電磁パルスが円状に広がるように拡散され司令室はおろか施設全体の電気がすべて消え失せた。そのころシンジはドアをけり続けていたが、突然車のエンジンが停止したことでロツクが外れ扉を蹴破ることに成功し脱出に成功し、ジョーも取調室の電気も消えたことで電気で動く暗礁式の鍵が外れ脱出に成功する。自分らの仇に意図せず助けられるとは何とも皮肉な話だ

司令室では電磁パルスによって沈黙した施設の機能を取り戻そうと研究員たちが予備電源を施設に接続し始めていた

「予備電源はまだか！」

「パルスで回路を焼かれているのでもう少しかかります……いや接続を確認、成功しました電気が戻ります！」

予備電源に接続し、ある程度の言力を取り戻すことに成功することであちこちで弱くはあるが最低限の機能を使えるように復旧していく。そして司令室とともに檻の周りの照明がつくと同時に奴の全貌が現れる。黒い体色、三角形の長い頭部、紅く輝く単眼、1対の脚に1対の巨大な腕、胸部のものより小さい1対の副腕の計4対6本の肢と自身よりも大きな1対の巨大な翼を持っている。奴の名はMassive Undentified Terrestrial Organism（未確認巨大陸生生命体）……略して M.U.T.O.（ムートー）と呼ばれている。今ここに地上で初めて誕生した古代の支配者の一体が目覚めの咆哮がまるで自身の存在を誇示するかのようにとどろいた



ムートー「ガラララララララララ!!!」

ムートーは繭から飛び出て外に出ようとすることが出来るが、特殊性のワイヤーによって構成された檻に邪魔され体を動かすことが自由にできない。ムートーは檻を力任せに壊そうともがいている光景を見て所長ははすべての人員にすぐさま避難を呼びかけ、沢も達もそれに従い施設から退避していく。一方だ守つに成功したジョーは獣の咆哮がする方角へと鉄橋を渡りながら途中非難する隊員たちにぶつかりながらも進んでいくと点滅する照明に照らされ檻から出ようとするムートーの姿が飛び込んでくる…。そしてジョーはあれが妻を殺した元凶だと理解するが、想像もできなかった存在相手にただ茫然とその姿を焼き付けるしかできなかつた

しばらくして戦えない隊員たちがある程度非難し終えたのか、銃を持った戦闘員たちが檻を取り囲むように展開する。しかし同時にムートーが一度しやがむと腕を少しだけワイヤーを通り抜けるように上げて、爪を器用に曲げてワイヤーをきっかけ思いつきり引つ張り出す。ムートーは自身を閉じ込める檻が蜘蛛の巣のような糸でできているとわかり、その糸を破壊すればいい出られると理解したのだ。ワイヤーは檻のような形に展開するため高い位置で固定された重機と密接につながっている・・・それを強い力で下に向けて引つ張れば下へと向かう力に耐えきれずあつという間に壊れていくのは当たり前だった。重機を支える柱が折り曲げられながらきしむ音を立てながら横に倒れ、まるでレンガ倒しのよう次々と重機が倒れていく。ジヨールはその光景をみながら此方に重機が倒れてくることを察し行く手に重機が倒れてくるであろう場所にパニツクで向かう作業員を止めようとするも聞く耳を持たず、その者達は重機による崩落で燃えさかる残骸の中へと墜ちていった。ちょうど同じ時ただ事ではないと判断してジヨールを探しながら避難しようとしていたが、戦場にいた感が真上に対して危険信号を発し、上を見上げると重機が自分がある所へと倒れてくるのを確認すると同時に今からうごいても逃げられないと経験で分かり即座に自分が入っていた車の中に避難することと即死は免れてたが車は重機が倒れる衝撃で激しく横転し、シンジの体に全方位から衝撃を与えてくる

ジョー「シンジ！」

鉄橋にいたジョーがそんなシンジを偶然見つけることができたが、息子の危機にただ安否を呼びかけるしか出来なかった。シンジはなんとか車の中にいたことで軽い打撲程度で済み、大破した車から脱出する。引きずられるように重機が助けを求める作業員もろとも檻の大穴に落ちていく・・・その時重機から垂れ下がっていたワイヤーが墜ちていくと同時に鞭のようにしなせながらジョーがいる鉄橋へと絡まる。そして落下する重機の質量と重力によって巨大な力が生まれ、その力が鉄橋を破壊しジョーを奈落へと誘った

シンジ「父さん!？」

シンジが父の元へ直ぐさま駆けつけようと全力で走るも鉄橋の残骸が行く手を阻むかのように崩落しジョーがいるであろう場所へと行かせることはなかった。するとシンジの第六感が先程の重機の時よりも危険信号を大音量で発しながら今すぐ逃げろと囁く。さらに後ろから獣の声と振り向いてはいけないと第六感が叫んでくる・・・しかし今自身の後ろにいる何かが全ての原因で有り真実だと隠していた。例え死ぬことになろうとも真実だけ走らなければと・・・そして意を振り向くとそこには赤く光る単眼で此方を見つめるムートーがそこにいた

ムートー「ゴツゴツゴツゴツゴ！」

ムートーは自身を閉じ込める檻を破壊して体が自由にうごかせることを確認しながら自由となった感覚を楽しむ。途中自分を見つめる取るに足らない虫けらを一瞥する

も直ぐに興味を失い、檻だった大穴から身を乗り出し足下にうろつく人間をまるで人間が蟻を踏んでも気にしないかのように何事もなく踏みつぶしながら歩を進め、翼を十分に広げられる広場までたどり着くと翼を羽ばたかせて闇夜の空へとあがりその場を後にして消えていく。シンジはあまりの情報量と驚愕する出来事の連続で精神が耐えきれず飛び去るムートーの背中を見ながら気を失う。後に起こったのは死体と困惑する生者と遠のく獣の咆哮・・・破壊され尽くされた施設の残骸のみだった

惨劇の夜が明け、死傷者の搬送と行方不明者の搜索に瓦礫を撤去する車や人員によって施設だった場所が溢れかえり、上空では軍所属のヘリがココが軍の管轄に入ったことをアナウンスで知らせていた。そんな惨状を非難することで無事だった芹沢はこの光景を困惑と後悔と自責の念が籠もった瞳で見つめる。すると後ろからグレアムと友に重桜の軍人がやってきて芹沢に声を掛ける

「芹沢博士ですか？お会い出来て良かった、あなた方の組織“モナーク”とは聞いています。そちらの組織は未確認生物の知識と情報を持っているようですね？」

軍人の問いに芹沢は首を縦に振り肯定を示す

「今後作戦の指揮は我々軍が引き継ぎます。あなたは一緒に来て貰います・・・他に必要な人材は？いるのなら急いでください、今の情勢は切迫しているので遅かれ速かれ他の各国もこの事件を知ることになる中行動は迅速にしなければ」

芹沢は惨状の中を見渡すと救急車に乗せられようとしている転落によって重傷となったジョーと励ますことで意識を保たせようと必死になって呼びかけを繰り返すシンジがいた。ジョーは自分達では知ることが出来なかったムートーの生態の一つを独学で判明された男・・・彼ならばさらに自分達が知らないことを知っており力になってくれるかも知れないと思い、彼等に向けて指をさす

芹沢「彼等を頼む・・・」

その後芹沢達は別々のへりに搭乗して施設の近海に待機させてある重桜の航空母艦『水龍』にむけて出発する。シンジはそこらの病院よりもあらゆる怪我や病気に対して備えられている軍艦の方が父が助かる可能性が高いと踏んで同行に承諾し、変わらず意識がもうろうとする父を励ましている

シンジ「父さん・・・悪かったよ、信じなくて」

父は何一つ間違ったことはしてはいなかった。父のやっていたが全て間違いだと決めつけ何故もつと耳を傾けなかったのかと後悔で胸が一杯になっていた。そんなシンジの心境を察してかか弱い声でジョーが問いかける

ジョー「いいんだ・・・私こそ・・・もつと側にいてやれなくて・・・すまなかった。お前は赤城達の所へ帰るんだ・・・！必ず・・・まもってや・・・れ・・・いい・・・な？」



シンジ「ああ、わかった。．．．父さん？．．．父さん!？」

父の頼みを聞き入れると同時に気を失ったことに気づき、呼びかけるが一切反応がなく供に搭乗していた衛生兵が様々な処置を施す中シンジはただ神にまだ父をそちらの元へ行かせないで欲しいと願うことしか出来なかった

数十分後、芹沢達を載せるヘリが重桜最新航空母艦『水龍』に到着する。ここでは今ではKANSENたちが戦いの主力となった現在、人間でもできることはやって見せるという精神でKANSENたちに力は及ばずとも少しでも支え共に戦うため訓練を積み続ける者たちが乗っている。そんな艦のブリッジではムートーが目覚めどこかへと飛び去る映像が流され様々な分析が行われており、追跡しようにもムートーが放つ電磁パルスの影響でレーダーなどの索敵方法が取れず目視でしかとる方法がなくすぐさま見失ってしまった。発見は困難を極めるだろうが世間ではムートーの目覚めを地震だとかまかしているが各国が気付き始めややこしくなるために発見し撃滅しなければならぬ状況に包まれていた。そこに芹沢が入室し、それに気づいた艦長の『大黒重兵衛』提督があいさつを交わす

大黒「芹沢博士、ようこそ水龍へ。提督の大黒重兵衛です。」

芹沢 「ご丁寧に、初めまして提督」

大黒 「ご無事でよかった、ついてそうそう申し訳ないが我々には未確認生命体ムー  
トーを早期に発見するのが責務だ。そのためにあなた方が持っている情報を教えても  
らいたい」

芹沢 「はい、ムートーは「芹沢博士少し来ていただけますか？」・・・失礼っ」

芹沢がムートーの情報を自分が知る限りのことを話そうとするが、グレアム博士に呼  
ばれたためいったん大黒提督から離れグレアム博士の元へ行き、話を聞くと驚きが全身  
を走った

グレアム「……ついさつき亡くなったそうです」

ジョーの訃報を聞いて芹沢の顔は暗く曇る……。ジョーの死因はムートーのせいではあるが、ムートーを生かしていた自分たちにも責任がある。こうしてムートーがシンジにとつて両親の仇敵になった瞬間だった

## シンジ side

そのころ管内の死体安置所でシンジは神への祈りむなしく安らかな表情で永眠する父の姿をじっと見ていた。頬に違和感を覚え触つてみると涙を流していることに気づ

き、そこから関が切れたように近くにいたのに救えなかった自身の無力さや信じれなかった後悔とまた家族をまた吸い込んだ悲しみが押し寄せて涙を流させてゆく。しばらくしてか扉からノック音が鳴りすぐさま涙をぬぐうと見知らぬ二人・・・芹沢とグレアムが入室する

芹沢「心からお悔やみを申し上げるよ」

グレアム「こんな時に申し訳ないけど力を貸してほしいの」

そしてある部屋に案内される間に軽く自己紹介を済ませた際に二人がああ施設の関係者だとわかり、この二人に協力すれば父を殺した怪物の正体を知るだけでなく殺す方法も知る事ができるかもしれないとシンジは協力することに承諾する。しばらくして目的地だった部屋に到着すると数人の学者と山のように積まれた資料が並んでおり、席に座ることを奨められそのまま座ると後ろから投影機からかなり昔の映像と写真だつ

たのかモノクロの映像がスクリーンに映され、潜水艦が移された場面で芹沢が説明を始める

芹沢「1954年・・・世界で初めて深海に潜った原子力潜水艦が“何か”を見つけってしまった」

グレアム「アメリカとソ連・・・今はユニオンと北方連合ははじめはお互いに相手の仕事だと考えた。50年代の行われた水爆実験はどれも実験ではなかったの」

芹沢「殺そうとしたんだ・・・強大な存在であるアレを・・・」

原爆の爆発が起こる映像が終わると一枚の写真が写され、シンジはその写真が写された瞬間驚きによって食い入るように見つめる。そこには水しぶきと津波を起こしながら

ら小島に身を出そうとする巨大な生物の背中と剣のように鋭い背びれが移っており、目であの怪物と同等の存在だと確信する

芹沢「恐るべき怪獣の王・・・」

グレアム「人類誕生より何百万年前の時代からこの生物は主に豊富にあつた放射線を餌にして生きていたの。私たちが知っているのは彼が数ある怪獣たちの中で無類の強さを誇っていたこと、地表に放射能がほぼない現在は深海奥深くに住み着き地球の核からエネルギーを吸収しているかもしれないという推測だけ。そしてそれを受けて各国との共同で私たち秘密組織『モナーク』が設立された。ムートーやこの生物にそれに準ずる生物を見つけ、研究する元が私たちの任務・・・」

芹沢「我々はこの生物たち『怪獣』の頂点に立つものをこう呼んでいる・・・』『ゴジラ』・・・！」

グレアム「彼は生態系の頂点・・・神よ、文字通りのね」

シンジ「怪物だ」

グレアム博士の言葉を否定するようになりあまりのスケールだったため何も話せなかったシンジがやっと話せるようになり一言つぶやく。軍にいてそれなりの年数がたつがここまで大規模な組織があつたなどとは噂で聞くこともなかったため、相当上層部が隠ぺいに力を入れていたのだろう・・・いろいろと考えると今度は仇であるムートーの話に切りかかりゴジラの話以上に耳を傾ける

芹沢「15年前、鉱山会社が掘り起こした際に大昔に死んだゴジラと思われる巨大な化石と2つの蛹をユニオンの辺境で発見した。寄生されたんだ、こいつらに・・・」



芹沢が指を指すと同時に映像が切り替わり、そこには車からのぞいた際に見た繭と酷似しているがぶよぶよとしてうごめく蛹が巨大な化石にへばりつくようにぶら下がっていた

グレアム「ええ、ムートーが・・・一体は休眠状態だったけど、もう一体は鉱山会社が地面を掘り進める振動で刺激して起こしてしまった。そして餌を探し求めて穴を掘り進めて日本の発電所に到達して再び眠りにつき、15年かけて放射線を吸収し続けたの」

芹沢「今日見せた姿のように羽化した成虫になるまでは・・・」

ここまで説明されてシンジの中には怒りが生まれていた。なぜここまで知っていて

何もしなかったのか、そんな危険な存在をなぜみんなをだましてまで隠したのか、もつと早く確実な方法・・・殺してしまおう手を使えば父が死ぬこともなかったのではないかと・・・もちろん信じれず向き合わなかった自分に全く罪がないとは言わないし思わないが・・・納得できようがなかった。

シンジ「ずっと前から存在を知っていたのかお前らは・・・どうして殺さずにあんなになるまで放っておいたんだ!!」

怒りを表すかのようにこぶしを机にたたきつける。グレアムは申し訳なきに屁を伏せるが芹沢は言い訳はせずそうせざる終えなかった利用を伝える

芹沢「原子炉や大気中にあつた放射能を根こそぎ吸い取っていたんだ、もし殺してしまえば放射線を施設周辺以上の広範囲にまき散らしてしまふ可能性があつた。だからこそ殺さず閉じ込めていた・・・生態を研究し管理するために・・・」

芹沢の言う事には考えられたうえで理由に筋があった。もし生態を知ろうとせずその場で殺してしまい本当に放射線がまき散らす結果になればそれこそ本末転倒で母が亡くなった事故を再現してしまうことになっていた可能性は否定できない。あの事件で核によって自分たち家族だけでなく周辺にいたせいで被爆してしまった人たちが事故で同じく家族を失った人たちを見ていたためその苦しみは人一倍わかるつもりだ……だからこそ今はくすぶり続ける怒りの炎を静かに沈めていく。するとグレアム博士がムートローの生態について話す

グレアム「ムートローが近くの物に電波障害を引き起こすことは我々も知っていたけど電磁パルスで攻撃してくることは私たちも知らなかったの……けどお父さんはわかっていた」

芹沢「ほかに彼は奴に関することを言っていなかったか？」

グレアム「どんな些細な事でもいいの・・・」

シンジ「たわごとだと思つて聞き流していたんだ・・・あいつに関係ある事なんて何も・・・」

シンジは父との会話を思い出していくが、まともな話や赤城たちに関する話以外はすべてたわごとだから聞き流していたため自身の仇に関するめぼしいものは浮かんでこない。人事でこなかった付けがここで支払われたと思いつながら後悔し始めると最近の思い出からあるワードを思い出す。それはつい昨日父が学んだという生物音響学・・・そして話をしているみたいだとも言っていた！

シンジ「そうだ．．．音を出しているといってた。話をするみたいに．．．」

芹沢「話を．．？」

シンジ「ああ、新しい研究でしていた。確か．．生物音響学だ！」

ふと思い出せたワードに芹沢が反応し、あることを思いつく。動物の中には音を使つてコミュニケーションをとる物があり、当然人間として言葉という音で意思疎通を図っているため生き物と音は密接な関係を持っている。そしてコミュニケーションをするには必然的に相手が必要．．．つまりムートーは誰かと話していたことだ

芹沢「ムートーが会話をしていたのなら、その相手の波長も記録されているはず：：調べなおそう！そこからムートーの行動が読めるかもしれない。交信していた相手探すんだ」

芹沢の指示でグレアムたち学者はすぐさま施設から可能な限り持ち帰った資料を一枚一枚ずつデーターや資料を洗いなおして少しでも手がかりを見つけようと探し出す

シンジ「博士・・・あの生物は、いやムートーは今どこにいるんだ？」

奴の居場所を知る事は自分にとって最重要だった。父は赤城たちの元へ帰って守れといった。しかし今帰れば野放しになった奴が自分たちの元へやってきて赤城もろとも何もあらがう術を持たない自分ごと殺しに来るかもしれない・・・だからこそ赤城たちの前に奴が現れる前にこちらから行って仇を討って守る。それが最善だと思っただらだ・・・芹沢は生物学的にムートーの状態から推測される行動を述べる

芹沢「ムートーはまだ若い。成長するため餌を探しているか、膨大な放射能を吸収したばかりで食欲が満たされたことでどこかで巣を構えるかもしれない・・・現在軍が行動できる範囲で考えられる場所を捜索しているが進展は今のところない。だが先に見つけなければ・・・」

正直前者是最悪の一言だった。奴のエサは放射能・・・つまり原子力発電所などが重点的に襲われてしまうことで被害がうなぎのぼりで上がってしまう。後者の場合はかなりこちらに対して幸運ともいえた、巣を構えてくれれば待ち伏せが可能でわざわざ探し回らなくて済むからだ・・・しかし芹沢の最後の言葉が気になってしまい咄嗟に聞くことにした

シンジ「先に見つけないとどうなるんだ？」

芹沢「自然とは常に調和を保とうとする・・・ゴジラがそのカギを握っている」

芹沢はスクリーンに映されるゴジラの姿を見ながらそうつぶやく。どういふことは詳しく聴こうとしたとき扉から軍の兵士が入ってくる

「失礼します、この中でプロデューサーは誰でしょうか？」

シンジ「自分に何か？」

「先ほどユニオンから大尉を速やかにこちらに引き渡すように重桜本部に向けて通達があつたそうです。ですから大尉はすぐに必要な荷物を整えるようにと・・・」



シンジはそのことを聞いて驚愕した。いくら事故の件が伝わったとして普通は無事だったか程度の電話で済むが、いきなり自分がアズールレーンの指揮官ということを入れても国が直々に個人の引き渡しをこんな早急に伝えてくるなど異常だった。理由を聞いても不明としかわからなかったが自分は軍人のため拒否することはできなかった。とりあえず博士たちに別れの挨拶を伝えると連絡を取り合う為の無線機をもらい、荷物をまとめてユニオンの軍が待っているという領域までへりで送られる。しばらく赤城に会えることはないだろうと思い、懐からせめて連絡だけはとスマホを取り出し赤城に連絡を入れる。しばらく待つても赤城は出さずようやくつながったと思うとそれは留守電のメッセージだった

《一航戦赤城です、御用がおありでしたらこちらに伝言をよろしくお願いしますわ》

彼女はKANSENのなかで特に実力が高く、同時に群にも買われているため多忙なのだろうと、そのまま一夜にして起こったことをメッセージとして残す

シンジ「……赤城か？ああ……父さんに会いに行ったら事故にあっただ。……父さんが死んだ……色々と話したいけどユニオンに召集をかけられてしばらく会えることができないかもしれない。でもやらなといけないう事を全部終われば必ず君のもとに帰る……だから待っていてくれ。またな」

招集もそうだが自分にはやらなければならないことがある……家族の仇であるムートーを打ち倒す。たとえ自分が死ぬことになっても愛する者を守るために自分は死地へと向かう覚悟をもって挑むと心に誓う。そしてすべてが終わったら赤城にまた会いに行つて父を失つた悲しみを分かち合い幸せとともに享受しようと……だがこの時自分は各国と陣営がどれだけ対立していて、その対立によつてできた溝はどれだけ自分を隔てているか想像すらしていなかった。そして自分は予想外の出来事に直面していくことにも想像すらせず……いや前から予感はしていたが杞憂であつてほしかつた……

まさか一週間後に重桜と鉄血がアズールレーンを脱退し、『レッドアクシズ』という陣営を作り戦争を仕掛けてくるなど……

まさか妻の赤城が自分には内緒である計画を進めていたことも……

これから起こる戦争の中でセイレーンが悠々と暗躍を続けていたことも……

今の自分には予想も知る由もできなかった

シンジ s i d e o u t

そしてこの時から人類とKANSEN・・・そして怪獣たちの運命の歯車が動き出して  
いた・・・

その運命の果てが破滅か・・・平穏か・・・今は誰も知らない

## 5 話 新たな開戦と新たな遭遇（前編）

↳新設アズールレーン母港↳

世間ではまだ公されてはいないがムートーの事件は自身による不幸な事故だと隠蔽してから一週間後・・・アズールレーンは同盟関係だった重桜と鉄血の二大陣営が思想と意思と方針が合わなくなり真つ二つと割れ、脱退してしまい各国同士と陣営の関係より悪化してしまった。そしてそれに合わせるかのようにアズールレーンに加盟していた小国のサディアも脱退しレッドアクシズに加盟してしまう。アズールレーンにもセイレーン大戦とともに戦った東煌と北方連合が合流してくれたが危機感を募らせたアズールレーン上層部は急遽各国で貿易を行う交流基地として作られていた施設を母校として回収することで短期間で母校へと改修し前線基地へと生まれ変わられた。そしてこの母校の指揮官としてシンジ・ブロイが勅任した。

シンジ side

シンジ「ふう・・・やつと着いた」

シンジは船による長旅によって拘束され凝り固まった体を軽くひねりながら新設された母校を見渡す。この1週間はまさにシンジにとって激動の時期だったといえるだろう。まさかいきなりユニオンに召集され、到着した瞬間に嚴重な監視下の元に拘束され半ば強制的に指揮官へと任命され配属されたのだから・・・原因としてはシンジがいまや鉄血、サディアとともにアズールレーンを脱退しいまや戦争一步前まで関係が悪化してしまつた重桜の血をひいている男で敵側のKANSENとケツコンしているので、故郷と愛する妻を優先しアズールレーンの情報を洗いざらい吐いては、スパイを粉う危険性があると判断されたからだ。その際に芹沢にもらい受けた無線機や私物は根こそぎ奪われたためムートーの情報や情勢もわからず、知つた時にはもはや戦争は避けられないといつても過言ではないほど関係は悪化し、第二の故郷がユニオンなら第一の故郷である重桜がアズールレーンを脱退しており、今や流れるままこの母校の指揮官となつて

いた。シンジはもちろん不服しかないがこうなってしまうた以上軍人の務めとして有事の際は指揮を執りつつまた戦うことを決めつつ、自分一人のできるかどうかわからないが戦争を早期に終わらせて仇を見つけて討ち倒して愛する者と仲間たちを守るという父との約束を果たすために今はこの状況を受け入れるしかなかった

シンジ「……本当ならこのまま戦いが起こらなければそれが一番だけだな」

本当ならこんなまだセイレーンを駆逐できておらず共通の敵がいる上に怪獣という脅威を現れた中で人類同士の内輪もめなど馬鹿々々しい……そう思いながらシンジは空を見上げながら口から一言本音を漏らす。そしてしばらく指示で待ち合わせするようにならされた港で待機していると3人の可愛い女の子たちが何かを探しながら近づいてくるとそのうちの一人でマストを模した髪飾りして薄い紫色の長い髪を黒いリボンで左側を結ってサイドテールにした髪型をして、ところどころ肌が透けてるワンピースを着こなしおとなしげな雰囲気を持っていて体つきは幼いが各部の膨らみからある意味将来有望な幼い少女がシンジに話しかける

??? 「あの、あれ?・・・もしかしてお兄ちゃん?」

上品な雰囲気から話しかけてきた少女はロイヤルの出だと推測できる。シンジはしばらく話しかけた少女は知り合いだと判断し記憶をたどるとふとセイレーン大戦中にロイヤルのKANSENたちと会った時に自分を鬼となつてきた少女だと思ひ出した

シンジ「・・・もしかしてユニコーンか!」

ユニコーン「そうだよ、ユニコーンだよ・・・お兄ちゃん!」



この少女の名前は『ユニコーン』。KANSENで『ロイヤル所属・軽空母』であるが本人は『支援空母』と言っている。シンジが大戦中に行われた作戦で出会い指揮をしてもに戦った1人で、作戦後に姉の後ろに隠れながらシンジの事を、「お兄ちゃんっで……呼んでも良い？」と聞いてきて了承し、以来シンジをお兄ちゃんと呼んで慕いながっている。もともと今はもう23歳になるためまだ若いけどどちらかというとより【おじさん】の方がしっくりくるかもしれないが……久しぶりの再会でシンジはうれしく思い、ユニコーンの頭をなでると「えへへ♪」と笑顔を浮かべる。するとユニコーンと一緒にいた少女たちもユニコーンと仲良くするシンジが気になり話しかけてくる

??? 「ユニコーンちゃんその人誰？ この母校の関係者みたいだけど？」

??? 「……眠い……ZZZ……」

ユニコーン 「ジャバリンちゃん……ラファイーちゃん……」

シンジ（・・・彼女たちがリストにあつた、『ロイヤル』のジャベリンと『ユニオン』のラフィーか）

ユニオンが声に出して彼女らの名前を言うことで、シンジは彼女らは自身がこの母校に来るまで母校に所属している、所属する予定のKANSENたちの大まかなリストに載っていたKANSENたちだと理解する。

1人はエメラルドグリーンの瞳に紫の髪をリボンで束ねたポニーテールに王冠のような髪飾りを着け、紫のスカートをして白色のノースリーブを着て青いスカーフを巻いた服装をして、元氣いっぱいの性格からロイヤルレディとしては少々落ち着きが足りないがそこが魅力とも言える少女が『ロイヤル所属・J級駆逐艦1番艦・ジャベリン』

もう一人はボサボサな銀髪をツインテールにまとめて白いウサミミのカチューシャを着け、赤く眠そうに寝ぼけた目、シャツ一枚と明らかにサイズの合っていないモコモコしたピンク色の上着を羽織り赤い小さなスカートをした服装をして、今にも眠ってしまいそうで気だるげな少女が『ユニオン所属・ベルソン級駆逐艦・ラフィー』。

シンジ「はじめまして、俺は本日からこの母校でアズールレーンの指揮官に務めるになったシンジ・プロデイ少佐だ。いろいろと迷惑をかけるかもしれないけどよろしくね？」

ジャベリン「ええっ!? 貴方が指揮官さんですか!? お会い出来て光栄です! あ、私はJクラスの駆逐艦のジャベリンです! どうぞよろしくお願いします!」

ジャベリンはシンジの手を取って上下にブンブンと振る。KANSENは人間よりも身体能力と戦闘能力が高いので振り回されるシンジの腕は悲鳴を上げていた。だが痛みに関しては赤城によく抱き着かれたり、他の女性と長く話していると嫉妬で強く握

られることがよくあるので慣れてしまったためかあまり感じはしなかった

シンジ「よろしくジャベリン。．．．でもそろそろ放してくれ、腕がとれそうだ．．．」

ジャベリン「あ、ごめんなさい！　つい張り切りすぎちゃって．．．！」

ラフィー「私ラフィー．．．この耳は本物じゃないから．．．よろしく．．．ZZZZZ．．．」

シンジ「ああ、よろしくなラフィー。確かにこれは作りものだな．．．服がずり落ちそうだぞ?。」

シンジの冗談が混じった一言にジャベリンはシンジの手を離し気遣う様に言いなが

らシンジの腕を心配する。彼女は元気とやる気が有りすぎるくらいだが思いやりのある優しい娘なのだろう。そしてラフィーの挨拶にもこたえると彼女のうさ耳は正直本物にも見えるほど精巧なものだった。しかし立ったまま寝そうになっている上に上着はだけている危なげな状態なので服装を直してあげた。内心彼女らを一部を見てまだ幼い体形の少女に比べて育ちすぎではないかと思ったのは彼だけの秘密だ・・・

シンジ「そうだ。ユニコーン、俺に用があつたみたいだけど何かあつたのかな？」

ユニコーン「そうだ・・・お兄ちゃん、『ゆーちゃん』を探しているんだけど知らない・・・？」

ゆーちゃんとはユニコーンがいつも持ち歩いている馬のぬいぐるみで友達である。正直一角獣のユニコーンに羽が生えた容姿をしているのでベガサスなのかユニコーンなのか判断しにくい上にぬいぐるみなのに普通ご飯を食べたり、空を飛んだり、歩いた

りするのもはや生き物に見えてくるので可愛らしいが謎が多い存在だ。そして普段ならユニコーンの腕の中で抱きかかえられているかそばにいたのだが、周りを見渡してもそれらしい影も見当たらない

ユニコーン「ゆーちゃん．．．どこかに行つちやつて探してるの．．．」

シンジ「あいにく俺も今ここに来たばかりだからゆーちゃんは見ていないな。『饅頭』ならここに来るまであちこちで見ただけ．．．」

ユニコーン「そうなんだ．．．」

ジャベリン「落ち込まないでユニコーンちゃん、次だよ次！」

ラフィー「頑張ればきつと見つかる……グツ……」

『饅頭』とはアホ毛が付いた黄色いひよこのようや生物でKANSEN達のサポートをこなす謎の生命体でその種類は幅広く店の番頭をしていれば、艦の整備をしていたり、料理をしてふるまっている。シンジの答えにユニコーンは見えてわかるほどシュン、と顔を下げると落ち込む。そんなユニコーンをジャベリンは元氣よく、ラフィーは片手でグッドサインをして励ます。それを見てシンジはそんな彼女らを見て事情を知ったからにここで引き下がるのは性に合わない、何より困っている人がいるならばほっとくとはできなかつた

シンジ「よし、俺もゆーちゃん探しを手伝うよ」

ジャベリン「ええ!? 良いんですか指揮官?」

シンジ「後で案内の子には怒られるだろうけど、困ってる女の子を見過ごす事は軍人としても人としてもできないからな。一緒にゆーちゃんを見つけようユニコーン」

ユニコーン「ありがとう・・・！ お兄ちゃん！」

シンジ「お礼は見つかってからさ」

少し涙目になっていたユニコーンだったが頭を優しく撫でられながらシンジの言葉にユニコーンは心の底からうれしくなり、上げられた顔は涙が消えて満面の笑顔を浮かべた。そしていざシンジもゆーちゃん探しに加わりあてになる場所やゆーちゃんが良そうな場所にあたろうと荷物を持ちながら歩を進めようとした瞬間、背中に柔らかく軽めの重みがのし掛かってくるのを感じなにかと背中を向けるといつの間にか後ろ



に回り込んでいたラフィーが眠そうに背中におぶさっていた

ラフィー「広くて暖かい、指揮官・・・ラフィーをおんぶして・・・ZZZZ」

シンジ「いつの間に・・・！はあ、しようがないな・・・」

いつの間にか後ろに気配を感じさせず背中におぶさっていたラフィーに驚きつつも慣れ慕った女性特有の柔らかさを感じながらしつかりと背負い、落とさないようにしつかり姿勢を正しくする。その際ジャベリンはシンジの指先で光るある物に気づく

ジャベリン「あれ？ 指揮官。その薬指の指輪ってもしかして？」

ね」 シンジ「これか。見てのとおりケツコン指輪だ。相手は今遠くにいてあえないけど

見ていないか聞いてみましょう！」

ユニコーン「うん……！」

シンジ「ああ、そうだな……」

ラフィー「ZZZZ……」

ジャベリンの質問に答えながら、今は会えない最愛の相手を指輪を見ながら想う。ジャベリンの言う通り一日でも早く会えるといいなと思いつながら、彼女たちとともにゆーちゃん探しを進めるために足を動かした。しかしまさか今日この日最愛の人と再会できることとなり、それは全く望まない形で果たされることになるとは思ってもいなかった……

ちなみ数分後、シンジの案内役だった兄貴とよく言われるKANSENが待合場所に来たが当の本人がいないためしばらく周りを探し出すことになったとは4人は知らない……

4人で行動する事数十分……母港の色々な所に赴いたり、他の艦船KANSEN達や人間の兵士達と出会い、自己紹介や言葉を交わしたりしながらゆーちゃんの見撃情報などを集めていた。その中で母校は軍事施設しかないと思つたが娯楽施設として服屋やレストランにゲームショップやモールといった施設がより取り見取りで軍事施設

というよりもリゾートに見えてくるほどの充実した場所だった。しかしやはり軍事施設なので最新鋭の警備システムやKANSENたちの艦載機には劣るが性能は折り紙付きの戦闘機や戦車にKANSENたちの劣化コピー品の戦艦である『量産型』も配備され、それを使い訓練をこなす兵たちや警備を行う兵士たちを多く見かけたのでやはりどうであれ軍事施設なのだと再認識される。そんな彼等やKANSEN達にも聞き込みをした結果、母港の丘の上にゆーちゃんらしき生き物？が向かうのを見かけたという情報を手に入れた。さっそくそこに向かおうとするが、シンジはこれまで長旅だったせいか今になって用を足したくなり一時的に別行動することにして残ったジャベリンたちは起きたラファイも加えた3人でそこに向かった

く 母校：丘の上く

ジャベリンたちが丘につくとそこには黒ローブを被った少女二人が丘の頂上で母校を見渡しながら立っており、その少女のうち角のような飾りをつけた一人の足元にペガサスカユニコーンかわからないのが特徴のゆーちゃんがいた。少女は足元にいたゆーちゃんを拾う

??? 1 「ぬいぐるみ？」

??? 2 「みたいですね、でもなぜこんな物がここに？」

少女達はそう思ったが、しかしそれはゆーちゃんが放してと言わんばかりにパタパタと手足が動かしたことで違うと思いき知らされた

??? 2 「ちよつ、なんなんですかこれは!？」

??? 1 「・・・変な生き物です」

まあ、質感や感触からぬいぐるみだと思つたら意思をもって動かしたのだからそれは驚くなりするのは当然の反応だった。そんな少女達のもとにジャベリンたちが丘の頂上にたどり着き、ユニコーンは自身にとって大切なゆうちゃんを見つけた事で元気に呼びかける

ユニコーン 「ユーちゃん!」

ユニコーンの声に反応して少女達はジャベリンたちに気づくと同時になぜKANNS

ENが3隻ここにいるのかと警戒しだす。しかし彼女たちの目的はこの変な生き物を探してたようなので警戒は続けるが怪しまれないように自然体を心掛ける。そんな彼女をよそにユニコーンたちはゆうーちゃんを発見できたことに喜びを分かち合う

ユニコーン「ユーーちゃん！良かった・・・！」

ジャベリン「よかったねユニコーンちゃん！」

ラファイ「見つかってよかった・・・」

ユニコーンは再開の歓びに笑いそのままそれを抱きしめ、ジャベリンとラファイも自分の事のように喜びんだ。ユニコーンはゆうーちゃんをみつ付けてくれた少女に礼を言う

ユニコーン「ありがとう！」

ラファイ「グッジョブ・・・」

??? 1 「いえ・・・お礼を言われるようなことしてないので」

??? 2 「そうです、私たちとしては偶然の事でしたから・・・」

ユニコーンと一緒にラファイもお礼を言うが少女達は遠慮がちに返す。実際にただ足元に偶然いたのを拾い上げただけなのは合っている。するとジャベリンが何かにきずきそれを絶賛する



ジャベリン「うわ〜！、こんな綺麗な場所があつたんですね！」

ジャベリンの言葉に一同が周りを見渡す。すると丘の頂上からは透き通るような大空と日の光に照らされた大海が宝石のように輝き幻想的な光景を生み出して広がっていた。少女も母校ばかり見ていたせいかその光景に故郷と似た景色だったのか懐かしさと一緒にきれいだとも感動もしていた。ユニコーンもその光景に見惚れ、ラフィーは丘に流れる心地いい風に立つたまま寝てしまいそうな勢いになる

ジャベリン「こんな穴場を知ってるなんて二人とも中々やりますね！」

???  
「え・・・どうも？」

??? 2 「ありがとうございます……」

少女達からしたらまったくのたまたまから見つかっただけなのだが、ジャベリンの元気な褒め言葉にたじろいでしまう。そしてすかさずジャベリンたちは少女に対して自己紹介を交わす

ジャベリン「あ、私はジャベリンと言います！貴女のお名前聞いても良い？」

ラフィー「ラフィーだよ……眠るのが大好き……」

ユニコーン「ユニコーンだよ、この子はゆーちゃん……」

ジャベリンに続くようにラフィーとユニコーンも自身の名を名乗り、ジャベリンは前

に出て名前を聞こうとすると同時に握手を求めるように手を差し出す

??? 1 「……えつと……？」

??? 2 「……」

少女達はこのようなことに慣れていないのか、それとも何かがあるから手を出せないのか戸惑うようにその差し伸べられた手を見つめるばかりだった。するとジャベリンたちの咆哮から駆け足でこちらに向かってくる男、シンジがやってくる

シンジ「おーい！すまない、思ったより時間がかかって。ゆーちゃんは見つかったのか？」

ジャベリン「指揮官！はい、この子が見つ付けてくれました」

ジャベリンがシンジからも見えるように退くと、シンジはお礼を言おうと近づき、少女もこの母校の指揮官を知るべく近づく。そして互いに顔を認識すると大きな衝撃が走りシンジと少女達は明らかに動揺した

シンジ「ツ！：：まさか『綾波』なのか!?それにそっちは『Z23（ニーミ）』か!？」

??? 1↓綾波「シンジ・・・指揮官ですか・・・!？」

??? 2↓Z23「どうしてここにシンジ指揮官が・・・!？」

シンジはなぜ重桜と鉄血のKANSENであり共に戦った仲間だが、いまや重桜と鉄血が脱退した今ではここにいない彼女がなぜここにいるのかと困惑してしまふ。それは少女達・・・綾波とZ23も一緒でまさかこの母校の指揮官が綾波にとつては重桜のみんなと長い時間を共にして今や離れ離れになってしまった家族、Z23にとつては大戦中にもともに戦って彼の指揮を補佐として支えながら鉄血を勝利に導いてくれた恩人、そんな彼が今はこの母校の指揮官であり敵だったとは思ってもいなかった。そんな二人の関係を知らないジャベリンたちは綾波と知り合いだった様子のシンジに話しかける

ジャベリン「あれ？指揮官、この子たちのこと知って・・・」

ジャベリンは指揮官に少女の事を聞こうとするがその言葉は大きな音に遮られた。

『ビュオオオン!』

シンジたちの真上を何かが通り過ぎ、とてつもない速さによって生まれる風圧が彼らを襲った

シンジ「みんな伏せろ!」

ジャベリン「うわあ!」

ラファイー「うう……！」

ユニコーン「キヤー！」

シンジは叫ぶと同時に引き寄せて、自身の肉体を壁にすることでジャベリン達を庇う。ジャベリン達も頭を下げて身を屈めるとなにか『物体』が通り過ぎ、巻き起こる風圧に飛ばされまいと足を踏ん張った。その中でシンジは通り過ぎた何かを確認すべく目を開くと一瞬だが青い札で作った紙飛行機が見えてシンジは思わず強風の中でも目を見開いてしまった。そして風が収まったことでシンジはジャベリンたちを腕の中から離す

ジャベリン「何だったんだろう？鳥かな？」

ジャベリンは今の風圧を鳥ではないかといううが、シンジは即座に険しい顔で否定する。まるでどんだん嫌な予感に近づいてしまっているといわんばかりに……

シンジ「いや、違う。鳥の羽ばたき程度であれほどの風圧は起きない……それにあの紙飛行機は……！」

ユニコーン「お兄ちゃん？」

シンジの険しい表情と雰囲気ユニコーンは心配するが、異変はそれだけにとどまらずそれに気づいたラファイーがつぶやく

ラファイー「……そういえばあの子たちがいない。」



ラファイアの言葉で周りを見ると、先ほどまでいた『綾波』と『Z23』の姿がどこにもなかった。シンジは嫌な予感的中したと判断して即座に最悪の状況を想定して指示を出すため母校に戻ることにした

シンジ「みんな、もしかしたら戦闘が起きるかもしれない。早く戻って何時でも出撃できるように準備はしといてくれ。」

ジャベリン「戦闘って・・・！」

シンジはすぐそこまで迫っていた戦火の始まりにやるせなさを感じながらも今は彼女たちと務めを果たすべく走り出した

## シンジ side out

## 加賀&amp;赤城 side

シンジが嫌な予感から行動を開始し始めた同時刻、母校の近海で重桜のKANSENが二人がとがった岩礁に腰掛けていた

1人は黒い長髪の頭の上に狐の耳に生やし、裏地が赤の雀色の羽織を肩にかけて胸元を大きく開き肩を丸出しにして白い肌を晒した露出度の高い格好しており、背面からは狐のような黒い尻尾を九本はやした艶やかかつ轟惑的な女性・シンジの結婚艦でありシンジにとって帰る場所の一つである『重桜所属・正規空母・赤城』

もう一人の女性は白銀の狐耳が生やして白銀の髪を肩口まで伸ばし、赤城と同じく露出の高い青い着物からは白い胸の谷間が見え、強気で堂々とした雰囲気をもち背面から赤城と同じだが色が違う白い九本の尻尾を生やした女性・シンジにとっては家族のよう過ぎしていた女性・『重桜所屬・正規空母・加賀』

二人は待機していると加賀の持つ青い札が震えだし、加賀は素早くそれを取り出して気を送るとそこから綾波の声が響き通信機のように働く

綾波『こちら綾波……』

加賀「作戦中だ、コードネームを使え」

綾波『あつ、ごめんなさい。こちら『ユズ』。基地の構造は大体把握した・です』

加賀「よし。こちらも仕掛ける。状況を見て合流しろ」

綾波『了解・・・それと大事な知らせがもう一つあります』

加賀「なんだ？」

通信を終えようとした加賀だが綾波から重要な知らせだと聞き、通信を着るのをやめて耳を凝らすとその答えは予想外なものだった

綾波『……あの基地にシンジ指揮官がいたです』

加賀「なんだと!?!それは確かか?」

綾波『はい、顔をあわしたのは短かったです。間違いありません。写真も撮っているのだから送ります』

数秒後、札から出る炎が投影機のように空中に写真を映像として映し出される。そこに移った男を瞬時にシンジだと加賀は確信する

加賀「間違いはない、この男はシンジだ。『オオトリ』、どうやら基地にはシンジがいるようだ」

赤城「ええ、とても嬉しい報告ね加賀。・・・ああシンジ！今すぐ赤城がお迎えに行きますわ、もう絶対にあなたを離れさせはしないわ・・・！」

加賀「赤城姉さま、コードネームを・・・あと気持ちはわかりますが落ち着いてください」

加賀も重桜で起きた地震事故から音信不通だったシンジが今は敵側にいるにしても家族同然に育った彼が無事でいたことをこれから戦いに行こうと滾っていた心と体がすぐさま沈下する程、笑顔を浮かべながらうれしく思っていた。赤城に至ってはコードネームで言うのをやめるほどシンジの無事に感銘を受けたのか喜びで体を震わせるだけでなく、体から炎に似たオーラを放ちながらその目はまるで獲物を見定めて絶対に逃がさないと感じさせる餓えた獣の様だった。しかし加賀もそうだが赤城のこれほどの豹変ぶりは仕方ないといえる

加賀や赤城にとっては数日の間シンジが義父のジョーを迎えに行き、自分たちのところに連れてきて仲良く暮らせるようになると思つた矢先に、届いてきたのはシンジが向かつた先で地震による事故が起こりジョーがなくなつたという訃報とシンジがユニオンに引き抜かれ半ばさらわれるような形で重桜を出たという凶報だつた。この知らせを受けて重桜のKANSENたちはジョーには小さいころから今まで親がいない自分たちに本当の父親のように様々なことに面倒を見てくれた恩人であり、シンジは幼いころから苦難と悲しみと喜びを分かち合つてきた家族に差し支えない存在でどんな時も絶望的な状況でもあきらめず自分たちを導いてくれた存在だつたのだ。その二人をいっぺんに失つた彼女らは多くの者が悲しみにさいなまれた。戦鬪狂であつた加賀でさえ、鍛錬をすつぽかししばらく部屋に出てくることはなかつた。赤城に至つては誰よりもひどくしばらく食事をとらず、ただシンジとジョーの写真を見ながら涙を流し外に出るとただ茫然自失で海を眺めているだけだつた

そんな日々が数週間も過ぎた時、ある日赤城は狂氣的な笑みを浮かべながらやつらと共にある計画を始めることを決意する。全てはシンジが帰つてくる場所を守るため、大切な「あの人」を取り戻すため、もう二度と大切な物を失わないために・・・たとえ無

能な重桜上層部だろうとアズールレーンだろうとこの場所を必ず守ると・・・そして加賀も姉の狂気に息をのみながらも赤城とシンジのために計画に乗り、血気盛んで傲慢な上層部を利用して事の準備を進めてここまで来たのだ。そして取り戻すと決めていた者がこれから行くところにいるのはある意味彼女たちにとっては僥倖だった。加賀はこのことから必ずこの作戦をものにしてみせると自身を奮い立たせると、赤城からある事を聞かれる

赤城「ねえ加賀、戦いの本質とはなんだと思う？」

加賀がその質問に首をかしげると赤城は加賀のぬくもりに触れて、互いに息を感じるほど近くなりながら『戦いの本質』を語る

赤城『戦いとは傷つけること』、『戦いとは傷つくこと』、『戦いとは痛みを交換する』・・・痛みを通じて互いの思いに触れ合うの、すなわち『愛』に他ならないわ」



赤城の言う『戦いの本質』の説明はかなり当たっているといえる。自国への愛、友への愛、恋人への愛、仲間への愛、家族への愛、故郷への愛といった感情が愛する対象に害する敵に対して明確な敵意と守護欲を生み出し、傷つけ傷つけあい痛みを互いに与え続ける。その中で互いの戦う理由といった思いに触れあうこともあるだろう。加賀はそれを聞いてゆつくりと立ち上がる

加賀「私には姉様の言うことが良く解りません。私はただ討ち滅ぼすだけ・・・ジョー・・・父上のためにもシンジを取り戻し、あいつが『帰ってくる場所』を守る為にも・・・!」

加賀はそう言いながら後半は力強く答えた。加賀は赤城とともに自宅の電話に残されたシンジの連絡を聞いていた。だからこそいなくなってしまったジョーのためにもシンジを守り、帰ってくるといった重桜を必ず守り、それを邪魔する敵は必ず討ち滅ぼ

すと決意を示すようにそう言い切る。加賀は手にした青い紙飛行機を構え、紙飛行機はたちまち青い炎に包まれ二人の後ろの空に暗雲が立ち込める

赤城「フフ、連れない子ね。でもその通りね、旦那様が『帰ってくる場所』を誰だろ  
うと汚させたりはしないわ」

赤城も自身の決意を声に出して示すと『黒い箱』を取り出すと、彼女達の後方から突如として暗雲がたち込み、暗雲の下の海から『赤い光を放つ黒い艦隊』……『人類の敵・セイレーン』が現れた。

赤城「さあ、戦争を始めましょう」

赤城は笑みを浮かべながら告げる・・・今現時刻を持つて、新たな戦いの火蓋が切つて落とされた

赤城&加賀  
s i d e  
o u t

〈数分後・母校〉

数分前は笑顔と笑いで活気であふれていた母校は突如として『セイレーン』の共に襲撃が起こり、あつという間に艦砲によると機銃による轟音が響き、硝煙と火の粉が舞う戦場と化した。まず訓練をしていた人間の兵士たちが真つ先にスクランブルで発進し、セイレーンの艦載機たちを少しだけ押されながらも次々とげ喫していく。彼らが時間を作っている間にKANSEN達や戦車に武装した人間たちが次々と装備を整えて出撃していった

???  
side

現在母校の中枢ともいえる『指揮官の執務室』ではかなり騒がしいことになっている。そんな中で3人のKANSENが中心に現在の状況に対して対応していた

1人は黄金色のショートヘアーに三つ編みカチューシャを施して紅白な西洋貴族の

ような制服と赤いマントを羽織つてミニスカートと白いニーソから生み出される絶対領域と腰に巻いたサーベルを携えた服装をして、優雅な佇まいから凛々しい印象を放つ麗人の女性・・・『ロイヤル所属・キングジョージ5世級2番艦 戦艦・プリンス・オブ・ウエールズ』

もう一人は銀髪の上にキャペリンハットを被り豊満な胸元と豊かなプロポーションを純白のドレスで優雅に身を包んだお嬢様を思わせる服装をして、左目の下の泣きぼくろが特徴的で清楚で優雅な大人の女性の余裕と魅力と包容力を感じさせる女性・・・『ロイヤル所属・イラストリアス級航空母艦1番艦・イラストリアス』

最後は長い金髪と艦橋のような髪飾りでサイドテールという髪型で白のクロークとその下に青と白のシャツと赤のラインが入った黒いミニスカートとそこから時折めくられるスカートから覗く紐パンの紐というアメリカンな服装をして、男勝りな雰囲気と活発さを醸し出している少女・・・『ユニオン所属 クリーブランド級軽巡洋艦1番艦・クリーブランド』

ウエールズ『セイレーン』だど!? 出撃急げ!これは演習ではないぞ、準備ができ次第部隊と合流し迎撃しろ!」

「はいっ!」

ウエールズが指示を出すとイラストリアスは難しい顔を浮かべ、クリーブランドが軍港を見渡せる窓に行く。爆撃機から攻撃を受けている母校の港とセイレーンの艦載機と爆撃機に応戦する戦闘機とKANSEN達に兵士たちが戦う姿が見え、すぐに向かった。

ウエールズ「まだ指揮官が着任していない状況で『セイレーン』とは．．．! 偶然か? それとも．．．」

イラストリアス「少なくとも偶然とは思えませんね・・・！」

シンジ「ああ、俺がここにいる事以外は偶然じゃないという事だ」

ウエールズ「指揮官か!？」

イラストリアス「指揮官さま！」

シンジ「久しぶりだなウエールズ、イラストリアス。本当なら紅茶を交えながら挨拶をしたかったが今はすべきことをしよう」

ウエールズの言葉にイラストリアスも難しい顔を浮かべているとちようどユニコーン達と別れたシンジが指揮官室に入室した。ウエールズとイラストリアスは事前にやってくる指揮官がシンジだとは知っていたが、予定の待ち合わせ場所にいなかったことや襲撃の事で何かあったのではと心配していたが襲撃があっても五体満足の無傷で無事だったことに驚きながらも安堵する。シンジにとつても大戦以来の戦友としての再会となるので、本来なら落ち着いた雰囲気ですれ交わったが状況が状況なこともありすぐに行動を開始する

ウエールズ「指揮官！ 状況はかなり切迫しているようだ」

シンジ「わかってる。ユニコーンとジャベリン、それにユニオンのラファイという子も向かわせた。ウエールズはすぐに港にいるKANSEN達と『部隊』に合流して迎撃に当たってくれ。こちらでも使える戦車があれば砲台代わりにして援護させる」



ウエールズ「はっ！」

シンジ「イラストリアス。この状況をすぐに『陛下達』に通達してくれ」

イラストリアス「承知しました」

シンジ「十数分後には『ユニオン』のエースも到着する。それまでなんとかしても時間は稼ごう」

ウエールズ・イラストリアス「了解しました」

二人はシンジからのそれぞれの指令を聞いて即座に言われた命令を実行する。ウェールズは即座に指揮官室を飛び出して港へと向かう。イラストリアスもすぐにそばにある回転式電話機に番号を入力していく。そんな中、本来ならシンジはこの一種のシエルターのように頑丈な指揮官室で指令を出すのが、ここに来るまで見かけた綾波とZ23の事で嫌な予感が彼の頭に残り続けており、シンジはこれは自身の目と耳で判断するしかないかと判断しあることを二人に聞く

シンジ「それとイラストリアス、通達したらこの母校にある武器庫はどこか案内してくれないか？」

イラストリアス「武器庫ですか？いいですがどうするのですか？」

シンジ「・・・確かめたいことがある、それに俺は椅子に座ったままでは性に合わないんだ」

イラストリアスは呼び出し音が鳴っている間に返事を聞こうとシンジに振り向くと、指揮官として、兵士として覚悟を感じさせる瞳で何かを急いでいるような様子だった。イラストリアスはそんなシンジを大戦時から変わらなないと感じながらも少しだけ危ういと感じたがシンジを信じて通達後に案内することにした

ウエールズ&イラストリアス s i d e o u t

クリーブランド side

シンジたちがそれぞれの行動を起こす中、いち早く外に出たクリーブランドは港をかけていくと海に向かって大きくジャンプする

クリーブランド「海上の騎士クリーブランド出るよ！」

クリーブランドがそう叫ぶと海上に停泊していた艦船・『クリーブランド級軽巡洋艦 クリーブランド』が複数の青く輝くキューブへと変化し、飛び出したクリーブランドの背中や腕に足に集積する。これがクリーブランドの分身にしてKANSENの武装・『**艦装**』である

クリーブランドは艦装を装着すると不敵な笑みを浮かべると上空を飛ぶ『セイレー

ン』の爆撃機に向かって、艀装の砲口を回転させ砲弾を発射して撃墜しながら海上に着水すると次の目標に狙いを定めながらセイレーンに向けて宣言する

クリーブランド「どうだっ！人類が『セイレーン』に対抗するため生み出した『切り札』、それが軍艦の力をその身に宿した私達！これがお前達<sup>セイレーン</sup>を倒す力だ!!」

海上を進むクリーブランドにもう一機の爆撃機がクリーブランドに接近し通りすぎの際にミサイルを発射し、海面に大きな水柱をあげた。爆撃機はもう一度攻撃するため旋回するがするが難なくミサイルと爆風を回避していたクリーブランドの砲撃で撃墜される。すると報復と言わんばかりに3機のセイレーンの爆撃機がクリーブランドの背後から迫る

『ババババババババ!!』

『ドオオオオンー！ドオオオオオンー！』

そこに空から人の兵士が操る戦闘機が爆撃機の直情からの奇襲で一機撃墜し、残りの二機が突如現れた戦闘機：『F-35 ライトニング』に混乱しているすきに港から出撃して砲台の役割を担った戦車：『M1A2 エイブラムス戦車』と『チャレンジャー2』の大隊が正確に狙いを定めて残りの二機にも砲弾をたたき込み海面へと叩き落した。彼らは今や戦いはKANSENたちが主流になった今でも国と家族、そして目の前で戦うKANSEN達とともに戦い、支えようと奮戦する人間の兵士たちの部隊：『有人部隊』だ。彼らの援護に助けられたことに気づいたクリーブランドは彼らに向けて腕

を大きく振るう

クリーブランド「ありがとう、助かったよ！」

クリーブランドの元気なお礼に応えるように彼らはさらに士気を高めて、セイレーンの爆撃機を攻撃していった。そしてクリーブランドに続くように他の艦船KANSEN達も港から現れて艦装を装着していく中、他のKANSEN達の中にジャベリン達の姿もあつた

ジャベリン「ジャベリン、全力で行きまーす！」

ラファイー「状態良好・・・行こう・・・」

二人には駆逐艦らしく砲塔と魚雷が装備され、ジャベリンには自慢の武器である槍を携えて、ラファイーはいつもの寝ぼけた様子で海上を駆ける。二人にも二機の爆撃機が向かうがジャベリンは槍から散弾状のエネルギー、ラファイーは艦装から砲弾を発射して攻撃し、爆撃機を撃墜……続くように他のKANSEN達も爆撃機を次々と撃ち落とすしていく

ジャベリン「やった！」

ラファイー「おお……」

二人はあつという間に一時的とはいえセイレーンの攻撃を退けたことに喜び、同時にみんなの力に感銘を受ける。そんな中クリーブランドの無線から着信が入り、相手はウェールズかイラストリアスかなと思いつながら無線の推知を入れて応答する



クリーブランド「ハイ、こちらクリーブランド。どうかしたのウエールズ？」

シンジ『こちらシンジ指揮官だ、聞こえるかなクリーブランド』

クリーブランド「シンジ指揮官じゃないか!? 待ち合わせ場所にいないって聞いたから心配したんだよ？」

シンジ《それについてはすまなかつた、それよりも状況はこちらに向いてはいるみただけどみんなには警戒を解かないように言ってくれ。・・・おそらく本命がそろそろ現れるぞ?》

クリーブランド「?、それって・・・っ!？」

シンジの言葉にクリーブランドは詳しく聴こうとするが、突如として目の前に母校には植えられていないためあるはずがない桜の花びらが現れ、鈴のような声と氷のような声が母港全体に響いた

《そう・・・『セイレーン』と戦うため人類は私達を造った。だけどやがて理念の違いにより『四大陣営』は2つの勢力に別れる・・・》

《1つはお前達・・・あくまで人類の力だけ》で『セイレーン』と戦う『ユニオン』と『ロイヤル』》

《そしてもう一つ……》

突然現れた桜の花びらの元を追うと桜吹雪が海上に渦巻いているのクリーブランドだけでなく他のKANSENや有人部隊までもが気付き、そして桜吹雪が晴れて現れた艦船の紋章が目に入り驚愕する

クリーブランド「あの紋章は!？」

クリーブランドらが目にした紋章は『重桜の国旗』だった。そして桜吹雪の中から二人のKANSENと二隻の空母が姿が現す。空母の甲板に立つのは重桜所属のKANSEN『赤城』と『加賀』である。彼女の後方からもセイレーンの戦艦と重桜のエンブレムを肩に描けた重桜所属の有人部隊が重桜の量産型に乗って現れる

赤城《セイレーンを倒すために“セイレーンの技術をも利用する”『鉄血』と私達『重桜』》

話の終盤になると甲板に立つ二人の横を重桜の艦載機が横切るが飛び立つ瞬間に赤城の空母から発進した艦載機は赤い炎に包まれ、加賀の空母から発進した艦載機は青い炎に包まれ、炎となった艦載機の編隊は2隻の空母の上空を旋回する

赤城 「重桜一航戦・・・赤城」

加賀 「重桜一航船・・・加賀」

赤城・加賀 「押し参る！」

二人が戦いの始まりを宣言するとセイレーンと重桜の爆撃機、セイレーンの戦艦、重桜の有人部隊、量産型がクリーブランド達に殺到し、クリーブランド達は敵の物量に気おされつつも勇気をもって立ち向かった

》

クリーブランド side out

ジャベリン side

重桜との艦隊と接敵してからまさに母校は激戦状態になった。大量に現れ、編隊を組

んで巧みな軌道をするセイレーンの戦艦に爆撃機、重桜の艦載機にKANSEN達が対応しているが物量で徐々に押されつつある。アズールレーンの有人部隊が重桜の有人部隊をKANSEN達に近づけまいと戦車の支援砲撃や戦闘機のミサイルを撃ち込んでいくことで接近を防いでくれているが、それも時間の問題でこのままでは押し切られてしまうのは明白だった

ジャベリン「キリがないです〜！」

ラフィー「ちよつとピンチ、かも・・・」

敵の数の暴力にさすがのジャベリンとラフィーも弱音を出してきた。撃ち落として数が増えるばかりで手が付けられない状況の一手手前で、もう駄目かもとも脳裏に浮かんでしまった

『ビュオオオオオオオオオオ!!』

しかし突如として味方の迎撃機『ソードフィッシュ』が飛んできてセイレーンと重桜の爆撃機を撃墜する。二人が迎撃機が飛んできた方向に視線を向けると、ゆうちゃんを抱きしめて艦装を装備していかにもご立腹なユニコーンがいた

ユニコーン「お友達をイジメないで！」

ユニコーンが吠えると同時にユニコーンが抱いているゆうちゃん光だしぬいぐるみのような姿が大きくなり、大きな翼をもったユニコーンに変身したゆうちゃんの背にユ

ニコーンが乗ると空へと駆け、機装から迎撃機を次々と射出して重桜とセイレーンの爆撃機を撃破していく。その様子にジャベリンはニコーンを絶賛する

ジャベリン「ユニコーンちゃんスゴい！ ラファイーちゃん！ 私達も頑張ろう!!」

ラファイー「うん、頑張る・・・」

ユニコーンの活躍により戦況は好転の兆しを見せ、ジャベリンとラファイーもユニコーンの頑張りに感化され気持ち切り替える。同時に無線からある通信がオーブンチャネルで響く

シンジ《全KANSENと有人部隊の隊員に連絡》



ジャベリン 「え!? 何々？」

ラファイ 「通信・指揮官から・・・？」

シンジ 《こちら、本日から君たちの指揮官になったシンジ・プロディ少佐だ。現在戦闘中のKANSEN達は、俺の指示に従って欲しい》

ジャベリンとラファイだけでなくこの場にいたアズールレーンのKANSEN達からはシンジの指揮官としての言葉に耳を傾ける

シンジ 《こんな状況で今更指揮をする指揮官等に命預ける事なんてできないと思われなくても仕方ないと思っている。だか俺は君たちKANSENを、有人部隊を誰一人として

死なせるつもりも見捨てるつもりない。だからこそ誰も欠けさせないために力を貸してほしい》

シンジは指揮官服よりも着慣れた戦闘服を着こみ、戦艦の装甲をも貫通できる特殊弾を装填した『バレットM82』と『M9拳銃』を装備した状態で量産型の船上からアズールレーンの全KANSENに通信を送信しその船を追従するように艦装を装備したウェールズとイラストリアスが現れる。そしてシンジは皆に向けてこちら側の勝利条件を伝える

シンジ「この物量で不安になっても仕方ない。だけどこの戦いは相手を倒す事が勝利じゃない・・・相手を撤退させれば俺たちの勝ちだ」

シンジの言葉を聞いてKANSEN達や有人部隊たちは感化され、絶対に誰も死なせないと自身を鼓舞して敵を押し返さんとばかりに勢いを強めた

そんな様子を見ていた加賀はやはりシンジが指揮する艦隊は歯ごたえるがあると関心しながら、初めて好転の兆しを見せて自身が発艦した艦載機を撃墜したユニコーンに意識を向ける

加賀「あの娘、空母か。あんな小さな身体では食いでが無いが……獲物は獲物だ！」

加賀は空中で奮戦するユニコーンに向けて凶暴な笑みを浮かべると手に狐のお面を持って、青い炎で燃やす。するとたちまち加賀の生まれ元となった『空母・加賀』が桜

吹雪に包まれ、晴れるとそこには艤装たる巨大な甲板を装備し、九つの尻尾や獲物を見る据える獯猛な双眼に青い炎を灯した巨大な白い九尾の狐・『白面』へと姿を変える

白面 「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」

クリーブランド 「ええええええっ!!?」

お面から完全な獣へと変身を遂げた白面は己は強者であることを誇示するように遠吠えを上げ、その変化と巨大な姿にクリーブランド等はあまりの予想外に仰天してしま

加賀 「喰らうてやるぞっ！」

白面「グルルルルルルルルルルル……!!」

驚く自分らをよそに加賀は白面の背になり、白面はその牙を獲物たるユニコーンに向けて唸り声を上げながら巨大な艦装から青い炎を纏った艦載機を大量に発艦した

ユニコーン「っ……！」

ユニコーンは自分に向かって飛んでくる艦載機を迎撃しようとするも練度の違いは歴然であり次々と迎撃機は撃墜されていき、白面から放たれる青い焰玉と艦載機を回避するのに精一杯になってしまった。故に背後から迫る一機の艦載機に気づけず機銃が迫るが、するとその様子を見ていたシンジが『バレットM82』を構えて艦載機のプロペラエンジン部分を鋭角に狙いを定めて発射する



かしそれでも多少の余裕はできたが、護衛のために艦載機も飛ばせないほど攻撃は激しいものとなる

ジャベリン「させない！」

ラファイー「っ！・・・ジャベリン危ない」

ジャベリンは回避に専念しているユニコーンを助けようと飛び回る艦載機たちに向けて槍を構えるが、そんなジャベリンに向けて魚雷が向かっていることに気づいたらファイがジャベリンを突き飛ばして庇い、代わりにラファイの足元で魚雷が爆発し水しぶきを立てる

ジャベリン「ラファイちゃん!!」

ラファイー「ケホ！、ラファイー・・・戦闘継続可能・・・」

ジャベリンはラファイーに庇われたことを認識し、ラファイーの安否を確認する。するとラファイーは艦装で魚雷を当たる寸前に撃ち抜いていたおかげで直撃は免れ多少のダメージを受けていた程度で済み致命傷などは見受けられなかった。ジャベリンはホツとして魚雷が向かって来た方向を見ると、そこには崖で出会ったローブを着ていた二人が立っており、その姿はローブを脱ぎ捨ててあることでその容貌は明らかになっている

一人は白髪をポニーテールにして本人曰く角のような装着品に見える耳がある髪型に出るとこは出ていながらも全体的に引き締まった体を丈の短い白と紺のセーラー服と紺色のミニスカートで包んだ服装をして、内気で控えめな雰囲気をしていたが今は戦士としての気迫を感じさせる雰囲気を持つ少女・・・『重桜所属・吹雪型駆逐艦――番艦・

綾波』



もう一人は短めのブロンド色の髪を右側を少しだけリボンでまとめた髪型に両肩と背中が大きく開いた黒く半透明なボディスーツの上から十字のアクセサリーがついた軍服風の前掛けと腰巻きと帽子という服装をして、大人びた印象といかにも真面目な努力家で優等生らしい雰囲気を持つ少女……『鉄血所属・Z23型（1936A型）駆逐艦・Z23』

艦装を装備した彼女らはジャベリンとラファイーに龍の顎を模した主砲と艦首を模した大剣を向ける

綾波 「重桜吹雪型駆逐艦・綾波」

Z23 「鉄血駆逐艦Z23と申します。あなた達はここで倒します」

綾波とZ23は名乗りを終えると、Z23は主砲を即座にジャベリンとラファイー達に主砲を打ち込む。二人は修練された正確な砲撃を何とか回避し、そこにすかさず綾波が大剣をジャベリンに振り下ろすが槍でなんとか受け止める

綾波「鬼神の力、味わうがいい……！」

ジャベリン「どうしてこんな……！」

Z23「そんなこと決まっています！」

綾波「綾波たちは敵同士なのだから、当然なのです……！」

ジャベリンはなぜ戦いを仕掛け、自分たちが多々和なければならぬのかを問う。しかしその答えは敵同士という言葉と砲弾によって返される。ジャベリンは至近距離の砲弾をジャンプすることで回避し、Z23の攻撃を回避していたラフィーの合流するも、同じくZ23と合流した綾波に追撃の攻撃を浴びせられるジャベリンは彼女達と戦いたくないと思いつながらどうするべきか考えると、青い焰玉が自分たちのもとへと飛んでくるのに気づき、なんとか回避して焰玉が飛んできた方向に目を向ける

ユニコーン「ううう・・・！」

回避に専念していたユニコーンだったが殺到してくる焰玉に退路を奪われ、いつ被弾してもおかしくない状況に陥っていた

加賀「どうした、この程度で音を上げては張り合いがないぞ？」

加賀は艦載機ではなく対空として主に使われる白面の焰玉を使って、ユニコーンにあえて手を抜いて追い詰めることで次の一手を誘おうと面白そうに笑いながら攻撃を続ける・・・その笑みには少々久しぶりに戦える高揚感が含まれているようだが・・・

ジャベリン「っ!?!・・・お願い!このままじゃユニコーンちゃんか!?!」

ラフィー「おねがい……！」

綾波「っ！……」

Z23「……！」

加賀の攻撃にさらされるユニコーンの苦し気な表情を見て、ジャベリンとラフィーは悲痛な声で綾波とZ23にユニコーンを救ってほしいと頼む。綾波とZ23も加賀のあんないたぶるような行為に思うところがないわけでもなければ、偶然とはいえ感謝の意をくれた言葉をくれたユニコーンにも思うところはあるため思わず攻撃を止めて険しい表情となる。しかし自分たちは敵同士……敵同士のユニコーンを助ける理由も道理もなければ目の前の二人の頼みを聞くことはできない。二人は自分にそう言い聞かせ、再びジャベリンたちに向けて艦装備をむける。ジャベリンは悲しげな表情になるも自分も自衛のために槍を構えるが、ラフィーは先ほどの魚雷のダメージが利いてきたの

か膝をついてしまう。ジャベリンは心配をしながらラフィーの盾となるように庇うもこのままではユニコーンもラフィーも危ないとわかっている。この状況を脱するにはどうすればいいかを考えるもわからず右往左往してしまう

その間に焰玉の一発がユニコーンのもとに迫り、当たると判断したユニコーンはこれから来る痛みを目をつむりおびえながらも防御しようと腕を前に出して身構える。そしていざ当たる着前で一機の艦載機とその上に乗る誰かが白面から放たれる無数の弾幕をかいくぐり、ユニコーンの手をつかんでゆーちゃんごと掻っ攫うようにして回避させ、白面と加賀から距離を取らせた

ユニコーン「え……何？」

ユニコーンは一瞬の出来事におもわずユーチャンゴと呆けてしまった。するとそんな彼女に手をつかんだ人物が快活な声で呼びかける

サラトガ「フツフーン！びっくりしたユニコーンちゃん」

ユニコーン「ぎ、サラトガさん……！」

サラトガ「ユニコーンちゃん、そこは“さん”じゃなくてさんじゃなくて“ちゃん”でよろしくね？」

ユニコーンを救ったのはユニオンの空母・『サラトガ』だった。サラトガはユニコーンが大したげがないことを確認して自身の艦載機にのせていたユニコンとユーちゃ

んを近くにいた量産型に降して休ませると加賀と白面に向き直る

サラトガ「ここからは魔女っ娘アイドルサラトガちゃん相手だよ！さあ、私の歌を  
聴け——！」

サラトガは艦装の旗から艦載機を飛ばして唸る白面とあきらかな強敵に笑顔を浮か  
べる加賀に立ち向かった

ジャベリン side out

戦いはさらに加速していき戦火より交差していく



しかしその場にいた全員は知る由もなかった。まさかこの場所に自分たちなど軽々と圧倒できる存在が海の底から近づいていたことに

??? 「グルルルルルル・・・！」

それは自身が忠誠を掲げる王のために

王からの直々の頼みを全うするために

王の使命を臣として手を貸して無益かつ身勝手な破壊から自然を守るために

彼は戦火が飛び交う場所へと向かう

そこに友と好敵手となる相手がしらぬまま  
・  
・  
・  
・

## 6話 新たな開戦と新たな遭遇（後編）

シンジ side

シンジは戦況を見ながら的確に有人部隊とKANSEN達に指示を出していく。現状、有人部隊は重桜の有人部隊の足止めをし戦闘機を撃墜されては戦車が中破するなど被害や負傷者は出てはいるが幸運にも死人はを出すことなく押しとどめている。KANSEN達はセイレーンの量産型や艦載機に対して主砲や対空砲で次々と撃ち落とし、特にユニオンの『リトルビーバーズ』とロイヤルの「ロイヤルCクラス」の駆逐艦らは持ち前の機動力と魚雷を用いてセイレーンの戦艦を沈めていつてくれたおかげで戦況は膠着状態だが、少しずつ持ち直していきながら押ししているという感じだ。ユニオンの救出にはサラトガを選出し向かわせたが、その結果はユニオンの無事の姿を見て成功だったようだ

シンジ「ユニコーンは無事みたいだな、間に合ってよかった」

イラストリアス「さすがサラ先生ですわ、かの巨獣を抑え込んでいます」

ウエールズ「ああ、あの人はユニオンの中でもベテラン中のベテランだからな」

シンジたちはユニコーンの無事にホツとするとすると同時に加賀と白面を相手に善戦して抑え込むサラトガの実力を賛美する。彼女らKANSENにとってサラトガは長い間戦い続けてきたカンレキをもつ老兵でありベテランであるため先輩という立ち位置にもあたるが、その経験豊富さを生かし航空戦術の指導者として機動艦隊作戦のレッスンをユニオンやロイヤルのKANSENに施している。その結果サラトガは多くのKANSENを相手にしてきたことで相手の癖や戦い方をすぐに見抜けるようになり、今加賀との戦いでは熱くなると積極手になり、攻撃に対して磨きがかかるが冷静さを欠いてしまう彼女をあえて戦いを長引かせることで二手先三手先読むことができなくさせ、その隙をついて白面に着実にダメージを与えている・・・皆知らないがサ

ラトガは地下世界から怪獣の相手をしながら2週間サバイバルを完遂しているので、白面のような規格外に対してはかなり慣れていることもある

シンジ「あとは、セイレーンをあらかた片付いたら有人部隊の戦車隊と駆逐艦たちにサラトガを援護させるか、しかし相変わらず加賀は戦闘狂だな。こうしてみると昔はもう少し加賀も赤城もおとなしかったんだけどな・・・ッ！」

加賀の戦いを楽しむ姿を見て昔を思い出し、昔はもう少し加賀も赤城も素直でおとなしかったなと思ふける。そしてふとあることに気づき、周りを見渡す・・・母港・・・戦場・・・兵器たちの残骸・・・荒れ狂う海・・・どこを見渡しても赤城の姿がなかった。加賀と赤城はセイレーンを率いて母港を襲撃してきたのだから必ずこの場所にいるはずなのだ。シンジはもう一度自身の周りを見渡す

赤城「フフ、私ならここにいますわ旦那様？」

シンジ「っ!？」

鈴のような声が首の後ろからささやかれとっさにシンジは前に飛ぶと同時に振り向く。そこには自身が愛する女性・赤城は蠱惑的で思い人と再会したような恋人のように幸せ様な笑みを浮かべて立っていた。シンジも軍人として殺気や気配を感じる事にはたけているにもかかわらず、距離的に息遣いが聞こえてもおかしくない首元まで近づかれてもなお気配を感じさせないその実力・・・さすが一航戦だと思い知る

イラストリアス「指揮官さま、下がってください！」

ウエールズ「指揮官に手は出させはしないぞ重桜！」

赤城「……邪魔なオジヤママムシにはご退場願いましょうか」

追隨していたイラストリアスとウエールズもいつの間にかシンジのそばに近づいていた赤城に気づき、イラストリアスは艦装から艦載機を赤城に向けて発進、ウエールズは腰に掛けてあったサーベルを抜刀し赤城に切りかかる。それに対し赤城は迫りくる二人を笑顔から一転して忌々しい物を見るように不機嫌になると、艦装を展開し、赤く炎のように揺らめく甲板から艦載機を発艦する。艦載機は編隊を広げて二人に襲い掛かり二人をシンジのもとから引きはがし、再び赤城にシンジに向かって笑みを浮かべながら話しかける

赤城「ようやく二人つきりになれたわねシンジ♪赤城こうして再開できる日を待ちわびていたわ」

シンジ「・・・俺もだ。だけど聞かせてくれ、なんで戦争なんて仕掛けたんだ？」

赤城「すべては重桜とあなたのためよ。アズールレーンのやり方では間に合わず滅びの未来しかない、だからこそ重桜と鉄血は脱退して新たな同盟を結び私たちの未来を掴み取るの。もちろんあなたを取り戻すためでもあるけれど、まさかテストを兼ねた小手調べであなたに会えるなんて僥倖だったわ♪」

戦争を仕掛けた来た理由を聞いてシンジは行為はともかく彼女らしいと答えだと納得してしまう。彼女の愛はとても大きい。シンジへの愛、仲間への愛、重桜への愛を持ち、多くの愛を持ちその愛は炎よりも熱く鉄よりも重い・・・そんな彼女ならばシンジと重桜のために戦争に踏み切っても不思議ではないだろう



シンジ「そうか・・・君らしいな。でも隠し事はよくないな」

赤城「?・・・赤城は隠し事などしていないわよ?」

シンジ「何年君と一緒にいたと思ってるんだ?君がなにか隠している事かまだ言うわけにはいかない事があれば話す際にわずかに目を合わせない癖くらい知ってるさ」

赤城「っ!・・・なるほど、さすが私の旦那様ね」

赤城は気分でも気づかなかつた癖をもとに《あの計画》を隠していること見破られたことに驚きながらも、自身の事を自分自身でさえ知らなかつたことを知り尽くすほど自

身を愛してくれていると再認識して若干喜びのあまり体を震わしながら赤城は手を伸ばす

赤城「それも追々と説明するわ、だから私たちと行きましょう？あなたの居場所は私たち『重桜』でここではないはずよ・・お義父様のためにももう二度とあなたを離したりしないから・・・」

シンジ「・・・・」

シンジはジョーのためでもあるという理由と愛する人の頼みに思わず手を伸ばしそうになる。しかし自分にはまだやらなければならないことがある。父の仇を取って赤城たちを守る事・・・自分とモナークしかあの怪物の存在を知らない故に自分がやらなければならない責務だった。だが彼女なら打ち明けてもいいのではないかとささやく自分もいるのも確かである。そんな自分の中の選択を考えてしまい言葉が詰

まっつてしまおう

『ヒュウウウウウウウン!!』

赤城 「っ!？」

その瞬間、赤城めがけて高速で光の大鷲が飛んでくる。赤城は獣の第六感に近い直感でその大鷲を紙一重で躲すも、そのまま大鷲はサラトガと交戦する白面の横腹を貫通、そのまま艦載機へと変貌しシンジと赤城の距離が広がった。そしてすべての艦載機を破壊したのか戦っていたイラストリアスとウェールズもシンジの元へと戻り、シンジと赤城にイラストリアスたちだけでなくその場にいたKANSENや有人部隊が矢が飛ん

できた方向に視線を迎える。そこには一隻の空母がこちらに向かって航行しており、甲板には一人のKANSENがたっていた

そのKANSENはストレートロングの銀髪に白い軍帽をかぶり黒と白の制服とノースリーブの白シャツに黒いジャケットをマントのように羽織りミニの黒いプリーツスカートに黒いタイツと黒いブーツと下半身は黒づくめな服装をして、その姿からは凜としながらも多くの激戦を勝ち抜いてきた歴戦の兵士としての覇気を雰囲気として放っている

赤城「ユニオンの空母ね、もしかしてあいつが……」

クリーブランド「間違いない。あの船こそ私達ユニオンの最強空母！」

クリーブランドと赤城が眩いた瞬間、空母から次々と艦載機が発進して縦横の艦載機を撃ち落とし、爆撃機でセイレーンの艦隊を瞬く間に撃沈していく

赤城 『『灰色の亡霊』 大いなる『E』・・・』

加賀 「そうか、貴様が！」

その実力と容姿を見て合点がいき、かのKANSENが何者かわかり鋭く睨む赤城とサラトガとの戦いを邪魔されたことに憤り、赤城と同様に睨む加賀に構わずそのKANSENの女性・・・『ユニオン所属・ヨークタウン級2番艦空母・エンタープライズ』が大きく叫ぶ

エンタープライズ 「エンタープライズ・・・エンゲイジ戦闘開始!!」

エンタープライズの乗っていた空母が光り輝くキューブに分裂すると、その形が艦装となつてエンタープライズに甲板が体の左側に、右手には艦橋を模した大弓が装備される。そして発艦した艦載機の一機の上に飛び乗るとセイレーンの量産型艦隊の間をすり抜けながら加賀と白面へと向かう

加賀「面白い！」

破竹の勢いの勢いで自身に迫るエンタープライズに加賀は更なる強敵に心を滾らせ、戦っていたサラトガをよそにエンタープライズに向けて艦載機を飛ばす。エンタープライズは臆することなく加賀の艦載機を光の矢で撃ち落としては、弓を近接武器のように扱って物理的に翼をへし折り、華麗な体術と正確な射撃と卓越した艦載機の手操作で次々と艦載機を撃墜しながらまるで“自分を顧みず死んでもいいと思わせる特攻”のように突き進む

白面「アオオオオオオオン!!」

エンタープライズがあつという間に白面と加賀のもとにたどり着く。しかし白面の強みは空母であると同時に巨大な獣へと変わったことで、艦載機や焰玉だけでなくその牙と鉄爪も武器となる。白面はエンタープライズが乗っていた艦載機を軽々と切り裂いた。しかしエンタープライズは切り焼かれる瞬間に艦載機から白面の頭上へと跳んでおり、すかさず東部に光の矢を三発放つ

『ドオオオオオオオン!!』

放たれた矢は爆弾へと変わり、そのまま白面の頭上に突き刺さり0距離での爆風によって白面は悲鳴を上げて倒れ伏す。エンタープライズはそのまま白面の背中に降り

ると、白面の背中に乗っていた加賀のもとへと疾走する

加賀「私を楽しませろ亡霊よ!!」

赤城「待ちなさい加賀!」

想像以上の強さを持つエンタープライズに触発され、さらに熱くなり目と尾から青い炎が噴き出すほど高揚している加賀を赤城は制止させようとするが、今の加賀には赤城の言葉は届かずさらに艦載機と青い炎となった紙札をエンタープライズに向けて放つ

エンタープライズ「フツ・・・!」

エンタープライズは艦載機の銃撃に焰玉の攻撃が激しくも加賀との距離が近い真ん



中を中弓を盾にしながら迷わず突っ切り、攻撃によるかすり傷を受けながらもお互いの顔がはつきりわかるほど近くまでたどり着き、敵たる加賀に大弓を構える

加賀「貴様・・！」

エンタープライズ「討ったぞ」

エンタープライズは自身を全く顧みずここまで近づいてきたことに戸惑る加賀に淡々と言葉を発すると、敵の急所たる人間でいうと心臓にむけて光の矢で射抜き倒れるまで何度も撃ち込んだ

加賀「がはっ！」

赤城「加賀!!」

シンジ「・・・っ!?」

加賀はあまりの激痛に苦痛の声を出し、赤城は傷を負った加賀に悲痛な叫びをあげる。シンジも今は敵になってしまったとはいえ家族である加賀の悲痛な姿に目を見開いて戸惑いながらも無事であってほしいと思ってしまう

加賀「ぐう・・・私の体に傷を!、この体は姉様の!!」

白面「グルルルルルル!!」

シンジの願いが通じたのか加賀は心臓に矢を何発も受けながらも倒れず、痛みが響く胸を抑えて意味深な言葉を言いながら炎のように揺らめく青い甲板を展開し、頭上で爆発を受けて倒れていた白面もダメージから復帰してエンタープライズをにらみながら唸り声をあげる

そんな加賀と白面をよそにエンタープライズは冷静に大弓を構える。さらに激しい戦いが繰り広げられるのではないかと両者を見るシンジたちだったが、シンジのもとに有人部隊から連絡が入る

《指揮官聞こえますか!?!こちらに向かって巨大な物体が移動しています!》

シンジ「何っ!?!」

ここに来てまだ重桜の造園が来たのかとその知らせに驚愕する。すると無線からレーダーの映像が送られ、シンジはすぐさまそれに目を通すと確かにそこには全長180mもある巨大何かが近づいていた

シンジ「これは戦艦か？」

《いいえ、水中です》

シンジ「なら潜水艦か？・・・だがなぜレーダーに映っているんだ？」

大きさからからして戦艦と思ったが、レーダーがとらえた何かは水中だと言われると潜水艦と切り替えたがそれでもおかしかった。潜水艦はレーダーの電波や可視光線が



エンタープライズ「これは・・・爆発か？」

赤城「一体何が？」

加賀「姉さま、あれを・・・何かがいます！」

リーダーが何かがあると示していた場所が突如として爆発する、距離的に一番近かったエンタープライズ、赤城は突然の爆発のように上がった水しぶきにさらされながら状況を把握しようと水しぶきの上があった場所に注目する。そんな中同じく水しぶきの場所を注目していた加賀が何かに気づき指をさして示す。赤城とエンタープライズが加賀が指さす場所である水しぶきの上部を目を凝らして見るとかすかにゆらゆらと何かが動いており、次第に水しぶきが収まりながらそれは姿を現した

クリーブランド「おいおい嘘だろ!？」

ジャベリン「ええええ!？」

綾波「・・・!？」

サラトガ「うっそー!」

シンジ「あれは・・・!？」

その姿を見てその場にいた人間やKANSEN関係なく、その場にいた全ての者が驚愕した。ある者は驚愕のあまり愕然とするもの、ある者は理解が追い付かず呆然とする





まるで自分を誇示するようにアンギラスは天に轟く咆哮を上げた

シンジ  
s i d e  
o u t

アンギラス  
s i d e

アンギラスは自身を見る人間やKANSEN達を一瞥すると自分よりも一回りか二回り小さい居住である白面とそれに乗る加賀へと視線が行き、瞬時に動けるように地面

を踏みしめながら数週間前の事を思い出す

〈数週間前〉

アンギラスはいつものように自身の縄張りである極寒地帯で縄張りに異常がないか回りながら狩りをして腹を満たしては、縄張りを狙ってきた外敵を相手にするなど命のやり取りが当たり前な世界でのんびりと過ごしていた。そんなある日の事、アンギラスが忠誠を誓う王・ゴジラがアンギラスの者へと尋ねてきた

アンギラス『ご足労深く感謝します王よ……して今回貴殿は何用で？』

ゴジラ『ああ、実はお前に頼みたいことがあってきた』

アンギラスとゴジラは念和で頭に直接話しかけて話す。アンギラスとしては王たるゴジラの頼みならばと断る理由はないので必ず引き受け、まっとうしてみせると意気込む

ゴジラ『先日地球から地表に出て、地表の環境を見て必要なら回復してほしいと頼まれたんだが、俺は前に地上で人間に攻撃され敵視されている身だ。下手に俺が出ていけば人間はまた躊躇なく俺ごと自然を破壊しようとする可能性がある。そこでお前が先んじて地上へと行き、地表での自然の傷の具合や人間たちの反応を確認してきてくれ、時間が経てば俺から話しかけて合流することにしたとも思っている。頼まれてくれるか？』

ゴジラは前に地上へ出た時に人間たちによって自分を倒そうと水爆を何度も使い自然を傷つけてきた。あれから時間がたったとはいえ、また人間たちがゴジラを前にして水爆をあつさり使うようであれば自然を回復させるどころではない。そこで人間たちに確認されていないアンギラスに頼んで、自然の具合や人間の対応の仕方などを知ったうえで行動を起こしたかった。モスラはラドンにも頼もうとも考えたがモスラは優しすぎるところがあるため攻撃されてもやり返さずそのまま深手を負ってしまう心配があり、ラドンは攻撃されたソニックウェーブを発生させて飛んだ先々で自然を傷つけてしまう可能性もあったので即座に却下していた

アンギラス『そのような事が・・・承りました。その頼み任せました』

ゴジラ『ありがとうアンギラス。では早速偵察に行ってくれ』

アンギラス「ハッ！」

アンギラスはゴジラの頼みを聴き、その日のうちの地下トンネルを経由して地表へと出ていった。そしてこの週数人間に出会うことはなく自然の具合を見ながら、時に海でクジラなどの巨大な海の幸を食べながら偵察に勤しんでいた。そして現在は、いつも通り偵察に依存していると遠くからいつぞや地下へときた長門やオイゲンやサラトガが使っていた武器が発する轟音を聞きつけた瞬間どこからか飛んできた魚雷や砲弾の流れ弾が見事アンギラスの頭部に直撃する。アンギラスはこの時自身を狙って攻撃したのだと判断し人間の武器や争いは自然への傷が大きいため、王たるゴジラの臣下である自分が今ここにいない王の代わりにその使命を手伝わねばと早急に攻撃した者を打ち倒そうと全速力で砲撃が響く場所へと向かった

く現在く

アンギラスは今思い返しながらKANSENや人間の予想外と言わんばかりの反応を見て、自分を狙ってきたのではなく運悪く流れ弾が当たってしまったというただの事故だったという事に気づく。しかも相手は自分よりも小さくひ弱な人間はともかくサラトガ達の同類が相手なのでいささか戦いにくいという事はあるが、争い自体は構わないが怪獣が争いあうよりも自然を傷つけていることには変わりはない上に完全に敵として扱われ銃を向けられている以上、人間の対応を知ること踏まえて戦うことにする。そんな中でアンギラスは巨大な獣である白面とそれに乗る加賀に注目する。

アンギラス（あれは我らと同じ怪獣・・・いやこの気配は何か違う。そしてそれに乗るあの女・・・獣と人間が混じっているのか？どちらにせよ弱者ではないな、仕掛けるならば奴らが先か）

アンギラスは姿は怪獣らしいがまったく別物な白面や加賀の容姿に疑問を抱きつつも最初の標的として狙いを定めた。そしてその巨体から想像もできないスピードで白面と加賀の元へとセイレーンやKANSEN達のいる場所を突っ切ろうとする。

シンジ 「っ!? …総員退避！今すぐ避けるんだ!!」

ラファイー 「うわあ ……！」

Z23 「これは対応のしようが!？」

エンタープライズ 「くっ ……！」

「全員しつかり掴まれ！艦から振り落とされるぞ!？」

シンジの素早い指示のおかげで驚きから動けないでいた有人部隊とKANSEN達は敵味方関係なく意識を取り戻して退避する。アンギラスの6万トンという巨大な質量で素早く動くことで発生する余波で海は大きく荒れ、大波やうねりがKANSEN達や有人部隊に襲い掛かり吹き飛ばされそうになる。エンタープライズをはじめとした空母や戦艦やセイレーンの艦隊や波にさらされない港にいた戦車隊がアンギラスにむけて攻撃を行うが、アンギラスの強固な甲殻は機銃や砲弾は全く受け付けず良くて極小のかすり傷しか与えられず、セイレーンが放つビームは少しだけ上皮を焦がす程度でほぼ無傷だった

『ガサガサガサガサガサガサガサガサ！』

砲撃と銃弾の嵐の中、アンギラスの背中の棘が微小で凄まじい勢いで振動し始める。それどころか背中の装甲と棘が冷気を放ちながら氷に覆われていきコーティングさせる



アンギラス「ガアアアアン！」

アンギラスは最大まで振動させた棘を銃弾や砲弾やビームが飛んでくる方向に体を傾けて向ける。瞬間、振動する棘に当たった攻撃はすべて跳ね返り、跳弾として撃たれた分だけ銃弾や砲弾や爆弾を撃った相手に跳ね返す。セイレーンの放ったビームでさえ棘にコーティングされた氷が鏡の役割を果たし屈折させて跳ね返しセイレーンの艦隊を次々と沈めていく。KANSEN達や有人部隊にも自分たちが撃った攻撃が跳ね返され多くのKANSENにKANSEN達の半身たる艦が被弾し、量産型やセイレーンの艦隊や戦車や戦闘機も次々と破壊される。幸運だったのは戦車や戦闘機の乗員は即座に脱出できたので負傷者は出たが死者は出なかった事だろう

赤城「攻撃を跳ね返した・・!?」

ウエールズ「こんなことが・・・！」

イラストリアス「ツ!!」

シンジ《真面に攻撃するな！駆逐艦は奴の足元に魚雷を発射、戦艦と戦車は奴の装甲と棘がない場所を狙ってくれ。それ以外のKANSENと人員は負傷者と搬送と脱出した隊員の救出を！》

アンギラスのこの能力は本来、棘を振動させることで攻撃してくる際に触れてくる相手を逆に傷つけるだけの能力だが縄張りや自分を狙ってくる光線を吐く怪獣や岩を砕いて飛ばしてくる怪獣に地下世界でのオイゲンたちの攻撃を受けていると氷を棘に纏わせては光線や砲弾を跳ね返すだけでなく跳ね返す角度を調節して敵を狙える強力なカウンター能力になった。そんなKANSEN達はアンギラスのこの能力に驚いてきつつも、アズールレーンのKANSEN達は指示に従い行動を起こす。駆逐艦たちは棘

がなくすべての生物に重要な場所である足に対して魚雷を放ち攻撃し、戦艦や戦車も装甲と棘のない場所へと砲弾をたたき込んでいく。アンギラスとて全身が甲殻という鎧に包まれているという事はなく腹や足には装甲がないが、アンギラスにとっては表皮を少しだけ削る程度でこの程度はすぐに治ってしまう為彼女らの攻撃を無視して加賀と白面へと突き進む

加賀「私が狙いか暴竜！」

白面「ウオオオオオオオオン!!」

加賀はアンギラスの狙いが自身と自身の式神である白面だと気づき、奇しくも伝承と同じ呼び方をしながらアンギラスに向けて札から変化させた艦載機と白面の尾から焰玉が放たれる。アンギラスは先に銃弾が飛んでくると思い、棘を振動させて跳弾を狙うが先に焰玉がアンギラスの装甲に到達する。焰玉は炎なので跳ね返すことができずに

棘を覆っていた砲弾や銃弾を浴びて傷はついても砕けなかった氷を溶かして棘を少し焦がした。しかしそれでもアンギラスは白面の首に狙いを定めるがプロペラの爆音が頭上から聞こえ、見上げると艦載機が自分に向かって爆弾を大量につけて急降下しており、再び棘を振動させて特攻だろうと跳ね返そうと体制を整える

加賀「同じ手が何度も通用すると思ったか！」

加賀は満面の笑みで吠える。加賀はアンギラスとの戦いをエンタープライズやサラトガとの戦いよりも心の底から楽しみ、心を熱く沸かせていた。エンタープライズたちが決して弱いわけではなくむしろ十分合格レベルだった。しかし今はアズールレーンと自分たち重桜とセイレーンを相手にすさまじい力で圧倒する存在が自分だけを見て戦っている・・・その事実に加賀はなぜだか嬉しく誇りに思い、自分では気づいてはいないが徐々に自身よりも強いであろうアンギラスに惹かれていた。熱くなっても正確な狙いで加賀は艦載機たちの爆弾を札で狙い撃ち、二十機近い数もある艦載機達に棘に触れる前に連鎖的に爆発し、すさまじい爆風と衝撃に鉄の破片がアンギラスに降り注



白面はとつさに鉄爪を振りアンギラスの首元を切りつけ、小さな傷鮮血が飛び散るもアンギラスは全く引かず白面の首元に喰らい付く。白面もアンギラスの首元に噛みつくが、アンギラスの装甲と凄まじい筋肉によつて歯が通らず、アンギラスはそのまま怪物の中でも屈指の咬力で白面の喉を食いちぎり頭部を胴体から挽ぎ取る。白面は絶叫を上げながらダメージの許容量を超えて青い炎となつて消えていき、粒子となつて加賀へと戻っていく

アンギラス（消えた？我らと同じ怪物どころか生物ですらなかったのか・・・ッ！）

アンギラスが知る由もないが白面は加賀の生まれもとであり半身でもある『空母・加賀』が獣としての姿に変わった艦装なので正確には式神であるため生物ではない・・・白面の正体に訝しむが頭上から鋭い闘気と殺気を感じ見上げると青い炎のように揺らめく甲板を体の横に携えて、瞳と尾から青い炎が噴き出る加賀が笑みを浮かべながら



どんな生物でも体内を直接攻撃されればただではすまず、アンギラスとて体内で爆発が起こればただではすまず多量の鮮血を海にまき散らしながら絶叫を上げる。今までの攻撃の中で一番真面な攻撃をたたきこむことに成功した加賀は達成感に酔いしるがそれが仇となり、その隙にアンギラスは体を回転させて鞭のようにしなる巨大な尾の振り回しを加賀へと食らわせ大きく吹き飛ばす

加賀「ガハアツ!？」

赤城「加賀!？」

明らかにKANSENとはいえ人間が食らえば体が四散するどころか細切れになるほどの一撃を食らえば十分致命傷になりえる。今まで間に割って入れなかった赤城が吹き飛ばされた加賀へと駆け寄ると、加賀は口元から血を流しながら左腕が腫らしてふ



らついでおり息も荒かった。実際に加賀は当たる直前に左腕で体をかばったおかげで死ぬことはなかったが左腕と胸の骨は折れて内臓にも刺さっており明らかに致命傷一步手前の死に体の状態だった・・・それでも極限まで熱くなった加賀にとつてどうでもいいのか闘志を燃やす目で早くも出血は止まりこちらを見据えるアングラスを狙う

加賀「ハハツ・・・良いぞ！強い敵だからこそ倒す価値がある！」

赤城「もうやめなさい加賀！これ以上はあなたの体がもたないわ！」

加賀は重症の体を引きずってアングラスに向かおうとするが、赤城は必死に押さえつけて止めようとする。今の加賀は赤城の声は届いておらずこれ以上戦えば間違いなく加賀は死ぬだろう。もう大事な人を失いなくない赤城は力の限り加賀を抑える。そんな二人の様子を見ながらも戦いは終わらず気はないと判断し、*“強者であろうと弱者だろうと最後まで戦う者に対しては最後まで戦って己の血肉にする”*ことを生きる強者

としての礼儀と重んじているアンギラスは二人に向けて大口を開けて食らおうとする

『ブロロロロロロロ！』

しかし突然艦の量産型がエンジンの最大出力で発せられる駆動音が響き、アンギラスはその音を聞いて加賀達からそちら意識を向けて視線を送るとそこには自身の横合いから全速力で向かってくる量産型にそれを手動で操作し登場するシンジだった

シンジ「二人はやらせないぞこのハリネズミ！」

赤城「シンジ!？」

シンジは戦っている加賀を放っておくことができず、自身が乗る量産型を自動操縦から手動操縦に切り替えて操縦してアンギラスに対して特攻を仕掛ける。アンギラスは迎え撃とうと動こうとするが、シンジはそこから動けないように足元を重点的に砲弾や魚雷を撃ち切るまで撃ち込んでいく。そしてシンジはもう一度自動操縦に切り替えてまっすぐアンギラスに直進するように設定するとそのまま量産型から飛び降り海へと飛び込むと同時に懐からスイッチを取り出して即座にボタンを押した

『ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

量産型は突如大爆発してアンギラスは爆発に飲まれて見えなくなった。シンジは量産型を操る前に持っていたグレネードやC4爆弾などの爆発物を燃料タンクにたまり設置していたのだ。うれしい誤算かアンギラスの周りには戦闘で中破して動かなくなった量産型や艦載機から漏れ出す燃料に引火してより爆破の力が加わったことでよ

りナパームのような熱とより爆破力が加わったことだろう・・・そして死んだのか気絶したのかただ出てこないのかアングラスが煙と炎の中から出てくることはなかった

アングラス side out

シンジ said

シンジ「やったのか・・・？」

ジャベリン「指揮官！」

イラストリアス「無事ですか指揮官様？」

シンジは量産型の破片掴まりながらアンギラスの生死を確認しようとする。爆発場所を見続けていると、そこにジャベリンとイラストリアスがシンジのために人が乗れる小型のボートを持ってきてくれた。シンジはそれに乗り込むと同時にシンジの周りを守るように出撃が遅れたKANSEN達も続々やってくる

赤城「・・・遺憾極まりないけどここまでね」

加賀「姉さま!?! 私はまだ戦えます、それにシンジがまだ……!」

赤城「わかっているわ、だけど潮時よ。目的も概ね達成できたしね。多少の予想外もあつたけど上場の戦果よ」

加賀「……姉さまがそう仰るなら今は引きます……!」

赤城の言葉に熱が引き幾分か冷静になった加賀がシンジを取り戻していないのに引こうとする赤城にまだ戦おうと進言するが、赤城とて今も何としてもシンジを取り戻りたいと思っているがセイレーンや量産型がアズールレーンやアンギラスに壊滅させられ、有人部隊も少なからず負傷者がいる上に加賀のけがも相まってこれ以上は戦えないと大局的に判断する。当初の目的を果たしたことも果たし、予想外の戦果だったと黒いメンタルキューブを見ながら加賀を諫める。加賀は悔しそうにしながらも赤城の言葉に従い艦装を解除して艦装を空母へと戻し綾波とZ23が護衛している有人部隊と合

流しようとする

エンタープライズ「逃がすと思うか？」

赤城「あゝら恐い、そんな目で見られたら私どうにかなってしまいそう」

そこにエンタープライズが敵を逃がさまいと鋭い目で赤城と加賀を射止めながら二人に向けて大弓を構え、赤城はそんなエンタープライズをからかう様に答える。シンジはボートから彼女たちを注目するが何よりも黒いメンタルキューブに視線を吸い寄せられていた

シンジ（あのメンタルキューブは・・・何だ？）

『メンタルキューブ』はKANSEN達の誕生にかかわる物体で、人類にとってわからない部分が多い素材だがこれが彼女たちの艦装を構築している。本来キューブは水色に輝いているが、黒いメンタルキューブは真つ黒に輝やいておりシンジは黒いメンタルキューブからなぜだかとても恐ろしい何かを感じていた

赤城「残念だけどお暇させてもわうわ、だけど覚えておきなさいアズールレーン。シンジは必ず返してもらうわ……！」

赤城はかならずシンジを取り戻すと伝えると加賀とともに空母へと降り立って自分たちアズールレーンの者たちを見据えながら二人は宣言する

赤城「これは宣戦布告よアズールレーン」



加賀「これより重桜は『鉄血』と共にお前達の欺瞞を打ち砕く」

赤城「未来とは強者に委ねられる物・天命はこの力で大洋を統べる我々にあり……  
我らは赤き血の同盟……『レッドアクシズ』なり」

赤城と加賀は鈴の様に響く声で『レッドアクシズ』の結成を伝えながら重桜の  
有人部隊と綾波とZ23と共に大量の桜吹雪の中に消えていった

イラストリアス「逃げられましたね」

シンジ「……そうだな」

イラストリアス「指揮官。エンタープライズをどう思いますか？」

イラストリアスの質問にシンジは赤城たちが去った場所を見つめるエンタープライズをみる。そしてその瞳はどこか虚ろでその背中からはどこか哀愁を感じさせる

シンジ「確かに彼女は強い。それと同じかそれ以上に危ないが……」

イラストリアス「ええ、なんて痛々しいのでしょうか……」

彼女の自分をあまりにも顧みない戦い方と行動をみて彼女の自身の命を軽視するあり方を察してのシンジの言葉にイラストリアスが同意するように頷いた

シンジ（戦いの次にまた戦いか・・・なぜこうなってしまうんだ）

シンジはなぜこんなことにならなければならないのだと心の中で呟く。数年前は多少行き違いはあれど人類と未来のために手を取り合い、背中を合わせてともに戦いあつたKANSENや人間など関係なく戦う者がすべてかけがえのない戦友だつたはずだつた。だが今度は双方の理念と方針がたがえて事で共通の敵をそつちのけで戦友だつた者同士に愛する者さえも敵同士となつていた・・・そのまま負の出来事から負の感情に襲われるも父と自分の思いだけは貫いて見せると自信を鼓舞する

ラフィー「指揮官・・・あれなに・・・？」

自身の護衛に集まつたラフィーが何かの異変に気付き指をさしてシンジに伝える。シンジは思考するのをいったんやめてラフィーが指さす方向を見るとそこは自身が量産型を爆破した場所で、炎と煙がある程度収まつたいた事である程度見渡しがよくなつ

たその場所には刺々しく生物的な球体上の何かが鎮座していた。そしてその球体はゆつくりと動き出して徐々に姿を変えていき全貌をあらわにする

アンギラス「ガアアアアアン・・・」

その球体上の何かだったアンギラスが煙と炎をかき消しながら出てくる。アンギラスは体を折りたたんで丸まることで球体上になることができ、これによって装甲がない腹や足を守るだけでなく移動や攻撃にも転用できる。今回はとつさに球体上になったことで爆発や熱から体を守りダメージをほぼ0にして生き残り、そしてアンギラスは熱はあまり得意ではなくナパーム並みの熱を収まるまで動けなかったがようやく音が引いたので動くことができたのだ。

シンジ（生きていたのか！・・・戦うにも今の戦力では！）

シンジはアンギラスがあゝの爆発で生きていることに驚愕するが、同時に消耗した戦力でどうするか狼狽する。しかしそんなシンジをよそにアンギラスはシンジや今ここにはいない加賀達KANSENを評価しており、ほとんどせいぜいが自身に傷はつけても脅威にならないければ強い力も持たず最後まで戦おうとしない弱者だと思っていたが、こうして最後まで戦う意思を見せて自身に傷をつけるだけでなくここまで食らいついてくるシンジたちを戦士として強者であると認めていた。そして周りを見渡して戦いは終わったとわかり、この場でのやるべきことはもうないと判断し海へと潜ろうとする

シンジ「?・・・引いていくのか?」

ウエールズ「なぜいきなり?」

突如自分たちに背を向けて海へと潜っていくアンギラスを見て不審に思いつつも、正

直戦うことがなくなればそれに越したことはないと安心する……しかし次の瞬間心臓に悪い事が起きた

サラトガ「おおい、アンギラスー！」

いつのまにかアンギラスのそばに近づいていたサラトガがアンギラスに向けて声をかけて、アンギラスがそれに応えるに振り向いたのだから！

ユニコーン「ぎ、サラトガちゃん……！」

クリーブランド「サラトガ何してるんだ！」

シンジ「・・・あいつの名前を知っているのか？」

多くの者がサラトガの行動に声を上げるがシンジだけは目の前の怪獣の名前を言う彼女を不審に思う。サラトガは年長者だが怪獣との関係は全くなく、モナークのように特殊な組織とのつながりもない彼女が怪獣の名前どころか存在すら知らないはずなのだ。それを知っているという事は何かがあるとシンジは踏むが、それをよそにサラトガは怪獣アンギラスに話しかける

サラトガ「久しぶり〜、どうしてここにいるの？・・・ふくんそうなんだ。でも念和で話してくればみんとと戦う事なんてなかったんじゃないの？・・・もうアンギラスつて相変わらずまじめだよね〜。・・・もう行くの？・・・わかった、またね〜！」

サラトガがアンギラスに対して独り言に見えるが何かしらの会話をしていると思われる光景にシンジとKANSEN達ははたから見たら痛い光景なので何とも言えない顔をしている。しばらくして会話が終わったのかサラトガは手を振りながら再び海へと潜っていくアンギラスを見えなくなるまで見送った。そして久しい級友に会えたようにうれしそうなサラトガにシンジはボートを動かして近づく

シンジ「サラトガ、ちょっといいかな？」

サラトガ「ん？どうしたのの指揮官・・・顔が怖いことになってるよ？」

シンジ「それは気のせいさ、とりあえずみんなの修復と母校の復興がある程度終わったら知ってること全部教えてもらおうが良いかな？」



サラトガ「は、はい・・・!?」

シンジはサラトガの了承に笑顔を浮かべる。しかしサラトガの言う通りシンジは笑顔だが、目が全く笑っていないかった。サラトガはあの時知らないふりやごまかそうとすれば後ろに見えた魔王に殺されていたから知れないと後に語ったという・・・

シンジ said out

## アンギラス side

サラトガと話していたアンギラスはあつという間に母校から数キロ離れた海の奥深くをある場所に向かいながら潜行していた

アンギラス（戦いに夢中であつたがまさかあそこにサラトガがいるとは・・・元氣そうで何よりだ）

アンギラスは久しく会えた友に喜びと懐かしさを感じる。しかしサラトガとは念和で喋っていることは知らない面々からは彼女が生暖かい目で見られていたことに全く気付いていないが・・・そうこうしているうちに目的の場所に到着すると、そこには自身が使える王がいた

アンギラス（参上いたしました我が王よ）

ゴジラ（来たかアンギラス、さっそくお前が見てきたことを教えてくれ）

アンギラスが母校から離れてから数分後、地上の回復と地球の意思から伝えられた新たな問題が浮上したことで時期を早めて地上に上がったゴジラから収集を受けて王の気配がするこの場所を目指していたのだ。アンギラスは平伏する体制ながらも頭を上げながら自信が見てきたことを伝える

アンギラス説明中・・・

自身で見たものや隠れて聞いた手たことで得た地上での状況と共通の敵をぎつくりと説明をし終わるとゴジラは明らかに怒っているとわかるほど怒気を放ちはじめ、怒気に当てられた周りの生物はアンギラス以外全速力でその場を離れた。アンギラスも怒気に当てられ、本能で恐怖してしまい一瞬体が震える

ゴジラ（同族同士で生きるために必要はない争いを何度も繰り返しては自然を平然と壊し、自身の都合があれば簡単に他の種族に生物を滅ぼす。さらには倒すべき共通の敵がいるのにも関わらず再び同族で争いはじめたか・馬鹿らしいにも程がある）

アンギラス（その上自分たちが至上の生き物だと思い込み、自分たちの豊かさや戦いのために資源や大地を独占し、文明を発展させ武器を作り出すたびに大地や海に空気を穢し続けています・・・なんと愚かな事か！）

ゴジラの言動に対して同意するように怒りを表す。実際に今でも人間の都合で絶滅寸前に追いやられては、卵が美味しいことから乱獲が続き絶滅させられた種が存在す

る。さらには人間に住処を追われ仕方なく生きるために餌を求めて人の縄張りに入ったら、追い込んでおいて危険という理由で殺されるという事もある

極めつけは自分たちの生活を追求するあまり、広大な大自然を枯れはてた砂漠にしては文明の発展により生まれた害となる物質をそのまま空や海に捨てることで穢し続けは他の生物たちの生態圏を脅かしている。自分たちの手で自分の首を絞めるとわかってはいてもなお、自分たちの欲と都合でこの星と命を少しずつむしばんでいる・・・なんと愚かで強欲で傲慢な事か

普段物静かで冷静なゴジラが怒るのも無理もない。ゴジラは前世が人間であるため、ある程度地球温暖化といった環境問題から人間の郷の深さを知ってはいたが自然を愛する今になっては人間たちの所業に呆れを通り越して怒りがこみあげてくる

アンギラス（してどうしますか王よ？早急に解決するならば人間たちを間引くことが

一番かと思いますが・・・)

アンギラスの言う通り人間をある程度撲滅して間引けば、人類は人不足に陥って生態圏は狭まり資源の使用量も少なくなり人がいなくなつた場所はおのずと自然はよみがえっていくだろう。そして文明も破壊すれば人類は衰退し新たな武器も作れなくなるかもしれない。しかしゴジラは待つたをかける

ゴジラ(その手もあるだろうが駄目だ。人間はいざ追い込まれると何をするかわからないからな、俺たちを殺すために星を殺すに至る武器を作ろうとしてもおかしくはない。何よりこの星で高い知能を持つ種族だ、根本的な考えを変えない限り何度でも同じことを繰り返すだろう・・・それに今回の戦争は何かがおかしい)

アンギラス(おかしい・・・ですか?)

ゴジラの言う通り人間は窮地に追い込まれれば何を考え付くかわからない危険性やたとえ文明を破壊して一時的に衰退したとしても、知識欲にも優れた彼らが怪獣を駆逐するため残された記録から文明を回復させて自然を破壊しながら怪獣を倒そうとして挑み、また文明を滅ぼされても怪獣を倒して自分たちが霊長の頂に立つまで繰り返す可能性もあり得る。故に根本的な考えから変わらない限り問題は変わらないが・・・ゴジラは今回の戦争に違和感を覚えていた

ゴジラ（お前の話から確かセイレーンといったか？その共通の敵を撃退したとはいえ、生き残るために十数年同盟を結んでいた関係が理念や方針がたがえた程度で数年で二分することになるか？さらに国同士の関係も戦争を起こすほど悪化もしていないにも関わらず唐突な宣戦布告・・・思い返せば勝利の鍵となったキューブの出現も追いつれられた戦況から発見され、そこから劇的な反撃を行い人類は救われた・・・いろいろと不自然すぎる点が多すぎる。まるで戦いへの流れがコントロールされて仕組まれているような・・・」

ゴジラは不自然な戦いの流れと仕組まれたようなできすぎた状況に疑問を大きくするとともにセイレーンに対して警戒し始める。ゴジラはしばらく考えるように小さくうなり続けると何か思いついたのかふとつぶやく

ゴジラ（アンギラス。引き続き地表の様子を偵察し、環境の回復と破壊をもたらす者の対処をしながら情報を集めてくれ。もし人間に攻撃されるようなことがあればなるべく守りに徹してくれ・・・新たな頼みの事も忘れるな？）

アンギラス《ハッ！王はどうするおつもりで？》

ゴジラ（よりこの星の人間を知り見定めどうするか、この戦いを起こすものを突き止めるために・・・戦いの当事者であり友人のオイゲンたちと話をしてくる・・・むろん新たな地球の意思からの頼みも果たしに行く）



ゴジラは人間と共存か敵対かを見定め、戦いを裏から操り自然を破壊するものを見つ  
けるためにオイゲンたちのもとへと向かうと同時に地球の意思からの新たな頼みを果  
たすべく深海を泳ぎだす。アンギラスもその背中を見送りながら自身のやるべきをす  
るために動き出す

全ては王とこの星の未来と平穏のために

アンギラス said out

芹沢 side

〈重桜本土のモナーク支部〉

戦争が始まって各国が騒がしくなっている中で重桜に人知れず存在するモナーク支部では多くの研究者や学者が謎を解き明かそうと頭を動かし続けている。かくいう芹沢博士にグレアム博士もシンジと離れてからの2週間・・・ムートーが発していた音響や積み上げてきたデータから手掛かりを探している。すると芹沢が繰り返して再生される音響が示された画面からある特徴を見つけた

芹沢「ここだ！・・・巻き戻してももう一度再生してくれ」

助手のグレアム博士が映像を巻き戻して再生し、特徴が現れる場所を停止する。その場面は振動のパターンが台形に見える時で注意深くグラフを見ると微小ながら小さくほかの台形同士が重なり合っていたのだ。つまりこのもう一つのパターンが会話をしている瞬間でムートーが話しかけている相手が発する声なのだ

グレアム「これがムートーの話し相手ですね」

芹沢「ああ、問題はその話相手が誰なのかだ」

ようやく痕跡らしいものを見つけたがまだ行方不明のムートーが放していた相手がわかつてはいない。すぐに話相手の特定を好みつけた痕跡から徐々につかんでいくため、過去の文献やら新しい機材をそろえようとするが部屋に研究者の人があわただし

く入ってきた

「芹沢博士！アズールレーンの拠点で怪獣が現れたと報告が!!」

芹沢 「なんだって!?!ムートーか!?!」

「それがムートーではなく、そこに居合わせたユニオン支部とロイヤル支部の者からの特徴では現れた怪獣は『アンギラス』だと!」

芹沢 「ムートーとは別の怪獣、しかもそれがアンギラス・・・!?!」

グレாம் 「アンギラス・・・『氷の暴竜』・・・!」

慌てる研究員からの報告を聞いて、ムートーが現れたと思いきや別の新たな怪獣が現れたことに驚愕する。しかもそれが伝承からその生態から氷の暴竜と呼ばれ、怪獣王の臣下であると伝えられた存在であるアンギラスが相手なら尚更だ。下手をすればムートー以上の脅威となる存在が現れ、もしそれが自分たちに牙をむくことになると考えると身震いしないわけがなく芹沢もグレアムも足が少しだけ震えていた。すると今度はこの施設を警護する兵士がやってくる

「芹沢博士、おそらく怪獣に関係する知らせが本部に届いたため伝えに來ました。追記先ほど鉄血の原子力潜水艦が消息を絶ちました……しかも最後に大きな獣の声と『鳥』というメッセージを残していました」

芹沢「鳥……間違いなくムートーだな、とうとう餌を求めて動き出したのか」

芹沢は兵士から大きな方向と鳥というワードを聞いて原子力潜水艦を襲った者がムートーだと確信づける。原子力潜水艦を狙ったのは潜水艦の中で生み出される放射線が目当てだったのだろう……。このままではムートーが放射能を求めて原子力発電所を襲い爆発が起これば被害は尋常ではない者になってしまふ。アンギラスも現れたことでこそこそと世界に隠しながらことを進める場合ではなくなっていた

芹沢「至急大黒提督と重桜上層部に連絡を取ってくれ、ユニオン支部にはアズールレーンの新設施設に『エマ・ラッセル博士』を派遣するよう要請も頼む。私たちは説明のために資料をまとめよう」

グレアム「博士……。ついに来たんですね？」

伝えられた弩級の知らせを聞いてしばらく唸った芹沢は覚悟を決めたようにアズー

ルレーンとレッドアクシズなど関係なく各方面に連絡を取れるように、同時にモナークが収集していた情報を一つのレポートとしてまとめ始める。その行動を見てグレアムはまるで最後の確認を取るかのように問いかけた

芹沢「ああ、もうごまかし続けて日陰にいる時は過ぎ去った。もう時代は動き出したんだ、これからの未来がどうなるかはすべての人間と命に掛かっている・・・私たちが動かないかけにはいかない！」

多くの人間とKANSEN達が怪獣という存在を知りこの星の支配者である怪獣たちが目覚めだした・・・もはや隠していくという事はできず、ついにモナークが表舞台に出る時が来たという事だ。そして芹沢は自身のやるべきことをなすため行動を始めていく・・・すべては人類と怪獣とこの星の未来のために・・・

徐々に時代と戦いが変わり始める

これから多くの人間とKANSENが怪獣の存在を知る事になるだろう

そして選ぶ先の未来に何があるのか

それはまだ地球も神もわからない



## 7 話 襲撃の後の襲撃・黒き翼と王（前編）

（アズールレーン母港）

シンジ side

重桜の強襲による戦闘が終わり母校は静けさに包まれているも硝煙と燃える炎が所々で揺らめき、戦闘に参加したKAN—SEN達が施設や艦の修復作業に当たっていた

シンジ（赤城、君はいつたい何を隠してるんだ・・・）

シンジは戦場後の光景を見ながら赤城の真意を何かと考える。シンジは自身の妻である赤城の事をよく知っているゆえに重桜のためならどんなことでもするとわかってはいるが、自身をただレッドアクシズに引き込むだけのつもりならそんなことを隠し事にしない。もっと大きな・・・途方もない何かを知っている感じだった

ウエールズ「ここにいたか指揮官。お疲れ様でした」

赤城が隠し持つ何かを模索していると、そこに艦装を解除したウエールズとイラストリアスにクリーブランドがやってくる。シンジはひとまず赤城の思惑を隅において彼女らに意識を向ける

シンジ「ウエールズもな。俺が遅刻したばかりに負担をかけてしまったな」

ウエールズ「気にしなくて良い。と言いたい所だけど、あなたのだれにも手を差し伸べる姿勢が良いが時間と場合を少し考えてほしいものだな」

シンジ「善処するが性分だから期待はあまりしないでくれ。イラストリアスも着任早々によくやってくれた」

イラストリアス「それは指揮官様も同じです。気にしないでください」

シンジ「ありがとう二人とも、さてと……」

シンジの戦い前の行動に謝罪し、ウエールズは彼の行動自体は美徳だと思いながらも少しやれやれと肩をすくめ、イラストリアスがやわらかい笑みを浮かべて気にしないように言う。そしてこうして顔を合わせるのはセイレーン大戦以来で久しぶりなクリーブランドにも声をかける

シンジ「久しぶりだなクリーブランド、また会えてうれしいよ。姉妹たちは元気か？」

クリーブランド「私もうれしいよ指揮官！うん、海上の騎士団<sup>姉妹</sup>たちも元気だよ」

シンジとクリーブランドは互いに再開した喜びを分かち合いながら握手を交わす。ちなみに彼女は姉妹で海上の騎士団という『ユニオン』の精鋭チームでリーダーを務めているのが彼女である。約一名その中にややブラコンの妹がいる……

クリーブランド「それじゃあ私ちよつとほかのみんなの様子が気になるからもう行く

から」

シンジ「ああ、みんなにもよくやったと伝えてくれ」

クリーブランドは姉妹と仲間たちの様子を見るためにその場を去り、シンジがそれに手を振って見送る

ウエールズ「……それにしてもやられたな」

ウエールズが洋風でアンティークな双眼鏡を覗き込んで、燃え盛る戦場後の会場で救助されているKANSEN達と有人部隊を眺めながら呟いた。余談だが救助の仕方が釣り針を海に浮いているKANSENの服に引っ掛けて吊り上げるといふ変わった手法が行われていた

ウエールズ『重桜』に先手を打たれたな……」

イラストリアス『重桜』が『鉄血』と手を組む事は予想していました。でも……」

ウエールズは重桜に先手を取られたことにふがいなさを感じ、イラストリアスがある場所をやや鋭い目で見据える。その場所は小島に建てられた寺院……正確には寺院に突き刺さるように停止していた『セイレーン』の鑑載機だったが、海に漂流していた『セイレーン』の量産型と同様に時間が経つと次第に妖しい光の粒子となって消える

ウエールズ「『セイレーン』の力……それがどれほど危険な物か、重桜あちらは分かっているのか」

イラストリアス「そしてあの強大な巨獣……『アンギラス』とサラ先生は言っていました、あのような存在がいたなんて今日一番の驚きですわね」

シンジ「……今はこれからの対応が先だ。ウエールズ、イラストリアス、頼まれてくれるか」

ウエールズ「はっ」

イラストリアス「はい」

セイレーンの力とそれ力を利用する重桜、そして怪獣であるアンギラスの存在に危機感を覚えるウエールズとイラストリアス。シンジは重桜の思惑やセイレーンは今は置いて今後の動きを伝えるために声をかけて二人は答える

シンジ「母港と設備の復興と復旧を急ぐぞ。あのハリネズミはともかく重桜の第二陣が来るかもしれない。ウエールズは動けるKANSEN達と有人部隊をを招集して防衛を固めてくれ」

ウエールズ「了解した」

シンジ「イラストリアスは動けないKANSEN達と隊員達を無事な子たちと一緒に医務室やドックに運んでほしいんだ。できれば探す途中で怪我をしてない、もしくは軽傷なKANSEN達と足の速い艦を集めてくれ」

イラストリアス「けがの少ない子たちと足の速い艦ですか？」

シンジ「ああ、『重桜』は攻勢時程勢いが強い。指揮を執っているのが赤城なら中途半端な事はしない、まだ『重桜』の攻撃は終わってない」

イラストリアス「ウエールズ「ッ！」」

シンジの言葉に二人は息を飲む。シンジは故郷である国の性格やKANSEN達の強みをよく知っているからこそ考えだ。実際にセイレーン大戦や第2次世界大戦中の重桜もとい日本は攻勢時程勢いも力も強かった。ゆえに徹頭徹尾に事をこなしてくるとシンジはわかっているからこそなすことを成せねばならない

イラストリアス「・・・そういえば指揮官様は重桜のKANSENと話していたみたいですがお知り合いですか？」

シンジ「・・・ああ、彼女は・・・赤城は俺のケツコン艦、つまり妻なんだ」

イラストリアス「まあ・・・！」

ウエールズ「なんだと・・・！」

シンジが赤城と知り合いであったことからイラストリアスが質問をする。指揮官としてのシンジとは付き合いが長いが、大戦終盤別の指揮かに入った二人にはシンジと赤城が結婚していたことを知らなかったため二人にとってシンジが既婚者であり、まさか



それが重桜のKANSENが妻であることは驚愕する者だった。本来ならば晴れやかに祝福したいところだが、いまやその相手が敵という立場であるためかなり複雑な心境になってしまう。いやもつと複雑な心境なのはシンジだ、何せ愛する人と戦わねばならないことになってしまっているのだから……。そんな少し空気が重い場に戦場でかちやくしたユニコーンが駆け足でやってくる

ユニコーン「お兄ちゃん……！ イラストリアス姉ちゃん……！」

ユニコーンは自身の姉と兄として慕うシンジが無事だったのか笑顔で駆け寄ってくるのを見て、優しい彼女なら気をかけてしまうと判断して三人は気持ちを切り替える

シンジ「ユニコーンお疲れ様。 先の戦いではよく頑張ったな、けがは大丈夫かな？」

シンジは笑顔でユニコーンの頭を優しく撫でるとユニコーンはほんのりと頬を赤くして、嬉しそうに笑みを浮かべる。腕に抱かれていたゆーちゃんも撫でられたいのか頭を下げていたため、そちらも撫でると嬉しかったのか前脚を交互に上下させた

ユニコーン「けがは大丈夫だよ・・・ユニコーン頑張ったよ、兄ちゃん！ジャベリンちゃんもラファイちゃんも、頑張ったんだよ・・・」

シンジ「そうか。それじゃあジャベリンとラファイにもお礼を言いに行かないかね」

ユニコーン「うん・・・！」

ユニコーンはジャベリン達と共に頑張ったことを笑顔で伝え、シンジはユニコーンと並んで歩いてジャベリンとラファイの元へ向かい彼女らにもよく頑張ったと言いつつ向かう。ウエルズとイラストリアスも二人の後に続きながら、シンジに頼まれた通りKANSEN達と隊員、並びにドックや医務室に連絡を取り始める

シンジ side out

ジャベリン side

ジャベリンとラファイーは戦いが終わった後、母校に戻る際にサラトガと合流して港へと到着して艦装を解除する。たちまち艦装はそれぞれの艦船の形へと戻る

ジャベリン「はあ、全員無事みたいでよかったね」

サラトガ「そうだね、早くお風呂に入って汗と塩を流さないとね。ラファイーちゃんもこの後お風呂に入りに行かない？」

ジャベリンとサラトガはラファイーに向けて声をかけて振り向くと、そこにはラファイー

がずぶ濡れの身体で大の字で横になって死体のように動かなかった

ラフィー（チーーーーーン・・・）

ジャベリン「ラフィーちゃん大丈夫!？」

ラフィー「駄目かも・・・眠い・・・グウ・・・zzz」

サラトガ「ここで寝てたら風邪ひいちやうから起きないとラフィーちゃん？ 早くしないとこれをラフィーちゃんの顔に置いちやうよく!」

ジャベリンはラフィーは何事からと声をかける。だがラフィーはただ眠かっただけの様で、ずぶ濡れな状態でも今に瞼を閉じて寝ようとしている。サラトガがこのまま寝たら風邪をひいてしまうので起こそうとするが、なかなか起きないのですぐ近くにいたカニを拾ってイタズラで起こそうとする

ジャベリン「それは危ないよサラトガちゃん！ 寝ないでおきてラフィーちゃん、よ

いしよっ！」

うつ伏せに倒れるラフィーにカニを乗せようとするサラトガを止めて、ジャベリンはラフィーを仰向けにして身体を起こさせ肩を貸して歩き出す。するとちようど良くシンジ達が港へとやってきて合流を果たす

ユニコーン「ジャベリンちゃん！、ラフィーちゃん！、サラトガさ．．．ちゃん！」

ジャベリン「あつ、ユニコーンちゃん！ 大丈夫？ けがは無い？」

ユニコーン「うん、大丈夫！」

サラトガ「指揮官もイラストリアスたちもけがが無さそうだね．．．よかったあ．．．」

シンジ「ああ、この通り五体満足だ。 ジャベリン、ラフィー、サラトガ、良くやつてくれた」

ジャベリン「ありがとうございます!・・・あっ・・・」

ユニコーンは無事だったジャベリンたちに駆け寄り、ジャベリン達も無事だったユニコーンに笑顔を浮かべる。サラトガもシンジたちにはががが無い事に安心するが彼の背中に見えた魔王のせいでタジタジだ。するとシンジの言葉にジャベリンは先ほど相對していたKANSEN、綾波とZ23の事を思い浮かべた

ジャベリン「・・・あの、指揮官!」

『ガシッ』

『プルルルン!』

指揮官に声を発そうとしたジャベリンだが寝ぼけたラファイが肩からずり落ち、その際ジャベリンの服の肩紐を掴みそのまま倒れると同時にジャベリンの服がずり落ち、少女のとしては以外と発育した胸が揺れながら露になつてしまった・・・しかもシンジ

たちの目の前でだ

ジャベリン「えっ？・・・ひゃあああああ!!」

ユニコーン「わあ・・・!!／／／／」

シンジ「・・・!」

サラトガ「・・・何でみんなよく育ってるのよ」

突然の事に反応は遅れるが次第に自身の状態を把握、羞恥から赤くなつたジャベリンが両手を交差して胸を隠してその場にしゃがみこみ。ユニコーンはジャベリンの露になつた姿を見て顔を赤くし、シンジは露になつた瞬間に目をつむり後ろを向く。そもそもシンジは既婚者であり相手が赤城なので、夫婦として風呂を一緒にに入つては夜の営みをしている女の裸を見慣れているのでほぼ動じない。サラトガは年相応とは思えない程に育っているジャベリンとイラストリアスとウェールズの胸を見て、自身の胸を比べて光の無い瞳で小さくつぶやいた

ジャベリン「ううっ！・・・ちよつと！ ラフィーちゃん!!」

ラフィー「眠い・・・お腹すいた、だるい・・・」

ジャベリンが倒れたラフィーを怒鳴るが、ラフィーは眠っているのか、寝言を言いながら身体を仰向けにする。するとラフィーの服もずり落ち片方の胸が露になり、胸の頂にはサラトガが捕まえていたカニが居座っていた

ジャベリン「わわわわ!!」

自身と同じく思ったよりも成長している胸がさらされ、ジャベリンは慌ててカニをつかみ取ってどかしラフィーの服を直した

イラストリアス「疲れたでしょう？ もう休むと良いわ。 指揮官様、参りましょう」

シンジ「ああ、わかってる。 サラトガはとりあえず復興に目途がついたら話を聞か



けてくれるか？」

サラトガ「うん、わかったよ指揮官。 はやくベトベトした塩を流したいしね」

イラストリアスはジャベリン達に休息を奨め、シンジはサラトガからアンギラスの話をする機会を作り港から離れる事にする

ジャベリン「あの・・・指揮官に伝えたいことがあって」

シンジ「ジャベリン。 俺もあの戦場で全てを見ていたからあの時二人が綾波とニミに会って話をしていたことは知ってる。 だから言いたいことはわかるが今は休むんだ」

ウエールズ「休憩も任務の内だぞ」

ジャベリンは戦場での綾波たちとの話をしようとするが、シンジは量産型から彼女らを見ていたのでジャベリンの性格を含めると言いたいことはある程度分かるが、シンジ

は彼女たちの疲労の事を考えてウエールズとともに回復を進めるように言って、四人はその場を立ち去った

ジャベリン「……………」

ラフィー「……………飲まないとやってられない」

少し落ち込むジャベリンの横でラフィーが『酸素コーラ』をイツキ飲みする

サラトガ「ほくら二人とも、今は汗を流して気分をリフレッシュしないとね？ お風呂

呂場にレッツゴ〜！」

そんな二人を引っ張るようにサラトガは二人を連れて風呂場へと向かっていった

ジャベリン said out

加賀 s i d e

シンジたちが母校の復興を進めている頃、アズールレーン母港から離脱している重桜は有人部隊の手当てや治療を行っており、赤城も傘を広げた縁台で団子と救急箱を置いて加賀の手当てをしていた

赤城「ほら、じつとしてなさい」

加賀「ね、姉様・・・顔が近いです・・・」

治療とはいえ赤城はお互いの息がかかりそうな程に顔が近づけ、加賀は思わず顔を背けるが赤城はそれを許さなかった。一応言っておくがこれが彼女らの姉妹としての接し方で、決してレズビアンの気はないはず……

赤城「ほら、顔にも怪我してる」

加賀「姉様、この程度のけがでどうという事は……」

加賀はもう大丈夫と言うが赤城は止めない。赤城は姉としてアンギラスと戦い、致命傷一歩手前の重傷を負ってしまい十数分前まで眠っていた加賀を妹として心配していた。KANSENなので常人よりも回復が早く修復材も使用したことで骨折や目立つ外傷は治っているが全ての傷をいやすことはできず、赤城によってかすり傷でも見逃さずように過保護な検診を続いていた

赤城「ダメよ。こんな綺麗な顔に傷が残ったら嫁入りするのも大変でしょう？それに傷が残ったらシンジも私も悲しいわ」

赤城は加賀の嫁入りなどを思いながら、治療の最後の仕上げなのか加賀の顔にある傷を消毒するかのように加賀の頬を舐めた。もう一度言うがこれが彼女ら姉妹の接し方であつてレズビアンではない……筈だ……おそらく……

加賀「うつ、それはそうですが……しかし、姉様はシンジにもこんなことを？」

赤城「ウッフ、当然よ。シンジがけがした時は念入りに隅々と私が直々に治療したわね。もちろん消毒もしつかりととね、その時の顔はとても高ぶるわあ……！」

加賀（シンジ……お前も苦労しているな）

赤城は加賀の質問でシンジの治療時の事を思いだして次第に恍惚とした表情でその時のことを語り。加賀は自分よりも激しい目にあつて知っていることを知り、今ここにいないシンジに同情する。そして思い出の映像が終わったのか赤城の表情は恍惚とした表情から普通に戻るとシンジの事について語りだす

赤城「ああシンジ・・・軍人としての身分と使命がある事を良いことにアズールレーンに拐かされて、今やアズールレーンのオジヤマムシ達に利用されているのよ。でなければシンジが私たちと敵対するなんてありえないわ・・・！だからシンジを取り戻すためにも身体は大事にしなくちゃダメよ加賀？」

加賀「はい。指揮官を取り戻すためにも私も全力を尽くします・・・お義父様のためにも」

赤城「ウフフフ！ええそうよ加賀、シンジは必ず取り戻すわ。でも加賀も無茶だけは禁物よ、シンジを取り戻してもあなたに何かあれば私は悲しいわ・・・」

赤城は狂気を纏った笑みを浮かべながらの言葉に加賀はジョーのためにも全力を尽くすと応え、赤城は加賀の応えに笑みを浮かべるも加賀の身を案じる。シンジが戻ってきてても加賀もいなければ意味がないのだ、加賀はそんな加賀の言葉に小さく笑みを浮かべる

??? 「へえ、あの基地に夫がいたのね。しかしそれがアズールレーンの指揮官なんてね」

突如上から聞こえてきた轟惑的な声に加賀はすぐに縁台から立ち上がり、構えを取りながら上を見上げる。そこにはアンテナマストに座りながら生物的な艦装『生体兵器』を装着した銀髪で『鉄血』のKANSEN『プリンツ・オイゲン』だった。そしてオイゲンは艦装をつかってアンテナマストからゆっくりと降りてくる

オイゲン「あら、お邪魔だったかしら？」

プリンツ・オイゲンは轟惑的な笑みを浮かべて声で話しかける

加賀「貴様……！」

オイゲン「そんな怖い顔しないでよ、仲間じゃない。貴女達『重桜』と私達『鉄血』は？」

加賀はオイゲンを静かに睨むと、オイゲンは仲間なのだからと鎮めてくる。しかし彼女が言った仲間と言う単語には少しだけ薄っぺらさを感じていた。加賀は感だが『重桜』がKANSENや民を仲間とするように、『鉄血』もそれに通ずるものがあるとは思うが『陣営』と『陣営』での仲間ではかなり意味が違っているとわかる。そしてオイゲンのつかみ処がなく、どこか作り笑いをする彼女に苦手意識も持っていた……加賀は知らないがオイゲンもある王の出会いのおかげで変わってきているがそれを知る由は今はない

加賀（やはり苦手だ、こいつは……）

加賀は内心でオイゲンに対して心境を洩くする。すると赤城がそんな加賀を察して



か、甲板に降り立ったオイゲンに向けて『黒いメンタルキューブ』を取り出して話し出す

赤城「もちろんですわ。 私たちは同じ理想を掲げる同志、全ては『レッドアクシズ』の勝利のために」

赤城は淡々とした言い方にオイゲンも想定済みといった感覚で返す

オイゲン「ふーん。 それにしても大したものね。 量産型とはいえ、セイレーンの船を意のままに操る〴〵なんて。 これも例の計画の成果かしら？」

赤城「全ては神の思し召しですわ」

オイゲン「でも随分と災難だったわね。 まさか基地の襲撃に行ったらあんなモノに出会うなんて、でも混乱に乗じて一気に基地を潰せそうでもあったけど」

オイゲンは縁台に置かれた団子を一本取ると舐めるように食べていく。 その光景は

妖艶しさを感じるが、加賀は行儀の悪いと悪態をついた

オイゲン「あの怪物に妹が傷ついて怖くなっちゃった？」

加賀「くっ……！」

加賀への侮辱なのか、オイゲンが加賀を一瞥してそう言い、加賀は激しい怒りかられる。自身への侮辱ならばともかく自身を思つて撤退した赤城を臆病だと侮辱したことで、そしてなぜか自身と戦つた巨獣……アンギラスをただの怪物呼ばわりしたことにも腹が立った。オイゲンを殴り飛ばそうと近づくと近づくが赤城がそれを制止する。オイゲンはそんなことを構うことなく話を続ける

オイゲン「それにしても、引き裂けられた夫がいたのにつれ返さずに帰るだなんてね」

赤城「フフ、【急いては事を仕損じる】と言う言葉があります。それに慌てずとも必ず迎えに行きますわ。だってあの人の本当の居場所は『アズールレーン』などではなく、私たち『重桜』なのだから……！」

赤城の目には獲物を定めてもう離さないと訴えるように輝いて笑っていた。そして赤城は激しく損傷した加賀の船を一瞥しながら加賀を傷つけた存在二つを思い出す

赤城「それに二つほど気になる事が起きましたので、『あの船』と『巨大な獣』。この事はすぐに本国に報告しなければなりません」

オイゲン『『ユニオン』のエンタープライズ、別名『グレイゴースト』。突然現れ、強大な力を持つ『巨大な獣』。．．．確かに厄介よね、本当に』

赤城が危惧する存在である『エンタープライズ』、『アンギラス』、この二つは必ず脅威となると判断し本国への報告を急ぎ、オイゲンも赤城に同意すると艦装と一緒に食べ終えた団子の串を揺らして弄びながらどこか獣に対して懐かしそうに呟く。すると赤色の紙飛行機が赤城に近づき、赤城はその紙飛行機を手に取ると紙飛行機から無線のように声が響いた

??? 《先輩見つけました。別動隊です》

加賀「綾波と『鉄血』のZ23の報告通りだな」

赤城「じゃあ、もうちよつとだけ『嫌がらせ』をしましょうか。やれるわよね五航戦？ 未熟な貴女達でも、このくらいの『お使い』ならね？」

???  
《・・・了解》

潜入していた綾波とZ23の報告から母校にはおらず警戒任務にあたっていた別動隊がいることを突き止め、五航戦と呼ばれる相手がそれを発見したのだ。赤城はいじめっ子ばく指示を伝えると紙飛行機は返事してその場で燃え尽きる

通信が切れたことを確認すると赤城はオイゲンに一礼する

赤城「さて、武名高き『鉄血』のプリンツ・オイゲン様にお頼み申し上げます」

加賀「五航戦が『食い残し』を見つけた。見逃す手はない」

赤城「恥ずかしながら私、後輩達が心配で……『鉄血』の皆様にご協力してもらえたら、こんなに心強い事はありませんわ」

オイゲン「ふーん……」

赤城は丁寧におだてるように言うが、遠回しに見てるだけでなく『鉄血』も仲間の援護くらいは働けと言っている。オイゲンは悩むそぶりをしながら串を皿において縁台から立ち上がる

オイゲン「良いわ。うちのニーミとあの綾波って子連れていくわよ？」

赤城「ええ。お手並み拝見させていただきますわ」

オイゲンはそのまま悠然と歩を進めていく。この話し合いだけでも『重桜』と『鉄血』は『アズールレーン』のようにKANSEN同士の関係は円滑に回っておらず、ただ一応の同盟を組んだ二つの陣営の間には信頼はなく、打算による同盟と言うのわかりきつ

てしまうほどに明らかだった

加賀「・・・ふう」

加賀はオイゲンがようやくいなくなったことに清々し、ぼんやりとアズールレーンの母校の方角を見ながらあの時戦ったアンギラスの事を思い出す

加賀（今思えば私が奴に与えた傷などかすり傷程度、あのまま姉様の制止が振り切つ

ていれば圧倒され地に伏していたのは私だろうな。慢心などしてはいなかったが、そこまでの差があるとはまだまだ私も精進しなければ……まさか初めて私を叩きのめした者が人ならざるものだとはな。それにしても……（そ）

加賀はアンギラスの強さを再認識すると同時にさらに強くならねばと化身を固めると同時に、いつか赤城から媚を迎えるならばそのものが自分を圧倒できなければという話を思い出し、現れたはいいがそれが巨獣だったとは思わず苦笑してしまう。そして何より心に残ったのがアンギラスが自身に向けてくる目だった

加賀（あの真つすぐに定めた目……私だけを見るような目を向けてくれたのは姉さま、シンジ、お義父様くらいだったが、まさそんな目を向ける者がまた現れるとはな。……だが何だこの感じは？）

多く者は加賀を『一航戦の加賀』、『赤城の妹の加賀』、『戦鬪狂の加賀』といった肩書からの彼女として見ており、『ただの加賀』として見る者は少なかった。加賀自身どういう風に見られても気にはしないが、やはり自分自身を見たいうえで知ってくれる方が心地が良かった。そんな目で見てくれるのはシンジや赤城にジョー等の親しいものくらい

だったので、またそんな目で見てくれるものが現れるとは意外だった。もちろんうれしくないと言えば嘘になるが胸の奥でうれしさとは違う何かを感じると同時にいささか鼓動が早くなっていた

加賀（この妙に胸辺りが暖かくなる感じは何だ？ それになぜ奴の事を考えると鼓動が早くなる・・・再戦が楽しみにしているせいかな？）

加賀はシンジや赤城たちと居られたり、『ただの加賀』として見てくれたり、戦いと戦いで強者と戦える事にうれしさを感じるが今胸の中にある暖かさはただの嬉しさとは何か違って暖かくさであり、アンギラスとの再戦することがあればの楽しみからくる高揚感とも違った

加賀（だが・・・悪くない気分だ）

よくわからなくもこの感じを加賀は悪く思う事はなく心地よく感じ始める。その後もこの暖かさと高鳴りについて考えたが結局答えは出ずに今は体を休めようと縁台に座って少しばかり眠るのだった



加賀がの心に芽生えた新たな感情・・・その正体が何か知るのはまだ先の話だ

加賀 side out

綾波&ニーム side

その頃自身の艦で綾波は海を眺めていると、基地とともに潜入したZ23がやってくる

Z 2 3 「綾波」

綾波 「ニーミ……」

Z 2 3 「出撃命令です。 私達について来て下さい」

綾波 「また戦闘です……？」

ニーミからの潜入任務から続くように命じられた綾波は、無表情だがどこか迷いが見える表情になる。心なしかニーミの瞳から迷いが少しだけ見える

Z 2 3 「……はい。 襲撃時基地を離れていた敵艦隊を帰還する前に仕掛けます」

綾波 「敵……」

ニーミは任務の内容は先ほどの基地にはおらず、遠海で警備をしていた艦隊の襲撃

だった。説明を聞くと綾波の脳裏には基地で出会ったジャベリン達の事、そしてシンジ指揮官の顔がよぎる。ニーミも一瞬言い淀んだため彼女も脳裏にシンジ指揮官、もしかしたらジャベリン達の事もよぎったのかもしれない

綾波「・・・戦闘は嫌じゃないけど好きじゃないです・・・」

Z23「任務なんですから我が儘言わないでください」

綾波「ニーミは戦うの好きですか？」

Z23「・・・好きも嫌いもありません。私達はKANSEN、戦い任務を遂行する為に私達は生まれたのですから、言わば義務・・・大戦の初期頃はそう思っていました」

綾波「思っていた・・・ですか？」

ニーミのKANSENである自分の在り方が過去だったことを語ると、綾波がそこが

気になり質問を返す。するとニーミは懐かしそうに話しだす

Z23 「大戦時にシンジ指揮官の指揮下にいた頃に、戦う事こそが私たちの存在意義であり義務だと答えた時に『せっかく心を持って生まれたんだ。そんなくだらなく悲しい生き方なんてやめて、もつと自分に正直に自由に生きた方が良い』と言われまして。当初は建造されたばかりだったため言葉の意味が良くわかりませんでした。シンジ指揮官と鉄血のみんなと過ごすうちに楽しいと思うようになって・・・今はその言葉がわかります。ですが今この戦いでは何が正しいのか、自分が何をしたいのかが良くわかりません。・・・話がすり替わってしまいました。少なくとも私は戦いは好きではないと思います」

ニーミの自身の昔から始まったシンジに出会った事での自身の変化と言葉の意味を理解したことを語った。昔の彼女はある意味エンタープライズと近い者だったが、建造された初期から仲間や尊敬できる人物に出会えたことで仲間とともに居られることの大切さや楽しさなどを学び、元々真面目な性格でもあったため仲間を守るため研鑽し続ける強さを得ることもできた。しかし今は自身の陣営がそうするべきだと判断し、大戦時仲間であったはずのアズールレーンの同胞を敵と思いつつも迷っていることも

吐露する。ニーミの意外な心境に綾波はわずかに目を見開くと、綾波も続くように答える。

綾波「……綾波もニーミと似ていて昔はそう思っていたです。でも、『そんな生き方はだめだ。君たちには心がある、戦うことがすべてだなんて悲しいじゃないか。心が思うままに生きるのが一番いい生き方だと私は思うよ』って、教えてもらったです」

Z23「そうなんですか、シンジ指揮官と似た言葉ですがどんな人だったんですか？」

綾波もニーミと同じくとある人間から同じような意味を持つ言葉をかけられたことで、戦うことがKANSENの務めだと思っていた考えを良い意味で変えてくれた。ニーミがシンジと似たような言葉だなと思い、どんな人物か聞く

綾波「……………」

Z23「綾波……？」

ニーミは突然喋らなくなった綾波を不思議に思い、綾波の顔を覗き込む。その表情は数年前の思い出を思い出すかのように懐かしさを思う様であり、悲しみに耐えるようでもある複雑で、片方の目から一筋の涙を流している悲しい顔をしていた。そして綾波は戸惑っているニーミに気が付き、小さな声でその人物の名を応える

綾波「……シンジ指揮官のお父さん、ジョーお義父さんにです」

重桜でKANSENの自分たちに父親となってくれた恩人であり、今やもう会えず帰らない人になってしまった大事な人の名を……

綾波 & ニーミ side out

シンジ side

く 現時刻・アズールレーン母港く

その頃シンジは本日分の書類仕事を終えると、こちらに向かっている『ロイヤルの女王陛下』にこちらの状況と念のために今期間途中の艦隊との合流を頼み事と通信を入れ終わる。色々と一段落した事を確認すると、ちようどお昼時の時間帯だったので復興の様子を見ながら良さげな料理が無いか探し待っていると、ちようどお昼のご飯であるサ

ンドイツチを作り終わつたジャベリンと出会い、ジャベリンと一緒にいたいまだ眠そう  
なラフィーと共に平原にシートを引いて食べることにした。ちなみにこの時ジャベリ  
ン達と行動していたサラトガは個室のバスタブに塩を落とすため湯船に長時間漬かつ  
た結果のぼせてダウンしている。そしてサラトガのアンギラスに対しての聴取はロイ  
ヤルの女王を交えて行うことになった

シンジ「うん：：バランスよく具材が挟まれていて味付けもしつかりしているな。  
料理がうまいと相手との出会いも良くなるだろうし、いい嫁さんにもなれるぞ」

ジャベリン「良いお嫁さんなんて、私なんかまだまだですよ．．．えへへ」

シンジ「いや自身を持って良いぞ。俺の母さんも父さんとの出会いから結婚まで進  
めてくれたのはおいしい料理って言ってたからな」

ラフィー「モグモグ．．．」

シンジはジャベリンの年相応には思えない程完成させたサンドイツチに舌を巻く。



やはりロイヤルの子たちは皆料理の才能を持つて生まれてくるのだろうか・・・ジャベリンは良い伴侶になると推されたことで頬を赤く染め、ラファイーはよほど気になったのかウサギのように少しずつ食べながら無心に味わっていた。楽しく昼食を楽しんでいるとふとジャベリンがあることを思い出したのかふとつぶやく

ジャベリン「あの子達、元気かなあ・・・」

ラファイー「ん？・・・綾波とニーミって言った・・・モグモグ・・・指揮官二人と知り合い？」

シンジ「ああ、綾波は故郷のKANSENで付き合いもそれなりに長いし、ニーミは大戦のときに一時的な補佐として支えてくれたことがあったからな。ジャベリンは重桜と鉄血の二人が気になるのかな？」

ジャベリン達はこの近くの丘の上で友達になろうとした二人の事を想う。ラファイーは二人を知っていたシンジにどんな関係だったのか聞くと、シンジはと付き合いの長い二人と答えると同時に綾波は重桜でよく父に相談しては共に綾波の友人たちと遊びに

付き合っていたことや、ニーミとはよく仕事上や戦闘でも頼れる真面目な子であり少し硬いところが存在していたが鉄血のみんなと過ごすうちに硬さがとれて自分がしたいを明確に表せては共に読書をしていたことを思い出す

ジャベリン「はい、指揮官……綾波ちゃん達とはやっぱり戦わないといけないんですか？」

ジャベリンは二人が敵になってしまったことを理解しても、なぜか二人とは争って傷つけあうことがとてもイヤに感じていた。だからこそまた二人と戦うことになるかと正直な彼女はシンジに聞けずにはいられなかった

シンジ「俺も彼女たちと戦いたくはないと思っではいるが、指揮官であり多くの命を背負っている立場な以上……軽率で個人的な理由や心情から答えるわけにはいかない。ジャベリンは自分自身どうしたい？」

ジャベリン「私は……」

シンジとて二人と戦いたくない気持ちはジャベリンと一緒だ。しかし指揮官として、兵士として今守るべきものを背負っている立場として個人的な物を持ち出すこととはできない。シンジはジャベリン自身は何を望んでいるのかを聞き、ジャベリンは口ごもるも声を発しようとして口を開こうとする

『バサツ！』

その瞬間、何かの影が彼らの頭上に現れると同時に、鳥が羽叩きする音が聞こえて上を見上げると一匹の鷹がすぐ隣にある大きな木の枝に止まっていた

シンジ「あの鷹は……」

どこからともなく飛んできた鷹にシンジは見覚えを覚えていた。すると鷹は枝から飛び去るとこちらに向かつて歩いてくる人物……先ほどの戦闘で加賀に傷を負わせるという活躍をしたエンタープライズの肩に止まった

ラファイ「あつ……エンタープライズだ……」

エンタープライズ「君はラファイだったか……そして貴方が指揮官か？」

シンジ「こうして挨拶を交わすのは初めてだなエンタープライズ、この母校の指揮官に任命されたシンジ・プロディ少佐だ。せつかくだ、一緒に昼食でもどうだ？」

エンタープライズは話しかけられたラフィーに反応しつつ、シンジに視線を向ける。大戦時はその活躍や武勇にその裏であったある悲劇を聴くことはあれど運や指揮系統の変更が日常茶飯事であったため、直接会ったことが無かったシンジは改めて彼女とあいさつを交わすと同時に昼食の誘いを出し、彼女は無言だが首を縦に振って肯定して誘いを受けた

数分後エンタープライズも加わりにぎやかな昼食になると思いきや、先ほどまでの明るい空気が霧散して代わりに静かでどこか喋りずらい重たい空気が蔓延していた。ちなみにエンタープライズの鷹……『イーグルちゃん』はエンタープライズからジャベリン特製サンドイッチの欠片を受け取り、重苦しい空気など構わずおいしそうに食事していた

エンタープライズ「……………」

シンジ（……………何を話題にすればいいか？）

ジャベリン（く、空気が重いよ……………）

ラファイー「……………おいしい」

シンジもエンタープライズも何もしやべらず無意識なのか無言の圧力を発しているため、ジャベリンも不用意に話題を切り出すことも一言喋ることもできなかった。まあシンジに至っては初対面のため何を話題に切り出そうか迷っているため喋れないだけだが……その中でラファイは変わらずサンドイツチをモグモグと頬張っている

ジャベリン「えっと、エンタープライズさんも食べますか？」

エンタープライズ「いや、結構だ」

ジャベリンはどうかエンタープライズを気遣いながら空気を改善しようとサンドイツチを差し出すも、まさに一刀両断のごとくバツサリと断られる

シンジ「なら俺がもらおうかな……サンドイツチだけじゃなくてこのフライドフィッシュもおいしいな。本当に大したものだなジャベリン」

ラファイ「うん、ジャベリンの料理……本当においしい……」

ジャベリン「えへへへへ」

目論見が失敗して落ち込むジャベリンだったが、シンジがフォローとして代わりにサンドイッチに沿えるようにフライドフィッシュを食べるとサンドイッチ同様に良くできた味や触感に舌を打ってジャベリンを称賛する。ラフィーにも自身の料理を褒められたので暗い表情から一転、照れくさそうに笑顔を浮かべた。するとその中でジャベリンを称賛すると同時にラフィーは海を眺めるエンタープライズからあることに気づく

ラフィー「・・・エンタープライズ、ケガしてる？」

ジャベリン「え？」

シンジ「・・・」

エンタープライズ「分かるか？ どうやら直りが遅いようだ」

ラフィーの間にジャベリンは戸惑いの声を出し、シンジはラフィーの直感と洞察力か



らやはりタダモノではない改めて感心する。そしてエンタープライズもラフィーの指摘を肯定しながら加賀の攻撃によってできた軽度の火傷が残る右手を見ていた

ジャベリン「ええっ!? ちゃんと直さないと!」

エンタープライズ「最低限の措置はしている、心配は無用だ」

ジャベリンはエンタープライズを心配して傷を治すように勧めるが、まるで他人事のように自分の体を気にしないように手当は無用だと言い切る。彼女からしたらまた敵の襲来に備えているからこそその考えだろうが負傷したまま戦場に赴こうとする者を彼が咎めないはずがなかった

シンジ「エンタープライズ。指揮官として言わせてもらうが、最低限の措置だろうとかすり傷だろうと万全の状態でない限り次の任務にはどんな理由があろうと出撃はさせないぞ?」

エンタープライズ「ッ!」

シンジ「今じゃ敵は『セイレーン』だけじゃない。先の『レッドアクシズ』、何より下手をすれば『セイレーン』や『レッドアクシズ』よりも脅威であろう巨大な怪物：『怪獣』達が現れたんだ。KANSEN達に有人部隊の隊員達には常時最高の状態でももらわれないと作戦時の行動に支障が出るどころか、大したことが無い傷でもそれが仇となって命取りになる。俺はエンタープライズたちにはそうなってほしくないんだ、君が何といおうと治療が完了するまで出撃は許可しない。これは命令だ」

エンタープライズ「……」

シンジはもう仲間でもあるエンタープライズを死なせないために説得をしながら、治療が完了して万全と判断するまで出撃は許可しないと命令する。シンジは指揮官と言えど命令で相手を縛ることは好ましく思っていないが、今のエンタープライズならやりかねないと判断する。シンジの予感も当たっており、エンタープライズは納得していないというかのように顔をしかめてシンジを見つめる

その中でジャベリンはシンジに一步も引かない姿勢とその自分を顧みずとも戦おう

とする姿に彼女のユニオン最強たる強さを垣間見るが、その在り方はジャベリンからしたら危うく感じて意を決し問いかける

ジャベリン「エンタープライズさんはどうしてそこまでして戦うんですか？」

エンタープライズ「！・・・おかしな事を聞く子だな、私達は『戦う為に生まれた存在』だ。その事に疑問は無い」

ジャベリンの自信を顧みず戦おうとするのはなぜかという問いにエンタープライズはそう答えた。自分達KANSENは『セイレーン』を打倒するために、戦う為に生み出されたのだから、その生まれた理由から戦う事は唯一の使命であり義務ととらえるのはおかしくはないのかもしれない。しかし彼女たちをただ命令と使命を淡々とこなし続ける『道具』ではなく、笑っては泣いて・・・食事して遊んでは何かを感じることができる『心』をもつ仲間だと思っているシンジにとってその答えは受け入れがたい物でしかなかった

シンジ「・・・そんなのはくだらない理由だ」

エンタープライズ「なに？」

シンジがそういうとエンタープライズは訝しむようにシンジに振りかえる

シンジ「くだらない理由と言ったんだ。『戦う為に生み出されたから戦うだけ』？ そんなのはただ与えられた命令をただ実行するだけの『道具』がすることだ。でも今君たちKANSENはこうして人の体と心を持って生まれたんだ、『生まれた理由』は変えられなくても・・・『戦う理由』も戦う以外の『生き方』いくらでもあるし見つけられるんだ。そうだろうジャベリン、ラファイー？」

ジャベリン「ツ！・・・はい！」

ラファイー「んく・・・ラファイー・・・眠い時はやる気でない・・・」

ジャベリン「ラファイーちゃん!？」

シンジの言う通り、生まれた理由が戦う事だからこそそれを義務もしくは仕事として何も考えずそれを実行するな道具に等しい。しかし彼女たちは『心』を持っている、ならば『戦う理由』に『生き方』なんていくらでも考えることだってできる・・・少なくとも今のエンタープライズの『戦う理由』よりは素晴らしい『生き方』と『何のために戦うか?』を見つけることができる。エンタープライズに伝えると同時にジャベリン達にこの考えはどうか聞く。ジャベリンはこの問いと言葉のおかげで不思議と背中を押された気がして元気に肯定するもラファイーは若干抜けている答えを出して、ジャベリンは予想外のラファイーの応えにびっくりする。だがしかし『酸素コーラ』を一口飲んでからラファイーは普段よりも真剣そうに応えた

ラファイー「でもラファイー・・・友達虐められたら許せないから・・・そのときはちよつと本気出す」

シンジ「良い答えだラファイー。寝たいなら寝る、腹が減ったなら食べる、遊びたいなら遊ぶ、趣味に興じたいなら趣味に興じる、こんな当たり前な事だがそれを『心』から楽しんでる方が『生きてる』と感じられる。ラファイーは『戦う』以外の事をしてる上に『戦う理由』もしつかりと持っているな」

ラフィー「ううゝ・・・」

シンジはラフィーを友達のために戦うという真つ当で正しい理由を持っている事と、心をもって生きている者たちが当たり前にすることを楽しんでいるのを褒めながら頭をなでて、ラフィーは頭を撫でられる感触を心地よさそうに反応する。

シンジ「エンタープライズ、君の戦う理由はどうなんだ。 国のため？ 仲間のため？ 友のため？ それとも家族のためか？」

エンタープライズ「私は・・・」

シンジは戦う理由を問うも、エンタープライズは顔を俯かせるしかできずそこから言葉を出すことはなかった

シンジ（エンタープライズ・・・君はいつたい過去に何があったんだ）

エンタープライズの様子を見て、彼女の過去に相応の何かがあり今のようになんか自分を顧みないようになってしまっただと何となくわかった。しかしそれ以上の追及は俯く彼女にはできず時間だけが過ぎていき昼食は次第にお開きになった・・・余談だがジャベリンが最後の一個のサンドイッチを渡して、エンタープライズが誰の目もないところで一口食べてそのおいしさから少しだけ微笑んでいた

シンジ side out

???  
s i d e

くアズールレーン基地の近海く

アズールレーンの近海にて、パトロールをしていたため母校にはいなかった別動隊のKANSEN達が母校を襲撃されたという報告を受けて全速力で母校に急行していた

別動隊はすべてユニオンのKANSENと有人部隊で構成されている

外側が紫に近い茶色で内側が青色という珍しい髪色の長髪に黄色のリボンをして翠の瞳をして、そして褐色肌のバランスの良く引き締まったスポーティなボディという体に短露出度の高い服装が特徴的な容姿をしている朴訥とした雰囲気を持つ体育会系な少女・・・『ユニオン所属：ノーザンプトン級重巡洋艦1番艦：ノーザンプトン』

銀髪の長い髪と頭には白い猫耳カチューシャに碧の瞳をして、小さく華奢な体と胸元



と肩が開いて少し露出があるメイド服にスカートからちらりと見えるガターベルトが特徴的な容姿をしている気が強そうな雰囲気をしているが正統派ツンデレとささやかな寂しがりな少女・・・『ユニオン所属：シムス級駆逐艦4番艦：ハムマン』

薄紫色の入った青髪と側頭部には通信機を兼ねたアクセサリにマゼンタの瞳をして、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる体つきと全体的に寒色系で纏められて背中や胸元や肩等が露出している服装が特徴的な容姿をしている優しく薄幸美人な雰囲気を持つ少女・・・『ユニオン所属：セントルイス級軽巡洋艦2番艦：ヘレナ』

足の膝まで届く黒いスーパードロングヘアースカイブルーの瞳をして、年の割にはなかなか発育している体形と袖の長さが腕1.5本分という大き過ぎる制服とシャツ一枚という危なげで幽霊をイメージした服装が特徴的な容姿をしている気だるげでのんびりとした喋り方もあってだらしない雰囲気をしているがプラモやゲームが大好きな活発な少女・・・『ユニオン所属：ロング・アイランド級航空母艦1番艦：ロング・アイランド』

ロングヘアアの茶色の髪に青い帽子を被り緑の瞳をして、大人の女性らしい立派な凹

凸がある体形と青い制服にボデイコンミニスカートと深白いタイツをガーターベルトで留めている大人びた服装が特徴的な容姿をしている涙もろくやや悲観的なところがあるためどことなく儚い雰囲気をしているがいざの時は守り貫く姿勢を示す女性・・  
『ユニオン所属：ペンシルベニア級戦艦2番艦：アリゾナ』

ツインテールの金髪にテンガロンハットを被りエメラルドの瞳をして、白い肌にナイスバデイの体形と黒ビキニとホットパンツと黒一色だがクロビキニにホットパンツと裏地が黄色でスズメバチのようなカラーリングである黒いマントを肩にかけた露出が高い扇情的な服装が特徴的な容姿をしている前向きで快活な性格であるエンタープライズの妹である少女・『ユニオン所属：ヨークタウン級航空母艦3番艦：ホーネット』

以上別動隊で構成されたメンバーだ。その中でハムマンは一分一秒でも早く基地に戻ろうと必死だった。そのため有人部隊の者達の艦は量産型の空母一隻であったためKANSEN達にはついていけず若干距離が開く形になってしまった

ノーザンプトン「ハムマン落ち着きなよ！」

「ハムマン」のんびりしている場合じゃないのだ！ ハムマン達の基地がピンチなのだ！」

ヘレナ「あのー、だから敵艦隊はすでに撃退したと報告が・・・」

ハムマン「急ぐのだ——！」

ノーザンプトンとヘレナが気持ちを沈めさせようと声をかけるも、ハムマンはその言葉振り切つてさらにスピードを上げて先行していく

ノーザンプトン「元気だな、数時間目からあのテンションだよ。 おかげで有人部隊の人たちとは離れちゃったし・・・」

ロング・アイランド「幽霊さんもうダメ・・・ハトハト・・・」

ノーザンプトンとロング・アイランドはそんなハムマンに呆れつつ、有人部隊に悪いことをしてしまったと申し訳ない気持ちになる。しかしハムマンの気持ちもその行動

は大切な人たちのためだともわかっている、それに有人部隊たちも仲間のためという気持ちはよくわかるので気にしないでと言ってきていたのであまり思い付いてはいないが……

アリゾナ「敵を退けたのは本国から任命された指揮官が指揮を執って、あの武勲艦工  
ンタープライズと……巨大な怪物『怪獣』という存在らしいですね」

ノーザンプトン「いろいろと気になるけどエンタープライズって……ホーネット、貴  
女の……」

ホーネット「いや、凄いや、凄いや、怖い姉を持つと大変だわ」

アリゾナの報告に面々が様々な情報にそれぞれ違う反応を見せるも、一番気に止まった情報がエンタープライズだった。ノーザンプトンがホーネットがエンタープライズの身内だったことを思い出し声をかけると、ホーネットは猫のような陽気な笑顔で答える

ハムマン「なに呑気におしやべりしてるのよ！ 敵がくるかもしれないでしょっ！」

ホーネット「ま、ハムマンの言うことも一理あるよね。急いだ方が良さそうだっ！」

「大声でハムマンに急かされホーネット達もスピードを上げ、有人部隊もそれを見て自分たちの艦の速力も上げて追従する

・・・『キイイン！』

・・・『ピコーン！』

スピードを上げたと同時にヘレナのアクセサリーである『SGレーダー』と有人部隊の空母に備えられたレーダーが突如として反応を示す

ヘレナ「っ?!みんなっ！」

アリゾナ「ヘレナ?・・・っ！」

ホーネット「ああ、ちよつと遅かったようだね！」

《ホーネットさん！ 前方から二つの反応を検知しました、臨戦態勢を！》

ヘレナの声に皆が反応すると同時にホーネットたちは前方から何かが近づいてきて

いるのに気づき、有人部隊からも前方から反応を検知したと警告を受けて臨戦態勢を即座に取る。すると遠くから向かってくる二つの何かは近づくことで正体を露にしていき、やがて2隻の空母……『重桜所属：翔鶴型航空母艦1番艦：翔鶴』・『重桜所属：翔鶴型航空母艦2番艦：瑞鶴』となつて立ちはだかる

アリゾナ「『重桜五航戦』……！」

ロング・アイランド「ううつ、強そうだよ……」

ハムマン「雑魚どもめ、このハムマンがやつつけてやる！」

ホーネット「……」

それぞれが突如現れた『重桜五航戦』に異なつた反応を見せる。その中でホーネットは2隻の空母を見据えて渋い顔を作り、戦いの構えを取るのだった

ホーネット side out

翔鶴&瑞鶴  
side

た 『重桜五航戦』の空母の甲板上にて二人のKANSENがホーネットたちを見据えてい



一人はストレートロングも銀髪に花の髪飾りを左側に添えて水色の瞳をして、着物で着痩せするがその下は見事な肢体をしている体形と袖が翼のようになっている鶴をイメージした着物と短い黒スカートに白い内またまで覆うソックスという落ち着いた服装と腰に差された日本刀が特徴的な容姿をしている基本的に気配りと配慮ができる温厚な性格である反面腹黒さな一面を持つ少女・・・『翔鶴』

もう一人はロングの茶髪を花の髪飾りで束ねて黄土色の瞳をして、見事なふくらみを持つ女性らしい体形と袖が翼のようになっており鶴をイメージさせる陣羽織風の着物とその下にある紅のワンピースを着ている動きやすさ重視の服装と腰にある日本刀が特徴的な容姿をしている負けず嫌いで活発だが少しせっかちな性格で翔鶴の妹である・・・『瑞鶴』

二人アズールレーンに潜入していた綾波たちが入手した情報から、ホーネットたちの帰還ルートを割り出して待ち伏せていたのだ

翔鶴「ああ、可愛そうな私達！ あんな意地悪な先輩赤城に目をつけられるなんて！ そ

う思わない瑞鶴？」

袖で顔を隠しながら泣き真似をすると同時に、赤城に対して翔鶴が毒を吐いて妹である瑞鶴に目を向ける。瑞鶴は先輩である赤城に対して軽々と悪態をつく姉に振り向く

瑞鶴「真面目にやろうよ翔鶴姉。この戦いで一航戦の先輩方に私たちの実力を認めさせなくちゃ」

翔鶴「もう、瑞鶴は本当に素直なんだから。．．．それでシンジがアズールレーンにいたって本当なの？」

一航戦から承った任をしっかりとこなして自分たちの実力と鍛錬の成果を見せつけようと意気込む瑞鶴。そんな素直な妹を頼もしく感じながら微笑む翔鶴だが、話題を切り替え離れ離れとなって音沙汰がなかったシンジが襲撃を仕掛けたアズールレーンの基地にいたのかと確かな所在を問いかけると瑞鶴は顔を俯かせる

瑞鶴「．．．間違いないよ。遠くからだっただけどあれはシンジだったよ」

翔鶴「シンジとジョーお義父様が今の重桜を目にしたら、どれだけ失望で悲しむでしょうね？」

瑞鶴の答えを聞いて翔鶴は悲しくも辛そうに今の重桜の現状をつぶやき、瑞鶴も同調するように顔を曇らせた。シンジやジョーがこうして人類同士で戦いあう事など一末も望んではないのは重桜全員がわかっていた。しかしシンジのユニオンからの引き抜きにジョーの死という出来事が起こり、重桜の全員がその事実悲しみの涙を流し、その日から数日後・・・少しずつ重桜の歩む道やあり方が変わり始めている。このことには瑞鶴と翔鶴もその変化にはうすうす感じ始めていた

瑞鶴「でも、やるしかないんだ・・・！ シンジがアズールレーンについたんなら、無理やりでも連れて帰る！ シンジが戻ってくれば重桜も元に戻るはずだよ！」

翔鶴「まあ確かに、シンジが戻ってくればあの腹黒い赤城先輩も少しは大人しくなるかもしれないわね。それじゃあ行きましよう瑞鶴、心配しなくてもお姉ちゃんが守ってあげる！」

瑞鶴 「うん！お姉ちゃんがいれば何も怖くない！！」

瑞鶴と翔鶴はシンジが戻ってくれば重桜はきつと元の在り方に戻ると思いをはせながら、お互いを鼓舞して獲物である刀と笛を構えて空母を艦装へと変換、ホーネットたちに急速に迫り先頭を開始した

翔鶴&瑞鶴 s i d e o u t

互いが武器を取り戦いが始まろうとしている最中  
・  
・  
・

ある島では黒い翼を持つ者が海の中から引きずり出した鉄の獲物の腹に喰いつき、中から自身の餌である放射能がたんまりと込められた『原子炉』を引きずり出し丸ごと飲み込んでいた

??? 「ゴツゴツゴツゴツゴ?」

すると遠くからわずかに響く戦闘の音を聞き、そちらに意識を向けると同時に鋭い嗅覚が新たな餌を嗅ぎつける

??? 「ガララララ・・・」

黒き翼を持つ者は自身の漆黒で巨大な翼を広げて飛翔し、匂いがする場所へと向かう  
しかし彼自身もこの時予想外の事が起きるなど思いもしなかっただろう

自身を仇とする人間がいる事・・・

何より自身の種族と宿命がある王が自身らに制裁を与える来るとは・・・

かの王との会合と再会は近い

## 8話 襲撃の後の襲撃・黒き翼と王（後編）

シンジ side

くアズールレーン母港く

昼食を終えた後、ジャベリン達と別れて執務室で仕事を再開しようとする。すると基地周辺のパトロールを行っていた別動隊の一人であるヘレナと有人部隊の隊長から、重桜の五航戦に遭遇し戦闘を解するという報告を受けて救援のために主要メンバーを召集した

シンジ「ホーネット達の救援にはクリーブランドを旗艦に、『ユニオン』と『ロイヤル』のKANSEN達の混成部隊と、動ける有人部隊を『バード・ネスト』に乗せて向かわせる。『女王陛下』たちの現在位置は？」

ウエールズ「既に『陛下』達も指揮官の指示通りに向かっている」



予め予想していたことだったが、やはり別動隊が襲撃されてしまったことにシンジは歯がゆく思うも『ユニオン』と『ロイヤル』の混成部隊を結成するとともに『バード・ネスト』に有人部隊を搭乗させてすぐに出撃するように指示を出す

『バード・ネスト』とはユニオンで最近建造された最新式の航空母艦であり、その名の通り多数の航空兵器を搭載している上に『5インチ砲』や対空砲を装備しているため攻守ともに優れている

そんな空母がこの母校に配備されている幸運に感謝しつつ、『陛下』たちも頼みごとを聞いてくれたというウェールズからの報告にすこし心に余裕ができたと思いきや、淑女らしいイラストリアスと不安そうなユニコーンが慌てた様子が入室する

イラストリアス「指揮官さま！ エンタープライズ様があの状態で出撃を……！  
クリーブランド様がそれを追って……」

シンジ「あの状態で!? 仕方ない、俺も出る。二人には母港の指揮を任せる」

ウエールズ「了解した、指揮官、気を付けてくれ」

イラストリアス「わかりましたわ、どうかご武運を・・・」

イラストリアスの言葉を聞いて呆れと驚きが同時にやってきたことに顔を渋くする。おそらく妹を想つての行動だろうが、あの状態で戦場に赴こうなど自殺行為と同じだ。クリーブランドが同伴しているなら彼女がエンタープライズのストツパーとなつてくれるだろうからそこは安心していいだろう・・・しかしそれでも心配はぬぐえず自身も出撃することに決め、ウエールズとイラストリアスに不在時の母校の指揮を任せて『M82』を携えて装備を整えつつ、損傷が少なくエンタープライズと関わったジャベリンとラフィーにサラトガに連絡を入れる

シンジ「サラトガ、ジャベリン、ラフィー。今母港のパトロールが襲撃を受けて、エンタープライズが損傷を抱えたまま出撃した。クリーブランドが同伴しているが彼女だけでは心配が残る、そこで君たちにもエンタープライズの護衛を任せたい」

ジャベリン《了解しました！》

ラファイー《任務了解・・・》

サラトガ《はくい、サラトガちゃんにお任せだよ！》

シンジの申し出に三人は快く承諾する。自身も制服を戦闘服へと着替えて『バード・ネスト』に登場するため歩を進める

しかしまさかこれから向かう戦場で待ち続けた仇敵と出会うことになるとは予想もしていませんでした

シンジ side out

エンタープライズ side

「アズールレーン母港近海」

シンジから万全の状態になるまで『待機命令』を下されていたエンタープライズは損傷が残る体を文字のごとく引きずって、ホーネット達が交戦する近海へと向かっていった。そんな彼女をクリーブランドが随伴しながら母港に連れ帰ろうとする

クリーブランド「エンタープライズ！ 先走るなっ！ 指揮官が今編成を整えているからさ！」

エンタープライズ「事態は一刻を争う・・・うぐっ！」

クリーブランドが現状を聞かせて制止しようとするも、ホーネットが襲撃されている

という報告を聞いてしまった彼女はいてもたってもいられなかった。しかし体は正直で体のあちこちから痛みが走るとともに、艦装も大きな音を立てながらひびが入り倒れそうになるも、とつさにクリーブランドが支えてくれたことでなんとか身体を立て直す

クリーブランド「やっぱりダメージが残ってるじゃないか!?　こんなの無茶だよ、指揮官にも出撃は無しって言われたんだろ！」

エンタープライズ「・・・ホーネットは私の妹だ！」

クリーブランドは体はもう限界であり無茶だと伝えられるも彼女は止まらない。部隊に妹のホーネットがいると知ってから、心が『行け!　妹を助ける!　急げ!』と叫んだように体が止まることを許さず一刻も早くたどり着こうとする。エンタープライズは今戦う為に戦うのではなく、妹を助けるために戦おうとしているのだ。妹のために歯を食いしばって戦おうとする姿にクリーブランドは彼女を見直してもう止めることをやめた

クリーブランド「エンタープライズ・・・なんだ、人間らしいところもあるじゃない

か。　　しょうがない、私も妹がたくさんいるから気持ちわかるし付き合うよ」

エンタープライズ「クリーブランド・・・良いのか？」

クリーブランド「気にしないでいいよ！・・・でもせめて護衛艦がいてくれればな：」

自分を顧みず色々と無頓着に思える彼女からこうして人間らしい一場面を見れたことにクリーブランドはそのままエンタープライズに随伴する。エンタープライズはそんな彼女に命令違反になるのではと問いかけるも、そもそもクリーブランドはエンタープライズにそのままついてくる形で来ているだけなので命令も下されていないので何も問題はなく笑顔で問題ないと答えた。すると後ろからシンジの指示によってエンタープライズの護衛として駆け付けたサラトガ達が駆けつける

ラファイー「ラファイーも行く・・・」

ジャベリン「みんなを助けに行きましょう！」

サラトガ「指揮官に頼まれてサラトガちゃん登場く、アイドルの力見せちゃうよー！」  
クリーブランド「さすが指揮官！ オーケー!!」

エンタープライズ「・・・フツ・・・」

クリーブランドは三人に向けて頼もしさを感じるとともに、親指を立てながらウインクする。そんな四人の様子を見ていたエンタープライズは口元がわずかに微笑みを浮かべ、大弓を構えなおして妹がいる海域へと急いだ

エンタープライズ said out

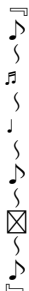


ホーネット side

戦闘を開始してから十数分後……『五航戦』によってホーネットと有人部隊以外は戦闘不能になっていた。あの強気だったハムマンもまる溺死体のようにプカプカと浮いていた

ハムマン「ブクブク……」

ロング・アイランド「なの……」



『ブオオオオオオオオン!!』

『ドオオオオオオオン！ ドオオオオオオオン！』

翔鶴 「この笛の調は・・・亡者を沈める鎮魂曲」

爆弾とプロペラ音が響き、所々が炎上する戦場に不釣り合いな笛による音色が鳴り響く。音色と共に発艦された艦載機がホーネットめがけて攻撃を集中させ、ホーネットは絶え間ないその攻撃を回避していた

「どうにかホーネットさんを援護できないのか!？」

《だめです！ 敵の艦載機の数が多すぎて味方の戦闘機たちが動けず、歩兵部隊も近づこうにも艦載機の爆弾による荒波で行動を妨害されて動けません!》

有人部隊もホーネットの援護をしようとするも、多数の艦載機に囲まれているせいで自衛するのが精一杯だった

ホーネット「くっ!? 防戦一方つてのは、性に合わないんだけどなあ!」

ホーネットは次々と頭上から襲い掛かる艦載機の銃弾や爆弾を回避するが、爆撃機が投下した爆弾による衝撃と水しぶきがすぐ横から襲い掛かったことで視界がふさがり、動きを止めてしまう

瑞鶴「貰った!」

ホーネット「っ!? しまった・・・!」

その隙を瑞鶴は見逃さず、高速でホーネットに接近すると刀を抜刀し切りかかる。ホーネットは回避は間に合わないと言本能に悟り動けなくなり、その刃が彼女の体を切りつける……………

『ババババババババババババ!!』

瑞鶴「何っ!? くう!」

翔鶴「はっ!」

しかし刃がホーネットへと到達する寸前、突如現れた艦載機の機銃が瑞鶴へと殺到する。咄嗟に瑞鶴は刀で機銃の弾丸を切り伏せながら即座に後退し、翔鶴も突然の攻撃に笛の演奏を止めると有人部隊のくぎ付けに発艦した艦載機達が突如現れた艦載機と

もに現れた戦闘機『F-35 ライトニング』、『F/A-18E スーパーホーネット』に撃墜されていくことに気づく。そのおかげでホーネットはその場から退避することに成功し、そのすぐ横を自身の姉であり艦載機を飛ばしたエンタープライズが突っ切る

ホーネット「姉ちゃん！」

エンタープライズ「行け！ホーネット！」

ホーネット「ありがとう姉ちゃん！」

エンタープライズは大弓から光矢を射ってホーネットを援護する。ホーネットはその援護で助けに来てくれた姉に礼を言いつて撤退する。そして上空にいた瑞鶴がエンタープライズを双眸に捉える

瑞鶴「来たか、グレイゴースト！」

瑞鶴はエンタープライズに突撃すると共に刀で切りかかり、エンタープライズは大弓

で瑞鶴の刀を受け止める

瑞鶴「『ユニオン』最強空母エンタープライズ！ 相手にとって不足なし!!」

エンタープライズ「・・・っ！」

火花を散らせながらエンタープライズの吠える瑞鶴。エンタープライズは鏝迫り合  
いから抜け出すため、瑞鶴は力一杯に吹き飛ばして間合いを確保する。そして両社とも  
刀と大弓を無言で構える

瑞鶴「いざ！ 尋常に勝負！」

瑞鶴からの一声から弓と刀の応酬が幕を開けた

その頃ホーネットは姉を心配しつつも前に視線を送ると、最新鋭空母『バード・ネス  
ト』の横で倒されていた仲間達をクリーブランドにサラトガと友軍であろう駆逐艦二人  
に救助されていた。そしてその横には量産型に乗る指揮官らしき男性に目が入る

クリーブランド「ホーネットー！ 助けに来たよー！」

ホーネット「ナイスタイミング、間一髪だったよ・・・」

自分に向かって手を振るクリーブランドに合流したホーネットだが体力が限界に

なったのか倒れそうになる。そこにクリーブランドが支えに入り、ホーネットはクリーブランドに感謝しつつ指揮官であろう男性に紙面を向ける

ホーネット「クリーブランド、もしかしてその人が？」

クリーブランド「うん！ 私達の指揮官、シンジ・プロデイ指揮官だよ！」

クリーブランドの紹介から指揮官・・・シンジが敬礼をしながら自己紹介する

シンジ「どうも初めましてホーネット。ここまで良く戦ってくれたな、勲章物の働きだぞ」

ホーネット「ありがとう、指揮官・・・」

気が抜けてしまったのかさらに体が入らなくなつてぐったりとしてしまうホーネット。さすがにクリーブランドも負担が大きくなつてしまったのかずり落ちそうになるも、シンジも一緒に彼女を支える



シンジ「みんな、負傷したKANSENと隊員達を量産型と『バード・ネスト』に乗せるんだ。すぐにここから撤退する」

クリーブランド「あれ？ 戦わないの指揮官？」

シンジ「当然だ。負傷者多数に万全じゃない仲間がいるんだ、戦えば間違いなく俺たちが負ける・・・それに嫌な予感がする。ここは・・・全艦退避しろ！」

シンジの言う通りこちらには大量の負傷者がいる上にけがと損傷が治っていないエンタープライズがボロを出さないという保証がない以上、空母とサラトガ達がいるといえ負傷者を抱えたままでは満足には戦えない・・・そして何よりシンジは一刻もここから離れなければならぬと思わずにはいられない不安な予感を感じていた。すると直後上空から何かが迫っていることに気づき退避を皆に命じた

??? 「フオ?ァ r!」

シンジが命じたと同時に、上空から砲撃が襲い掛かる。クリーブランド達とシンジは回避に間に合うも『バード・ネスト』はその巨体故に回避が間に合わず被弾してしまう。砲撃をしたであろう存在はゆっくりと降りてきてホーネットたちにその姿を現す

オイゲン「ウフフフフ」

それは上空で蠱惑的な笑みを浮かべる鉄血所属のプリンツ・オイゲンだった

クリーブランド「今度は何だよ!？」

シンジ「彼女は『鉄血』所属のプリンツ・オイゲンだ。　いよいよ鉄血も参戦してきたか・・・!」

クリーブランドは突然の襲撃者に戸惑うも、シンジは冷静に彼女の正体を皆に伝えると状況がかなり悪化したことに冷や汗をかく。大戦時に彼女とも会って指揮をしたこ

ともあるため彼女の實力と堅牢な防衛力は脅威であることを知っており、嫌でも今ここにはその防衛を突破する見方がいないという事実ができてしまった。そんなシンジに対してオイゲンは久しぶりの旧友に会えたことで作り笑顔ではない本当の笑みを浮かべながら声をかける

オイゲン「Guten Tag。 私たちとも遊んでよ『アズールレーン』。 それにしても久しぶりねシンジ？ 色々と話してみたいことはあるけど、まずは結婚おめでとうと言ったところかしら？」

シンジ「ありがとうオイゲン。 本当なら再開を祝して互いに酒をたしなみたかったが……こんな事になってしまって残念だ」

オイゲン「……そうね、でも全ては『鉄血』のためよ。 それはそうとあなたの方も久しぶりねサラトガ？」

オイゲンからの結婚の祝言をもらいシンジは嬉しく思うも、場所が場所だけに素直に喜べなかった。 本当なら鉄血らしく酒を飲みあいたかったと吐露しながら、『バレット

M82』を構える。オイゲンも静かにそれに同意するも全ては『鉄血』と仲間たちのためにと伝えると久しぶりに会えた旧友であるサラトガに再開の言葉を送る

サラトガ「そうだね、あの『冒険』以来だったよね？　本当だったらもつと平和な時に私のライブを見せてあげたかったかな・・・」

オイゲン「ええ、あなたの歌嫌いじゃないからもう一度聞いてみたかったわね・・・。だけど今はそうはいかないのよ。それじゃあ任せてもいいかしら、ニーミ？」

サラトガも旧友に会えたことへの喜びがわいてくるが、それ以上にこんな敵同士での再会になってしまったことに残念さと悲しみがわいていた。オイゲンも旧友である彼女の歌をまた聞きたいと思っていた身として残念な思いを伝えるとオイゲンの後方からセイレーンの量産型と共にニーミと綾波が現れる。余談だがこの時シンジは大戦時よりも笑顔らしい笑顔を浮かべてどこかあきらめている雰囲気ほとんど感じられない事から一瞬『別人では？』と思ってしまった

ニーミはオイゲンの言葉にまるで決心したようにうなづく、前に出てホーネット達

に艦装を向ける

Z23「鉄血駆逐艦Z23と申します。あなた達をここで倒します」

ニーミの宣言と共に彼女の後ろから綾波も艦装を携えて現れる

綾波「……………」

ジャベリン「綾波ちゃんちゃん……ニーミちゃん」

二人に気づいたジャベリンの呼びかけに二人は一瞬ジャベリンから目を伏せようとしたが、余計なものを考えないようにするかのように顔を横に振って対艦刀と主砲を構えなおす。ジャベリンはそんな二人に武器を向けられることができずにいるとラファイが二人の前へと出る

ラファイ「指揮官、みんなを連れて撤退して」

ジャベリン「え、ラファイーちゃん!？」

シンジ「やれるのかラファイー……」

ラファイーが殿を買って出たことにジャベリンは驚き、シンジはラファイーは少なくとも綾波とニーミとジャベリンと同様な気持ちを持っていることとうすうす気づいているため無理しているのではないかと心配するもラファイーは覚悟を決めているのか艦装を前へと向ける

Z23「つ……自ら殿を務めますか？ 敵ながら敬意に値します」

最初会った時には感じなかったが、今は迫力を感じさせる真面目なラファイーに戸惑いつつもZ23は銃口を向ける

シンジ（今俺たちのこの状況を打開する一手はない。賭けるとするなら『陛下』達だが、それまでま持つか？ いや、持たせるんだ!）

シンジはこの状況を打開する一手を『陛下』に賭けることを決め、それまで誰一人死なせずに乗り切るため頭を回転させてライフルを構える。ホーネットも残された体力でどうにか艦載機を発艦しようと艦装を操作するのだった

しかしこの時この場にいる全員が思いもしなかっただろう

もう黒き翼がすぐそこまで迫ってきていることに……

ホーネット said out

エンタープライズ side



一方エンタープライズは瑞鶴と激しい打ち合いを繰り返しているが、エンタープライズが推され気味だった。なにせ負傷したままの出撃であったため動けば動くほど体から悲鳴が上がり狙いも正確には射てず、射つても刀で切り伏せらせ瑞鶴の得意とする近距離戦に持ち込まれるため防ぐ続けるのが限界だった。そして激しい刀による連撃にエンタープライズは耐えきれず吹き飛ばされてしまう

エンタープライズ「くっ！」

瑞鶴「貰ったあ!!」

仰向けに倒れそうになるエンタープライズを見て、好機と判断した瑞鶴は一気に接近して追撃を仕掛けようとする

翔鶴「駄目よ瑞鶴！」

瑞鶴「っ!?!」

その瞬間翔鶴の制止が聞こえ、瑞鶴もその意図をエンタープライズを見て即座に気づいた。倒れそうになっていたエンタープライズは瑞鶴が自身に向けて必ず追撃してくると予測して弓矢をまんまと引き付けられた瑞鶴に構えていたのだ

エンタープライズ「そう来ると思ってたぞ・・・！」

瑞鶴「くっ！」

エンタープライズの瑞鶴の胸元を狙った光矢は、紙一重で瑞鶴の刀ではじかれる。しかし弾かれた光矢は艦載機へと変わり、瑞鶴を抑え込んで自分ごと爆弾を投下する

瑞鶴「む、無茶苦茶だあ!？」

『ドゴオオオオオオン!!』

瑞鶴はエンタープライズのバカげた戦術に声を上げなら爆発に巻き込まれる。爆弾によって起きた水柱から少しして瑞鶴が出てくるも、すかさず水柱から飛び出したエン

タープライズの蹴りを瑞鶴の横腹に繰り出し大きく吹き飛ばす

瑞鶴「うわあっ?!？」

瑞鶴は爆発によるダメージによって傷だらけとなった体を起こしてエンタープライズを視線を移す。元々あの光矢は外れる事や弾かれる事を考慮した上で艦載機となるようにしていたのだ。あの一瞬であらゆることに予測して攻撃を選択し実行する判断力・・・エンタープライズがどれだけの戦場を駆け抜けてきたのが良くわかる。自身を巻き込むことも戦術の一部にするあたり歪んでいる部分もあることもわかってしまうほどに・・・

瑞鶴「くっ、なんて奴・・・！」

そんなエンタープライズの強さの一端を知らながらも、痛みを訴える体に鞭を打って立ち上がる瑞鶴に向けてエンタープライズは静かに大弓を構えなおす。しかし彼女の艦装はもうすでに限界を迎えようとしていた

エンタープライズ said out

シンジ side

その頃シンジたちはオイゲンたちとのにらみ合いが続いていた。ジャベリンは二人と戦うことに迷いを持ち、シンジもかつての仲間であるオイゲンたちに銃を向けることは本意ではなかったが殿を買って出たラフィーの命のためなら戦うことを決める覚悟で対物ライフルを構える

オイゲン「・・・あら？」

上空からシンジたちを見下ろしていたオイゲンが突如として起こった事態に気づく。なんとラフィーは艦装の装備である主砲と魚雷発射管を折りたたんでしまったいたの

だ。当然相対していたニーミと綾波にシンジたちも戸惑った

Z23 「な、何のつもりですか!？」

シンジ 「ラファイー・・・どういうつもりだ・・・？」

その場の全員が硬直する中、ラファイーの一言で全員が違う意味で呆然と驚愕が巻き起こった

ラフィー「……やつぱり眠いから止める」

Z23「なっ！……あ、あなたふざけているのですか!? 真面目にやりなさいっ!!」

ジャベリン「えっ、ええええ??」

シンジ「……ラフィーらしい理由ではあるな……気が抜けるなあ……」

救助部隊&パトロール部隊&有人部隊『……………』

ラフィーの行動の理由に真面目で優等生なZ23は大声で注意し、シンジはラフィーらしい答えに納得はしつつもこの場の空気で言えないありえない言葉に張りつめていた気が抜けてしまい、ジャベリンやクリーブランド達や有人部隊でさえ啞然となる

ラフィー「指揮官も……気は乗らないよね?」

シンジ「……本心から言おうとそうだな」

ジャベリン「えええっ！ 指揮官もですか!？」

Z23「っ！ シンジ指揮官も何を言ってるんですか!？」

ラフィーの間にシンジとてラフィーと同様に彼女らと戦いたくない思いを持つていたため同意する。ジャベリンはシンジもラフィーと同じ考えに驚愕し、Z23はこの期に及んで戦うことを拒否する思いを持つシンジに異を唱える。するとシンジはZ23に視線を向けて話し出す

シンジ「……ニーミ、確かに今俺たちは互いに敵という立場にあるさ。だが敵だからという点だけで何も迷わず、共に戦ったかつての仲間同士や知り合つて友になるかもしれない人とと戦えるほど俺たちは万能じゃない。俺だつて軍人であり指揮官である前に心を持った人間だ、共に戦つた仲間简简单に銃を向けることはできない。それに心を持たない道具でない以上必ず気に入らない現状に出会えば迷うのは当たり前だ。現に君だつてこんな共通の敵や未知の敵がいるのにもかかわらず人類同士で争い、親

しく接せられたジャベリン達と戦う事になったこの戦いに疑問を抱いているだろうか？」

Z23「・・・っ！」

シンジの言う通り今や自分たちは敵同士だ。しかし人間は迷い迷って末に決断して進歩してきた存在、人間とそう変わらないKANSEN達もそうであるように親しくなれたかもしれない相手やかつての戦友を相手に戦えと言えば「はい」と即答できるような機械の様に判断などできる筈もない。たとえ時代という流れによつて敵が変わるこの世界で国や家族のためとはいえ、背中を合わせて戦中同士で殺しあうことになれば迷いを生じるのは当然のこと、その中で自分がどうしたいのかを迷い悩んで最適解を導き出すのが重要なのだ。ニーミとてこの戦いについてや心のどこかで戦うことに迷っている所があるため、シンジに凶星をつかれて口ごもってしまう



『ドオオオオオオオン！』

ニーミが何かを応えようとした時、後方から爆発音が響き全員がその方向に目を向けるとエンタープライズが瑞鶴を追い込んでいた。翔鶴はどうか瑞鶴を援護しようとするもエンタープライズの発艦した艦載機や有人部隊の『F-35 ライトニング』に機銃を打たれ動けず、いよいよ瑞鶴に最後の一手を打とうとする

シンジ「っ！ 待てエンタープライズ、お前の艦装はもう限界だ！ 今すぐ退け!!」

エンタープライズの艦装にひびが広がっていることに気づきシンジが生死の言葉を上げると同時にピキピキと音を立てながら大弓が砕け散った

エンタープライズ「っ!？」

思いもよらない事態にさすがのエンタープライズも戸惑ってしまい大きな隙を生んでしまった。その隙を見逃す瑞鶴ではなくすかさず艦載機を発艦させると、その艦載機が炎となって刀の刀身に纏われ凄まじい熱を放ちすべてを焼き切る溶断刀となった

瑞鶴「うおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

雄たけびを上げなら疾走してからのジャンプで上空から迫る瑞鶴にエンタープライズは甲板から艦載機を発艦して迎え撃とうとするも、甲板も同様に限界でひびを立てながら損壊する

シンジ「・・・まずい！」

シンジはエンタープライズを助けるべく瑞鶴・・・正確には瑞鶴の刀を狙って『パレットM82』を構える。しかしもう距離的に正確に狙いを定める暇もなく万事休すかと

思ったその時……

??? 《ただいま到着しました、ご主人様》

シンジ 「っ！ いいタイミングだベルファスト!!」

一人のKANSENの到着で賭けに勝ったと確信した  
シンジ side out

エンタープライズ side

エンタープライズ（ここまでなの・・・か？）

艦装が損壊し、まさに打つ手なしの状態で瑞鶴の炎を纏った溶断刀が眼前に迫る中『死』を覚悟しながらも壊れた大弓の残骸で受け止めようとする。その時……

??? 「失礼いたします」

エンタープライズ・瑞鶴「っ!？」

突如涼やかな声が響くと共にエンタープライズと瑞鶴の間に颯爽と現れたKASE Nが腕に付けられた装甲を交差して、燃え盛る炎の斬撃を防いで見せた

瑞鶴「な、なんなのアンタはっ!？」

そのKASE Nは絹のように精細な白髪に白いフリルのカチューシャを被りコバルトブルーの瞳をして、まるで人形のように豊満ながらバランスの取れた体形とフリルに彩られたステレオタイプな白と紺色が入ったメイド服と首にある破断された鎖が垂れた鋼のチョーカーというまさに中世のメイドを思わせる服装が特徴的な容姿をしている凛としていながらどこか柔和さと艶やかさを兼ね備えた世話好きな魅力の美少女……『ロイヤル所属：エディンバラ級軽巡洋艦2番艦：ベルファスト』だった

ベルファスト「通りすがりの、メイドでございます」

突然の人物に戸惑う瑞鶴にベルファストは笑顔で答えると、勢いの落ちた刀を艦装としてのガンレットで弾き飛ばし瑞鶴を後退させる。するとエンタープライズの艦載機をすべて撃墜し終えたうえで、自身の艦載機で有人部隊を足止めしているのか翔鶴が瑞鶴を心配して合流する

シンジ《久しぶりだなベルファスト、君のおかげでみんなが助かったぞ》

ベルファスト「こちらこそお久しぶりでございますご主人様。 壮健そうで安心しました」

大戦以来の再会に互いに言葉を混ぜ合わす二人。するとベルファストの視線の先にシンジがいることに瑞鶴たちは気が付いた

瑞鶴「やっぱりシンジだっ……！」

翔鶴「っ！……本当ね、なら私たちがすることはわかってるわね瑞鶴？」

瑞鶴「うん翔鶴姉、シンジを取り返すよ！」

瑞鶴と翔鶴はシンジを奪還するためシンジの元へと向かおうする。しかしそれをベルファストが許すはずがなく、シンジへの行く手を阻むため艦装の三連装砲と対空砲で二人をけん制する

瑞鶴「くうっ!? 邪魔をするな！」

ベルファスト「申し訳ありませんが、ご主人様に危害を与えようとするならば、主人の身を守るのもメイドの務めであるためお相手するしかありません」

瑞鶴は行く手を遮るベルファストに声を張り上げながら接近戦に持ち込むが、メイド服を着ているのにもかかわらず軽快で洗練された動きで斬撃を避けてはガントレットで受け流し、極めつけは通り過ぎる瑞鶴の腕をつかんで後方へと投げ飛ばした

瑞鶴「あぐっ!?!」

翔鶴「瑞鶴！」

エンタープライズの戦いによる傷も含めて瑞鶴の体はボロボロで海水にたたきつけられる痛みも数倍となっているため、叩きつけられた痛みが激痛となり瑞鶴は悲鳴を上げる。翔鶴も一時シンジへの接近を断念して、立つことも難儀になりつつある瑞鶴を支える。ベルファストはロイヤルで『ロイヤルメイド隊』のメイド長を務めているため、その技量と練度はとても高い上に能力も卓越しているのでそう簡単には倒せない相手だ。故に今の五航戦に勝てる見込みはほぼない

瑞鶴「っ！ 先っからメイドって、なんの冗談なの・・・」

オイゲン「大真面目なのよそいつは・・・」

いきなり現れてメイドと名乗るベルファストに悪態をつく瑞鶴に、上空から戦況を見ていたオイゲンがベルファストを見下ろしながら答える



オイゲン「ロイヤルエディンバラ級軽巡洋艦ベルファスト、ふざけた格好をしていてもロイヤルの中でも歴戦の強者よ。甘く見ないことね」

ベルファスト「ご機嫌麗しゆうございます、鉄血のプリンツ・オイゲン様。このよ  
うな場所で会うとは奇遇でございますね」

オイゲン「そうね・・・『鉄血』と『ロイヤル』、遠く離れたこの海で決着をつけるのも悪くないわね」

オイゲンに向けてベルファストは礼儀正しく挨拶を交わす。『鉄血』と『ロイヤル』の因縁はなかなか深く、いわばライバルと言ってもおかしくはない。するとオイゲンの生体兵器がガチガチとその顎を鳴らすとベルファストにむけて『セイレーン』の量産型を仕向ける。ベルファストはそれに臆することなく微笑みを浮かばせる

ベルファスト「私は一向に構いませんが・・・その場合、こちらもお相手させていただきます」

ベルファストの言葉と共に『鉄血』とセイレーンの量産型を真つ向から立ち向かうように遠くから『ロイヤル』の艦隊が現れる

ケモミミのような髪型をした金髪にライトパープルの瞳をして、愛らしい少女のような背が低く控えめな幼児体形と首元に金色の錨の刺繍がついた白いマフラーを巻いて金色のボタンが付いている白い衣装の上に紺色のチョッキ上の軍服を着て、下は本人が言うには「スピードを得るためにスカートは廃した」とスカートを履かず黒い紐パンだけで何より携えている大剣と言う刺激的だが中世の騎士を思わせる服装が特徴的な容姿をしている愛らしい見た目に反して歴戦のオールドレディとして淑女であると同時に勇敢な少女……『ロイヤル所属：クイーン・エリザベス級戦艦2番艦：ウォースパイト』

輝くような金髪に艦橋を模してたような白いハット帽子を被りサファイヤの瞳をして、一目で大人の女性と確信させる魅惑的なプロパーションを持つ体形と青い膝まで長いコートにユニオンジャックの外套を纏い、細い美脚は黒いストッキングで包まれているという優雅にして堂々とした英国の淑女を思わせる服装が特徴的な容姿をしている勇ましくも優雅な雰囲気と物腰を持つ穏やかな淑女でありロイヤルネイビーの栄光で

ある女性・・・『ロイヤル所属：アドミラル級巡洋戦艦1番艦：フッド』

右目が隠れた薄い金髪に白いフリルのカチューシャを被りトパーズの瞳をして、色々と小柄ながらも均一さがとれたスレンダーな体形と全身グレー系で統一したフリルに彩られ露出が少ない清楚なメイド服とベルファスト同様に破断された鎖が垂れた鋼のチョーカーにくびれた太物の下に白いガーター付きソックスという英国の本来元のメイドを思わせる服装が特徴的な容姿をしている無愛想で無表情かつ毒舌家だが指揮官と認められた者にはそれなりに慕い、冷静な行動力を発揮するやや氷のような少女：『ロイヤル所属：サウサンプトン級軽巡洋艦3番艦：シエフィールド』

絹のように精細な白髪に白いフリルリボンを飾り丸眼鏡をかけてコバルトブルーの瞳をして、豊満ながらバランスの取れた体形と首下にセーラー服の襟を模した首飾りフリルが彩られた宗元がさらけ出されたウェイトレスタイプな白と紺色が入ったメイド服に長く白い靴下という現代風のメイドを思わせる服装が特徴的な容姿をしている自信たっぷりな仕事をことごとくこなすプロだが人間臭いドジなところが目立ってしまいう可愛らしくも少し残念であり、ベルファストの姉である少女・・・『ロイヤル所属：エディンバラ級軽巡洋艦1番艦：エディンバラ』

黄金のような金髪に光輝く王冠付きのカチューシャを被り碧眼の瞳をして、童女らしい凹凸が少ないがどこか艶しさを感じる体形と胴回りのラインどころかへソまではつきり見えるドレスと腕には二の腕まである手袋に足には白のハイソックスと云ういかにも大変高貴で王族であるのかを思わせる服装が特徴的な容姿をしている我儘にして尊大で多くの者から慕われる『ロイヤル』の小さな女王陛下でありウオースパイトとは姉と妹ではなく主君と騎士の関係をもち少女・・・『ロイヤル所属：クーイン・エリザベス級戦艦―番艦：クーイン・エリザベス』

『ロイヤル』の最高権力者が率いる『ロイヤル』の主力艦隊が今ここに現れたことで形勢は間違ひなく逆転した。シンジが先んじて母港に向かつていた『女王陛下』ことクーイン・エリザベスにホーネット達の救援を頼んでいたことが功をもたらしたので

オイゲン「なるほど、あの小さい女王様もいるわけね・・・」

オイゲンもロイヤルの増援とその女王を確認して、今の戦力では対抗することは不可能だと察する。そして潮時と判断してニーミ達に撤退の言葉を変えようとしたその

『ヒ  
ユ  
ウ  
ウ  
ウ  
ウ  
ウ  
・  
・  
・  
・  
・  
ド  
ボ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
ン  
!!!  
』

時  
・  
・  
・  
・  
・

ジャベリン「え!? 何々!」

シンジ「くっ、何が起こった!」

エンタープライズ「・・・っ!」

瑞鶴「うわあっ!」

突如として空から何か巨大なものが彼らの前に振り落ちて、その衝撃によって起きた荒波が彼女らを襲った。幸いにも全員が何とか荒波に乗り込まれながらも沈むことはなく、有人部隊もすでに『バード・ネスト』や量産型に避難していたことで事なきを得ていた。そして落ちてきたものが何かと全員が確認すると一番最初に反応を示したのは『鉄血』だった

Z23「これは! 今行方不明になっていた私たち『鉄血』の原子力潜水艦じゃないですか!」

オイゲン「……この有様じゃ生存者は絶望的ね。それに『原子炉』が引き抜かれてるわ、そしてこの壊れ方は……」

その正体は『鉄血』内で点検のために稼働させていた鉄血所属の原子力潜水艦だった。突如として行方が不明となっていたが、今その潜水艦は無残な姿で現れた。その船体は大きく捻じ曲げられ、原子炉が供えられた場所がまるで何かに食い破られたように破壊されており、その船体のあちこちに白い粘液のような液体がへばりついていて、潜水艦が空から降ってきて、その潜水艦の異常な破壊のされ方にその場にいた全員が呆然し、オイゲンはこの惨状に搭乗していた乗組員の生存者はいないと察すると同時にこの破壊のされ方からあることを確信してしまう

『キイイーン！』

するとヘレナの『SGレーダー』が何かの反応を捕らえる

ヘレナ「指揮官！ 上空から何か巨大な物が直上から接近くるわ！」

シンジ「何っ！」

シンジがヘレナの報告を聞いて即座に上空を見上げた瞬間・・・雲を突っ切りながら黒く巨大な何かが急降下していた

『ズドオオオオオオオオン!!』

そしてそのままセイレーンの量産型に向けて降り立ち、その衝撃によって近くにいたオイゲンやベルファストにシンジ達が吹き飛ばされてしまう。辛くも全員が波にのまれず濡れになったが無事であり、全員が水しぶきが舞い衝撃が起こった中心に視線を集める

エンタープライズ「あれは・・・！」

エンタープライズは徐々に水しぶきが晴れていくその場所で『奴』を見た



黒い体色で三角形の長い頭部をしており、紅く輝く単眼を怪しく光らせ、1対の脚に1対の巨大な腕と胸部のものより小さい1対の副腕の計4対6本の肢と自身よりも大きな1対の巨大な翼を持つ怪獣……

ムートー「ガラララララララララ!!!」

ムートーが大きく黒い翼を広げ、咆哮を上げて蒼き海へと降臨した

エンタープライズ said out

シンジ side

ムートー「ゴツゴツゴツゴ・・・」

現れたのはムートーは『セイレーン』の量産型から鉤爪を使って、核エンジンを引きずり出してそのまま飲み込んで放射能を吸収し始める

その場にいた者達はアンギラスとは異なる別の怪獣の出現に、一度怪獣を見た者や初めて怪獣を目にする者関係なくムートーの突然の襲来に唾然とするがシンジだけは違った。『モナーク』からの情報を元に探していた父と母を殺した怨敵が目の前にい

る。それだけ心の底から憤怒と報復心が燃え上がり、気づけば量産型をムートーに向けて直進させていた

ジャベリン「指揮官っ!？」

シンジの特攻に近い行為にジャベリンが戸惑いの声を上げるが、シンジには今なにも聞こえずただ眼前の仇だけを見据えて『バレットM82』をムートーに向けて放つ

『バアアアアアアアアアン!!』

しかし戦車や戦闘機の装甲を貫通できる対物ライフルの弾丸は命中するもはじき返されてしまう。そしてムートーは食事の邪魔をされた事に怒り、邪魔をしたシンジに矛先を向ける。そこに今まで突然の状況に周りを飛行していた『F?35 ライトニング』、『F/A-18E スーパーホーネット』に『バード・ネスト』から発艦した『AH-64D アパッチ・ロングボウ』がシンジの攻撃を切っ掛けに攻撃を開始しようとしていた

ムートー「ガララララ・・！」

ムートーは自身の周りを飛行し始めた戦闘機を見据えると、爪先に生態電流を生み出して赤く発行させると大きく振りかぶる。シンジはその動作をみてムートーが何をしようとしているのかを瞬時に読み取る

シンジ「全員奴から離れろっ!!」

KANSEN達や有人部隊に即座に退避命令を出す、間に合うわけもなかった

『ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

揺れ動く衝撃波と共に電磁パルスが不可視のドーム状になって拡散され、電磁パルスに晒された戦闘機たちは一瞬で電子回路が焼き切れて次々と機能を停止していく

《なんだこれ！ 機体が停止した!?!》

《指揮官！ 機体の電源を失いました！》

《野郎俺たちの機体に何しやがった！》

パイロットたちは突然制御できなくなった事に戸惑いつつも、なんとか脱出装置を起動させて海面にたたきつけられる前に脱出する。しかし異変はそれにとどまることはなかった

ホーネット「何これ・・・体が、重い・・・！」

クリーブランド「っ！・・・それどころか上手く移動もできないよ！」

オイゲン「くっ！」

綾波「体に・・・力が入らないのです・・・！」

翔鶴「・・・っ！」

戦闘機だけでなく固い装甲に守られている『バード・ネスト』も停止することはなかったがエンジン出力が大幅にダウしている中、KANSEN達には突然の体の不調が現れて水上を満足に移動できなければ凄まじい怠惰感と疲労感が彼女らを蝕む。どうにか艦載機でムートーの気を引こうとする翔鶴だが――

翔鶴「――っ！ 艦装が動かない!？」

Z23「こちらでもです！ 主砲も魚雷も全く反応しませんっ！」

艦装に意識を向けて操ろうとするが全く反応を示さず艦載機を発艦することができず驚愕してしまう。それに続いてニーミも艦装の機能停止を訴えて、そこからKANSENのみんなが互いの艦装を確認すると全員が使用不能の事態に陥っていることに気づく

シンジ「これはまずい！ 『バード・ネスト』、そちらは戦闘が可能か！」

《運航はできませんが武器システムがすべてダウンしています！ おそらく搭載している艦載機もすべて無力化されています・・・使える物があるとすればライフルとロケットランチャーと言ったアナログに近い物しか・・・！》

『バード・ネスト』から聞こえる通信相手の兵士がこの状況に震えていることがすぐにわかった。シンジとてその気持ちをすぐに理解する。たつた一手でこちらを詰み一歩手前まで追い込んだ怪物が今自分たちを見据えているのだ。少しでも動けばそれがきつげとなり、今攻撃されれば全滅は必至・・・絶望しても仕方ないだろう

シンジ（だけどそれがどうした？）

戦場において不利な状況なんて当たり前、装備が完全に潤沢な時なんて無く、相手が自分達よりも強いなんてしょっちゅうだった。それでも自分たちは生き残ってきた、それはなぜか？

ただ諦めず家族のため、仲間のため、国のためと最後まで戦う意思を持っていたからだ。故に人類は生き残ってきた。怪獣がなんだ？ 相手がなんだろうと自分は仲間と

家族のために戦うだけ、それに仇を前にして臆する気などさらさらなかった。そしてシンジは量産型から『バード・ネスト』に飛び移り、『M136 AT4』と『SMAM ロケットランチャー』を拝借して背中に背負うと量産型に再び伸び乗って『バレットM 82』をムートーに向けて乱射しながら近づく

瑞鶴 「っ！ シンジ!? 無茶だよ・・・やめて！」

エンタープライズ 「指揮官・・・！」

無謀ともいえる行動にエンタープライズと瑞鶴が生死の言葉をかけるも、ムートーの咆哮とその質量によって動く余波によってそれはかき消される

ムートー 「ガララララララ！」

ムートーはチクチクとうっとおしいことをしてくるシンジにイラ立ちの声を上げながら前脚の爪をシンジに向かって振り下ろす



『ガッシャアアアアアアン!!』

シンジを狙ったムートローの爪は量産型の装甲を轟音を立てながら軽々と破壊し、衝撃による揺れと破片が襲い掛かるも銃を盾にしながら突っ切りと同時にムートローの爪に飛び乗ってそのまま駆け上がる

ムートロー「グオオオオオンツ!!」

まさか踏みつぶすつもりだった敵がそのまま自身の腕に飛び移ってくるなど思いもしていなかったのか戸惑いの声を出すムートロー。腕を動かして振り落とそうとするが、驚異の馬鹿力なのか驚異的な身体能力であつという間にムートローの眼前まで上り詰め、たシンジは背負っていた『M136 AT4』を右手に、『SMAW ロケットランチャー』を左手に携えるとそのまま反動を気にせず発射した

『ドオオオオオオン!!』

発射されたロケット弾は二発ともムートローの顔面に見事命中し、爆炎と硝煙と衝撃が

吹き荒れる。煙で一時的に見えなくなっていたムートーだが、一瞬で無傷の状態で煙から飛び出すと翼を羽ばたかせて空中に投げ出されたシンジを叩き落とす

シンジ「ガハッ!？」

シンジはとつさに弾頭が無くなった『M136 AT4』と『SMAW ロケットランチャー』を壁のようにして前に出すが、ムートーにとつては羽虫を払う行為だが圧倒的質量と威力をもったそれはシンジにとって必殺の一撃と化した。凄まじい衝撃によつてシンジは気を吐き出しながら海面へとたたきつけられる

ジャベリン「指揮官っ！」

そこによくやく電磁パルスの影響が抜けたのか、いつも通りとはいかず遅くなつてはいるが艦装を操つて海上を疾走しながら駆けつけるジャベリンとラフィー。そこには量産型の残骸にムートーをにらむシンジがいた。ただしその左腕は骨が折れて脱臼しているのか所々が赤くにじんでおりブランプランと脱力したように揺れている。それでもまだ立ち向かおうと『バレットM82』を杖代わりにしてムートーに向かおうとす

る。当然ジャベリン達は指揮官の容態を見て戦わせまいと止めに入る。

ジャベリン「指揮官、その怪我じゃもう戦っちゃだめです！」

ラファイ「血がこんなにたくさん・・・もう動いちやダメ！」

シンジ「止めないでくれ二人とも。　奴は・・・父さんの仇だ！　これくらいで引けるわけない・・・！」

二人は自身の身を案じてくれていることはわかっているが、それでも怒りが『前に進め！　仇はまだ生きています！』と伝えてくる。ようやく見つけた仇が目の前にいてまだ生きているのだ、それを前にして尻尾を巻いて逃げるなんてシンジの選択肢にはなかった。するとシンジの言葉が聞こえたのか瑞鶴たち重桜のKANSEN達は狼狽する

瑞鶴「ジョーお義父さんの・・・仇？」

翔鶴「ジョーお義父様は、事故で亡くなったんじゃないの・・・？」

綾波「指揮官……どういことですか……？」

瑞鶴たちはジョーが無くなった原因は爆発事故であると知らされていたため、シンジの言葉に耳を疑うのも無理はなかった。綾波が震えた声でどういことか問うとシンジはジャベリン達に支えられながら真実を話す

シンジ「父さんが死んだのは事故じゃない。あいつが……！ あいつがある場所で目覚め、暴れだした時に崩壊した施設に巻き込まれて父さんは……死んだんだ！」

翔鶴「それが……真実なのね……」

瑞鶴「あいつが、義父さんの仇……！」

翔鶴「瑞鶴？」

『アズールレーン』だけではなく『レッドアクシズ』のKANSEN達が明かされる真実

に愕然とする中、瑞鶴と綾波が得物が震えるほど強く握りしめながらムートーを怒りで染まった目で見つめていることに翔鶴は気づくも、その瞬間二人はムートーへと駆け出す

瑞鶴「あああああああつ!!」

綾波「絶対に、許さないのです・・・!」

翔鶴「瑞鶴!? 怒りに任せては駄目よ!」

Z23「綾波! いくらなんでも無茶ですよ!」

恩人でもあり父親でもあったジョーを殺した相手が今日の前にいるムートーだが認識した瞬間、ジョーをなくしたからの行き場のない悲しみとやるせなさが一気に怒りへと変わる。綾波は鋭い目つきで分厚い対艦刀を、瑞鶴は怒りの絶叫を上げながら刀を携えてムートーへと突貫する。無論翔鶴とてムートーに対して思うことが無いわけではないが、無策に挑んでも勝てない相手と分かっているためニーミとともに制止しようと

するが二人には怒りによつてその声は聞こえてはいなかった

ムートー「ガララララッ！」

ムートーはまた自分に仕掛けてくる新手に向けて、今度は両腕を二人に向けて振り下ろす。しかし二人はKANSEN、シンジのような訓練された兵士よりも身体能力が高いため最小限の動きでそれを避けると大きく跳躍し腕に刀を切りつける

『ガツキイイイイイイン!!』

しかしムートーの体は、戦車砲にバズーカや艦載機の銃撃を耐えきるほどに頑丈。摩擦音と火花を散らせ、軽く極微小の傷しかつことができなかった

瑞鶴（全く切れなかった・・・!? セイレーンの艦でも切れる刀なのに!）

綾波（っ!?!・・・ものすごく硬いのです!）

セイレーンの艦ですらたやすく切れる自慢の得物がまったく歯が立たなかったことに驚愕する二人。驚愕と刃が通らないことで動きが止まった二人をムートーはそのま  
ま腕を振り回して吹き飛ばす

翔鶴「瑞鶴っ！」

Z23「綾波！」

吹き飛ばされた二人に翔鶴とニーミが駆け寄り、二人の状態を確認する。幸いに吹き飛ばされただけで目立った傷はないことにニーミと翔鶴は安堵するも、ニーミと綾波は体が小さく仕留めやすいと判断したムートーが彼女たちに狙いを定める

ムートー「グオオオオオオオン！」

Z23・綾波「っ!？」

ムートーは少しだけ足場にしていた残骸から飛翔すると大口を開けて二人を捕食し

ようと海上を滑空して急速に迫る。ニーミは綾波を背負って退避しようと試みるも、電磁パルスの影響がまだ依然として残っているせいで思うように力が入らず動けなかった。そして迫ってくるムートーの口に思わず目をつむってしまうニーミだが……

ラファイー「あぶない……！」

ジャベリン「危ない！」

そこにシンジをベルファストとエンタープライズに任せたジャベリンとラファイーが



横から搔つ攫うように全速力で二人をムートーの進行方向から退避させた

ジャベリン「大丈夫だった!？」

ラファイ「けがはない・・・？」

綾波「・・・どうして？」

Z23「あなた方は・・・！」

ジャベリンとラファイは二人を心配する反面、二人のの行動に綾波とニーミはなぜ敵を助ける行為をしたのかと疑問を抱くがそんな暇を与えるムートーではない。もう一度4人を襲おうと旋回して上空から襲い掛かり、クイーン・エリザベス達『KANSEN』がどうにか動くようになった艦装から対空砲や砲弾を浴びせるがそのほとんどが避けられ、当たってもかすり傷程度にしかならずそのまま爪を四人に向けて構える。四人は次に迫ってくる死に思わず抱きしめあいながら目を閉じてしまう・・・

ムートー「グオオオオオオツ・・・!? ガラララララララララ!!」

その瞬間ムートーは何か気づいたのか、ジャベリン達に向けての攻撃を突然やめるとその場を後ろに飛んでセイレーンの残骸に降り立つと同時に羽を大きく広げて出現時と同じくらいの咆哮を上げながらある一点を見据える。その視線と行動はまるで自身を天敵を威嚇するようだった。

エンタープライズ「・・・何かに反応している？」

ベルファスト「ええ、まるで何かに威嚇しているように見えます」

エンタープライズとベルファストはムートローの突然の行動に何かあるのかと思案している、突然ムートローが視線を向ける方向から渡り鳥たちが一斉に何かから逃げるように飛んでくる

ロング・アイランド「うわ、鳥さんがいっぱいなの〜！」

ノーザンプトン「次から次へと何なのさ・・・」

渡り鳥たちの様子にKANSENと有人部隊が戸惑っていると、渡り鳥たちが来た方向に渦巻きが突然と発生する

『ザッパアアアアアアン!!』

渦巻の中心が大きく爆発すると水しぶきと共に中心から黒く巨大な何かが現れ、その場にいたムートーを除く全ての者が息を飲んだ

シンジ「あれは……！」

オイゲン「……フフツ、これはまたうれしい再会ね♪」

サラトガ「アハハ！　なんだかこの状況懐かしいね」

KANSENや有人部隊がその存在に慄く中シンジはその芹沢達に伝えられていた王である存在だと気づき、オイゲンは自身の友であり心の在り方を変えてくれた存在にまた会えたことにうれしく微笑み、サラトガはまたこうしてピンチの時に駆け付けてくれる状況に懐かしさを覚えつつ嬉しそうに再会を喜ぶ

それはかつて地上を支配していた恐竜のように圧倒的巨大な体躯をたくましく頑強な足で支えながら二足歩行でたたずみ、全身が黒い体表で背中の大きな背びれは剣山のごとく黒く鋭く尖っており尾の先まで続いている。恐竜のティラノサウルスに似た屈

強な頭部と鋭い牙を持ち、首元にはえらのような呼吸器官があつて太くがっちりとしている。彼が持つ目は猛禽類のように鋭くどこまでも見渡せ、その剛力を発揮する腕は太く屈強でその爪は刃のように鋭かった。その強さと大きさだけでなくその放たれる覇気で『王』だと周りの者を認識させる。彼こそが地上が今よりも濃い放射能で満ち溢れ、様々な怪獣が跋扈していた古生代ペルム紀からこの星の生態系の頂点に君臨していた『王たる種族』の末裔……

『怪獣王』ゴジラが初めて堂々と人類の前にその姿を現した

ゴジラ「ゴガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン!!」

ゴジラは王として、調律者としての役目を全うするため咆哮を上げながらムートーと

の戦いを始めた

シンジ said out

ゴジラ side

ゴジラ（まさか、ここでオイゲンたちと出会うとはな・・・）

ゴジラはムートーを前にしながら、久しぶりに再会できたオイゲンたちにうれしく思い、視線を彼女らに向けるとオイゲンは心からの笑みを浮かべながらこちらに小さく手

を振り、サラトガはうれしさのあまりかピョンピョンと跳ねながら手を大きく振っていた。ゴジラはそれに対して「久しぶりだな」と伝えるように低くうなずくとムートーへと向き直る

そもそもなぜゴジラがこの場所に現れたのか？

その理由は『地球の意思』からの頼みと今日の前にいるムートーが関係していた。『地球の意思』の『頼み』とは、目覚めたムートーの対処だった。本来ならムートーは何も自然に対して過度な破壊や殺戮をしていないわけではないが、この人間たちが繁栄すると同時に機械が跋扈する地上ではムートーの能力は危険すぎる物であり、主食も大地や海を汚染してしまう核弾頭などの人工的な核エネルギーであるため野放しにしておけば故意でなくと地上の自然は次々と汚染され、何より彼らの『目的』が果たされることがあれば天敵がほとんどいないに等しいこの地表の生態系が木っ端みじんに破壊されるのが確実であるため何としてムートーを仕留める必要があった

何より先ほどからムートーを見るたびにゴジラの本能が奴を倒せと叫び続けている。まるで古来から続く因縁に決着をつけると言ってるかのようにな……

ゴジラは知らないだろうが、ムートーは古来からゴジラの祖先に寄生をしてきた種族。故にゴジラとムートーは宿敵と言っても過言ではない関係なのだ。本能がそう訴えてくるのも無理もない

ゴジラ「ゴガアアアアアン！」

ムートー「ガララララ！」

ゴジラは咆哮を上げながらムートーに地鳴りと波を立てながら駆け寄ると、ムートーも咆哮を上げながら残骸から飛び立つと彼よりも速くその喉元に爪を突き立てようとする。しかしゴジラは難なく素早く近づいてきたムートーの動きに対応して逆にその小さな首元に噛みつく

ムートー「グオオオオンツ！」

KANSEN達の攻撃にはほとんど苦痛の声を上げなかったムートーだが、生物の急



所である首元を自身よりも巨大で格上なゴジラに噛みつかれることで大きく苦痛の声を上げる。さらにゴジラは噛みつくだけでなく、何度もそのムートーの体を残骸や海面へ大きく叩きつける。海面は面積が大きければ大きい程衝撃や強く、高い場所から落ちた際には高さによってコンクリートにたたきつけられるほどのダメージを与えられる。ゴジラはムートーを衝撃で体を何度も痛めつけて軋ませると体を回転させて、遠心力を強化した勢いでムートーを投げ飛ばす

大きく空中に投げ飛ばされるムートーだったが、空中で体制を立て直して旋回するともう一度ゴジラの正面から低空飛行で高速で迫る。ゴジラは海から頑強な足を引きあげて踏みつぶそうと振り下ろすが、ムートーをゴジラの踏みつぶしを紙一重で避けると同時に左腕の爪を足に食い込ませてブレーキをかけると同時にその勢いでゴジラの背びれがある背中に取り付く

ゴジラ「ゴガアアアアッ!？」

足に痛みが残りつつも、背中に乗りかかったムートーを払いのけようとする。しかし体が小さいムートーは腕が届かない場所に取り付いて、振り落とされないように後頭部

に当たる場所を嘯み続けている。ムートーはそのままゴジラの背中でロデオしながら背中の至る処を爪で突き刺しては切り裂いていく。いくらゴジラの強固な皮膚でも穴地場所を何度も攻撃されれば傷口となりゴジラは悲痛を上げる

『ドオオオオオオオン!!』

ムートー「ガララララッ！」

ムートーを中々引きはがせないでいると、突然轟音が響くとムートーの体に砲弾が命中する。ムートーは突然の横やりに痛みを感じずとも注意がそがれてロデオに失敗し体勢を崩す。ゴジラはそれに乗じて体をくねらせて腕の届くところにムートーを動かすとその翼を掴み強引に引きはがすと、海面へと一度たたきつけると空中に投げると回転を加えた尾の一撃をムートーの腹に叩き込んで吹き飛ばす。ムートーとの距離が開いたことを確認すると、砲弾の飛んできた方向を見るとオイゲンが艦装を構えていた

オイゲン「借りは返したわよコウモリ擬き？」

どうやら電磁パルスを食らわされた仕返しと共に援護してくれたようだ。軽く一言  
念和で「ありがとう」と伝えるとオイゲンはこちらに向かって微笑み、礼を言われてう  
れしかったのか頬を若干赤らめていた

ムートー「ガララララララ！」

すると吹き飛ばされていたムートーが残骸に乗りながら腕を赤く発行させて振り上  
げていた。おそらく邪魔されたことで一度優先目標をKANSENに切り替えて、無力  
化したうえでオイゲンたちを仕留めるつもりだと腹を読む。ゴジラはそうはさせない  
と体内の原子炉に似た器官を活性化させて莫大なエネルギーを生み出す

『ヴォン・・ヴォン・・ヴォン・・ヴォン・・ヴォン・・！』

その無尽蔵のエネルギー生み出していくと同時に体を駆け巡り、背鰭が尾の先端から  
胎動して広がるように青白い光を放ち始める。そしてそのエネルギーを口内と喉に集  
中させて口の中で発する生体電気を着火剤として熱とエネルギーを双眸と首元のエラ  
がチエレンコフ色に輝くと同時に爆発させる

『ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

そのエネルギーを口から『放射熱線』としてが放ち、巨大で青い炎の奔流がムートーへと直撃し膨大な熱がムートーの体表を焦がしながら残骸から吹き飛ばして後退させる

ムートー「グオオオオン・・・!」

ゴジラ（・・・おかしい、普段の熱線よりもうまく力を出せなかった）

しかし致命傷にはならず直撃したところを中心に負った大火傷に苦痛の声を上げるムートー。ゴジラも手ごたえを感じつつも決めきる事が出来なかつたことに違和感を覚えていた。通常の『放射熱線』なら小型のムートーくらい今の一撃で致命傷か即死に

できる威力を持つが、先ほどの熱線は熱線の勢いが弱くなりまるで火炎放射器の様で膨大な熱力もやや下回っていたのだ

ゴジラは知らないがムートーその電磁パルスを発生させ周囲の電子機器に影響を及ぼす能力が、体内の生体電気で点火して打ち出すゴジラの『放射熱線』の機能に干渉し、威力を大幅に低下させていたのだ

ムートー「ガララララ！」

ムートーは火傷を負った状態でも動きが劣る様子もなく、残骸を足場に天高く飛びあがる。逃がすまいとゴジラはもう一度『放射熱線』を放つため体内の体内原子炉を活性化させる瞬間、天高く飛びあがったムートーは急降下して自身の体重と急降下の勢いがついた一撃をゴジラの頭上に喰らわせる

ゴジラ「ゴガアアアアッ!？」

流石の渾身の一撃にゴジラも答えたのか、固い頭蓋骨によつて爪は通らなかつたが脳

を揺らされた影響で平衡感覚が狂い足元がおぼつかない。そこにムートーが襲い掛か  
らないはずもなく、ゴジラの喉元に喰らい付く

しかし相手はゴジラ・・・怪獣の王だ。長い間戦い続けることで鍛え抜かれたその体  
は生半可な力では傷つけることはできず、事実今ムートーはゴジラの喉元に出せる限り  
の力で食いちぎ網と力を込めているが分厚い皮膚と頑強な筋肉によって阻まれ、せいぜ  
い筋肉の表面にまでしかその牙は届かなかつた。なによりゴジラは長年戦い続けた戦  
闘経験と危機察知能力によって、小さい痛みでさえどのような攻撃をされたのかをある  
程度予想することができる。ゴジラは徐々に覚醒する意識と共にムートーの胴体を捕  
らえて、そのまま首から引きはがすと残骸へとぶん回し、同時に体内原子炉を活性化さ  
せる

『ヴォン・・・ヴォン・・・ヴォン・・・ヴォン・・・ヴォン・・・！』

体内原子炉の活性化に応じて背びれが尾の先端から首まで光始める。しかし先の体  
内放射とは違うようで双眸とエラの代わりに屈強で巨大な尾全体が輝いていた







ムートー「ガラララララララッ！」

その吹き飛ばれた中心部からムートーが方向を上げながら天に向かって飛翔する。その体の肩から胸にかけて大きな刀傷ができて鮮血を垂らしているという見るからに重傷を負ってしまい、これ以上の戦闘は間違いなく死ぬことになるかと判断してこの場をすぐに離脱していく

ゴジラ「グルルルルル・・・！」

ゴジラはそう簡単に逃がすまいと鼻息と唸り声を上げながら顔から海面に倒れ込んで潜水し追跡を開始しようとする。後ろからとある人間の兵士・・・シンジがムートーに対して怒号を上げる

シンジ「逃げるな！ お前を仇として殺そうとしている奴はまだここにいてぞ!!」

シンジの怒りに満ちた瞳と言動からゴジラはあのムートーはこの人間の報復する敵

であると見抜く

ゴジラ（復讐か・・・気持ちにはわからないことはないな、だが奴を殺すのは俺の役目だ）

前世での記憶から仲間を失うつらさや悲しみから復讐に走り、それを成し遂げてきたことは数知れないゴジラにとつてシンジの抱える心情はよくわかっていた。よく復讐は虚しいや悲しいに意味はないというが、復讐を果たすことで前に進むことや自分の中ではじめをつけることがあり、決して意味がない行為ではないとゴジラは思っている。しかし元よりムートーはこちらの獲物・・・シンジには悪いが譲る気はさらさらなく心の中で謝罪するとそのまま海の奥深くに潜ると同時にムートーの行く方向にただ進んでいくのだった

全ては自然と仲間と調和のために

ゴジラ said out

シンジ said

シンジ「……あれがゴジラか」

エンタープライズ「なんという力だ……」

人類同士の戦略と武力になる戦いとは根本的に違う単純な力同士のぶつかり合いである怪獣同士の戦いにシンジとエンタープライズは畏怖の言葉をつぶやき、エンタープライズのみならずその場にいたKANSEN達や有人部隊の全員が怪獣の力に圧倒され動くことはできなかつた

……オイゲンとサラトガはムートーを圧倒して退けたゴジラに感嘆の視線を向けて

いたが。すると仇がいなくなったことである程度冷静になったシンジがこの場においてレッドアクシズの指揮者であるオイゲンに提案を告げる

シンジ「……レッドアクシズ。これ以上の戦闘はお互いに無意味のはずだ、即座に撤退しろ」

シンジの言葉を聞いてオイゲンは周りの状況を確認する。呼び出したセイレーンの艦隊は全滅、怪獣の戦いあの余波でこちらの艦隊もボロボロ、ロイヤルの傍円により戦略的に不利、それだけわかるとオイゲンの決断も早かった

オイゲン「確かにここら辺が潮時ね。そろそろ帰るわよニーミ、もちろん綾波もね」

Z23「……了解です。そのうさ耳のあなた！ ラフィーでしたね？ 次に会うときはそのいい加減な態度、反省してもらいますからね！」

オイゲンはさすがに分が悪いと思いき撤退をニーミ達に促す。ニーミもそれに従うとラフィーに指差しして宣言するも、ラフィーは眠いのか体をゆらゆらと揺らし上の空で

何も聞こえておらずその様子を見てプンスカと起こりながらその場を後にする。綾波も二ーミに続くもその視線はシンジに向いていた

綾波「……………」

シンジ「……………」

シンジは綾波の視線でその心情は申し訳なきと悔恨に似た感情が生まれる。家族や仲間を守るため、軍人としての責務を全うするために彼女たちと故郷と戦うことになってしまった。もし自分が命令に逆らっても重桜に残っていれば何か変わっていたのではないかと考えてしまう。しかしもうすでに賽は投げられて過去は巻き戻ることはない……なら今できることとできるかもしれないことをやるしかない、そうおもっている。眠そうにしていたラファイが少し眠気が覚めたのか姿勢を正して綾波に向き直る

ラファイ「綾波。　バイバイ……またね」

綾波「っ！」

ラフィーの友達に対するあいさつと軽く手を振る行為に、綾波は戸惑いを少しだけ見せると顔を俯かせてニーミ達の後が続いていった。そんな様子を見てジャベリンはラフィーのように何かを言おうとするも言葉が出すことができなかつた

瑞鶴「勝負は預けたぞ、グレイゴースト！　そして次こそ必ずシンジは取り返す！」

翔鶴に介抱されながら瑞鶴はエンタープライズに再戦を申し込むと同時にオイゲンたちと同様に撤退する。するとまったく同時に負傷や疲労からエンタープライズが体勢を崩しながら気を失つてしまい、傍にいたベルファストが彼女を支えた

シンジ「エンタープライズ！　ベルファスト、彼女の容態は？」

ベルファスト「心配はありません。　どうやら疲労から気を失っただけのようです」

シンジ「そうか。　それじゃあ俺たちも母港に帰ろうか」

シンジはエンタープライズを心配し、ベルファストに容体を確認する。ベルファストは笑顔で気を失っただけと伝え、大事な無い事がわかって安心すると自分たちも母港に帰るために各自に指示を出す。電磁パルスで動けなかった量産型はEMP対策されていたため行動可能な『バード・ネスト』にけん引させて動かすと同時にそしてとある想いを浮かばせていた

シンジ（・・・どうにか重桜に行つて、赤城から真意を聞きたいな）

そう思いながらシンジは仲間とともにその海域を離脱していった

少し先の未来でその思いが思わぬ形で実現するとは思わずに・・・

シンジ said out

ゴジラ said

シンジ達が海域を撤退して十数分後……ムートーを追跡していたゴジラだったが、いかんせん相手は空を飛ぶ怪獣。あつという間に気配を感じれる距離から離れてしまい見失いながらも、その重傷で自分を振り切るとは思ったより根性があると逆に感心しながらもあることを危惧する

ゴジラ（速くアイツを見つけなければ……奴と出会い、事を成す前に）

ゴジラは海底を潜行しながら、地上へと出た際にムートーが奴に話しかけている会話を聞いたことで地球の意思からの頼みの重要性を理解していた。そのことからムートーと奴の居場所を早く見つけなければと自身の第六感を研ぎ澄ませると、ふと先ほど



あつたオイゲンたちを思い出す

ゴジラ（それにしてもオイゲンたちとは久しぶりに会つたな。サラトガは相変わらず元気そうで、長門とはまだあつていないまた思い詰めていないといいが、オイゲンは・・・前よりも笑顔が良くできて綺麗になつたな）

久しぶりの再会にうれしさを覚えながら三人を振り返る。サラトガは相も変わらず元気であると同時にどこか歴戦の雰囲気を持ち、長門はまだであつてはいないから何とも言えないが思い詰めていないか不安を持ち、オイゲンは笑顔が作り笑いでなかつたことに徐々に変わってきているのだと友として嬉しさを覚える反面でその笑顔がモスラと同じくらいにきれいに見えていた。思い返すたびに心臓が本少し高鳴っている気がするがいったんその事は置いてある事を思う

ゴジラ（そういえばあの場所に板という事は少なからず彼女たちはこの戦争に関係しているだろう。この際当事者に聞いた方がセイレーンやこの戦争の発端もより詳しく聴くことができるかもしれないな、そうと決まれば・・・）

ゴジラはオイゲンたちならばよりこの戦争やセイレーンについて詳しく聴けると踏み、ムートローの搜索と並行しながらオイゲンたちの後を追う。その行先はおのずと重桜へと向かっていった

全てはこの星のために・・・

其れこそが調和をもたらす者でもあり、王である彼の役目なのだから

## 9話 新たな仲間と亡霊への問答（前編）

エンタープライズ s a u d

とある病院の一室にてエンタープライズとベッドに身を預ける両足を失った女性がいた

その女性は長い銀髪と紺色の瞳をしているどこかほかなげな雰囲気を持ち、エンタープライズの姉である『ユニオン所属・ヨークタウン級航空母艦1番艦・ヨークタウン』。彼女は窓から見える海を見ながらエンタープライズに一言つぶやく

ヨークタウン「見て、今日は海が綺麗よ？」

エンタープライズ「・・・海を美しいと思ったことはない。私たちが生まれた時から海は戦場だった。ヨークタウン姉さん、あなただって海で・・・」

エンタープライズはヨークタウンの失った足を見ながら言葉をつなげる。しかし彼

「女の言う通り彼女達KANSENが初めて見た海は確かに戦場であったことは紛れもない事実であり、今窓から見える戦火のかけらもない静かな海でさえ戦場と変わらないように見えている。ましてや海で足を失った姉の事を思えばなおさらだ。しかしヨークタウンはその妹の海への感想を否定する

ヨークタウン「それは違うわ。 私たちはただ忘れてるだけ、私たちは艦が人の形を成したもの。 海の美しさは私たちの魂の奥に刻み込まれているわ」

ヨークタウンの言う通りKANSEN達はキューブによって思いと艦の記憶によって人の形を成したもの。故に人が海に思いを馳せた結果生まれたのが船なのだから、人が海に対して思った美しさがどういふものかはどういふ形であれ艦である自分たちに刻まれているとヨークタウンは思い、妹に言い聞かせながら彼女の手を取る

ヨークタウン「人があなたに込めた思いにいつかきつと思いつける日が来るわ。 碧き航路に祝福を・・・私のかわいい妹エンタープライズ」

姉の微笑を見ながら言葉の意味を少しの間考えようとすると、徐々に自身の周りの景

色がぼやけ始めて最終的にすべてが真つ暗となった

エンタープライズ「・・・姉さん・・・」

気が付くとそこは薄暗い生活感がまるでない自室だった。あるのは必要最低限の家具と机に並べられたレーションや缶詰しかなく、まるで独房のようなもの寂しさがある。そして今のが夢であると気づき、昔に教えられた言葉の意味をいまだ理解できず医いるなど思いながらももう少しだけ眠ろうとする

??? 「あら？ 可愛らしい寝言ですね」

エンタープライズ「っ！」

自室に見知らぬ声を聴いた瞬間、戦士として身についた聞き察知能力によって眠気がふと牙されると即座に起き上がる。同時に謎の人物によつて締めていたカーテンが開かれて日光が部屋全体を照らして、思わず光に慣れていない視界を庇いながらその人物を確認する

ベルファスト「おはようございます。 ゆっくりとお休みになれましたか？」

エンタープライズ「あなたは・・・」

その長い銀髪と優雅なたたずまいで自分を訪ねてくるメイド姿の彼女を見て、先の戦いで自分たちを助けてくれたロイヤルのKANSENだと思い出す。そして名を思い出す前にメイド・・・ベルファストがスカートをつまんで軽く持ち上げて名乗りだす

ベルファスト「メイドのベルファストでございます」

そしてベルファストはエンタープライズに向けて優しく微笑んだ

その後すぐに身支度を整えると、助けてもらったことに礼を言っつていつものレーションを持って自室を出る。すると前の戦闘の事を気遣ってベルファストが提言する

「安静にしておられた方がよろしいのでは？」

「この程度の傷は戦場の常だ。」

「危ないところだったのですよ。」

しかしエンタープライズはこの程度問題ないと拒否するが、ベルファストの言う通り

命の危機であつたことも事実だ

「そうだな。 貴艦に感謝する。」

だがその言葉も簡潔な礼で終わらせると、ベルファストは若干むくれる。そしてそのまま寮から外へと出るため扉の持ち手に手をかける

ベルファスト「朝食のお時間ですが？」

エンタープライズ「これで十分だ」

そこにベルファストに朝食を奨められる。実際にもうすでに食堂では朝食のために KANSEN 達がたむろしている時間帯だが、彼女は携帯したレーションを見せて外へと出ていく

ベルファスト「・・・はあ・・・」

それを見送るとベルファストは彼女に気が付かないほど小さく、先が思いやれると溜



息を吐くのだった

エンタープライズside out

ジャベリンside

その頃食堂では多くのKANSEN達が料理を楽しむ中、ジャベリンとラフィーも食事をとっていた。ちなみにラフィーはハンバーガーでジャベリンはサンドイッチをほおばっている・・・余計だがこの時サラトガが他の子達の料理に余計なひと手間を加えて阿鼻叫喚を作っていた

するとハンバーガーを美味しそうに食べていたラフィーだが、先ほどからジャベリン

がほとんど食が進んでいない事に気づく

ラファイ「ジャベリン、食べないの？」

ジャベリン「えっ・・・あ、ごめんなさい。ちよつと考え事してて」

ジャベリンは食事を再開しながら先の戦いでラファイの行動を思い出す。ラファイは敵としての綾波とZ23に全く恐れずまるで近しい友人のように接していた。その点では自分は二度であつて何もできなかったうえに、いまだ心の中でもややもやとした思いと綾波たちに対する答えが出てこないことに気落ちしている

「ずいぶんと落ち込んでるな。食事の時は暗いと味なんてレーションの様に不味くなるぞ。」

すると後ろから最近聞きなれた声が聞こえて後ろを振り向くと、そこにはあちこち訪台や応急処置が施された指揮官のシンジがスクランブルエッグとウインナーとパンという言わゆるユニオンらしい定食を持って立っていた。シンジは二人の前に空いた席に着くと挨拶を交わす

シンジ「おはようジャベリン、それにラフィーも」

ジャベリン「お、おはようございます指揮官」

ラフィー「ん・・・おはよう指揮官」

シンジは軽く挨拶を交わすとジャベリンもシンジの当然の登場に遅れながらも挨拶を返して、ラフィーも挨拶を返す

ラフィー「そういうえば指揮官・・・怪我は大丈夫・・・？」

ジャベリン「そうですよ！ 怪我は大丈夫なんですか？」

シンジ「ああ、さすがに医師にはかなりどやされてしばらくは戦闘は厳禁とくぎを刺された。けど日常生活や執務には問題はないよ」

ラフィーがシンジの大げがの具合を思い出したことでジャベリンもその事を思い出して二人で問い詰めると、シンジは苦笑いして医師にきつく言われた時のことを思い出しながら戦闘も無理だともう動けるほど回復したことを二人に伝えると二人はほっとしたように胸をなでおろした。するとシンジはジャベリンに向き直り話を持ち掛ける

シンジ「ジャベリン、やっぱり綾波たちの事で悩んでいるな？」

ジャベリン「え、えつと．．．はい。　　いったいどうすればいいかわからくて．．．あの時黒い怪物に食べられそうだった綾波ちゃん達をみたらいつの間にか体が動いてましたけど．．．」

ラファイ「うん．．．ラファイも同じ」

シンジの問いにジャベリンは肯定する。あの時黒い怪物．．．ムートーの襲来時、捕食されようとした綾波たちを見た瞬間に理屈や感情など関係なく気づけば体が動いて助けていたと吐露する。ラファイもジャベリンと同じらしく同意する

シンジ「なるほどな．．．なあジャベリン。今でも綾波たちを敵と思ってるか？　　ちなみに指揮官がどうか話だぞ」

ジャベリン「．．．敵じゃないです。　　敵だと思いたくないです．．．」

シンジ「そうか．．．ならその気持ちを大事にするんだ。　　そうすれば答えは必ず見つかるさ」

シンジの問いにジャベリンは悩んだ結果の答えを返す。シンジはそんな彼女の応えになった臆すると彼女の思いを激励する。そしていつの間にか完食していた朝食をもってシンジは立ち去ろうとするが最後にシンジはジャベリンにある事を伝える

シンジ「ジャベリン、最後に言わせてくれ。良く人が人助けるのに理由なんてないというが、あれは嘘だと思うんだ。敵だろうと関係ない人だろうと助けたいから助けたいと……救いたいから救うと必ず理由があり、俺だって守りたいと思うからここにいるKANSENや兵士たちに市民を守るんだ。問題は どうして助けたいと思ったのか、ジャベリン……君がなぜ綾波たちと戦いたくないのか……どうして敵と思いたくないのか……それがわかれば君の答えはすぐにわかるさ」

シンジは自身の自論を伝えるとその場を去っていく。彼にとって親しい者が重桜にたくさんいる身として彼女の気持ちは大変理解できるからこそその言葉だがジャベリンはその言葉を聞いてほしいぶ楽になると、まだ答えは出ないけど改めて自身の思いを大切にしてゆつくりでもいいから自分なりの答えを出そうと決心する。そして決心と比例してか先ほどとは違って元気に朝食をラフィーとともに完食した

ちなみにサラトガの方では己のいたずらにかなり注意されて絞られているのは別  
話

ジャベリン side out

ホーネット side

く同時刻・軍港付近く

同時刻において港でホーネットとハムマンが新しく着任したKANSENを出迎え  
ていた

ふわふわな銀髪ロングヘアにナースキャップを被り、修道服に似た服と短いスカート  
とはニーソックスにガーターベルトであるという服装をしている背丈は低いが豊満な  
体つきでどこか母性を感じる少女：『ユニオン所属・工作艦・ヴェスタル』。ホーネッ

トはヴェスタルに近づくと再会を祝すかのように背中をポンポンと叩きながら抱き着いた

ホーネット「ようやく工作艦が到着だよ、助かったあ！」  
ヴェスタル「遅れてごめんなさいね？」

ホーネットのハグにヴェスタルは若干苦しうだが、久しぶりに会えた友人にあえた喜びの方が勝り笑顔で彼女の感謝を受けとって戦いにおく手は事に謝罪した。すると後ろでどこかモゾモゾしいハムマンが口を開く

ハムマン「……ヨークタウン姉さんは元気？」  
ヴェスタル「……」

艦であったところからの付き合いが長く姉として慕うハムマンはヨークタウンの容態を聞くと、ヴェスタルは沈んだ顔で無言になる。その事からホーネット達はある程度察した

ホーネット「まあ、相変わらずってところかな・・・？」  
ハムマン「ハムマン」・・・そう・・・」

姉として慕う人の状態を聞いてハムマンは沈んだ気持ちとなる。するとホーネットは彼女の後ろに回り込むと・・・

ホーネット「フン！」

『バサアッ!!』



ハムマン「きやあああああつ!?」

おもいつきりハムマンのスカートを捲りその純白の下着があらわとなる。自分の状態を理解するとハムマンは顔を真っ赤にすると同時にスカートを下ろしながら後退すると下手人であるホーネットに吠える

ハムマン「なっ何をするのだーっ!!」

ホーネット「私の姉ちゃんだぜ? 心配すんなってー!」

ホーネットはいたずらが成功した子供のようにと笑みを浮かべながらそう言う。頬を膨らませるハムマンとヴェスタルはこれがホーネットなりの励ましかと長い付き合いかから知っているため、その気持ちを受け取ってようやく二人は沈んだ気持ちから笑みを浮かべた。するとヴェスタルがある人物について一言尋ねる

ヴェスタル「それで、エンタープライズちゃんはどうしてます?」

ヴェスタルの言葉で場の空気が止まり、ホーネットもさすがに苦笑いしかできないのであった

### 数十分後

それからホーネット達はヴェスタルと共に半壊どころか沈没寸前のエンタープライズの艦とご本人のまえに連れていくと……

ヴェスタル「・・・フウ——ッ！」  
エンタープライズ（・・・まずいな）

ヴェスタルは怒りが強すぎるのか吸って吐いてを繰り返して感情を沈めている。ホーネットはもちろんエンタープライズでさえ何か今言えば雷が落ちるがごとく説教の嵐が飛んでくるとわかり黙るしかできなかった。するとある程度落ち着いたのかヴェスタルは見事に壊れた艦と大弓を交互に見てからエンタープライズに言葉を投げる

ヴェスタル「ずいぶんと無茶をしましたね！ エンタープライズちゃん！」  
エンタープライズ「・・・やむ得ない事態だった。」

ヴェスタル「自分を大切にしなさいといつも言ってますよね！」

百歩譲って激戦だったとしてもエンタープライズの傷は限度を超えており、それを見て今回こそ沈んでもおかしくなかったと瞬時に見抜いたヴェスタルは心配するからこそ説教をエンタープライズに掛けている

エンタープライズ「私たちは戦うための存在だ。自分を大切にする理由はない」

しかしエンタープライズはそれでもその言葉を受け入れることはなかった。そして聞く耳を持たないかのように彼女たちに背を向けてその場を去ろうとするが・・・

ヴェスタル「もし何かあつてエンタープライズちゃんがいなくなったら、私たちもヨークタウンもこの母港にいるみなさんも悲しみますよ！」

エンタープライズ「・・・」

その言葉を聞いてエンタープライズは一瞬歩を止めたが、少しして歩をまた進めてその場を去ってしまう。そんな彼女を見ながらヴェスタルは頬を膨らませるのだった

ヴェスタル「もう！ 世話の焼ける子!!」

ホーネット（姉ちゃん・・・）

ヴェスタルがそういう中、ホーネットは姉の背中を見ながらふと思う。昔は少なくともあれほどひどくはなかったがヨークタウン姉さんが倒れてからがまさに人格が変

わったと言っても過言ではないほど自分を追い込んでいった。そんな姉たちを見て  
もつと自分がやれていたら何か変わったのかと思ってしまうばかりだった

ホーネット said out

シンジ side

エンタープライズが説教を受けているその頃、シンジはジャベリン達と別れた後  
ウエールズとイラストリアスに合流して女王陛下・・・もといクイーン・エリザベスの  
ために用意されたロイヤル庭園で女王陛下たちとお茶会をしながら話を始める。まず  
一つ目の話はエンタープライズについての問題だった。その場にいたシンジ、ウエール  
ズ、イラストリアスもその実力は疑いの様の無い物だとわかつてはいたがその行動はあ  
まりにも軽率で危険・・・故に自分たちが支える必要があるとしてクイーン・エリザベ

スに掛け合つた

クイーン・エリザベス 以降 Q・エリザベス「話は分かつたわけど．．．うゝん／＼．．．八ッ！」

シンジ達の要件を聞いて申したいことを察すると同時に菓子を口に入れて美味な味から女王の顔から体形相応の幼女のように頬が緩む。そんなところをシンジ達だけでなくその場にいた地震と一緒にやってきたフツドにウオースパイトにユニコーンが見ていることに気づきすぐに表情を立て直して問い直す

Q・エリザベス「けれど下僕．．．それって、ユニオンの問題ではなくて？ 私達が口を挟む事ではないでしょうか？」

ウエールズ「それは．．．」

ユニオンの問題ならユニオン内で片付ける．．．クイーン・エリザベスの言う事は筋が通っている。ウエールズはどうか提言しようとするがうまく何を言えいいのか言葉詰まらせる

ユニコーン「でもエンタープライズさん、ユニコーンの事助けてくれたよ

するとそこにユニコーンがエンタープライズに助けられたことを話す。シンジとイラストリアスは彼女のそんな言葉を聞いて笑みを浮かべると続くようにクイーン・エリザベスに向き直る

シンジ「陛下。エンタープライズはユニオンのエースであり今やその象徴とも言える人物です。故に彼女の存在はユニオンのKANSEN達の士気や戦力面にも彼女をこのままにしておくのはこちらとしては勿体無い上にエンタープライズ自身のためにもなると考えています」

イラストリアス「私も指揮官と同じ意見ですわ。『セイレーン』に新たな陣営『レッドアクシズ』だけでなく全く未知の存在『怪獣』が現れた今、彼女の力はきつとこれからの戦いで必要になります。ここで終わって言い方ではありません」  
フツド「お二人は彼女を買っているのですね、理由を聞いても？」

理由を言いながら言い切る二人にフツドがそこまでエンタープライズを買う理由は何かと聞くと、シンジはフツと笑みを浮かべた発言する

シンジ「彼女の戦士の輝きは相当だったからさ。それに今はロイヤルやユニオンとか関係なく彼女は俺たち『アズールレーン』の仲間、不愛想で危なっかしくとも真つ向から受け入れて背中を守ってやらないと指揮官は務まらないさ」

イラストリアス「聖なる光の導きですわ♪」

シンジのいう戦士の輝きと言うのは彼女の戦いぶりを見ていたウエルズも同じ考えで共感し、指揮官らしい彼の言葉に皆は彼らしいと納得する。しかし次のイラストリアスの満面の笑みで答えた言葉に一同の空間がまさに一時停止してしまい雰囲気があつという間に崩れたのだった

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ウォースパイト「・・・・貴女はいつつもソレねえ」

フツド「けれど、彼女の勘はこれでなかなか侮れませんわ。そう思わなくて？」

ウォースパイト「むう・・・・」



ウォースパイトが沈黙を破つてため息をつくも、フッドの言葉通りイラストリアスの勘は侮ることはできないほど鋭いのも事実だった。そこに畳みかけるようにウエールズも言葉を発する

ウエールズ「二人の言う通り『セイレーン』に『レッドアクシズ』だけでなく『怪獣』の問題もある以上、エンタープライズは戦力的にもこの基地の主力であり要となる艦です。彼女の抱える問題は見過ごすわけにはいきません」

3人がエリザベスに僅かに頭を下げるとクイーン・エリザベスは少しの間考え込むと、自身の右腕とも言えるウォースパイトに目を向けた

Q・エリザベス「ウォースパイト。貴女はどう思う？」  
ウォースパイト「私は陛下の判断を信じます」

ウォースパイトはそう答えるとK・エリザベスは再び思考すると不敵な笑みを浮かべて3人に向き直る宣言する

Q・エリザベス「そこまで言うなら見定めてあげるわ！ エンタープライズ、彼女がどんな艦なのかをね！」

エリザベスの答えにシンジたちは互いに顔を合わせて笑みを浮かべる。そしてK・エリザベスは自身の後ろに控えていた『ロイヤルメイド隊』のメイド長ベルファストに声をかける

Q・エリザベス「ベル！」

ベルファスト「畏まりました陛下」

ベルファストはK・エリザベスに綺麗にお辞儀をするとその場を後にする。シンジも彼女ならエンタープライズを見定める人として最適だと判断する。ベルファストがその場を去るのを確認するとクイーン・エリザベスはシンジに声をかける

Q・エリザベス「さて下僕。この間の頼みも含んでこれは貸しよ♪ いいわね？」

シンジ「分かっています」

K・エリザベスは前の救援と今回のエンタープライズの件で大きな貸しであると感じに改めて伝える。シンジは返事をするもいったい何で借りを返す事をさせられるのだろうと内心げんなりしていた。余談だが前は大量の荷物持ちや多くの買い物、果ては口イヤルの輸入をよりしやすくする様にさせられた

Q・エリザベス「なら良いわ。それで『怪獣』についてだけど、あれを知っているみたいなサラトガはどこかしら？」

シンジ「ああ、それについては先程順序が変更することになったのです」

Q・エリザベス「？ それはどういうことなの？」

シンジ「実は・・・」

シンジはなぜ怪獣を知るサラトガがここにはおらず、順序が違ってしまったのかを説明する

実はシンジがジャベリン達と別れた直後、自身のスマホから連絡が入った。確認する

と連絡先はモナークでありすぐさま応答するとそれはモナーク・・・正確にはモナークユニオン支部からの者であり、その内容は怪獣の出現を知ったモナークは表舞台へと出ることを決定したという事とその先駆けとして怪獣に詳しいモナークの重要人物をこの母港に送っているという知らせだった。故にシンジはかじっている程度の知識と正確かなサラトガの手がかりよりも長年怪獣を研究してきた組織の重要人物の方が信憑性も高く実際整備員などの戦場に出なかつたことで怪獣をその目で見なかつた人員も信じるだろうという考えに行きつき本格的な説明はその人物が来てからの方が良いと判断したので

しかしそうはいつでもロイヤルの王族であるK・エリザベスに対して何も報告できないというのは失礼な事・・・故に自分が知り得る限りのことを報告した

1つ・・・・彼らは人類誕生前からこの星に存在していた巨大生物であること

2つ・・・・その怪獣たちを第2次世界大戦前よりも研究してきた組織がモナークであること

3つ……今回現れた黒い翼を持つ怪獣は重桜で管理していたが、目覚めてしまい自身の両親の仇である『ムートー』であること

4つ……怪獣たちの中で格上であり生態系の頂点に立っているのがムートーととも現れた『ゴジラ』であること

5つ……現在モナークは表舞台から出ることを決定し、その先駆けとしてこの基地に組織の人間が怪獣の説明で派遣されていること

全部で5つの事をその場にいた面々に伝え終わるとその反応は差異はあった物の、ほとんどが驚愕と困惑の表情で締められた。しばらく誰もが沈黙を貫くがクイーン・エリザベスはその沈黙を破る

Q・エリザベス「……事情は分かったわ。けれど下僕、あなたの仇を討ちたいという気持ちはわかるけれどそれであなたも傷つき死に急ぐ事はあなたを愛した両親と信じてくれる部下たちの侮辱だと理解なさい。決して早まった行為はするんじゃないわよ?」

シンジ「・・・肝に銘じておきます」

クイーン・エリザベスの忠告を聞いてシンジは頭を下げて聞き入れる。確かに敵討ちで忘れていたが、父との約束である家族を守る事を放棄していた。さらにまるでついでくるように赤城たちを置いて両親の後を追うことになればそれこそ両親に顔抜きはできないだろう

ウォースパイト「それにしても私たちが艦であった時代からそんな組織が存在していたばかりか、大昔から怪獣の存在があったなんてね」

フツド「ええ、まるで映画や小説の中の出来事の様です」

ウォースパイトとフツドもまさか昔から自分たちの知らないところで彼ら怪獣が存在し、それを研究する器官があるとはまさにSFとしか思えない事態のため息をつくばかりだった。するとクイーン・エリザベスは話題を変えるように別件を持ち出す

Q・エリザベス「まあ、それなら怪獣の件はその組織の関係者が到着した時に持ち越すわ。それはそうとして私たちと同時刻に本国から新しい増援が到着したわ。シ

ンジ、イラストリアス、あなた達と親しい者達もいるわ」

シンジ「俺たちと親しい者達ですか？」

Q・エリザベス「ええ、もう入ってきていいわよあなた達！」

自分たちに親しい者と聞いて首をかしげると、クイーンエリザベスの一声で庭園の出入り口である扉から数人のKANSENと年若い青年に率いられた人間の兵士達が入ってきた

黒と白のゴスロリなりボンでツーサイドアップに纏めても地面についてしまうほどの長い銀髪、黒基調のゴシック風のドレスと大きな胸に挟まれて隠れてしまったお洒落なゴシックネクタイ、イラストリアスと同等に強烈で大きい胸を持つダイナマイトな体形、イラストリアスの妹で三女に当たりそのお嬢様とわかる『ロイヤル所属：イラストリアス級航空母艦3番艦：フォーミダブル』

黄金の月桂冠を被った豪奢で長い金髪、金の飾りが施された前が大胆に開いた純白のシースルーのドレス、彼女も姉であるイラストリアス譲りの豊満さがあふれ出る体形、

彼女もイラストリアスの妹で次女に当たり右手に持った杖と追わせて全体的な雰囲気  
がギリシヤ神話に出てくる女神のようである『ロイヤル所属：イラストリアス級航空母  
艦2番艦：ヴィクトリアス』

白黒のレースのカチューシャで纏めた銀髪のボブヘア、首にはベルファストと同様  
の鎖が付いた首飾り、纏っているのは白系に黒のアクセント入りのモノトーンである胸  
元が多きく露になっているエプロンドレス、メイド長ベルファストに引けを取らない豊  
かな胸を持つ体形、彼女は携える長剣も相まってメイドでありながら騎士を彷彿とさせ  
る『ロイヤル所属：ダイドー級第2グループ：シリアス』

白黒のレースのカチューシャで求めた青みがかった銀髪の長髪、両腕の手首には枷の  
ようなアクセサリ、纏っているのは白系に黒のアクセントが入ったモノトーンである  
胸の下半分が小さく露になっているエプロンドレス、シリアスと同等の大きさを誇る胸  
を持つ体形、シリアスと同様に背中に携える長剣も相まって彼女もメイドでありながら  
騎士を思わせる『ロイヤル所属：ダイドー級第1グループ：ダイドー』

黒いリボンでまとめた腰まで伸びている手先が若干ロールしている金髪のツイン



テール、纏っている服は胸元が大胆に開いた黒を基調として白と金が入りじまった超ミニのワンピースにそれを覆い隠すほど大きな赤い軍服、太ももも隠すほど長く黄色の刺繍が入った赤いハイブーツ、気が強く居丈高であるゆえに全体的に気高い女軍人を思わせる『ロイヤル所属：ネルソン級戦艦1番艦：ネルソン』

薄紫を帯びた一部三折りされた銀色の長髪、纏っているのは上から色が青と白で腋や肩や二の腕が大きく露出した海軍服と下は胸元が大きく露出した黄金のラインが入った白のトップスと同じく黄金のラインが入った白いプリーツスカート、ロングブーツを履いている。姉であるネルソンとは正反対で軍人とは思えない優しくおっとりとした雰囲気を持つ『ロイヤル所属：ネルソン級戦艦2番艦：ロドニー』

そして彼女たちの横に並ぶのは『ロイヤル』の有人部隊で誰もかれもが屈強で精錬されたへしたちである。そしてそんな彼らの隊長を務めるのは彼らの前に立つ中性的な顔立ちをした茶髪の年若い青年・・・『ノア・トレスラアモ』。

しかし彼はただの兵士ではなく、エスパ・・・いわゆる超能力者である。幼少の時に能力に目覚めて以来能力のコントロールを可能にしながら、戦争に巻き込まれて両親

を失った悲しみからももう誰にもこんな思いをしてほしくないと言へたと軍へと入隊する。そして超能力で第六感的に人間では感知することが出来ない波長や精神感応を感知、障害物越しから相手を確認する透視能力、物体を自在に操るテレキネシスを用いて味方や敵の思考を読み取って誰を狙ってどこに攻めようとしているのかを見抜き、的確にサポートするという数々の戦績を上げてきた

シンジとは大戦時とともに背中を預けあつた戦友と言う関係で、ノアもシンジの善い心の持ち主だとわかつたことから親しくなり、遠く離れた後もよくプライベートで連絡しあつては相談を気兼ねにしあつていた。するとイラストリアスは最愛の妹たちを見るや否や笑顔でヴィクトリアスとフォーミダブルに駆け寄つた

イラストリアス「ヴィクトリアスにフォーミダブル！ まさかあなた達が来るなんて、私とっても嬉しいですわ！」

ヴィクトリアス「久しぶりね姉さん、私も姉さんと過ごせるなんて嬉しいわ！ 私がいればこの戦いもうまくいくはずよ」

フォーミダブル「ヴィクトリアス姉さん、陛下の前なのだからもう少しお静かに。」

久しぶりですわねイラストリアス姉さん、後で再会を記念して後で3人だけのお茶でも

「いかがかしら？」

久しぶりの姉妹同士の再会にイラストリアスたちは話の花を咲かせて楽しく談笑を始める。そこにユニコーンも加わりさらに話が盛り上がっていった……。こうして4人そろってある育った部分を見ると本当にしまいだなど思ってしまった有人部隊は少ない無いは余談である。そして同時にシンジもまた久しく会えなかった友と再会できたことに喜んでいた

シンジ「ノアじゃないか！ 久しぶりだな、しばらく会わないうちに隊長になったんだな」

ノア「こつちこそ久しぶりだねシンジ。 うん、階級が最近上がったと同時に隊長に任命されたんだ」

互いに久しぶりの再会に笑顔を浮かべ、互いにまた戦えることを祝う。しかし互いの昇級を祝い終わるとノアは表情を暗くしてある件についてシンジに聞く

ノア「そういえばシンジ……。ジョーさんの事は聞いたよ。……。残念だったね本

当に……」

シンジ「……ああ」

ノアもジョーに世話になった一人、ジョーの死を聞いた時はノアも大きく心に影を落とした。しかしノアはシンジの心を覗き込まずとも、誰よりも悲しく怒りに燃えているのを察していた。そしてシンジの肩にきずかうように手を置いて言葉を送る

ノア「シンジ……君が抱えてる気持ちにはわかるよ。僕たちを巻き込みたくないってこともね、でも君を親友として何もしないで無茶はさせたくない。だから抱え込まず僕たちを頼ってよ？　僕らは仲間なんだからさ」

ノアはシンジに仲間だからこそ自身の問題に巻き込みたくないと思ひの気持ちはうれしく思う。しかしただ一人で復讐と言ういばらの道に行かせる喉親友として看過できるわけがない。友でもあるのだから……互いにその業を背負ってやるのが真の仲間だとノアは思い、手を差し伸べた。シンジもノアの言葉を切っ掛けに涙を一筋流す

シンジ「ッ！……ああ、すまないな。この戦いを早く終わらせるために、仇を討

つために力を貸してくれ」

ノア「もちろんだよ」

良き友を持ったことに感銘を受けると同時に感謝するシンジの言葉をノアは当然のように受け入れて力強く握手を交わした。男同士の誓いを立てるように・・・するとクイーン・エリザベスがノアに声をかける

Q・エリザベス「そろそろいいかしら？ 久しぶりねノア、遠路はるばるよく来てくれたわ！」

ノア「陛下のご命令ならすぐに駆け付けます」

Q・エリザベス「良い心掛けよ。そちらもよく来てくれたわねシリアス、ダイドー、ネルソン、ロドニー？」

クイーン・エリザベスはノアの功績とロイヤルでの鉱石から下僕ではなく本名で呼ぶほど信頼している。だからと言ってシンジよりも親しいというわけや依怙鼻負しているわけは無い。クイーンエリザベスはノアに本国から遠い基地まで来たことにねぎらいをかけるも当然のことであるとノアは言い、その心掛けに感服するとシリアスたちに

も労いをかける

シリアス「ご機嫌麗しゆうございます陛下。もったいなきお言葉です」

ダイドー「ロイヤルメイドとして当然のことです」

ネルソン「命令とあれば即座に駆け付けるのは当然です」

ロドニー「お褒めに頂き光栄です」

しかし四人は当然のことだと労いの言葉を受け取るも、陛下の言葉ならこれくらいのこと当然だと言いつける。これだけでクイーン・エリザベスがどれからの忠誠をささげられている指導者か一目でわかるだろう。するとシリアスがクイーン・エリザベスのカップの中身が無くなっていることに気づき、ティーポットを手に取るとカップに注ぎ込むと陛下に合わせて砂糖を一さじ加える。その様はベルファスト同様にメイドと言つて差し支えない姿だった。クイーン・エリザベスはその紅茶を一口おいしそうに口に含ませたが……

Q・エリザベス「ブウウウウウウウツ!？」

シリアス「陛下!？」

次の瞬間クイーン・エリザベスは紅茶をすべて噴出した。シリアスは即座にクイーン・エリザベスに駈け寄るとクイーンエリザベスは涙目で睨みながらシリアスに怒号を飛ばした

Q・エリザベス「シリアス！ またあなた砂糖と塩を入れ間違えたわね、海水と同じくらいしょっぱいわよ！」

シリアス「も、申し訳ございません！ どうかこの卑しきメイドに罰を！」

実際シリアスが入れた物は砂糖ではなく、塩であったため甘い紅茶ではなく海水並みにしょっぱい紅茶になっていたのだ。それに対してシリアスは不甲斐ない自分に罰を要求し、それに応じてクイーン・エリザベスは彼女の大きな胸を思いっきり引つ叩いた。若干別の私怨が混じっているが……

ウォースパイト「シリアスのメイドとしての仕事ぶりは相変わらず残念ね」

フツド「フフツ、けれど前と比べてシリアスもメイドとして手腕も良くなっているのも事実ですわ」

ウォースパイトの言う通りシリアスは現在としては『ロイヤルメイド隊』の一員だが、以前はキングジョージ5世率いる『ロイヤル騎士隊』に所属していたがとある理由でメイド隊へと鞍替えすという経歴を持つため、戦闘面ではとても頼りになる。しかしメイドとしては仕事をすれば必ず備品を破損させる、料理をすれば必ず一個は成功して2個は消し炭になる、仕事のサポートも逆に仕事を増やしてしまう等多々不甲斐ないところはあるが、フツドの言葉の通りとある理由で最近では紅茶の入れ方や砂糖との間違いの頻度も少なくなり、掃除でも備品の破損も少なくなり、料理で失敗する頻度も確率で言うとうと5分の1になるほど少なくなっていると少しずつ成長はしている

ロドニー「これも愛の力ですわねシリアス、ノアさん？」

ノア「ちよつ!？」　ロドニー、みんなの前でそれは言わないで!

シンジ「まあ、愛した人のためにうまくなりたいという気持ちはわかるけどな。なあシリアス？」

シリアス「はい、指揮官様。誇らしいご主人様のためならシリアスはすべてを捧げます♪」

ノア「あう・・・／／／」



ロドニーとシリアス、さらにはシリアス自身にもおちよくりを食らわれノアは顔も真つ赤にして俯いた。ここまですればわかるだろうが、ノアとシリアスは恋人の関係である。シリアスが『ロイヤルメイド隊』に鞍替えしたことでメイドの仕事が上達したのも理由は自身の主と認めたノアである。昔話になるがシリアスとノアは同期であり、建造直後からの付き合いで会う機会が多かった。戦場で新兵時代の彼の超能力を使つた活躍や衛兵兵としての「誰も死なせず生きて帰らせる」という奉仕の姿勢に感銘を受けて、人としても兵士としても誇らしく思つた彼を支えたいとメイド隊へと編集を希望し、以来なれないメイドとしての業務を何とかこなしつつ彼とともに戦い続けてきた。彼も初期は生真面目で包容力がある上に戦闘では頼りになる彼女を良き友人として思つていたが、彼女がメイドになつて自身に仕え始めてからは彼女のなれないメイドの仕事で失敗しても目を背けず努力し続ける姿や不手際が多くても「奉仕には自身がある」と言い切るゆるぎない献身的な姿勢からだんだんと好意を抱えるようになり、様々なことを経てノアから告白して晴れて主従はあれど恋人と言う関係になつてゐる。最近彼はシリアスから剣術など戦闘技術を学ぶ半面、彼女に料理や掃除の仕方を教え、その結果作る料理や菓子がうまい彼から教わつたことでメイドとしての手腕が上がつたのだ。

そしてしばらくして陛下への広告を含めたお茶会はノアの羞恥顔で締められ、姉妹と話し終えたイラストリアスとウエールズと一緒に生きたいと懇願してくるユニコーンを連れていったんその場をシンジは後にするのだった

シンジ side out

エンタープライズ side

ゝ母港の商店街ゝ

シンジ達がお茶会を終えて数十分後、エンタープライズは母校に設置されている商店街を歩いていたと言うよりも襲撃の後であったため見回りをしていた。しばらく歩く

と海沿いの場所に到着すると前方から見知った人物3人・・・ベルファストとユニコーンとシンジがたっており、ベルファストはエンタープライズを確認すると軽く一礼して口を開いた

ベルファスト「ユニコーンさんがあなたに御用があるという事でお向かいに参りました」

シンジ「ほら、ユニコーン。エンタープライズが来てくれたぞ？」

ユニコーン「うう・・・」

エンタープライズ「・・・？」

シンジとベルファストの背に隠れながら自身を見つめて用があるというユニコーンに、エンタープライズはただ疑問を浮かべるしかなかった

エンタープライズ「何をやってるんだ、あの子達は？」

その後シンジ達に誘われ、車に乗って連れてこられた浜辺で困惑の言葉を呆然とつぶやいた。場所については話し合いについて申し分はない浜辺なので問題はないが、困惑したのは目の前のビーチで襲撃の後というにもかかわらずビーチバレーで遊ぶ水着姿のジャベリンとラファイーといった小さいKANSEN達、さらには黒いビキニを着用した自身の妹であるホーネットがビーチチェアに寝そべってはハムマンはサラトガのファンである『グリッドレイ』に水着姿を取られた上に砂で胴体を埋められて遊ばれている。海では水着姿でサラトガと同じくアイドルであるサイドテールにまとめた赤い髪と体軀は小さくとも発育が良いKANSEN『サンデイエゴ』が突如現れたサメに喰われそうになって、それを助けようとサンデイエゴが艦載機を飛ばしてサメごと吹き飛ばされるなど皆々が好き勝手していた。そんな光景を前にして理解できないというよ

うに何も言えないでいるとベルファストが声をかけてきた

ベルファスト「息抜きも結構な事だと思いますが？」

エンタープライズ「襲撃の後だぞ」

シンジ「休息も兵士にとって重要な事だぞエンタープライズ」

襲撃の後だというのにこの体たらくはいけないというと、シンジはそれに待ったをかける。ユニコーンはシンジに遊んでもきていいと体をつついて聞くと、シンジは許可を出して彼女は浜辺へとゆーちゃんと共に向かった

シンジ「襲撃の後だからこそ警戒するのもわかるさ。けど休める内に休むことでコンディションを整えるのも兵士の務めだ。前の君のように戦場でミスを起こさないためにな」

エンタープライズ「……………」

シンジの長年の兵士としての経験からくる言い分に、エンタープライズは渋くする。そしてシンジは畳みかけるように先の戦闘の件について語りだす

シンジ「言い忘れていたけど、前の戦場での独断専行については結果的にホーネット達を救出できたから不問にする。しかし次また命令違反をしたときは厳罰に処する・・・わかったな」

エンタープライズ「了解・・・」

先の戦闘による独断行動に命令違反・・・本来なら即座に厳罰だがシンジは結果的にホーネット達を救出して帰還してきたことを踏まえてチャンスを与えると伝え、エンタープライズは渋い顔のまま了承する。するとユニコーンが自分たちに向けて手を振っていることにベルファストが気付く

ベルファスト「呼ばれてますよ」

エンタープライズ「えっ・・・？」

ベルファストに声をかけられ、エンタープライズは呼ばれているのは自分だと指差しを確認してユニコーンをチラツと見ると、確かに自身の事を見ていたことで困った顔をしながらユニコーンの元へと向かった。余談だがこの時シンジは浜辺を見渡せる離れ

た森が生い茂る崖付近でカメラの反射光を発見し、万が一に備え持つてきていた『バレットM82』をゴム弾に切り替えてその場所を射撃。そしてその場所であるとあるロリコンならぬ駆逐艦コンが気絶して確保されたらしい……

ユニコーン「ウフフ♪」

時間が経って夕暮れとなった浜辺で、ワンピースの裾を積個室マンで上げて波際でパチャパチャと音を立てながら跳ねて遊ぶユニコーン。そんな彼女をエンタープライズとシンジとゆーちゃんが見守っていた

エンタープライズ「……………」

しばらく見守っていたエンタープライズだったが、そろそろ本題に入るべくユニコーンに声を掛けた

エンタープライズ「私に用があるのでは？」

ユニコーン「うん。……あのね、ちゃんとお礼を言いたかったの」

エンタープライズ「？」

エンタープライズは要件はお礼を言いたかったことであるとわかったが、彼女に対してお礼を言われることをした覚えが無いため首をかしげる。

ユニコーン「エンタープライズさん！ 助けてくれてありがとうございます！」

エンタープライズ「ああ、襲撃の時の話か」

ユニコーン「うん・・・!!」

ユニコーンの笑顔でのお礼から、エンタープライズは襲撃時に白面から彼女を救った時の事だと思いつく。ユニコーンも肯定と言わんばかりに何度もうなづくが、エンタープライズは砂を払いながら立ち上がって言葉を放つ

エンタープライズ「礼を言われる事ではない。当然の責務を果たしただけだ」

ユニコーン「でも・・・！」

シンジ「！・・・ユニコーン、後ろを見てみなよ」

ユニコーン「え・・・？」



当然のことだとエンタープライズはお礼は不要と言い、ユニコーンはそれでも感謝を送りたいため言い淀む。すると見守っていたシンジがあることに気づき、後ろの事象に對してユニコーンに伝えると彼女もそれに振り向く。そこには水平線の向こうに淀む夕焼けに染まったオレンジ色の海岸で、夕焼けの光が海面で反射してキラキラと輝いている神秘的な光景があつた

ユニコーン「綺麗……エンタープライズさん。海が凄く綺麗だよ！」

エンタープライズ「……！」

ユニコーンははしやぎながらエンタープライズに振り向くが、反対的に彼女の表情は悲しそうなものになって俯いていた

エンタープライズ「皆同じ事を言うんだな……」

ユニコーン「えっ？」

突然の言葉に戸惑うユニコーンとはよそに、エンタープライズ何度も聞く言葉に對し

てどこか暗い意味を含めた思いを言葉にして発する

エンタープライズ「海が美しいなどと思えたことが無いんだ。 思い出すのは轟く砲声や硝煙の匂い、燃える炎の熱さ、水の冷たさ、そう言う物ばかりだ。海は戦場だ、それを美しいなんて・・・」

思いを言葉にすると同時に脳裏には戦場としての海の光景が脳裏に現れる。戦場で揺らめく炎と硝煙、飛び交う砲弾の轟音と銃声、そして死にゆく者達の声、そして自身の肌にごびりつく血と海の感触、そればかりが自身の中の海を形成する者ばかりだった。故に誰もが海を美しいと言ってもエンタープライズは海を綺麗と思ったことはなかった。少なくとも姉が健在のころは少しだけ違っていただろうが・・・夕焼けの海をみながらそう語ったエンタープライズにユニコーン少しかだけ考えてたった一言を彼女に返した

ユニコーン「エンタープライズさんは・・・海が、怖いのか？」

エンタープライズ「怖い」・・・私が？」

シンジ「・・・なるほどそうかもしれないな？」

エンタープライズ「指揮官・・・？」

ユニコーンの言葉に一瞬戸惑るとシンジが合点が言ったようにエンタープライズに話しかける

シンジ「長年戦場にいたせいで、人の目を見ればその奥に何をもっているの変わるようになってな。君の目には何かを恐れている恐怖だったことも・・・言わせてもらうが恐れている物から逃げて、海、世界、仲間、自分自身に向き合う事をしないのは永遠に前に進まない事と同じだぞ」

エンタープライズ「指揮官、あなたに私の何が・・・！」

シンジの経験からの言葉にエンタープライズは少しだけ怒りが混じる表情で何かを言おうとする。すると同じタイミングで離れていたところで遊んでいたジャベリン達がユニコーンに声を掛けた

シンジ「ユニコーン、俺たちのことは気にしないで行っておいで」

ユニコーン「う、うん！」

ジャベリン達に呼ばれていくべきか行かないべきか迷うユニコーンだったが、シンジとエンタープライズに勧められてゆーちゃんと共にジャベリン達の元へと向かった

シンジ「・・・俺にとって確かに海は戦場だ。　だけどそれだけが海の全てじゃない事も知っている」

ユニコーンがジャベリン達の元にたどり着いたことを確認すると、シンジはエンタープライズの隣に立ちながら海を懐かしむような眼をしながらそうつぶやく

シンジ「エンタープライズ・・・実はヴェスタルとホーネットから君の事はある程度聞いている。姉の『ヨークタウン』の事も、その姉を海で重傷を負って立てなくなつたこともな」

エンタープライズ「ッ!?!」

シンジの言葉にエンタープライズは動揺を見せる。しかしシンジはそれを余所に話を続けていく

シンジ「仲間を失ってしまふ戦場を恐れる気持ちにはわかる。だが恐れているだけで逃げていたらその場所で逝ってしまった仲間たちに顔向けができなければ、前に出て自分が戦う理由も失ってしまう。それに俺にとつて海は戦場だけじゃなく、仲間と一緒に馬鹿笑いした事や誓いを立てた場所、そしてその果てに夢見た思い出の場所でもあるんだ。だからエンタープライズ・・・いつまでも姉である『ヨークタウン』を失つた海ばかりを見て恐れているは、いつまでたつても君は前に進むことはできない。分かりやすく言うとな、『兵器』なんて簡単な言葉で大事な事から逃げるな。それはあの大戦で倒れていった全ての者達の侮辱だ」

話しながらシンジの頭の中には海に思いをさせた仲間たちの事が思い出される。いつか海を旅したいと夢見た仲間、いつかセイレーンからこの海を奪還しようと言いつつた仲間、海でふざけあい笑いあつた仲間、そんな者達と出会わせてくれたのは今戦う場所である海だった。そんな海を戦場と決めつけ、逃げることは仲間とその死を穢す行為であつた。故にシンジは今のエンタープライズの在り方は『気に入らない』の一言に尽きる。シンジはそれだけ伝えると場えるもいるであろう車の者に戻つていく。エンタープライズはそんな彼の背中を見つめて何か言おうとするもすぐにうつむいてしま

う。

エンタープライズ（私が・・・逃げている？　　いったい何から逃げているというんだ・・・）

エンタープライズは心の中で自問自答するも答えは出ず、そんなどこか儂く壊れてしまふような彼女をベルファストが見守り、夕陽を反射させた海が慰めるように照らすのだった

（数十分後）

その後しばらくして暗雲が立ち込め、突然の土砂降りに晒されシンジはジャベリン達と共に母校に設置された寮へと戻る。しかしエンタープライズはあれからその場を動かず、海を見つめながらその身を雨に濡らしていた。そんな彼女にベルファストは傘を広げて差し出した

ベルファスト「いつまでそうしているおつもりですか？」

そうして二人は浜辺を二人で傘を差しながら寮へと足を運びだす

エンタープライズ「指揮官達の事はいいの？」

ベルファスト「ご主人様方なら心配はございません。それにそのご主人様と陛下からあなた様のお付け目役を命じられたのです」

エンタープライズ「そうか・・・」

ベルファストの言葉にエンタープライズはなぜこうも彼女に鉢合わせる事が多く、見られているのかに合点があった。そしてベルファストはまた口を開く

ベルファスト「陛下には、それとなく探りを入れるよう仰せつかっているのですが、お恥ずかしながら私そのような機微には疎いものでして・・・」

エンタープライズ「何が言いたい？」

本題に早く入れと急かすエンタープライズ。そんな彼女にベルファストは向き直り、要件を述べだす

ベルファスト「単刀直入にお伺いします。いつまでそのような戦い方を続けるおつもりですか？」

エンタープライズ「・・・」

ベルファストの言葉にエンタープライズは無言を貫くが、ベルファストは視線を合わせながら話を続ける



ベルファスト「あなた様は『戦いを疎んじている』ようお見受けします。しかしその一方で、『自らの命を顧みることがない』……あなたの在り方は歪んでいる。このままではあなた様は、いずれ『戦う意味』さえ見失ってしまうでしょう」

エンタープライズ「……」

ベルファストが指摘した己の歪みとその果ての末路に無言を貫くエンタープライズだったが、その体をわずかに震わせていた。まるで心の奥底にしまい込んだ恐怖が漏れ出したかのように……

エンタープライズ side out

その頃遠く嵐によつて荒れ狂う海で鉄でできた残骸がそこら中に散らばり、その中で巨大で長い”何か”が蠢きながら自身のテリトリーを荒らす者達を見下ろしていた

「ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」

そしてその何かは怒りをあらわにするかの如くその方向を嵐の中で轟かした

## 9話 新たな仲間と亡霊への問答（後編）

シンジ side

エンタープライズとベルファストが帰路についているその頃、執務室でジャベリン達と共に寮に戻ったシンジが執務に励みながら窓からうかがえる嵐の様子を見ていた

ウエールズ「荒れそうだな・・・」

シンジ「雨に濡れた子たちが風邪をひかなければいいが。にしても快晴からいきなり嵐か・・・悪いことが起きなければいいな」

ウエールズは外の強まる一方のアメを見ながらそうつぶやき、シンジは雨に濡れた子たちを心配しながら急な土砂降りや嵐は不吉を呼ぶものとされていため不穏が起きないように祈る。するとそこに息を切らしながら執務室の扉を大きな音を立てて開かれるとクリーブランドが入室してきた

クリーブランド「ウエールズ！ 指揮官！」

クリーブランドのただ事ではない様子にシンジは予感が的中したと頭を抱えたのだった

シンジ side out

クリーブランド side

その後クリーブランドから近海で救難信号を検知したと有人部隊からの報告を受けたシンジは、すぐにセイレーンの作業か重桜の作業にしろ無視するわけにはいかず、すぐさま救助部隊を編成する。メンバーはクリーブランド、ベルファスト、ハムマンだったが・・・その中にはある程度回復しているがまだ全快ではないエンタープライズの姿があった

ハムマン「むう〜！ また濡れる羽目になるなんて・・・」

クリーブランド「ごめんよ、でも救助信号は見過ごせないよ。そろそろ信号が出た

辺りなんだけど」

エンタープライズ「この嵐で遭難したか？」

クリーブランド「かもね。・・・つてえ、何で付いてきたのさエンタープライズ!？」

艦装まだ直つてないだろう？」

半ば無理やりでの海や土砂降りに合わせてこれでぬれること3回になってしまい愚痴るハムマン。そんなクリーブランドは軽く謝罪しながら周りを見渡す。そしてエンタープライズの疑問にうなずいて数秒後、まだ怪我が治りきつてもいないのにまた出撃しているエンタープライズに気づいて思わずツッコんだ

ベルファスト「っ！ そのような状態で出撃なさっているのですか！」

エンタープライズ「少しは修復した。過度な戦闘はともかく艦載機の発艦だけなら

問題ない」

ベルファストはそんな危険な状態で出撃していることに戸惑う。ヴェスタルと整備員たちの働きのおかげで沈没寸前の状態から傷だらけの状態という多少は修復されているが、自慢の大弓を持たず甲板だけという万全とは程遠い状態だった。クリーブランドとベルファストは直ちに帰還するように促すがこの頑固者には意味なかった

ハムマン「待つて！ 前方に何か・・・！」

エンタープライズ・クリーブランド・ベルファスト「「っ！」」

ハムマンの言葉に3人はすぐに前方に注意するとそこには一隻ずつの艦と量産型、そして『セイレーン』の艦が漂っていた。それを確認するとクリーブランドはすぐに臨戦態勢を取った

クリーブランド「セイレーン!? こんな時に！」

エンタープライズ「いや、よく見ろ。・・・戦闘の後だ」

エンタープライズの制止され、注意深く見ると『セイレーン』は機能を停止しているように全く動いてはおらず、戦闘中には静かすぎる上に直前に砲撃した音も聞こえない

ければ硝煙の匂いもしない。その雰囲気はエンタープライズの言う通り戦闘後の静けさそのものだった

ハムマン「もしかして、救助信号を出した艦がセイレーンと戦ってる!？」  
クリーブランド「大変だ！ 急いがないと！」

機能停止したとしてもまた何時再起動して動き出すか分からない上に、救助目的の編成のため火力には乏しい。一刻も早く早めに救助すべきなのは明白である。しかし凄まじい嵐が彼女たちの視界や聴覚を惑わせて妨害する

クリーブランド「でもこの嵐じゃ索敵も難しい。 慎重に進まないと・・・」  
エンタープライズ「・・・周囲の警戒を頼む」  
クリーブランド「えっ？」

慎重に進もうとするクリーブランドだったが、そんなこと関係ないと言わんばかりにエンタープライズは一足先に救助信号を出した艦の搜索するため荒れ狂う海を全速力で疾走する

クリーブランド「・・・なんであいつはいつもああのさーー!! (#。D)」  
ハムマン「あわわ、落ち着いて！」

エンタープライズの行動に、ついに耐えられなくなり憤慨するクリーブランドをハムマンはなだめる。一方ベルファストはエンタープライズの後ろ姿を見据えながら耳元のインカムで執務室から指示を出しているシンジと連絡を取る

ベルファスト「ご主人様」

シンジ《こちらシンジ。ベルファスト、救助信号を送った相手が見つかったのか?》  
ベルファスト「只今捜索中です。ですがエンタープライズ様が・・・」

シンジ《・・・どこにも姿が見えないと思つてたが、まさか?》

ベルファスト「はい。そのまさかでございます」

ベルファストの報告を聞いて、執務室でシンジは頭を抱えたまま突っ伏す。そして本格的に胃薬を買おうか迷うのだった

クリーブランド said out



エンタープライズ side

エンタープライズは機能停止した量産型『セイレーン』の間を疾走し、救助信号を出した艦を警戒を怠足らないように周囲を常に注意しながら搜索する。気がかりがあるとするばセイレーンの中にはまるで溶かされたように装甲がグチャグチャになっている物に、まるで鋭利な刃物でズタズタにされたかのように傷だらけの物、まるで強い力で折られたかのように真っ二つに引き裂かれた物等がチラホラとあった事だが……するとセイレーンとは異なる艦を二隻発見する

エンタープライズ「あれか！」

エンタープライズは艦の横に回り込んで、1隻の艦に飛び乗るとそこには容姿がとも似ている二人のKANSENがいた。その少女たちの服装からアズールレーンの同盟である『東煌』であると見抜く

??? 「くっ……！」

エンタープライズに気づいた一人は気を失っているもう一人を抱きしめながら、敵味方不明であるエンタープライズに対して警戒を露にする。エンタープライズは警戒を解くために二人に歩み寄る

エンタープライズ「安心しろ。わたしは『アズールレーン』に所属する者だ。救助信号を追ってきた」

エンタープライズの言葉を聞いて、よほど怖かったのか警戒していた『東煌』の少女は助けが来たとわかった瞬間、安心と同時に嗚咽混じりの声を漏らす

エンタープライズ「周囲のセイレーンは貴女方が倒したのか？」

???  
(コクン)

エンタープライズ「何があつたか教えてくれ」

周りの状況は二人が関わっているかを確認するエンタープライズ。一人は肯定と頷き、詳しいことをより知るためここで何があつたかや所属を聞く

嗚咽をもらしているのは、前かけ部分に黄金の龍があしらわれた赤いチャイナ服とその上に白いコートを羽織った服装に装飾でツインテールにまとめられた髪型とスレンダーな体形が特徴的な少女・・・『東煌所属：寧海級軽巡洋艦2番艦：平海』

気を失っているのはその姉であり、前掛け部分に黄金の龍があしらわれた紫のチャイナ服とその上に白いコートを羽織った服装に装飾でまとめられたツインテールを輪となるようにまとめた髪型と小柄でナイスボディなグラマーな体形が特徴的な少女・・・『東煌所属 寧海級軽巡洋艦1番艦：寧海』

そしてもう一隻には『東煌』の有人部隊が乗艦しており、何人かが負傷しているとの

ことだった

『東煌』は地形の位置的には重桜に近いが、『東煌』はアズールレーンに所属している。すると平海は姉を心配しながら全容を話し始める

平海「平海達『セイレーン』とあいつに追われてて、全部やつけたけど姉ちゃんが私を庇ったから……！」

寧海「うっ……ううっ！」

平海「寧海姉ちゃん！」

説明していると気を失っていた寧海が目を覚ました。そしてすぐに妹の身を案じる

寧海「平海……無事？」

平海「うん！」

寧海「良かった……ううっ！」

平海「姉ちゃん!？」

平海が無事であることに安堵する寧海だったが、庇った際のダメージが残っているように苦悶の声を上げた

エンタープライズ「大丈夫だ。私たちが助ける。仲間たちもじきに到着する」

安心させるようにそういうエンタープライズだったが、その時ぎこちない機械音と赤い光があたりを照らし始めた。エンタープライズと平海は反射的にその音源に向けて構えると、そこには『セイレーン』の艦が動き始め、主砲をこちらに向けていた

平海「倒し損ねた!?!」

寧海「逃げなさい……! 平海……!」

平海「嫌だ! 今度は寧海が姉ちゃんを助ける!」

エンタープライズ「ツ!」

せめて妹は逃がそうとする寧海だが、今度は平海が姉を守る番であると吠える。その光景にエンタープライズは脳裏に姉のヨークタウンの顔がよぎり、艦から飛び出すと『セイレーン』の注意を自分へと向けさせる。

エンタープライズ「こっちだ！」

エンタープライズの声に反応して『セイレーン』は狙いを彼女に切りかえるも、砲の死角に入り込んで相手が攻撃できないうちに攻撃を開始しようと艦載機を発艦させる

エンタープライズ「くうっ！」

しかしやはり艦装は実戦レベルではなかった。ヴェスタルと整備班のおかげで攻撃が可能な程修復はしたが、艦載機の具現化が本調子ではないらしく甲板は青い火花を走らせるばかりだった。その隙に『セイレーン』は両側に搭載された小船を分離させ、エンタープライズに照準を合わせた小舟の主砲から砲弾が真っ直ぐに彼女へと放たれた

ベルファスト「はああああ!!」

しかしそこにベルファストが主砲から二発の砲弾を放ち、その砲弾がイナズマ状のエネルギーとなってがセイレーンの弾を撃ち消すとエンタープライズの前に立つ

ベルファスト「少しだけ貴方の事が理解できました」

ベルファストはそういうと、続けざまに魚雷をセイレーンに向かって放つ。魚雷は全弾見事命中し『セイレーン』の艦も撃破した。放たれた砲弾に命中させる精度に破壊力からベルファストの実力は凄まじいことは明白だった

ベルファスト「貴方はご主人様と同じくお人好しなんですね。エンタープライズ様」

エンタープライズ「指揮官と私が、同じだと・・・？」

ベルファスト「はい。ご主人様はご両親を亡くしております」

エンタープライズ「何？」

すでに指揮官は両親を亡くしている。その事にエンタープライズは驚くがベルファストは続ける

ベルファスト「指揮官様は幼いころに事故でお母様を亡くしており、お父様は私たちもご存じの通りあの黒い翼を持つ怪獣によってその命を奪われました。本来なら母

港を抜け出してご両親の仇を探そうとするのにあのお方は指揮官として、私達の力になるために、この戦いを一刻も早く終わらせるために、一人でも多く生きて帰らせるために、もう誰にも大切な人を失う悲しみをさせないためにご自分の思いとご両親の仇を後回しにしています。そんなご主人様だからこそ陛下達も私達メイド隊も信頼を置き、力を貸そうと心から思えるのです」

エンタープライズ「……」

クリーブランド「ベルファスト！ エンタープライズ！ 二人とも大丈夫!?」

ベルファストから聞かされるシンジの思いにエンタープライズは「失う悲しみ」に対して反応を示す。するとクリーブランドとハムマンが二人の元に向かってくる

エンタープライズ「……ああ、こちらは無事だ。それより早くあの子たちの救助を……」

平海と寧海と有人部隊の元に戻ろうとするエンタープライズたちだったが、後ろから機能停止していた量産型『セイレーン』が数隻再起動する。それに気づいた彼女たちが再び構えを取る……





その時海の底から龍の咆哮が轟いた  
エンタープライズ side out

―寧海 side―

平海「寧海姉ちゃん……」

寧海「平海……」

突如海の底から響いた咆哮に二人は体を寒さからではなく恐怖で震わせる。それは自分たちがセイレーンと戦っているときに何の前触れもなく現れ、一気に『セイレーン』を蹴散らした存在が発する咆哮だったからだ

寧海「だ、大丈夫よ平海。・・・私達には、頼もしい人たちがいるんだから」  
平海「うん、そうだよね・・・！」

おびえる妹に寧海はそういうしかできなかった。後は救援に来てくれたエンタープライズたちにかの存在が追い払われる事を願うばかりだった

寧海 side out

エンタープライズ side



ベルファスト「セイレーンを一瞬で……！」  
クリーブランド「今度はドラゴンみたいな姿をしてるね」  
ハムマン「ふええええ……！」

ベルファストはティアマトの力に圧倒され、クリーブランドは慣れてきたのかティアマトの姿に感想を述べ、ハムマンはまじかに怪獣の迫力にのまれて涙目になっている。その中でエンタープライズはあることに気づいていた

エンタープライズ「……おかしい」

ベルファスト「どうなされました？」

エンタープライズ「私たちが攻撃をしたわけがないのに、奴の体が傷だらけになっている」

エンタープライズの言う通り、ティアマトの体の至る処に大きな傷がちらほらと見受けられる。しかもそれが全て弾痕ではなく、何かに引っかかれたような切り傷や喰らい付かれたような咬み跡だった





ゴジラはティアマトと自身の眼下にいるエンタープライズたちを見ながらそう思った

そもそもなぜゴジラとティアマトがここにいるのかと言うと、ティアマトは元々この海域の海底奥深くで休眠していたが、戦争の余波や地殻変動に温暖化などの要因で休眠から目覚めたのだ。それ以降は元々古来から縄張りだったこの海域でクジラやダイオウイカ、同時期に目覚めた古代魚『マードーフィツシユ』たちを主食として生きてきた。しかし海底を遊泳中に頭上において戦闘を始めた『セイレーン』とそれから逃げる寧海達を縄張りを荒らしに来た外敵だと判断して襲い掛かり撃破する

その後倒したことを確認すると再度海底へと戻るが、そこに同じく『セイレーン』という調和を乱す存在を感じ取ったゴジラと遭遇してしまう。ティアマトは自身よりも格上だと本能で理解するも縄張りを守るため外敵とみなしたゴジラに攻撃を仕掛け、ゴジラは身を守るために反撃に出る。そして何度かの攻防の際に『セイレーン』の気配を感じ取ったティアマトがゴジラといった距離を取ると『セイレーン』を優先して海面へと向かい今に至る



ティアマト「ギユオオオオオオン!!」

ティアマトはゴジラにすさまじい勢いで海面を滑るように接近し、ゴジラは接近してくるティアマトに剛腕を振り下ろす。しかしティアマトは振り下ろされる剛腕に蛇のように巻き付くと瞬時に腕から胴体、胴体から全身へとその長い体躯を巻き付けると水中へと引きずり込む

ゴジラ「ゴガアアアアツ!」

ティアマトの鱗は刃のように鋭く、それがゴジラの体にまとわりつくたびに鏝のごとくゴジラの固い体を削り落として流血させていく。さらにその傷口すら削り落とすのだからその痛みは絶大だろう。ゴジラはまとわりつくティアマトの首をつかみ取るとその首を掴んで手すら鱗に切り裂かれるも、痛みを無視して万力の握力で締めあげる。ゴジラの握力によって呼吸ができずティアマトが力を弱めた所をゴジラは自身の体から力づくその長い体を引き剥がすとその首元に噛みついて鱗をかみ砕きながら水中で何度も振り回した後、海中に漂う『セイレーン』の残骸へとたたきつける

ゴジラ「ゴガアアアアアアン！」

今度は自分の番であるとゴジラがティアマトに急接近すると、体を前転させてからの尾の一撃を繰り出す。しかしティアマトの水中での動きはゴジラさえ超える。ゴジラの一撃を悠々と躲すと今度はまわりついても引きはがされると学習したのか纏わりつくことはなく、しかしゴジラの横を通り過ぎるように自身の鱗でゴジラの体を削り取る。ゴジラも自身の尾や四肢を使って攻撃をするが、攻撃した瞬間に射程外に逃げられては、わきの下などの攻撃が当たらないところに潜り込まれ当てることができな。しかしゴジラは何度も攻撃によって体を削られながらもその動きを観察し、動きのタイミングを計ると首元を削ろうとしたティアマトの胴体を絶対に話さないという意を込めて、その顎で鱗ごと首に噛みつくことで捕らえた。どれだけ早くとも捕まえればゴジラに分があり、そのまま首を顎で抑えながら胴体を鋭い爪と力を持って引き裂こうと両手で胴体を掴んだ瞬間・・・

『プシュウウウウウウウウウ!!』

ゴジラ「ゴガアアアツツ!!?」

ティアマトの口から黄色い液体をゴジラの粒に吹きかける。ゴジラはとっさに目には入らないように瞼を閉じて庇う事でその液体が目にかかることはなかったが、液体がかかった額はジュウジュウと音を立てながら文字通り溶けていき、ゴジラは激痛からティアマトの胴体を話してしまう。ティアマトの放った液体は溶解性の猛毒であり、主に敵の視界を奪う事に用いる攻撃手段だが相手の表皮を軽々と溶かすその毒性は本物である。痛みに悶えるゴジラにチャンスと思ったのか、ゴジラの喉元を狙って急接近す

る・・・しかしその直後ゴジラの背びれが輝きだす

『ヴォーン・・・ヴォーン・・・ヴォーン・・・ヴォーン・・・ヴォーン・・・!!』

体内原子炉を活性化させて、体内のエネルギーを爆発的に高めると『放射熱戦』の発射体勢に入る。そして十分にエネルギーがたまると口内の生態電気でそのエネルギーを起爆させる

『ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

起爆された炎の奔流で『放射熱戦』は水中だろうとその勢いと熱量を少しも損なうことなく、ティアマトへと放たれる。すでに速力を限界まで出していたティアマトは体をくねらせて避ける事ができず、その胴体に命中して膨大な熱によってその身を焦がし海上へと吹き飛ばされる

ティアマト「ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!?」

海上へと吹き飛ばされティアマトは感じたことのない熱の痛み海面が波立つほど悶えながら絶叫を響かせる。『放射熱戦』を受けた場所は強固な鱗と海水が微々たる程度だが威力を抑えてくれたおかげで致命傷にはならずとも、当たった場所の鱗が完全に消失して肉は重度の火傷を負っていた。するとティアマトを追ってゴジラも半身を海面から浮上させてティアマトを見据える

ティアマト「グルルルルルルルルルルル……！」

ティアマトはゴジラが自身よりも格上な存在だと認識しつつも、こうして手負いの自分に追撃することなく唯々威嚇する様子から先ほどの戦いはあくまで自衛であって自身の縄張りを犯しに来たのではないと判断する。どう事情があっても縄張りに土足で踏み込んだ相手に背を向けるのは業腹だが命を繋ぐためにここで死ぬわけにはいかなと傷の痛みに耐えながら海底の暗闇へとその姿を消していった

ゴジラ「グルルルルル……」

ゴジラはそれを姿が見えなくなるまで見届けるだけで追撃はしなかった。元よりティアマトの判断通り自身は『セイレーン』を駆逐するために来たのであつて縄張りを略奪しに来たわけでもないので敵ではなくなった彼女を追撃する理由など何一つない。そしてゴジラはいったん周りを見渡し辺りを確認して『セイレーン』に生き残りがいないかを確認する

ゴジラ（どうやらすでに彼女にすべて破壊されたらしいな。 さて・・・）

『セイレーン』がすべて破壊されていることを確認すると、戦いの余波に巻き込まれながらも五体満足なエンタープライズ達に目を向ける。するとこちらが視線を合わせたことに気づいたのか全員が艦装を向けてくる。しかしゴジラにとっては情報収集ができていい機会という事で都合なうえに、エンタープライズをみてどこか放つてはいけない気になり念和をする

ゴジラ『武器を下ろせ。俺はお前たちを襲う気はない』

エンタープライズ「ッ！　なんだこれは？」

ハムマン「なんなのだ声！　頭に響いて聞こえるのだ!？」

クリーブランド「なんだかもう予想外な事に慣れてきちゃったよ……」  
ベルファスト「……察するのに声の主はあなたでございますか」

ゴジラの敵意無しと伝える念和にエンタープライズとハムマンは驚き、クリーブランドはここ最近怒涛の予想外の出来事に遭遇してか慣れ始め、ベルファストは驚きつつも念和を出しているのはゴジラと問いかける

ゴジラ『そうだ。俺の名はゴジラ、この星の調和を保つ者だ。お前たちは確かムートーとの戦いの場でいた者達だったな』

ベルファスト「ええ、あの時は貴方様のおかげで命を救われた者もおりますので礼を言わせていただきます。申し遅れましたが、私はベルファストと申します」

エンタープライズ「……エンタープライズだ」

クリーブランド「私はクリーブランドだよ」

ハムマン「……ハムマンよ」

ゴジラの自己紹介にベルファストが先のムートー戦でのお礼と共に礼儀正しく自己紹介すると、ベルファストに倣ってエンタープライズ達も自己紹介を交わした

ゴジラ『ムートーに関しては礼には及ばない。俺は俺の使命を果たそうとしただけだ。・・それにしてもサラトガもそうだが、KANSENは個性的な奴が多いのか?』

ハムマン「こ、個性的ってどういう意味よ!」

クリーブランド「まあ、否定的できないよね。あれ、何でサラトガのこと知ってる

のさ?」

ゴジラ『一言でいうなら旧知の友という関係だからな。付き合いは数年前からだ』

ゴジラの言葉にハムマンは反応するが、クリーブランドの頭の中にはメイドやケモミミにセーラー服やよく眠る子、はたまたロリコンや騎士のような人が思い浮かび否定することはできなかった。簡略的だがサラトガの関係もある程度伝えるとエンタープライズが話しかけてくる

エンタープライズ「貴方が何者かはわかった。だが何故私たちと接触した? 私たちに何か目的があるのではないのか?」

ゴジラ『・・やはりムートーの時でも思っていたがエンタープライズだったな?』

なかなかの戦士だな。俺はお前たちに聞きたいことがあってこうして念和を掛けさ



せてもらった。要件は……』

エンタープライズは何か自分たちに用があるからこそ拙著くしてきたのだと見抜き、ゴジラはエンタープライズの洞察力や雰囲気で分かる強さに舌を巻く。そしてそこからゴジラが知りたかった現在の戦争の状況、歴史、戦争の発端、国の事などをアズールレーンからの視点での情報をエンタープライズ達から聞き出すことに成功。やはりアズールレーンの分裂は違和感があつた……キュ痛の敵を前にして同盟を組んで長年戦いあつた中ならば信頼関係はともかく、国東牛としての利益のためのつながりは強かつたはず、それが終戦後セイレーンが鳴りを潜めたとはいえその間に戦力を蓄えている可能性があるのにもかかわらずたつた数年でいがみ合つては、セイレーン大戦よりも激化……それどころか人類が滅びる可能性もあるだろう戦争を戦争に疲れ切つたであろう人民の意見も無視して行うだろうか。ここまでの強硬といつてもいい戦争への進みにやはり何か裏で操られているとしか思えなかつた……前世の記憶から国の上層なんか信用できないと思つてはいるが……

ゴジラ『情報提供感謝する。だが去る前に……エンタープライズ、お前に聞いた  
いことがある』

エンタープライズ「私に？」

ゴジラ『ああ、あの『海蛇』に追っているときにお前の行動を片眼で見っていたが：なぜ万全ではない状態で囷をするばかりか自身の命を無視して戦おうとする？ 何が お前をそこまで駆り立てる？』

ゴジラは情報の提供に礼を言うと言とうとエンタープライズに対して質問をする。ゴジラはエンタープライズが寧海のために囷をするところを目撃していたが、元軍人であるゴジラにとって囷役はもつとも敵からの攻撃を受ける危険が伴う役割でもあり、一番死の恐怖と危険がまとわりつく。しかしエンタープライズは装備も万全でもない上に死を覚悟しているのではなく、まるで“自分が死ぬことなどどうでもいい”もしくは“死よりも怖い何かから逃げている”に思えるかのようにためらいが無くどこか矛盾がある姿を見て、兵士としてもどこか異常な彼女を気になっていた

エンタープライズ「・・・別に私は何かに突き動かされているわけではない。私たちKANSSENは戦うために生み出された兵器だ。戦いの為に戦う私に自分の命を大切に思う等必要ない。例え戦いの果てで倒れたとしてもそれは本望と言えるだろう」  
ゴジラ『下らないな・・・』

エンタープライズ「ツ!？」

自身は兵器であるから自身の命を変え見ることはないなど当然であり、戦いの為に生まれたからこそ戦いそれこそが本望であり戦う理由だと応える。そんな答えにゴジラはエンタープライズがひるむほどのかなりの怒気をこめて彼女の言葉を一蹴する。そしてエンタープライズに語りかえる

ゴジラ『戦う為に戦うだと・・・兵器だからこそ命などどうでもいいだと・・・寝言は寝て言う事だ。戦う為に戦う存在など本来居るはずがない。いるとしたらそれはそれは心を持たないどころか生きてすらいらない兵器か怪物だ。それに兵器は何も考えず、何も感じず、ただ命令に従い破壊と死を繰り返すだけの存在の事だ。例え生まれただ理由が戦いの為だとしてもお前たちは『心』を持って生まれた者のはずだ』

エンタープライズ「私に『心』なんて・・・」

ゴジラ『なら何故お前はあの時あの姉妹を庇うように囿になった？ただ命令された事だけしかできず、何も感じないはずの兵器がなぜ傷を負って痛みを耐えながら彼女たちを救おうとした！それはお前が『心』に何かを感じ、何かしたいと思ったからのはずだ!』

エンタープライズ「……！」

ゴジラはエンタープライズの『心』と『命』を軽視する言い分に怒りをあらわにする。ゴジラは前世で兵士だった頃、命などとてもなく軽い物だった。そして死んでいった仲間たちの亡骸を見て涙を流して悲痛な表情を浮かべる仲間を見ると胸が締め付けられた。正直に言えばあの戦場に縛られた身としてはこんな思いをするくらいなら『心』等いらなと思うたことはあつたが、『心』があつたからこそ戦いの合間に仲間たちの日常を楽しくて喜ばしく愛おしいと思えたからこそもつと仲間たちと生きたいと思えた。だからこそ悲しみに負けず一人でも多く仲間を守りたいと思えた。『命』があつてこそ仲間と出会う事ができ、宝物と言つても過言ではないほど暖かい思い出を掴むことができ、かけがえのない仲間を守ることができた。だからこそ『心』と『命』を否定することとはそれらをすべて侮辱していることにほかならず、ましてや自分が死ぬという事は自分だけの問題ではなく、仲間たちの思い出の中の自分が死に仲間たちに消えない傷を残していくことを簡単に言うエンタープライズがとてもなく気に入らなかつた。ゴジラの言葉と迫力にも言い出せない様子のエンタープライズを余所にゴジラは止まらない

ゴジラ「たとえ戦うために生まれたとしても、『心』があるなら誰かを想う事も、誰かのために生きること、夢を思い描くことも、生き方や戦う理由も自分自身で決める事ができる。先の『海蛇』もこの場所で命を繋ぎ、種を未来へと残すため為の居場所を守るために戦ったのだぞ。それに戦うだけに生きること程下らなくつまらない者はない。そんな生き方をするくらいなら新しい道を探す方が有意義だ」

例え戦う事を目的に生み出されたとしても兵器とは違い、心があるならばその先において自身がどんな生き方をするか等自分自身でいくらでも変えるができる。どんな夢を抱くも、何故戦うのかも、何のために生きるかもそもそも自由に決めていい事なのだ。そもそも戦う為に戦う事を生きる目的にしていれば、戦いが終わればその生も意味を亡くしてしまう事に等しい事・・・ならばそんなくだらない生き方など捨てた方が良く事だろう。すると何も言えずにいたエンタープライズが口を開く

エンタープライズ「・・・なら、貴方はなんのために戦っているんだ？」

兵器であることを当然であり、戦う為に生み出されたのならその通りに戦う事は当然だと思ってきたエンタープライズ。しかしゴジラの言葉の通り、兵器と自分を律してき

た自分でもホーネットや平海たちのようにどうしても立ってられず行動する事や妹の危機にどうしようもなく突き動かされた自分がいた事も事実だった。そんな兵器であるとしながら人のように何かを感じている矛盾を抱えている彼女はゴジラに戦う理由を無意識に聞きだす

ゴジラ「俺は守るために、大事な者と生きるために戦っている。この美しい自然が溢れる星とその中でもともに生きる仲間たちをどれだけ傷つこうが誰が敵になろうが必ず守り通し、そしてその中で生きるかけがえのない仲間たちと共に笑いあえる平穏を命尽きるまで生きるために俺は戦い続ける……俺はそろそろ行かせてもらおう。だが最後にエンタープライズ……その在り方は危険すぎる、自分だけでなく周りの者ですら壊しかねない程にな、そしてもう一度考えろ。お前は誰のために、何のために、どうして戦うのかをな」

ゴジラは毅然とした態度で己の戦う理由を告げる。彼に仲間との平穏な日常こそが何よりの宝であり、自身を強く育てて星を彩る自然が大好きだった。だからこそそれを害する者達がいるならば、たとえ神だろうとこの世の無い者だろうと制裁を下し、どれだけ傷つこうとも守り通すため、そして仲間たちと生きるために戦っていると述べる。

そして最後にエンタープライズに向けて歪んだあり方を続けると必ず不幸な末路が訪れると警告するとともに、もう一度自身の戦う理由を考えるように伝えるところのまま彼女たちに背を向けて海底へと姿を消すのだった

エンタープライズ（私の・・・戦う理由は・・・）

エンタープライズは海に去っていくゴジラをただじつと見つめていた。そして戦うために生まれた来たからこそ兵器として戦うという理由を持っていた彼女はどんな理由で何のためにに戦ってきたのか昔に忘れていたものを探すように考えるのだった

たった数秒だが彼女の中では数十分という感覚の中思考していると、その沈黙を破るかのようにハムマンの驚きの声が響く

ハムマン「み、みんな大変なのだ!」

クリーブランド「うわ!?! 急にどうしたのさハムマン?」

ゴジラがいなくなったことで緊張が一気に解けた瞬間の大声にびっくりするクリー

ブランド。その理由を聞くと、次のハムマンの言葉に一同が目を見開く

「ハムマン」さつき通信が来たんだけど、その通信だと指揮官が敵に拉致されたらしいのだー!!」

シンジ指揮官が何者かに拉致されたという知らせだった・・・

ゴジラ side out



シンジ side

（数時間前・アズールレーン執務室）

シンジ 「エンタープライズ・・・また命令無視か」

ベルファストの通信から早くもエンタープライズが命令違反したことに呆れつつも、やはり彼女は兵器ではないと実感する。兵器は命令が無ければ何もしないが、何の命令をされずとも行動できる上にホーネットの時と同様に仲間の事なら自分を顧みないその姿勢は兵器とは程遠かった

シンジ 「どうすればエンタープライズの意識を変えられるか・・・一度ホーネットと相談してみるか？」

どうにかエンタープライズの考えを根本的に変えるにはどうすればいいかと窓の外を見ながら考え込む・・・

『バリーン！ プシユウウウウウウウウウウウウウウツ!!』

その時窓を何かが突き破り、その窓を突き破った丸い物体から煙が大量に吹き出し

あつという間に部屋を煙で充満させる

シンジ「これは煙玉か!? くそっ!・・・意識が・・・視界が、霞・・・む・・・」

シンジはとっさに物体の正体を突き止めるも煙を吸うたびに急激な眠気が襲い掛かってくる。そして煙の正体である睡眠ガスによって意識を失い深い眠りへといざなわれ床に倒れ込む。それを見計らって3人の人影が窓から執務室へと侵入する

一人目は黒髪をポニーテールにまとめた髪型に、赤い双眸は右側を白く角が突き立った鬼面型メンポで隠しており、年相応につつましい体形とその身体は現代ものの映画でありそうな首元には黒いマフラーと腰には小太刀を忍ばせたニンジャ風のセーラー服で包んでいるという服装が特徴的な少女・・・『重桜所属：特III型駆逐艦1番艦：暁』

二人目は頭に先端が赤くなっている突き立った漆黒の角とお花の髪飾りに黒い髪はおさげにして前に出ている髪型に、すらりとしたスレンダーな体形とその体は首元を赤黒のマフラーと水着のように露出が多い上着とその下に晒しを巻いて、黒いスカートという動きやすく懐にクナイがあるなどクノイチらしい服装をした少女・・・『重桜所属：

## 陽炎型三番艦：黒潮』

三人目は黒い角が生えて栗色の髪を肩までセミロングに伸ばしている髪型に、出ることは出て引つ込むところは引つ込んでいるグラマラスな体形と女忍者を思わせるマスクを口元にして右目のまぶたにメイクで仕立てた切り傷がありホルターネックのワンピースに振り袖風の羽織りというこちらは形だけシノビ風な服装が特徴的な少女．．．  
『重桜所屬：金剛型巡洋戦艦4番艦：霧島』

ある人は言った．．．大群とは囷に使うべきだと．．．！！

彼女たちは元々赤城たちと言う代表的な人物を餌に、そちらに敵が集中している間に基地内に潜入して情報を手に入れては破壊工作を目的としていたが、シンジがいることが分かったので目的がシンジの奪還となっていたのだ。そしてシンジが一人になって上で戦力が手薄になるという絶好の機会を待ち続け、エンタープライズと言う主力がないところを突いたのである

霧島「よし、上手く眠っているな」

暁「任務といえ、シンジ殿に申し訳ないでござる・・・」

黒潮「任務だから仕方ない事・・・それよりも早く離脱を。窓を破壊した音で集まってきました」

霧島・暁「応よ（承知）！」

霧島はシンジが完全に眠っていることを確認し、暁は重桜のためとはいえ有無を言わない手段に申し訳なくなる。しかし任務であるから仕方ないとすぐに離脱するように指示する黒潮に二人は頷き窓から飛び出すと無音で着地する。すると周りには黒い布で顔を完全に隠し、所々に手裏剣やクナイと言った暗器に閃光手榴弾やサイレンサー装着が装着された重火器などを装備した軽装の兵士達もとい忍たち・・・『重桜隠密部隊』が即座に彼女たちに駆け寄る

「黒潮殿・・・うまくいったようですな」

黒潮「はい。では邪魔が駆けつける前に離脱しましょう・・・準備は？」

「とうにできております・・・お急ぎを・・・！」

そうして黒潮たちと隠密部隊は闇の海へとシンジと共に消えていく。不穏な音に駆

け付けて執務室に入ったウエールズとシリアスにノアが見た者はもぬけの殻となった執務室の身だった。その後ノアが超能力で広範囲で読心能力を行使した結果、シンジが重桜に拉致された事とその行先は重桜本土であることを知れたがもうすでに嵐の事も相まって落ち着けない場所に逃げられてしまっていたことにただ彼らは悔しさからこぶしを握り締める事しかできなかつた

く十数時間後く

シンジ「うう・・・俺は？」

深い眠りからシンジが覚醒する。睡眠ガスの影響で前後の記憶があやふやだったが、自分は催眠ガスで眠らされたことを思い出すと同時に、煙玉を使ってくる上に音もなく

実行する手際の良さから重桜の『隠密部隊』よ推測する。そして次第に頭もさえてくると後頭部にとても軟かく心地よくも懐かしい感触を感じふと目を開けるとそこには……

赤城「あら、目が覚めたのね？　おはよう。　愛しの旦那様♪」

シンジ「赤城……」

自身の妻であり世界で一番愛しく、最後の家族であるも今や敵となつてしまった人が自身に向けて微笑んでいる姿が目に移りぼそりと愛する人の名をつぶやいた

この二人の再会はこの戦争は大きく状況を変える事になる始まりの瞬間だった